愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第132集

かみ　しな　の　い　せき

上品野遺跡

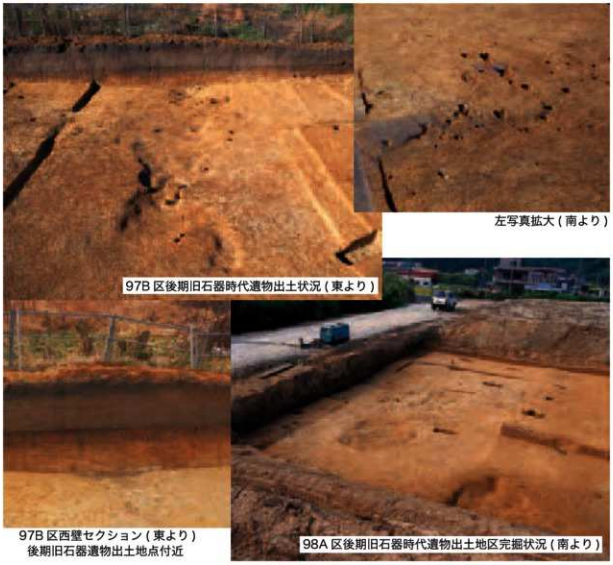
2005

財団法人 愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

上品野遺跡遠景（西より）

上品野遺跡は、瀬戸市東部上品野町の品野盆地東端に位置する。南東側から舌状に伸びる丘陵の末端部にあたり、東を流れる中洞川と西を流れる大洞川が、北で水野川に合流する地点にあたる。標高は 180m ～ 200m。南東から北西方向に向かう緩斜面上に立地する遺跡である。



左写真拡大（南より）

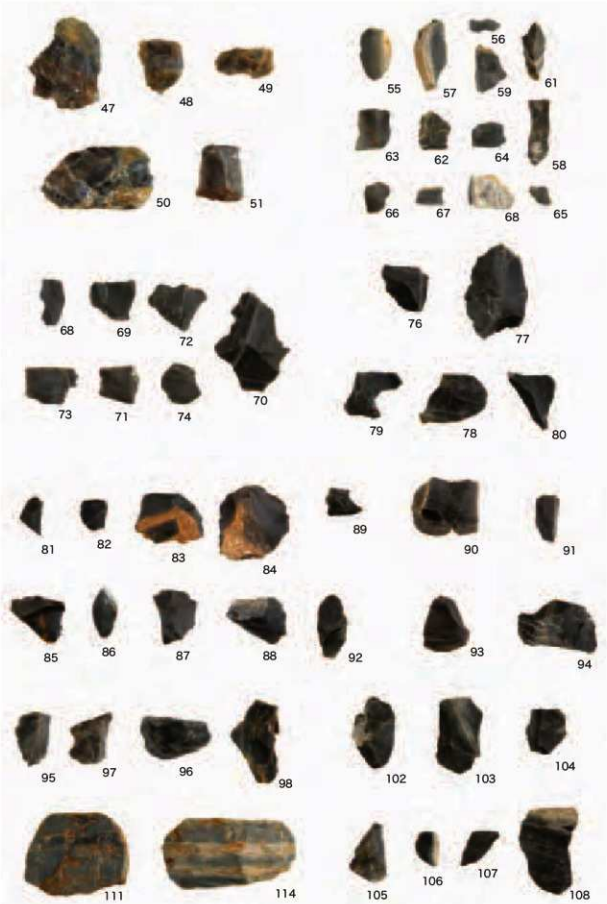
97B 区後期旧石器時代遺物出土状況（東より）

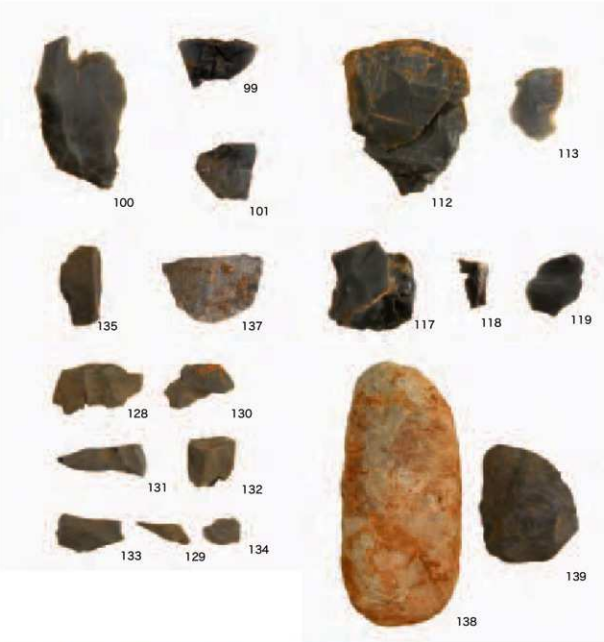
97B 区西壁セクション（東より）
後期旧石器遺物出土地点付近

98A 区後期旧石器時代遺物出土地区完掘状況（南より）

巻頭図版2

1
2
3
4
5
8
9
10
11
12
14
15
6
7
23
24
13
16
17
18
19
20
21
22
27
41
40
25
26
31
32
36
29
28
30
33
34
35
38
39
37
45
46
109
110
42
43
44
52
53
54


47
48
49
50
51
55
56
57
59
61
63
62
64
58
66
67
68
65
68
69
72
70
73
71
74
76
77
79
78
80
81
82
83
84
89
90
91
85
86
87
88
92
93
94
95
97
96
98
102
103
104
111
114
105
106
107
108



96 NR02 セクション（北より）

96 区では、NR01・NR02 の埋土下層では、3000 年前に堆積したとされる「松河戸火山灰」が検出されている。

序

瀬戸市は、日本を代表する窯業生産地として、不動の地位を占めています。しかし現在の高い窯業生産技術の背景には、先人の並々ならぬ努力があったことを、いろいろな場面で思い知らされます。この様ななか、近年、窯業遺跡の発掘が多く行われ、窯業生産に関わる具体的資料が徐々に揃いつつあります。

また、最近の調査で、窯業関係以外の資料も増えつつあります。これまでの瀬戸地域の歴史に厚みが増し、歴史財産として共有できることは歓迎すべきでしょう。

さて、このたび瀬戸市上品野町に所在する上品野遺跡の発掘調査報告書が刊行されることとなりました。調査では、これまで知られていた古代の集落跡のみならず、後期旧石器時代の石器群と、縄文時代から弥生時代と考えられる貯蔵穴が見つかりました。特に、ここで報告する後期旧石器時代の遺物は、「台形様石器」などはじめとする約３万年前の資料と考えられ、東海地域の「あけぼの」を考える上で、第一級の資料となることでしょう。

最後になりましたが、発掘調査につきまして、地元住民の方々をはじめ各方面の方々にご配慮いただき、さらに関係各機関および関係者のご指導とご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げる次第であります。

平成 17 年 8 月 31 日

財団法人愛知県教育サービスセンター

理事長　古池庸男

例言

1．本書は、瀬戸市上品野町に所在する上品野遺跡（県遺跡番号 03678）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴い、国土交通省愛知国道事務所から愛知県教育委員会を通じて、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

3．調査期間は平成８年 11 月から平成 10 年 12 月である。

4．調査担当者は、平成８年度が福岡晃彦（課長補佐兼主査、現調査課長）・池本正明（調査研究員、現主査）・後藤英史（調査研究員、現名古屋西高校教諭）、平成９年度が北村和宏（課長補佐兼主査、現愛知県教育委員会文化財保護室）・小澤一弘（主任、現主査）・後藤英史、平成 10 年度が黒田哲男（主査、現五条高校教諭）・小澤一弘・川添和暁（調査研究員）である。

5.　調査では、以下の方々からのご協力を受けた。

平成８年度　　調査補助員　町田義哉

発掘作業員　浅見久江　伊藤輝長　伊藤奈月　伊藤真弓　稲垣冴子　大江裕美　太田重明　加藤鍺子
加藤和枝　加藤千年　久保田敬男　近藤年江　後藤久美子　神野幸子　斉場きみ子　佐々木淑子
杉野幹夫　杉原千速　諏澤仙一　高野裕也　谷川正治　塚本　博　塚本芳子　中島真己　長江典子
中根千恵子　丹羽美佐江　野牧　励　平田多助　深田美智子　宮石千津子　宮本勢津子　元木保美
森　優子　山内憂子　山下　洋子　山本里美　矢野富久美　三宅　順

平成９年度　　調査補助員　町田義哉

発掘作業員　浅見久江　伊藤輝長　伊藤奈月　伊藤真弓　稲垣冴子　大江裕美　太田重明　岡田靖子
加藤鍺子　加藤和枝　加藤千年　久保田敬男　駒田直人　近藤年江　後藤久美子　塩見早智代
神野幸子　斉場きみ子　佐々木淑子　杉野幹夫　杉原千速　諏澤仙一　高野裕也　高羽美穂　谷川正治
塚本　博　塚本芳子　長江典子　中根千恵子　丹羽美佐江　野牧　励　平田多助　深田美智子
宮石千津子　宮本勢津子　元木保美　森　優子　山内憂子　山下　洋子　山本里美　矢野富久美
三宅　順

平成 10 年度　　調査補助員　町田義哉

発掘作業員　浅見久江　伊藤輝長　伊藤奈月　伊藤真弓　稲垣冴子　大江裕美　太田重明　岡田靖子
加藤鍺子　加藤和枝　加藤千年　久保田敬男　近藤年江　後藤久美子　神野幸子　斉場きみ子
佐々木淑子　杉野幹夫　杉原千速　諏澤仙一　高野裕也　谷川正治　塚本　博　塚本芳子　長江典子

中根千恵子　丹羽美佐江　野牧　励　平田多助　深田美智子　宮石千津子　宮本勢津子　元木保美
森　優子　山内憂子　山下　洋子　山本里美　矢野富久美　三宅　順

6．発掘調査時の航空測量に関して、アジア航測株式会社から支援を受けた。

7．遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。
八木佳素美 (研究補助員)、伊藤ますみ・後藤恵里・斉藤佳美・服部里美・中村たかみ・牧ゆかり・三浦里美・山田有美子・(整理補助員)
遺物実測の一部 (石器) は、アイシン精機株式会社から実測支援を受け、川添が実測した。また、遺物トレースについては、アイシン精機株式会社と（株）ウェルオンに委託し、川添が校正した。

8．出土遺物の写真撮影については福岡　栄氏 (スタジオ プュア) の手を煩わせた。

9．発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。
国土交通省愛知国道事務所・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター (五十音順、敬称略)

10. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々および機関から御教示・御協力を頂いた。
青木　修、井関弘太郎、岡本直久、金子健一、河合右近、川合　剛、齊藤基生、白石浩之、佐野　元、城ヶ谷和宏、鈴木忠司、平井義敏、藤澤良祐、長屋幸二、楢崎彰一、野口　淳、山下峰司、渡辺　誠、(敬称略)

11. 本書の執筆は、川添和暁が担当した。但し第５章に関しては、冒頭に執筆者名を記した。

12. 本書の編集は川添和暁が行った。

13. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、旧基準で表記してある。

14. 調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

15. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　次

カラー巻頭図版

序・例言・目次

第１章　遺跡の位置および調査の経緯・・(1 頁)

第１節　環境と立地

第２節　調査の経緯と経過

第２章　調査方法および基本層序・・・・(7 頁)

第１節　調査区設定と調査方法

第２節　地形・基本層序

第３章　後期旧石器時代の遺構・遺物・・(17 頁)

第１節　調査方法と調査時の出土状況

第２節　出土遺物の分析方法

第３節　97B・D・98A SX01 の出土状況分析

第４節　97B・D・98A SX01 の遺物

第５節　97B・D・98A SX01 の位置づけ

第４章　縄文時代以降の遺構・遺物・・・(47 頁)

第１節　縄文時代～弥生時代

第２節　古墳時代初頭

第３節　古代

第４節　中世・近世

第５章　自然科学的分析・・・・・・・(117 頁)

第１節　地層の堆積年代 (鬼頭　剛・古澤　明)

第２節　上品野遺跡から出土した大型植物化石 (新山雅広)

第３節　上品野遺跡の花粉化石群集 (新山雅広)

第４節　放射性炭素測定年代 (山形秀樹)

第５節　97B SB02 出土炭化材の樹種同定 (植田弥生)

第６節　黒曜石・サヌカイト石材の現産地推定 (藤根　久)

第７節　上品野遺跡の縄文後・晩期の地層中より産出した昆虫化石 (森　勇一)

第６章　総括・・・・・・・・・・・・・(153 頁)

第１節　上品野遺跡の時期的変遷

第２節　各時期の歴史的位置づけとその意義

参考文献

遺構図版

写真図版

挿図目次

図 1　遺跡位置図
図 2　上品野遺跡位置図 (1 ：5,000)
図 3　瀬戸市の地質概要図
図 4　周辺の遺跡位置図 (1 ：25,000)
図 5　調査区配置図 (1 ：5000)
図 6　基本層序図化位置図
図 7　土層セクション 96 区西壁 (1 ：80)
図 8　土層セクション 97C 区西壁 (1 ：80)
図 9　土層セクション 97C 区西壁 (1 ：80)
図 10　土層セクション 97C 区西壁 (1 ：80)
図 11　土層セクション 97A 区西壁 (1 ：80)
図 12　後期旧石器時代遺物出土位置図 (1 ：5000)
図 13　97B.D.98A SX01　遺物出土状態散布図 (1 ：150)
図 14　97B.D.98A SX01　地形測量図 (1 ：150)
図 15　97B.D.98A SX01　遺物出土状況 (製品) (1 ：150)
図 16　97B.D.98A SX01　遺物出土状況 (接合資料)(1 ：150)
図 17　97B.D.98A SX01　石材別遺物出土状況 1 (1 ：300)
図 18　97B.D.98A SX01　石材別遺物出土状況 2 (1 ：300)
図 19　97B.D.98A SX01　石材別遺物出土状況 3 (1 ：300)
図 20　97B.D.98A SX01　石材別石器出土分布パターン
図 21　97B.D.98A SX01　出土石器 1 (2 ：3)
図 22　97B.D.98A SX01　出土石器 2 (2 ：3)
図 23　97B.D.98A SX01　出土石器 3 (2 ：3)
図 24　97B.D.98A SX01　出土石器 4 (2 ：3)
図 25　97B.D.98A SX01　出土石器 5 (2 ：3)
図 26　97B.D.98A SX01　出土石器 6 (2 ：3)
図 27　97B.D.98A SX01　出土石器 7 (2 ：3)
図 28　97B.D.98A SX01　出土石器 8 (2 ：3)
図 29　97B.D.98A SX01　出土石器 9 (2 ：3)
図 30　97B.D.98A SX01　出土石器 10(2 ：3)
図 31　97B.D.98A SX01　出土石器 11(2 ：3)
図 32　97B.D.98A SX01　出土石器 12(2 ：3)
図 33　97B.D.98A SX01　出土石器 13(2 ：3)
図 34　97B.D.98A SX01　出土石器 14(2 ：3)
図 35　97B.D.98A SX01　出土石器 15(1 ：2)
図 36　遺構配置図 (貯蔵穴と自然流路) (1 ：5000)
図 37　96・97B NR01 および 96 NR02 土層断面図 (1 ：80)
図 38　96 SK84・85・90・91(1 ：50)
図 39　縄文土器・弥生土器 (1 ：3)
図 40　古墳時代初頭関連遺構配置図 (1 ：1500)
図 41　97B SB01(1 ：50)
図 42　97B SB02(1 ：50)
図 43　97B SB03(1 ：50)
図 44　97B SB05(1 ：50)
図 45　97D SB06(1 ：50)
図 46　古墳時代初頭の土器 1 (1 ：3)
図 47　古墳時代初頭の土器 2 (1 ：3)
図 48　古墳時代初頭の土器 3 (1 ：3)
図 49　古墳時代初頭の土器 4 (1 ：3)
図 50　古墳時代初頭の土器 5 (1 ：3)
図 51　古代遺構配置図 (1 ：1500、1 ：2000)
図 52　97B SB04(1 ：50)
図 53　97B SB04　カマド部分 (1 ：30)
図 54　97B・98A SD01(1 ：50)

図 55　古代遺構配置図 2 (1 ：300)
図 56　98A SD02(1 ：50)
図 57　97B SK273(1 ：30)
図 58　各ピット断割りセクション (1 ：50)
図 59　古代の陶器類 1 (1 ： 3)
図 60　古代の陶器類 2 (1 ： 3)
図 61　古代の陶器類 3 (1 ： 3)
図 62　古代の陶器類 4 (1 ： 3)
図 63　古代の陶器類 5 (1 ： 3)
図 64　古代の陶器類 6 (1 ： 3)
図 65　古代の陶器類 7 (1 ： 3)
図 66　古代の陶器類 8 (1 ： 3)
図 67　古代の陶器類 9 (1 ： 3)
図 68　古代の陶器類 10(1 ： 3)
図 69　古代・中世の陶器類 11(1 ： 3)
図 70　古代の陶器類 12(1 ： 3)
図 71　中世・近世遺構配置図
(1 ：2000、1 ：500)
図 72　98A P375・413 断割りセクション
(1 ：50)
図 73　中世以降の陶器類 1 (1 ： 3)
図 74　中世以降の陶器類 2 (1 ： 3)
図 75　中世以降の陶器類 3 (1 ： 3)
図 76　中世以降の陶器類 4 (1 ： 3)
図 77　中世以降の陶器類 5 (1 ： 3)
図 78　中世以降の陶器類 6 (1 ： 3)
図 79　中世以降の陶器類 7 (1 ： 3)
図 80　中世以降の陶器類 8 (1 ： 3)
図 81　中世以降の陶器類 9 (1 ： 3)
図 82　中世以降の陶器類 10(1 ： 3)
図 83　中世以降の陶器類 11(1 ： 3)
図 84　中世以降の陶器類 12(1 ： 3)
図 85　中世以降の陶器類 13(1 ： 3)
図 86　中世以降の陶器類 14(1 ： 3)
図 87　中世以降の陶器類 15(1 ： 3)
図 88　中世以降の陶器類 16(1 ： 3)
図 89　中世以降の陶器類 17(1 ： 3)
図 90　中世以降の陶器類 18(1 ： 3)
図 91　中世以降の陶器類 19(1 ： 3)
図 92　中世以降の陶器類 20(1 ： 3)
図 93　分析試料採取地点図
図 94　地点 1 (97D 区) におけるテフラ分析結果
図 95　地点 2 (98A 区) におけるテフラ分析結果
図 96　地点 3 (96 区 NR02) における層序
図 97　地点 3 (97D 区) における層序と放射性炭
素測定およびテフラ
図 98　花粉化石分布図
図 99　97B SB02 出土炭化物の産状と樹種
図 100　出土黒曜石製石器の原産地判別図 1
図 101　出土黒曜石製石器の原産地判別図 2
図 102　出土サヌカイト製石器の原産地判別図 1
図 103　出土サヌカイト製石器の原産地判別図 2
図 104　上品野遺跡遺跡変遷図

表目次

表 1　周囲の遺跡一覧表
表 2　調査工程一覧
表 3　チャート細別一覧表
表 4　石材別出土石器器種一覧表
表 5　地点 3 (96 区) の埋積谷 (NR02) におけるテフラ鉱物構成
表 6　地点 3 (96 区) の埋積谷 (NR02) における放射性炭素年代測定結果
表 7　ドングリピットから出土した種実類
表 8　花粉化石一覧表
表 9　放射性炭素年代測定結果
表 10　97B SB02 出土炭化材樹種同定結果一覧
表 11　産地推定を行った黒曜石とその詳細
表 12　黒曜石原産地の判別群名称
表 13　原産地のサヌカイト原石
表 14　黒曜石製石器の元素強度 (cps) と計算された指標値及び原産地推定結果
表 15　上品野遺跡から産出した昆虫化石
表 16　東海・中部高地後期旧石器時代初頭遺跡一覧
表 17　東海地域の貯蔵穴および関連遺構出土遺跡一覧表

遺構図版目次

図版 1　97A 区
図版 2　97A 区・97B 区・98A 区
図版 3　97B 区・97D 区・98A 区
図版 4　97B 区・98A 区・96 区
図版 5　96 区
図版 6　96 区・98B 区
図版 7　96 区・97C 区・98B 区
図版 8・9　97C 区・98B 区
図版 10　97C 区・98B 区・98C 区
図版 11　97C 区・98C 区
図版 12・13　97C 区・98C 区

写真目次

巻頭カラー図版１　遺跡遠景・97B.D.98A SX01 遺物出土状況
巻頭カラー図版２　97B.D.98A SX01 出土遺物１
巻頭カラー図版３　97B.D.98A SX01 出土遺物２
巻頭カラー図版４　97B.D.98A SX01 出土遺物３・96NR02 セクション

写真１　出土した大型植物化石
写真２　出土した大型植物化石
写真３　産出した花粉化石
写真４　97B SB02 出土炭化物樹種
写真５　上品野遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真

写真図版１　96・97B NR01 および 96 SK84・85・91・92
写真図版２　97B SB02・96 SX01・98B SX02
写真図版３　97A SB01・97A SK199・97A Sk210・97A SB03・97D SB06
写真図版４　97B SB04・97B 98A SD01・98A SD02・97B SK293
写真図版５　96 区全景・97A 区全景
写真図版６　97B 区全景・98A 区全景・98A P375・P413
写真図版７　98B 区全景・98B SX01・98C 区全景
写真図版８　出土遺物写真１(土器・陶器)
写真図版９　出土遺物写真２(陶器)
写真図版 10　出土遺物写真３(陶器・土製品)
写真図版 11　出土遺物写真４(陶器)
写真図版 12　出土遺物写真５(陶器)
写真図版 13　出土遺物写真６(石器)
写真図版 14　出土遺物写真７(木器)

第１章　遺跡の位置および調査の経緯

第１節　環境と立地

1. 遺跡の位置

上品野遺跡は、瀬戸市上品野町地内に所在する。瀬戸市は愛知県の中央北部、岐阜県との県境に位置し、旧尾張国の北東端にあたる（図１）。北は岐阜県多治見市、土岐市等に接し、西は春日井市、名古屋市、尾張旭市に隣接する。東及び南方は旧三河国に属する西加茂郡藤岡町や愛知郡長久手町、自動車産業の町として世界的に著名な豊田市に接している。瀬戸市は「セトモノ」の名前で知られるように古来より窯業生産の一大中心地として繁栄したところである。現在は名古屋市、豊田市の近郊という地の利から市の南西部を中心に宅地造成が進行しつつある。市域は東西12.8km、南北 13.6km で、周囲約 50km の楕円形を呈している。

図１　遺跡位置図

2. 地理的環境

瀬戸市は名古屋市の東に展開する尾張丘陵地帯の一部に位置し、木曽山脈の最南端にあたる。その大部分の標高は 100m から 600m の丘陵地で占められている。中でも市域西側には 100m から 200m の低位丘陵が展開しており、市街地や耕作地を形成している。それらの低位丘陵帯は市内を流れる河川によっていくつかに区分されている。市境北東に沿って庄内川が南流し、その支流である蛇ヶ洞川が市域北部、水野川が市域中部を東から西へと流れている。また市域中南部には矢田川（山口川）とその支流である瀬戸川が東から西へと流れている。水野川の北側を穴田丘陵、水野川と瀬戸川に挟まれた地域を水野丘陵と呼んでいる。また瀬戸川と矢田川に挟まれた部分を菱野丘陵、矢田川以南を幡山丘陵と呼称している。菱野、幡山丘陵地は近年、宅地造成が進み、平地同様住宅地が増加している。さらに河川沿いには狭い沖積地が盆地状に広がっており、蛇ヶ洞川沿いには上半田川盆地、下半田川盆地、水野川沿いには上流に品野盆地、下流に水野盆地が形成され、

図２　上品野遺跡位置図（１：5000）

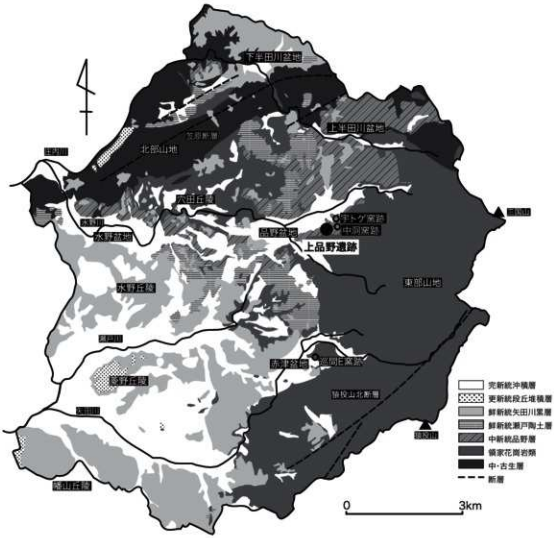


図３　瀬戸市の地質概要図　（瀬戸市史編纂委員会 1986『瀬戸市史』資料編二自然および愛知県 1997『愛知県活断層アトラス』を引用一部改編

矢田川上流（赤津川）には赤津盆地がある。また、矢田川と瀬戸川沿いには西方にむかって平地が広がっており、名古屋市北東部の沖積地へとつながっている。北部及び東部山地は国有林と県有林が広がり、土砂採集場以外は自然の多く残る丘陵地帯となっている。

瀬戸市における地質的特徴は、伝統的な窯業地であることからも分かるように、市域中央部に良好な陶土層（瀬戸陶土層）がみられることである。この陶土層は、その基盤である中・古生層及び花崗岩層の上に厚く堆積しており、その由来は第三紀鮮新世から第四紀更新世初めにかけて伊勢湾を中心に広がっていたとされる東海湖の堆積物である。また、市域中部に広がる水野砂礫層、蛇ヶ洞川北部に広がる土岐砂礫層（いずれも矢田川累層）中にも砂礫層に挟まれて粘土層がみられる。一方市域北部には中・古生層、東部には花崗岩類が広がっており、この部分では粘土層はみられない（図２）。

さて、上品野遺跡は、瀬戸市東部、上品野町の品野盆地の東端に位置する（図３）。ここは南東側から舌状に伸びる丘陵の末端部にあたり、東を

流れる中洞川と西を流れる大洞川が、北で水野川に合流する地点である。標高は 180m ～ 200m を測り、南東から北西方向に向かう緩斜面上に位置する。

3．歴史的環境（図4・表1）

この品野町近辺は、中世以降、現代にまでつながる窯業生産の中心地であり、周囲には多くの窯跡の所在が、知られている。また、最近の発掘調査の成果により、窯業遺跡のみならず、各時代の様相が徐々に知られるようになってきた。

縄文時代の遺跡・遺物としては、品野西遺跡・上品野蟹川遺跡 (24)・中洞遺跡 (28)・落合橋南遺跡 (42)・鳥原遺跡 (55)・岩屋堂遺跡 (60)・針原遺跡 (74) で知られている。特に品野西遺跡は、有舌尖頭器や木葉状尖頭器・局部磨製石斧などを代表とする縄文時代草創期の石器群の出土が知られている。また、近年、愛知県埋蔵文化財センターで調査した中洞窯跡では、調査区内に中洞遺跡も含まれており、数点の縄文土器の出土を見た。

弥生時代の遺跡・遺物としては、品野西遺跡・大洞遺跡 (29) で出土している。

古墳時代に関しては、金峰神社古墳 (3) や井山古墳 (45) など、後期古墳の造営が確認できる。また、落合橋南遺跡 (42) では、近年、古墳時代の集落跡が見つかっている。

古代の遺跡・遺物としては、上品野蟹川遺跡 (24) が知られている。ここでは、平成 12・13 年度の調査で自然流路のからは「山寺」・「山」・「阿」・「門」・「文室門」（ふんやのもん）などと墨書された灰釉陶器がまとまって出土している。上品野遺跡でも昭和 62 年の調査で、墨書された灰釉陶器を含め、遺物がまとまとって出土している。

中世以降の窯業遺跡に関しては、上品野窯跡・稲荷北神社北窯跡・桑下窯跡・桑下東窯跡・上品野丸山窯跡など多数知られているが、ここにすべてを記載する能力を持ち合わせていない。最近、当地域で調査された窯跡に鶯窯跡 (57)・五葉窯跡 (78)・宇トゲ窯跡 (25)・中洞窯跡 (26) がある。中洞窯跡は五葉窯跡と、宇トゲ窯跡は鶯窯跡と、ほぼ併行する時期に操業されていたようである。鶯窯跡は、3 年にわたる調査の結果、窯体構造・十基を越える作業施設・遺物の豊富な種類などが明らかとなってきた。中洞窯跡と五葉窯跡でも丘陵部全体が調査され、窯業生産に関わる興味深い調査成果が提示されている。

また、宇トゲ窯跡・中洞窯跡の立地する丘陵の東側には、中世の山城として品野城 (36) が知られている。また、現在の国道 363 号線をはさんで北側には、愛知県埋蔵文化財センターにより調査が行われている桑下城跡 (17) がある。

（註 1）番号は、図 4 および表 1 の番号と一致する。

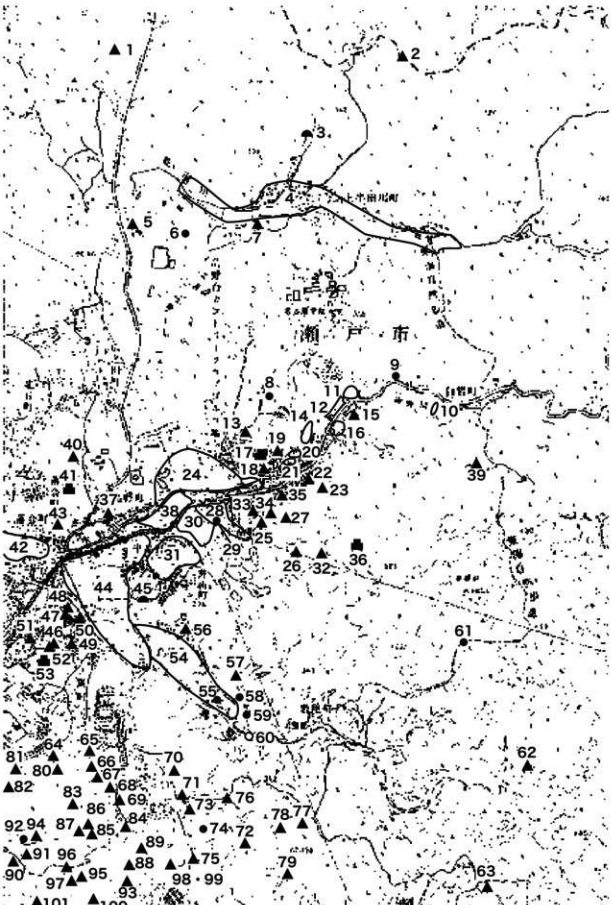


図4　周辺の遺跡位置図（1：25,000）国土地理院「瀬戸」「猿投山」をもとに作成

表１　周辺の遺跡一覧表 (番号は図４と一致)

番号	遺　跡　名	時代・時期	番号	遺　跡　名	時代・時期	番号	遺　跡　名	時代・時期
1	下半田川B窯跡	13世紀	35	上品野D窯跡	19世紀	69	境８～10窯跡	13世紀
2	上半田川B窯跡	13世紀	36	品野城跡	中世	70	針原A窯跡	13世紀
3	金峰神社古墳	古墳	37	品野町８丁目A窯跡	19世紀	71	針原B窯跡	14世紀
4	上半田川遺跡	中世～近世	38	上品野向横南遺跡	中世～近世	72	針原C窯跡	14世紀
5	広之田３号窯跡	13～14世紀	39	窯ヶ根窯跡	15世紀	73	三つ窯跡	13世紀
6	上半田川A窯跡	19世紀	40	広之田B窯跡	13世紀	74	針原遺跡	縄文
7	広之田A遺跡	14世紀	41	落合城跡	中世	75	針原窯跡	13～14世紀
8	菩提寺遺跡	中世	42	落合横南遺跡	縄文～中世	76	仏供田窯跡	13～14世紀
9	白岩遺跡	15世紀	43	勘介窯跡	16世紀	77	祢宜窯跡	14世紀
10	白岩A遺跡	中世～近世	44	品野中部遺跡	古代～近世	78	五葉窯跡	13～14世紀
11	上品野一ノ瀬遺跡	中世～近世	45	井山古墳	古墳	79	赤津長根窯跡	14世紀
12	上品野一ノ瀬南遺跡	中世～近世	46	窯町A窯跡	17世紀	80	五位塚A窯跡	13世紀
13	西窯跡	15～16世紀	47	窯町B窯跡	17～19世紀	81	五位塚B窯跡	13・15世紀
14	上品野西金地遺跡	中世～近世	48	窯町C窯跡	17～19世紀	82	五位塚C窯跡	13世紀
15	上品野丸山窯跡	15世紀	49	窯町D窯跡	17～19世紀	83	殿原窯跡	13～14世紀
16	上品野東山遺跡	中世～近世	50	窯町E窯跡	18～19世紀	84	馬ヶ城A窯跡	13～14世紀
17	桑下城跡	中世	51	品野馬場窯跡	19世紀	85	馬ヶ城B窯跡	13世紀
18	桑下窯跡	15世紀	52	円六窯跡	15～16世紀	86	馬ヶ城C窯跡	13世紀
19	桑下東窯跡	16世紀	53	山崎城跡	中世	87	馬ヶ城D窯跡	13世紀
20	上品野桑下A遺跡	中世～近世	54	鳥原遺跡	古代～近世	88	馬ヶ城E窯跡	13世紀
21	上品野桑下B遺跡	中世～近世	55	鳥原縄文遺跡	縄文	89	馬ヶ城F窯跡	13～14世紀
22	稲荷神社窯跡	19世紀	56	浄源寺西窯跡	19世紀	90	馬ヶ城K窯跡	13世紀
23	稲荷神社北窯跡	19世紀	57	篤窯跡	14～15世紀	91	馬ヶ城L窯跡	13世紀
24	上品野蟹川遺跡	縄文～近世	58	浄源寺遺跡	19世紀	92	馬ヶ城M遺跡	古代
25	宇トゲ窯跡	14～15世紀	59	浄源寺境内遺跡	19世紀	93	馬ヶ城O窯跡	13世紀
26	中洞窯跡	13～14世紀	60	岩屋堂遺跡	縄文	94	萱原窯跡	13～14世紀
27	清五郎窯跡	19世紀	61	岩屋A遺跡	中世	95	大栃窯跡	
28	中洞遺跡	縄文～中世	62	乗越窯跡	15世紀	96	大栃B窯跡	13世紀
29	大洞遺跡	弥生	63	狸島屋窯跡	15世紀	97	大栃C窯跡	13・15世紀
30	上品野遺跡	後期旧石器～近世	64	境１・２号窯跡	13世紀	98	奥白根窯跡	13世紀
31	中品野遺跡	古代～近世	65	境３号窯跡	不明	99	サカイ窯跡	17世紀
32	上品野A窯跡	15世紀	66	境４号窯跡	13世紀	100	保手窯跡	13・15世紀
33	上品野B窯跡	19世紀	67	境５号窯跡	13世紀	101	椿窯跡	13～15世紀
34	上品野C窯跡	19世紀	68	境７号窯跡	13世紀			

第２節　調査の経緯と経過

１.調査にいたる経緯

国土交通省は中部地方の高速道路網整備の一つとして愛知、岐阜、三重の東海三県を環状に結ぶ東海環状自動車道建設を計画した。自動車道は瀬戸市東部を南北に縦断する形で計画され、当遺跡付近が建設予定地となっていた。国土交通省愛知工事事務所は愛知県教育委員会に対し、この地域の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いに関する照会を行った。以前から陶片等の散布地として知られていた当地域を踏査調査の結果、遺跡と確認された。（財）瀬戸市埋蔵文化財センターは愛知県教育委員会から委託を受け、平成７年度まず範囲確認調査を実施し、遺構および包含層の範囲を確認した。さらに平成８年度以降事業として愛知県埋蔵文化財センターが調査を行うこととなった。

２.調査・整理の経過

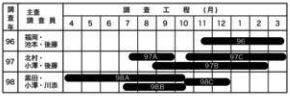
平成８年 11 月から平成 10 年 12 月にかけて、計 13,000 ㎡を調査した。調査は、平成８年度に１調査区 (96 区)、平成９年度に４調査区 (97A・B・C・D 区)、平成 10 年度に３調査区 (98A・B・C 区) の計８調査区を設定した (註２)。調査の手順は表２の通りである。

平成９年度 97B 区から、後期旧石器初頭とされる石器群が出土した。当地域におけるこの時期の遺物は諸例となるばかりか、当地域に人類が存在する最古段階になるものである。この重要性を考慮して、平成９年に記者発表を行った。

また、遺物の洗浄・注記は平成 10 年度内に終了させた。

その後平成 16 年７月から 12 月までの期間で、出土遺物の分類・接合・復元・実測などの整理作業を行い、報告書作成作業を進めていった。

表２　調査工程一覧



(註２) 調査工程の都合上、愛知県建設部道路建設課の 600 ㎡分は 97A 区の一部として調査を行った。詳細は第２章の図５参照。

第２章　調査方法および基本層序

第１節　調査区設定と調査方法

調査は８調査区に分けて行った（図５）。北から97A区―97B区・97D区・98 A区―96区―97C区・98B区・98C区である。調査区内には５ｍ四方でグリッドを設定した。グリッドは国土交通省告示に定められた平面直角座標第VII系（旧基準）に準拠している。これを包含層掘削および出土遺物取上げの基本単位とした。

調査では、まず表土・耕作土をバックホウで除去し、調査員による遺物包含層の精査・検討を繰り返し、作業員による掘り下げを順次行った。遺構確定後、土色の記録を経て、各遺構を完掘した。全体の遺構がほぼ各掘した段階で、航空測量および全体写真撮影を行った。これを各調査区で実施した。

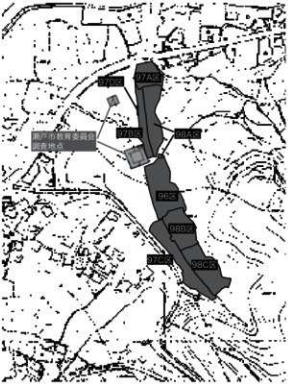


図５　調査区配置図（１：5000）

調査では、遺構番号は調査区ごとで順次付けられている。整理・報告でも番号をそのまま踏襲したため、番号の付け替えなどは行っていない。従って遺構名は調査区名を冠した、□□□区SK△△で呼称する。

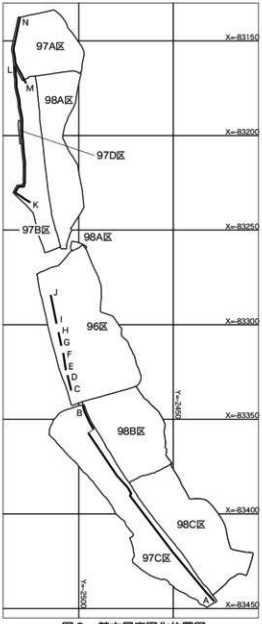


図６　基本層序図化位置図

第２節　地形・基本層序

地形は、96 区・97C 区・98B 区・98C 区の沢部分と、97A 区・97B 区・97D 区・98 A 区の緩やかな傾斜地とに、大きく二分される。発掘前状況でも両者は大きく異なる。前者は森林あるいは沢で、地表にも湧水が見られた。後者は耕作地および休耕地であった。

96 区・97C 区・98B 区・98C 区では、調査により、谷状の自然流路部分とその肩を形成する高台部分とが見つかった。基本層序は、Ⅰ層（表土層）、Ⅱ層（遺物包含層：黒（褐）色粘質土と砂層との互層）、Ⅲ層（地山：遺物包含が見られなくなった砂層および粘質土）である。Ⅱ層では、中世・近世陶器の出土を主体とするが、流路の落ち際などの地山直上では縄文土器・弥生土器・古墳時代の土師器が出土している。96 区では、Ⅱ層中に松河戸火山灰と思われる暗オリーブ褐色砂の堆積が数 cm 確認された。Ⅱ層の堆積は厚く、中世・近世陶器の包含層が最大で４m ほどを測

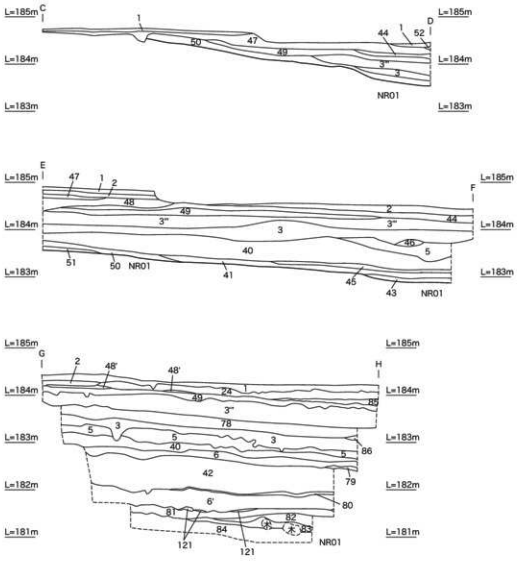
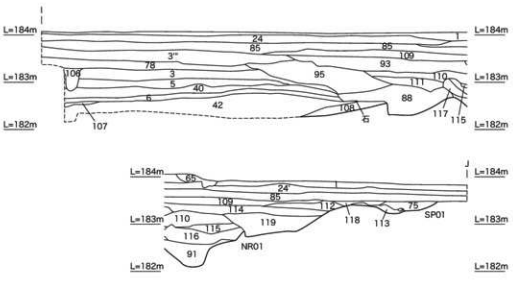


図７　土層セクション　96 区西壁

った。

97A 区・97B 区・97D 区・98 A区の基本層序は、I 層 (耕作土)、II 層 (遺物包含層 : 黒茶褐色土)、III 層 (赤褐色ないし黄褐色粘質土) である。現地形で 98A 区南東部が最も高く、そこから 97B 区および 97A に向かって傾斜している。III 層直上の「旧地形」でも同様の傾向が確認できた。I 層はさらに最上面の現耕作土と、下面の旧耕作土ないし開墾や造成による搬土に分けられる。II 層は厚さ 10cm から 20cm ほどで、調査区全体に広がっている。遺物は灰釉陶器をはじめとする古代の遺物が主体であり、局所的に中世陶器が目立つ部分もある。遺構は、II 層直下、III 層上面で検出した。第 4 章で後述するような古代・中世の遺構群が主体であり、一部、地形的に下る 97A・97B 区を中心に古墳時代初頭の遺構群が検出された。III 層は名古屋台地の熱田層に相当する。この層中から後期旧石器時代の遺構・遺物が出土した。詳細は第 3 章で報告する。



1	7.5YR4/4 褐色粘土層	48'	10YR5/2 灰黄褐色砂層(細粒砂)	93	10YR5/2 灰黄褐色砂層(粗粒砂)
2	7.5YR3/2 黒褐色土層	49	7.5YR3/1 黒褐色砂層(粗粒砂)	95	10YR5/2 灰黄褐色砂層(粗粒砂)
3	7.5YR2/3 極暗褐色粘土層	50	7.5YR2/1 黒色砂層(細粒砂)	106	10YR3/1 黒褐色泥炭層
3''	10YR3/1 黒褐色砂層(粗粒砂)	51	7.5YR2/1 黒色砂層(細粒砂)	107	10YR3/1 黒褐色砂層(粗粒砂)
5	10YR2/2 黒褐色泥炭層	52	7.5YR2/3 極暗褐色砂層(粗粒砂)	108	2.5Y3/1 黒褐色泥炭層
6	10YR2/2 黒褐色泥炭層	65	2.5Y5/2 暗灰黄色粘土層	109	10YR3/1 黒褐色土層
6'	2.5Y3/1 黒褐色泥炭層	75	10YR4/2 灰黄褐色砂層(粗粒砂)	110	10YR4/1 褐灰色砂層(細粒砂)
24	10YR3/1 黒褐色粘土層	78	7.5YR3/1 黒褐色粘土層	111	10YR3/1 黒褐色泥炭層
24'	10YR3/1 黒褐色粘土層	79	10YR5/1 褐灰色砂層(細粒砂)	112	10YR4/1 褐灰色砂層(粗粒砂)
40	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂層(粗粒砂)	80	7.5YR2/1 黒色泥炭層	113	10YR2/2 黒褐色泥炭層
41	7.5YR1.7/1黒色泥炭層	81	7.5YR3/1 黒褐色泥炭層	114	7.5YR3/1 黒褐色砂層(細粒砂)
42	7.5YR4/3 褐色砂層(粗粒砂)	82	10YR3/1 黒褐色泥炭層	115	7.5YR5/1 褐灰色砂層(粗粒砂)
43	10YR3/1 黒褐色砂層(細粒砂)	83	10YR3/2 黒褐色砂層(粗粒砂)	116	7.5YR3/1 黒褐色泥炭層
44	10YR3/1 黒褐色砂層(細粒砂)	84	10YR3/1 黒褐色泥炭層	117	7.5YR3/1 黒褐色泥炭層
45	10YR3/1 黒褐色泥炭層	85	10YR3/1 黒褐色粘土層	118	10YR4/2 灰黄褐色砂質土層
46	10YR2/2 黒褐色泥炭層	86	10YR4/2 灰黄褐色砂層(粗粒砂)	119	10YR3/1 黒褐色砂層(粗粒砂)
47	7.5YR2/1 黒色砂層(粗粒砂)	88	10YR3/2 黒褐色砂層(粗粒砂)	121	10YR3/1 黒褐色粘土層
48	7.5YR5/2 灰褐色砂層(粗粒砂)	91	10YR4/1 褐灰色砂層(粗粒砂)		

(C—D、E—F、G—H、I—J) (1 : 80)

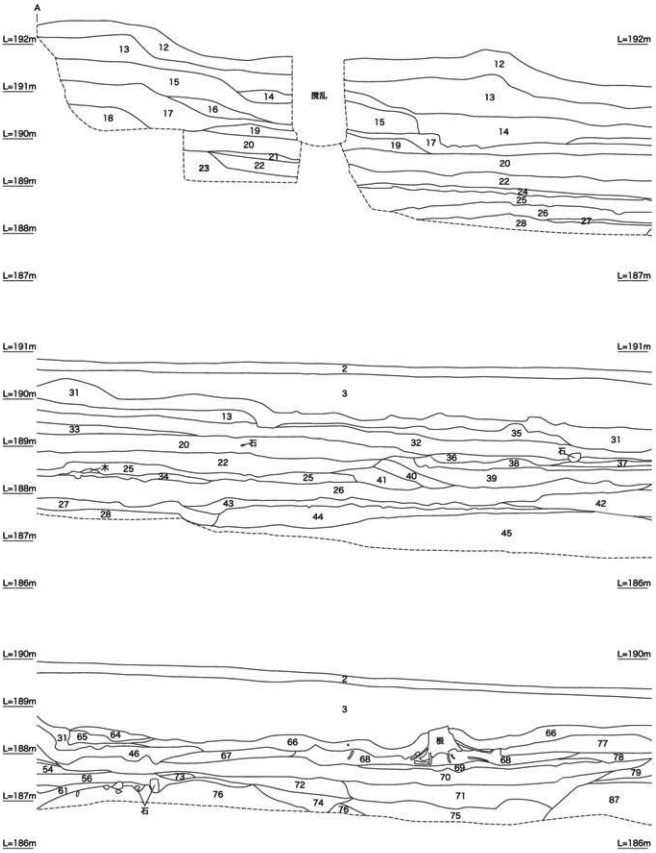
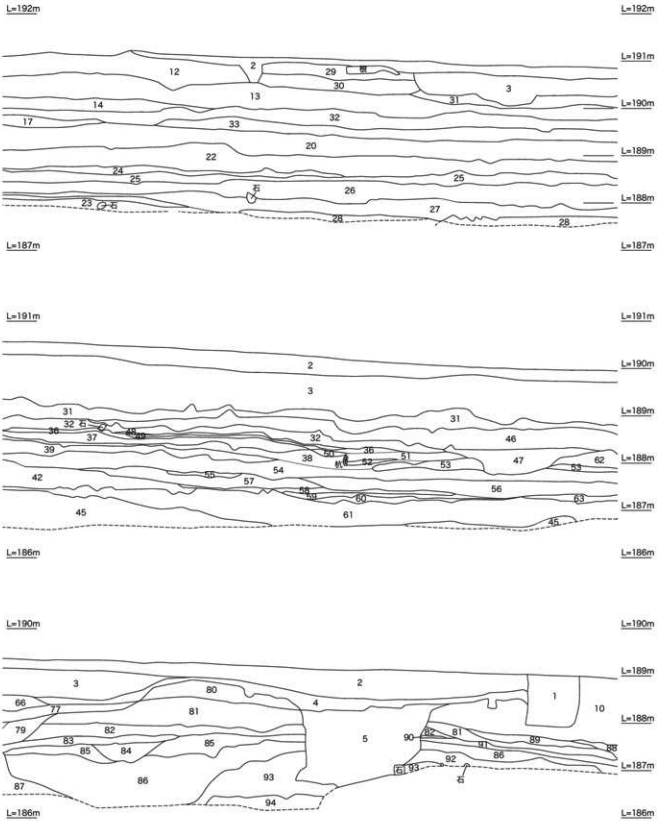
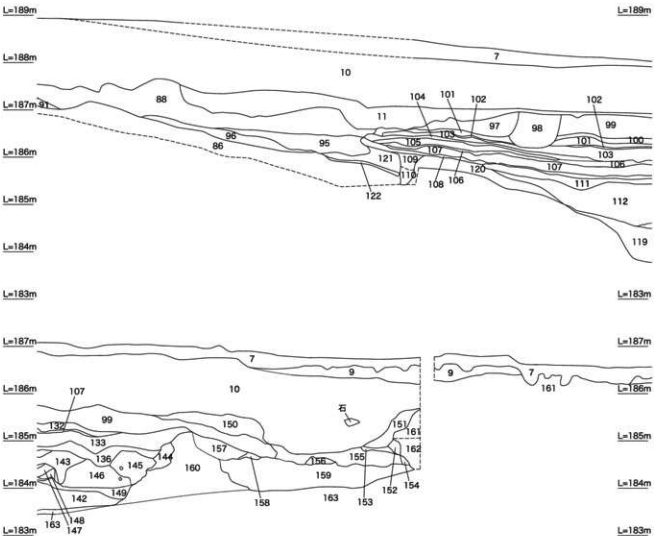


図8　土層セクション　97C 区西壁

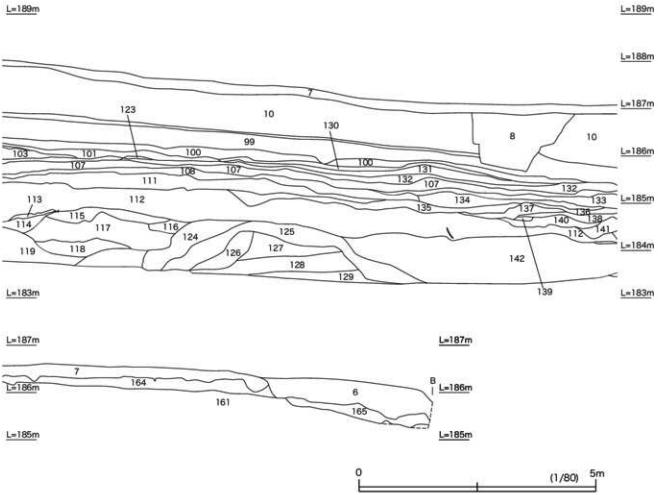


（A—Bその1）（1：80）



1 7.5YR3/2黒褐色土層
2 2.5Y5/2 暗灰黄色土層
3 10YR6/6 明黄褐色土層
4 7.5YR3/2黒褐色土層
5 7.5YR4/4褐色土層
6 7.5YR4/4褐色土層
7 2.5Y6/1 黄灰色土層
8 7.5YR4/4褐色土層
9 10YR5/1 褐灰色土層
10 7.5YR5/8明褐色土層
11 10YR5/8 黄褐色土層
12 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土層
13 7.5YR5/6明褐色砂層(粗粒砂)
14 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土層
15 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
16 5Y4/1 灰色粘質土層
17 5Y5/1 灰色砂層(中粒砂)
18 5GY5/1 オリーブ灰色砂層(粗粒砂)
19 7.5GY6/1 緑灰色砂層(粗粒砂)
20 5Y2/2 オリーブ黒色砂層(粗粒砂)
21 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂層(中粒砂)
22 7.5YR4/2灰褐色砂層(粗粒砂)
23 5BG6/1 青灰色砂層(極粗粒砂)
24 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘質土層
25 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土層
26 7.5YR3/2黒褐色泥炭層
27 2.5Y7/2 灰黄色砂層(極粗粒砂)
28 5YR4/3 にぶい赤褐色泥炭層
29 5Y3/2 オリーブ黒色土層
30 5Y5/1 灰色粘質土層
31 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土層
32 5Y5/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
33 2.5Y6/2 灰黄色砂層(粗粒砂)
34 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
35 5Y4/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
36 7.5YR3/1黒褐色泥炭層
37 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(極粗粒砂)
38 7.5YR5/1褐灰色粘質土層
39 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
40 5Y5/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
41 5Y6/3 オリーブ黄色砂層(粗粒砂)
42 7.5YR3/2黒褐色泥炭層
43 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
44 7.5YR3/3暗褐色泥炭層
45 7.5YR3/2黒褐色泥炭層
46 5Y4/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
47 5Y6/3 オリーブ黄色砂層(粗粒砂)
48 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(極粗粒砂)
49 5Y7/2 灰白色粘質土層
50 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(極粗粒砂)
51 7.5YR3/1黒褐色泥炭層
52 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
53 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
54 7.5YR6/1褐灰色粘質土層
55 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
56 7.5YR3/4暗褐色泥炭層
57 7.5YR3/1黒褐色泥炭層
58 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
59 7.5YR3/4暗褐色泥炭層
60 5Y7/1 灰白色砂層(粗粒砂)
61 7.5YR3/2黒褐色泥炭層
62 5Y6/3 オリーブ黄色砂層(極粗粒砂)
63 5Y7/1 灰白色砂層(粗粒砂)
64 10YR3/2黒褐色土
65 2.5Y4/1 黄灰色土層
66 5Y3/1 オリーブ黒色土層
67 5Y5/1 灰色土層
68 5Y6/4 オリーブ黄色砂層(粗粒砂)
69 5YR4/6 赤褐色砂層(粗粒砂)
70 5Y6/1 灰色粘質土層
71 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘土層
72 7.5GY6/1緑灰色粘質土層

図9 土層セクション 97C区西壁



73 2.5Y6/1 黄灰色粘土層
74 5GY5/1 オリーブ灰色粘質土層
75 7.5Y6/1 灰色砂層(粗粒砂)
76 5G6/1 緑灰色粘質土層
77 5Y3/1 オリーブ黒色土層
78 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
79 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
80 5YR4/4 にぶい赤褐色土層
81 5Y6/3 オリーブ黄色砂層(粗粒砂)
82 5Y5/1 灰色粘土層
83 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土層
84 5YR4/6 赤褐色砂層(粗粒砂)
85 7.5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
86 5Y5/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
87 7.5Y7/2 灰白色粘土層
88 7.5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
89 2.5Y7/3 浅黄色砂層(極粗粒砂)
90 2.5Y3/2 黒褐色粘質土層
91 2.5Y5/4 黄褐色砂層(粗粒砂)
92 7.5Y7/2 灰白色粘土層
93 7.5Y7/2 灰白色粘土層
94 5Y7/3 浅黄色粘土層
95 7.5YR4/4褐色土層
96 2.5Y5/3 黄褐色砂層(粗粒砂)
97 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
98 7.5YR3/4褐褐色土層
99 7.5Y6/2 灰オリーブ色砂層(粗粒砂)
100 5Y7/1 灰白色砂層(極粗粒砂)
101 2.5Y6/2 灰黄色粘質土層
102 2.5Y3/1 黒褐色粘質土層
103 2.5Y7/2 灰黄色砂層(極粗粒砂)
104 2.5Y4/1 黄灰色粘質土層
105 5Y7/1 灰白色砂層(極粗粒砂)
106 2.5Y4/1 黄灰色粘質土層
107 5Y7/1 灰白色砂層(極粗粒砂)
108 7.5Y6/1 灰色土層
109 5Y4/1 灰色砂層(極粗粒砂)
110 5Y3/1 オリーブ黒色砂層(極粗粒砂)
111 5Y6/2 灰オリーブ色砂層(極粗粒砂)
112 10YR3/4 暗褐色泥炭層
113 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
114 10YR3/3 暗褐色泥炭層
115 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
116 10YR3/4 暗褐色泥炭層
117 10YR3/2 黒褐色泥炭層
118 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
119 5Y5/1 灰色粘土層
120 10Y7/1 灰白色砂層(粗粒砂)
121 5Y7/2 灰白色砂層(極粗粒砂)
122 7.5Y8/2 灰白色粘質土層
123 2.5Y7/2 灰黄色砂層(極粗粒砂)
124 5Y5/1 灰色粘土層
125 5Y6/1 灰色粘土層
126 5Y7/1 灰白色砂層(極粗粒砂)
127 5Y7/1 灰白色砂層(粗粒砂)
128 10GY7/1 明緑灰色粘土層
129 5Y7/1 灰白色砂層(極粗粒砂)
130 5YR4/4 にぶい赤褐色砂層(極粗粒砂)
131 5Y7/4 浅黄色砂層(細粒砂)
132 5Y6/1 灰色砂層(粗粒砂)
133 7.5Y6/1 灰色砂層(中粒砂)
134 5Y7/2 灰白色砂層(細粒砂)
135 7.5Y5/2 灰オリーブ色砂層(極粗粒砂)
136 10YR4/1 褐灰色粘質土層
137 5Y6/1 灰色砂層(極粗粒砂)
138 5Y6/1 灰色土層
139 5Y7/4 浅黄色砂層(粗粒砂)
140 2.5GY6/1オリーブ灰色砂層(粗粒砂)
141 2.5GY7/1明オリーブ灰色粘質土層
142 10Y7/1 灰白色砂層(極粗粒砂)
143 7.5YR3/1黒褐色土層
144 10GY5/1 緑灰色砂層(粗粒砂)
145 5YR5/6 明赤褐色砂層(極粗粒砂)
146 2.5Y6/3 にぶい黄色砂層(極粗粒砂)
147 2.5GY6/1オリーブ灰色砂層(粗粒砂)
148 10Y6/1 灰色砂層(粗粒砂)
149 5YR5/6 明赤褐色砂層(極粗粒砂)
150 10YR7/6 明黄褐色砂層(粗粒砂)
151 2.5Y5/2 暗灰黄色砂層(中粒砂)
152 5Y6/2 灰オリーブ色粘質土層
153 7.5YR5/4にぶい褐色砂層(粗粒砂)
154 5Y5/1 灰色粘質土層
155 10YR6/6 明黄褐色砂層(中粒砂)
156 7.5Y7/2 灰白色砂層(中粒砂)
157 7.5Y8/2 灰白色粘土層
158 10G5/1 緑灰色砂層(粗粒砂)
159 5YR5/6 明赤褐色砂層(極粗粒砂)
160 7.5Y8/2 灰白色粘土層
161 7.5Y7/3 浅黄色粘土層
162 7.5Y7/2 灰白色礫層
163 5BG7/1 明青灰色粘土層
164 7.5YR5/6明褐色土層
165 10YR4/1 褐灰色土層

（A—Bその1）（1：80）

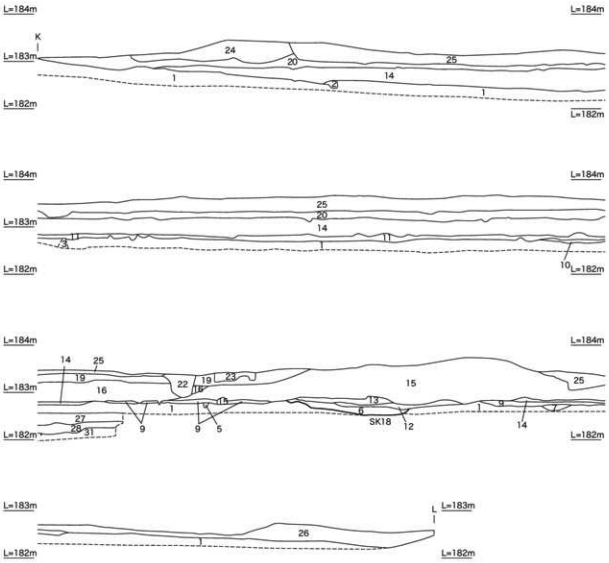
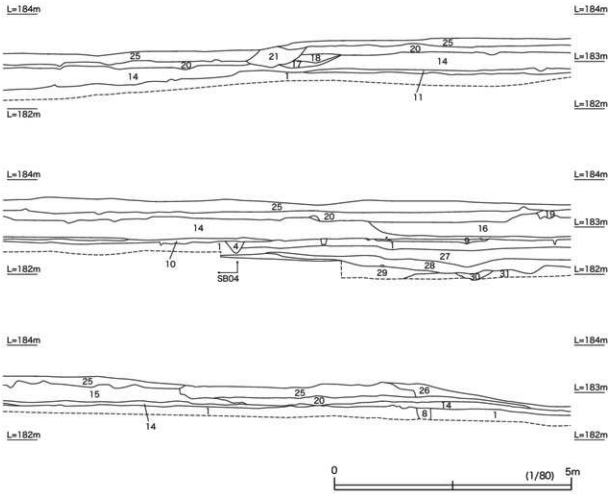
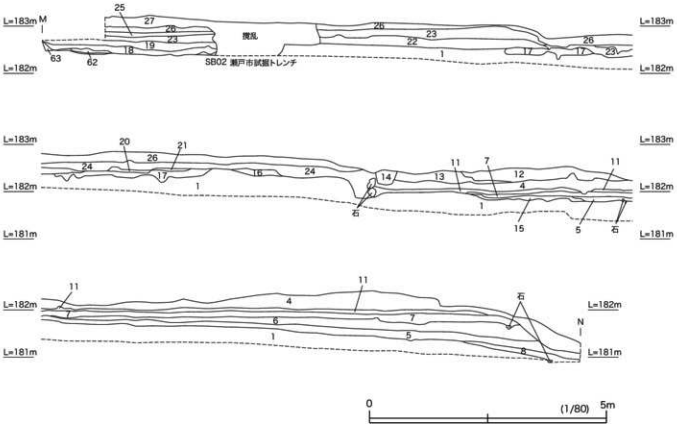


図10　土層セクション　97 B区西壁



1　10YR4/4 褐色粘質土層
2　10YR4/4 褐色粘質土層
3　2.5Y3/2　黒褐色粘質土層
4　10YR4/1 褐灰色粘質土層
5　10YR3/2 黒褐色粘質土層
6　10YR3/2 黒褐色粘質土層
7　10YR3/1 黒褐色粘質土層
8　10YR3/2 黒褐色粘質土層
9　10YR3/2 黒褐色粘質土層
10　10YR4/1 褐灰色粘質土層
11　2.5Y4/1　黄灰色粘質土層
12　10YR3/2 黒褐色粘質土層
13　2.5Y5/2　暗灰黄色砂シルト層
14　2.5Y4/1　黄灰色シルト質砂層
15　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト層
16　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト層
17　5Y4/2　灰オリーブ色砂質土層
18　2.5Y6/6　明黄褐色粘質土層
19　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質シルト層
20　2.5Y4/4　オリーブ褐色砂質シルト層
21　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土層
22　2.5Y4/1　黄灰色砂質土層
23　10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト層
24　7.5YR4/1 褐灰色砂質土
25　5Y3/1　オリーブ黒色土層
26
27　7.5YR5/6明褐色粘土
28　7.5YR5/6明褐色粘土
29　10YR6/6 明黄褐色粘土
30　10YR7/4 にぶい黄橙色粘土
31　2.5Y6/2　灰黄色粘土

（K—L）（1：80）



1	10YR4/4	褐色粘質土層	14	7.5YR1.7/1	黒色粘質土層	23	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土層
4	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土層	15	10YR2/1	黒色粘質土層	24	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土層
5	10YR3/3	暗褐色粘質土層	16	10YR4/1	褐灰色土層	25	10YR5/3	にぶい黄褐色土層
6	10YR5/6	黄褐色粘質土層	17	10YR2/3	黒褐色粘質土層	26	5Y4/1	灰色シルト層
7	10YR6/4	にぶい黄橙色粘質土層	18	10YR3/2	黒褐色粘質土層	27	2.5Y5/3	黄褐色土層
8	5YR3/2	暗赤褐色粘質土層	19	10YR3/4	暗褐色粘質土層	62	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト層
11	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土層	20	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘質土層	63	2.5Y3/1	黒褐色粘質土層
12	10YR3/2	黒褐色粘質土層	21	10YR3/4	暗褐色粘質土層			
13	2.5Y3/1	黒褐色シルト層	22	10YR4/2	灰黄褐色土層			

図11　土層セクション　97 A区西壁（M—N）（1：80）

今回の調査で出土した遺構・遺物の時代は、次の通りである。

後期旧石器時代

縄文時代から弥生時代

古墳時代初頭

古代

中世・近世

第３章　後期旧石器時代の遺構・遺物

第１節　調査方法と調査時の出土状況

後期旧石器に属する石器が出土したのは、97B・97D・98A にまたがる部分であり、今回の調査区全体の中でも局所的である (図 12)。当地点は、東側から伸びる丘陵の緩斜面に面しており、東側から西側に向かって下っている。現地表は標高 183 ～ 185m ほどである。

初めてこの石器群 (「97B.D.98A SX01」註１) が見つかったのは、97B 区調査時においてである。遺物は、第４章で後述する上面に展開する古代遺構検出面の褐色粘質土層 (図 14 の１層) およびその下層の明褐色粘質土層 (図 14 の 27・28 層) に包含されていた。石器群を各層に分層して取上げることはできなかった。

各調査区完掘後には、それぞれ旧地形図を作成した (図 14)。旧地形は、大きく「谷状地形」と「上面平坦部」とに分けられる。「谷状地形」は 98A 区の中ほどから始まり、97B・97D 区へと西に向かって伸びている。「上面平坦部」は 98A 区の「谷状地形」の北東部および南東部に向かって広がる緩斜面で、旧石器時代の遺物はこの北東部側にかけて見られた。

石器群の出土状況について、平面的には濃密な分布が東西方向の幅５m ほどの「帯状」に展開するようで、98A 区ではこの「帯状」が若干北東―南西方向に変化する (図 13)。97B・97D 区側では旧地形として検出された「谷状地形」に沿って出土しており、特に 97B 区東側や 97D 区付近に最も濃密な部分がみられる。また 98A 区では、「谷状地形」からの出土はむしろ少なく、「上面平坦部」から「谷状地形」の落ち際にかけて石器群が分布している様である。

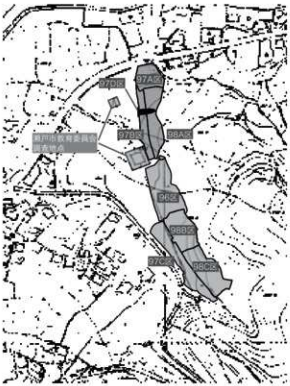


図 12 後期旧石器時代遺物出土位置図 (１：5000)
黒塗りが該当部分

なお、グリッドは当センターで通常行っている５m 四方グリッドをそのまま使用し、グリッド自体のさらなる細別は行っていない。しかし、遺物の取上げはほぼすべて地点による記録をとることができている。

(註１) これら石器群および検出された谷状地形について、調査時の遺構名は 97B SX01 と 97D SX01 および 98A SX01 である。以下、まとめて「97B.D.98A SX01」と呼称する。

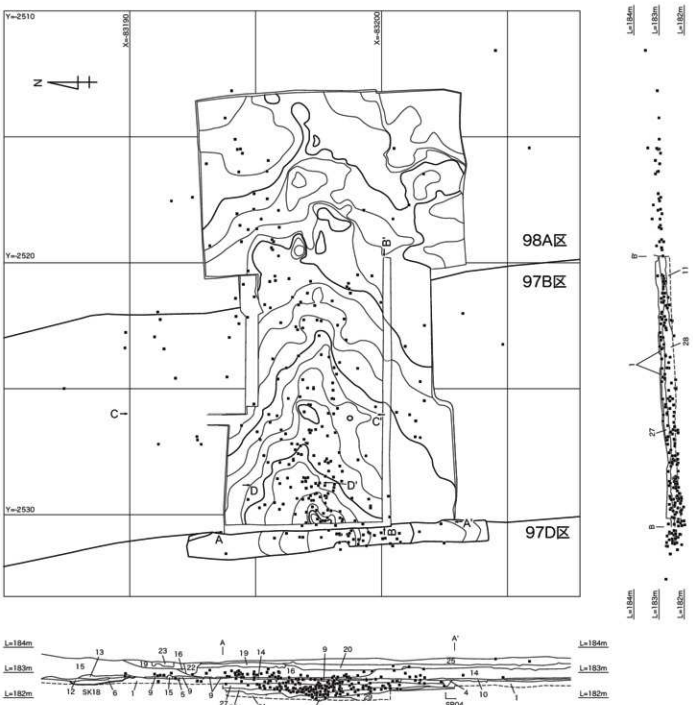
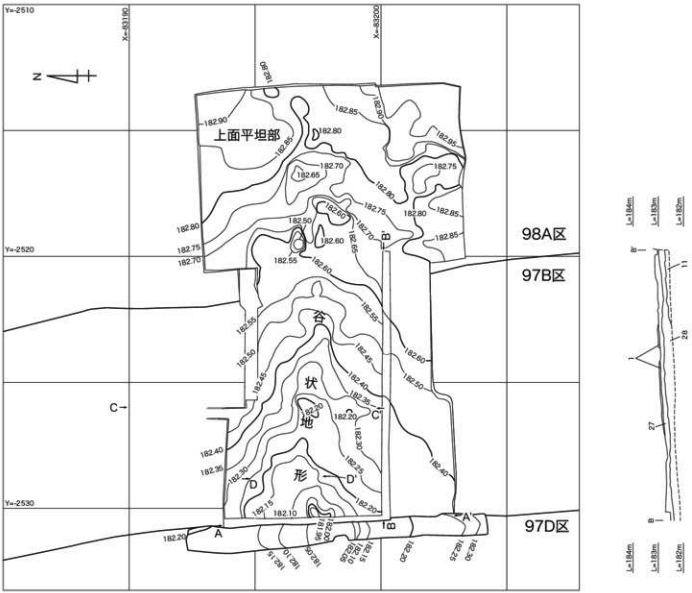


図 13　97B.D.98A SX01　遺物出土状態散布図 (1 ：150)

第２節　出土遺物の分析方法

まずは取上げられた遺物についてドットマップを作成し、その分布状況を最終的に確認した (図13)。それを踏まえて、石器の器種分類と、同時に石材分類とを行った。石材分類では、特にチャートに関して、色調・光沢・節理の状態・不純物の混入状態を基準に、さらなる細別を行った (表3)。下呂石に関しては、礫風化面が残存しているもののみ細別を行った。さらに石器同士の接合



1 10YR4/4 褐色粘質土層
4 10YR4/1 褐灰色粘質土層
5 10YR3/2 黒褐色粘質土層
6 10YR3/2 黒褐色粘質土層
9 10YR3/2 黒褐色粘質土層
10 10YR4/1 褐灰色粘質土層
12 10YR3/2 黒褐色粘質土層
13 2.5Y5/2 暗灰黄色砂シルト層
14 2.5Y4/1 黄灰色シルト質砂層
15 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト層
16 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト層
19 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト層
20 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト層
22 2.5Y4/1 黄灰色砂質土層
23 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト層
25 5Y3/1 オリーブ黒色土層
27 7.5YR5/6 明褐色粘土層
28 7.5YR5/6 明褐色粘土層
29 10YR6/6 明黄褐色粘土層
30 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土層
31 2.5Y6/2 灰黄色粘土層

図14 97B.D.98A SX01 地形測量図（1：150）

関係を検討するなど、各種石材での石器の様相を　　把握することを主眼とした分析を行った。

表３　チャート細別一覧表

チャート細別	色調	光沢	節理	不純物	備考
チャート01	5Y2/1 黒	明瞭	極めて少ない	少ない	
チャート02	黒褐	明瞭	少ない	鉄分など多く含む	「土味石」
チャート03	2.5GY6/1 オリーブ灰	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート04	2.5Y5/3 黄褐	やや鈍い	少ない	少ないものの一部鉄分を含む	
チャート05	7.5Y7/1 灰白	鈍い	少ない	砂粒状のものを多く含む	
チャート06	N2/1 黒と7.5Y8/1 灰白との斑	明瞭	多い	砂粒状のものを少量含む	
チャート07	2.5YR4/3 赤褐と2.5Y8/1 灰白との斑	明瞭	多い	少ない	
チャート08	2.5YR4/3 赤褐と10YR8/1 灰白との斑	やや鈍い	多い	少ない	
チャート09	2.5Y7/4 浅黄	明瞭	多い	少ない	
チャート10	5P3/1 暗紫灰と5Y6/3 オリーブ灰	明瞭	多い	少ない	
チャート11	5YR3/3 暗赤褐と10YR7/4 にぶい黄橙	鈍い	多い	砂粒状のものを多く含む	
チャート12	2.5YR2/4 極暗赤褐	明瞭	少ない	少ない	
チャート13	10YR3/2 暗赤褐にN5/1～4/1灰が若干含まれる	鈍い	多い	少ない	
チャート14	2.5YR2/3 極暗赤褐	明瞭	少ない	少ない	
チャート15	2.5YR3/3 暗赤褐	明瞭	少ない	少ない	
チャート16	5YR2/3 極暗赤褐	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート17	2.5YR3/3 暗赤褐と2.5YR3/1 暗赤灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート18	2.5YR2/2 暗赤褐	鈍い	多い	砂粒状のものを多く含む	
チャート19	7.5R 3/3 暗赤褐	明瞭	多い	少ない	
チャート20	10YR7/3 にぶい黄橙とN3/1 暗灰と7.5YR3/2 黒褐	明瞭	多い	少ない	
チャート21	N2/1 黒	明瞭	多い	少ない	
チャート22	N4/1灰と2.5Y7/4 浅黄	鈍い	多い	多い	
チャート23	N3/1 暗灰と2.5GY3/1 暗オリーブ灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート24	N4/1 灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート25	N3/1 暗灰と7.5YR2/1 黒	やや鈍い	多い。層状に見られる	少ない	
チャート26	N3/1 暗灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート27	N5/1 灰とN8/1灰白	やや鈍い	少ない	砂粒状のものを所々含む	
チャート28	N3/1 暗灰	やや鈍い	多い	少ない	
チャート29	N4/1 灰	鈍い	多い。層状に見られる	少ない	
チャート30	N4/1 灰とN2/1 黒	明瞭	多い。層状に見られる	少ない	
チャート31	2.5GY6/1 オリーブ灰と7.5Y2/1黒	明瞭	少ない	少ない	
チャート32	N3/1 灰とN2/1 黒	やや鈍い	多い	少ない	
チャート33	2.5GY5/1 オリーブ灰とN3/1 暗灰	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート34	N4/1 灰とN3/1 黒	明瞭	少ない	少ない	
チャート35	N5/1 灰	明瞭	少ないが部分的に集中する	少ない	
チャート36	10Y5/1 灰と10Y5/2 オリーブ灰	やや鈍い	多い	少ない	
チャート37	5B6/1 青灰と2.5GY8/1 灰白	やや鈍い	多い	少ない	
チャート38	7.5GY6/1 緑灰とN3/1 暗灰	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート39	5GY6/1 オリーブ灰	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート40	N5/1 灰とN7/1灰白	明瞭	少ない	少ない	
チャート41	7.5GY6/1 緑灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート42	7.5Y5/1 灰	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート43	10Y6/1 灰	鈍い	少ない	少ない	
チャート44	N4/1 灰と2.5GY8/1 灰白	鈍い	少ない	少ない	
チャート45	N2/1 黒と2.5GY4/1 暗オリーブ灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート46	N3/1 暗灰と2.5Y8/4 淡黄	やや鈍い	多い。層状に見られる	少ない	
チャート47	7.5Y5/1 灰とN3/1 暗灰	やや鈍い	多い。層状に見られる	少ない	
チャート48	N2/1 黒	明瞭	少ない	少ない	
チャート49	N7/1 灰白	やや鈍い	多い	砂粒状のものを所々含む	
チャート50	2.5GY7/1 明オリーブ灰	鈍い	少ない	少ない	
チャート51	N8/1 灰白	鈍い	少ない	少ない	
チャート52	5GY7/1 明オリーブ灰	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート53	N6/1 灰とN2/1 黒	明瞭	少ない	少ない	
チャート54	5GY5/1 オリーブ灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート55	7.5GY5/1 オリーブ灰と5PB3/1 暗青灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート56	5Y7/2 灰白	明瞭	少ない	少ない	
チャート57	10G7/1 明緑灰	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート58	N4/1 灰と10TR5/4にぶい黄橙	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート59	N5/1 灰とN8/1灰白	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート60	5GY7/1 明オリーブ灰と2.5Y7/3 浅黄	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート61	5Y8/3 淡黄と10YR7/6 明黄褐	やや鈍い	少ない	少ない	

表4　石材別出土石器器種一覧表

石材	識別	台形様石器	掻器	削器	使用痕剥片	ナイフ形石器	石刃	その他剥片類	石核	局部磨製石斧	礫器	微細剥片	接合資料	総重量(g)
チャート	1	1			3				3			2		28.67
チャート	2							1	3			1		72.78
チャート	3					1	1	4	2				●	18.72
チャート	4		1		2			10	2				●	87.13
チャート	5							2	2			2		9.45
チャート	6							8	3				●	74.21
チャート	7							2						1.07
チャート	8							1				1		0.92
チャート	9								1					18.58
チャート	10							1	1					11.98
チャート	11							6					●	34.19
チャート	12			1				3	3					37.05
チャート	13							6	2				●	26.65
チャート	14				1			1	1					19.72
チャート	15							1	1					28.47
チャート	16				1									12.80
チャート	17								1					3.51
チャート	18								1					3.67
チャート	20							4	4					166.51
チャート	21				1			5	1				●	58.59
チャート	22				1			11	8			9		110.66
チャート	23			1				12	2			1	●	97.07
チャート	24				1			2	3			1	●	39.88
チャート	25				1			10	6			1		76.79
チャート	26							2	6				●	33.66
チャート	27							1	3					25.58
チャート	28							2						15.89
チャート	29				3			2	4			2		68.90
チャート	30							1	1					8.12
チャート	31			1				2						12.54
チャート	32				1				1					23.84
チャート	33								1					5.09
チャート	35								2					244.12
チャート	36				1			4				1	●	144.49
チャート	37								1					305.40
チャート	38			1				1				3		19.49
チャート	39							1						3.48
チャート	40							1	2					46.00
チャート	42			1										2.43
チャート	43				1									10.22
チャート	44								1					22.49
チャート	45							1	1			2		4.11
チャート	46							1						8.02
チャート	47								1					8.48
チャート	48							1				3		1.79
チャート	49							2						8.43
チャート	51								1					19.92
チャート	52								1					5.98
チャート	53							2						1.50
チャート	54								1					3.79
チャート	55				1									1.03
チャート	56							1						1.15
チャート	57											1		0.16
チャート	58											1		0.34
チャート	59											1		0.42
チャート	60											1		0.32
チャート	61											1		0.12
黒曜石								2	1			8		5.90
石英								10	2			4		99.61
サヌカイト?								5	5			1	●	68.67
下呂石	円礫(爪)								1					10.64
下呂石	その他	1						3				1		5.83
層状頁岩								2						1.64
泥岩												1		0.19
泥岩起原のホルンフェルス			1							1	1	5		423.32

第３節　97B.D.98A SX01 の出土状況分析

石器の器種では、台形様石器（２点）・ナイフ形石器（１点）・掻器（２点）・削器（５点）・使用痕剥片(18 点)・石刃？(１点)・局部磨製石斧（１点）・礫器（１点）、そして各種剥片類（多数）と石核類（多数）が確認された（表４）。

まず製品について見ていく。分布は旧地形の「谷状地形」と「上面平坦部」とで様相が異なるようである。「谷状地形」から出土している製品としては、台形様石器・掻器・削器・使用痕剥片・局部磨製石斧がある。掻器・削器・使用痕剥片は、各種剥片類および石核類が濃密に分布する区域にほぼ重なって出土している。一方、台形様石器（１・135)(註２）と局部磨製石斧(138) はこの濃密に分布する区域から若干離れた場所に出土している様子が見られる。「上面平坦部」から出土している製品には、ナイフ形石器・石刃？・削

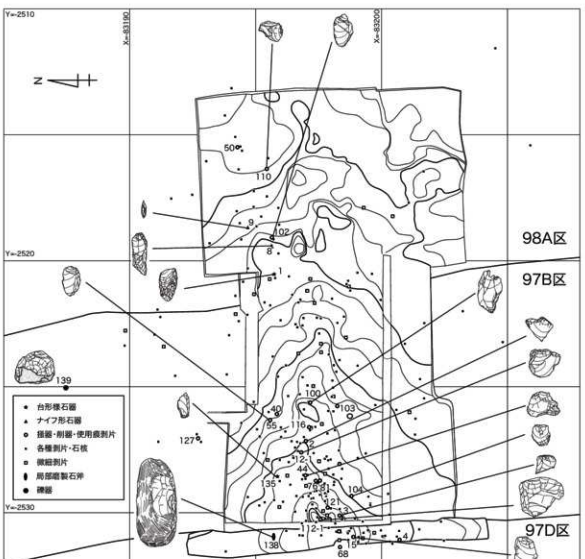


図 15　97B.D.98A SX01　遺物出土状況（製品）(１：150）

（註２）番号は遺物番号を示す。以下同じ。

器・使用痕剥片がある。ナイフ形石器(9)・石刃?(8)は、「上面平坦部」の上ではなく、むしろ「谷状地形」への落ち際に位置する。なお、礫器(139)に関しては、「谷状地形」「上面平坦部」のいずれからも若干離れた地点に位置している。

次に、各種剥片類・石核類のうち、特に接合資料について概観する。製品との接合例では、石核と使用痕剥片との接合例が2点ある(12・112)。特に接合資料に関しては、「谷状地形」と「上面平坦部」とに明確に分かれるようであり、両者の石器の接合関係は確認ではなかった。「谷状地形」では、各種剥片類および石核類が濃密に分布する区域に集中してみられる。一方、「上面平坦部」では上面から「谷状地形」の落ち際にかけての間で接合関係が確認できた。

また、各石材の分布状況について概観した(図20)(註3)。石材ごとの石器分布状況として、A「谷状地形」を中心とするもの、B「上面平坦部」を中心とするもの、C「谷状地形」および「上面平坦部」の両方に石器の分布が広がるもの、の3パ

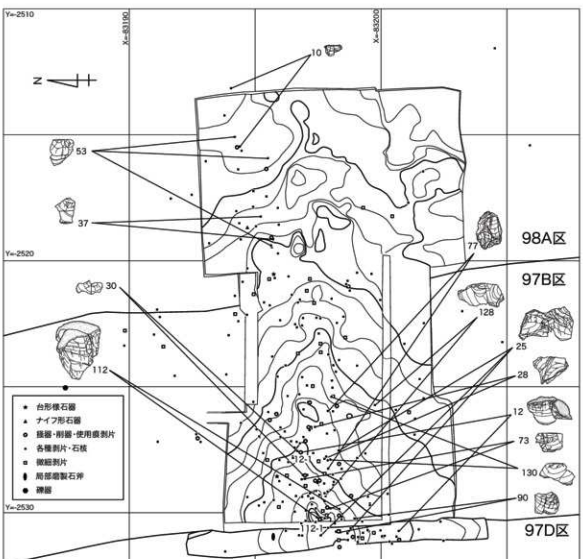


図16　97B.D.98A SX01　遺物出土状況(接合資料)(1：150)

(註3)詳細は図17～19参照。

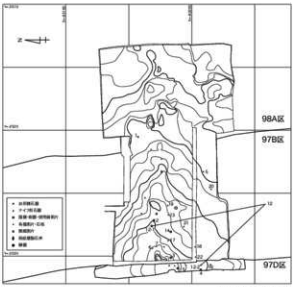


チャート01-02-04

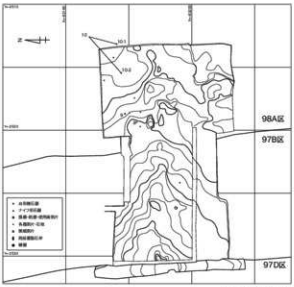


チャート03-07-08

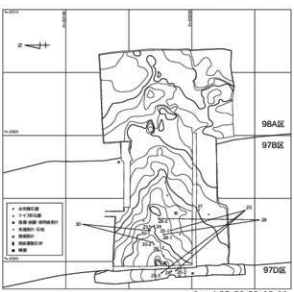


チャート05-06-09-10-11

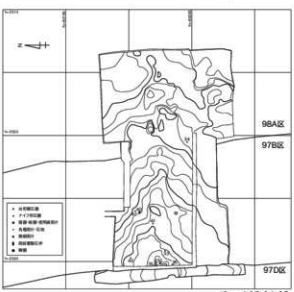


チャート12-14-15

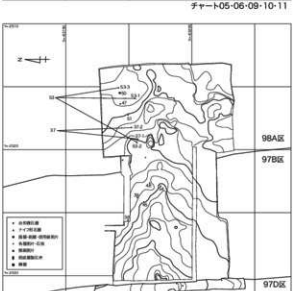


チャート13-17-20-21

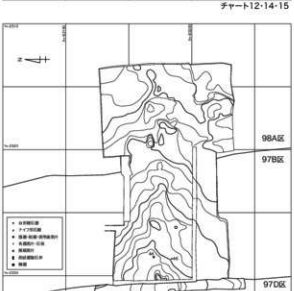


チャート16-18

図17　97B.D.98A SX01　石材別遺物出土状況1（1：300）

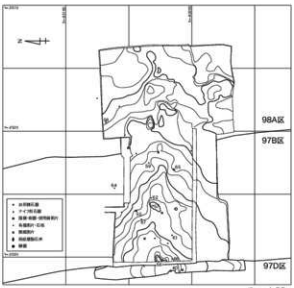


チャート22

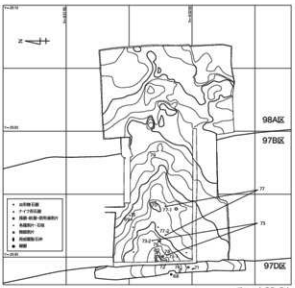


チャート23･24

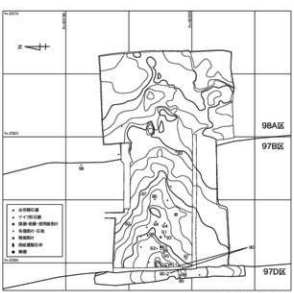


チャート25･26･27･28

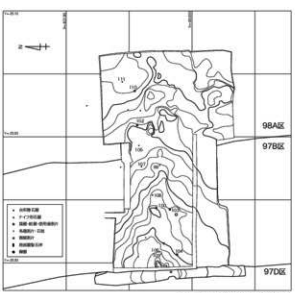


チャート29･30･31･32･35･46

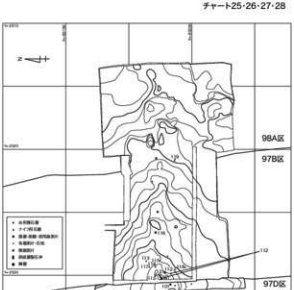


チャート33･36･37･38･39･40･43･44

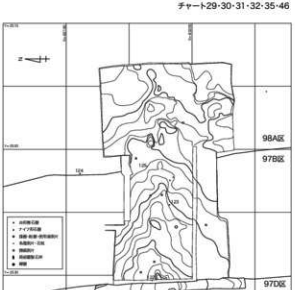


チャート47･48･51･52･53･54･55･56･58･59･60･61

図18　97B.D.98A SX01　石材別遺物出土状況2（1：300）

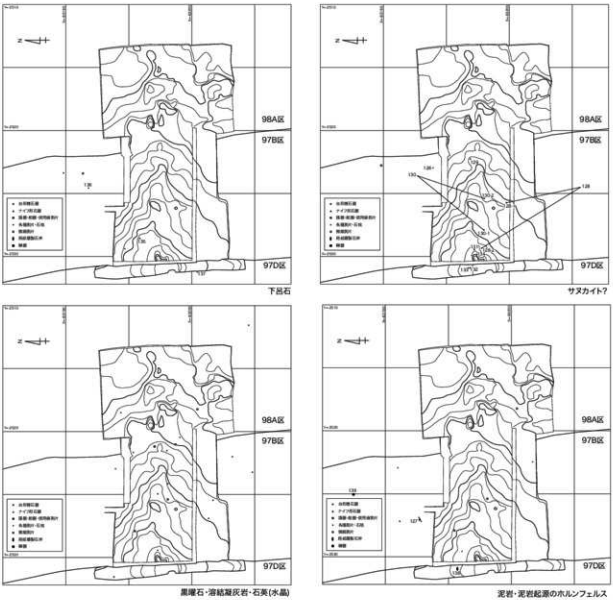
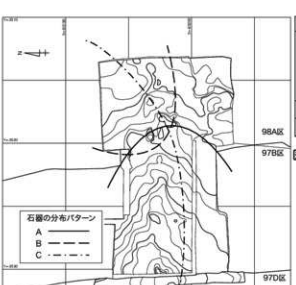


図19　97B.D.98A SX01　石材別遺物出土状況3(1：300)



分布パターン	該当石材
A	チャート01・02・04・05・06・09・10・11・12・14・15・16・17・18・23・24・25・26・27・30・33・36・37・38・39・40・43・44・47・48・51・52・53・54・56・60・61、黒曜石、下呂石、サヌカイト?、石英(水晶)、溶結凝灰岩、泥岩起源のホルンフェルス
B	チャート03・07・35・46
C	チャート08・13・20・21・22・28・29・31・32

図20　97B.D.98A SX01 石材別石器出土分布パターン

ターンに分けることができる。分布パターンAを示す石材は、97B.D.98A SX01 出土石器の半数以上を占め、チャートのみならず黒曜石・下呂石・サヌカイト？などもこのパターンを示す。一方、分布パターンB・Cを示す石材は、チャートのみで少なく、特に分布パターンBを示す石材はさらに限定されるようである。

第４節　97B.D.98A SX01 の遺物

出土遺物について、石材ごとに報告していく。すべての石器について記述できないが、代表的なものについて取上げていく。

チャート 01 製の石器（１～５）　１は台形様石器である。横長気味の貝殻状剥片を素材剥片とし、長辺の両側には急角度でブランディング状の加工がなされている。裏面側では基部と考えられる一端に、さらに加工が加えられている。２・３は使用痕剥片である。横長気味の貝殻状剥片の端部や長辺に不連続な微細剥離が認められる。４は一部に節理面を残す剥片で、縦長剥片である。石核の打面調整剥片かもしれない。剥片端部に微細剥離があり、使用痕剥片になる可能性もあるか。５は石核である。かなり小型になるまで剥片作出が行われたようである。主に横長気味の剥片が作出されたものと思われる。

チャート 02 製の石器（６・７）　いわゆる「土岐石」と呼ばれる石材の石器群である。６は各方向に打面転位をさせながら縦長・横長気味の剥片を作出している。７は方形ブロック状の石核で、これも各方向に打面を転位させながら縦長・横長気味の剥片を作出している。これらに対応する製品はここでは見られなかった。

チャート 03 製の石器（８～11）　９はナイフ形石器である。先端部が欠失しているものの、現存長２cm ほどと小型の部類のものと考えられる。縦長剥片の打点側には左右両側から平坦剥離が見られ、左右両側辺にはやや角度が急なブランディング状の剥離が加えられている。８は縦長剥片である。連続して同一方向に剥片作出および調整が行われたようで、石刃の可能性があるか。10 は石核 (10-2) と剥片 (10-1) との接合資料である。打面調整を行いつつ、やや縦長の剥片が作出されている。11 も 10-2 と同様な石核である。10・11 のような石核などから作出された剥片が９の素材剥片になった可能性が考えられる。

チャート 04 製の石器（12～22）　12 は石核 (12-2) と使用痕剥片 (12-1) との接合資料である。12 は打面未調整の状態で、同一の打面方向から横長気味の貝殻状剥片を複数枚作出したものと考えられる。このように作出された剥片としては、13・18・19・22 などが考えられる。14 は急角度の刃部を有することから「掻器」とした。厚手の横長気味な貝殻状剥片を使用している。15 は縦長気味の剥片の端部に使用による微細剥離が見られるものである。21 も各方向に打面を転位させながら作出された、横長気味な貝殻状剥片の１枚であろうか。20 は横長気味な貝殻状剥片の端部を急角度で剥離することにより、長方形状の剥片を意図して作られたかもしれない。16 は石核

である。各方面に打面を転位させながら、横長気味の剥片を作出していたものと考えられる。

チャート 05 製の石器 (23・24)　23 は石核。厚みのある三角形状を呈するものである。23・24 から各方向から打面を転位させ、主に横長気味の貝殻状剥片を作出している様子が窺えられる。

チャート 06 製の石器 (25・26)　25 は板状の石核 (25-1・25-2) と剥片 (25-3) の接合資料である。各方向から打面を転位させながら縦長および横長気味の貝殻状剥片を作出している。26 も石核である。これも各方向から縦長および横長気味の貝殻状剥片を作出している。一部礫風化面が残されている部分があり、ここからは剥離行為は行っていない。

チャート 07 製の石器 (27)　サイコロ状を呈する石核である。これも打面を各方向に転位させながら、横長気味の貝殻状剥片を作出している。最終的には長さ 1cm 程度の剥片を作出して終了している。

チャート 08 製の石器 (28 ～ 30)　28・30 は剥片同士の接合例である。各方向に打面転位をさせながら作出された一剥片が、さらに分離したものと考えられる。30 は横長に作出された一剥片が、剥片中央部で分離したものである。29 は縦長気味の剥片である。

チャート 12 製の石器 (31 ～ 36)　31 は掻器である。縦長剥片の端部にやや角度が急な刃部が見られる。また、打点側の表面付近には、プランディング状の加工が施されている。32 は礫風化面を各所に残す横長気味の剥片である。持ち込まれた原石に対して行われた初段階の剥片である。33・34・36 は縦長・横長気味の貝殻状剥片である。36 は石核で、対向する二方向から剥片を作出している。32・36 からは原石として小型のものも使用されていることが想定される。

チャート 13 製の石器 (37 ～ 39)　37 は縦長気味の剥片の接合資料である。38 も同様な横長気味の貝殻状剥片である。39 は細長の石核で、打面を 90 度かえながら、横長・縦長気味の剥片を作出している。

チャート 14 製の石器 (40・41)　40 は縦長気味の貝殻状剥片である。凸状の縁辺部には細かい不連続な剥離があり、使用痕剥片の可能性もある。41 は石核である。各方向から横長気味の貝殻状剥片を作出している。一側面には礫風化面がそのまま残されている。

チャート 15 製の石器 (42・43)　ともに石核と考えられる。42 は円板状を呈するもので、周囲から剥片作出が行われている。43 は板状を呈するもので、一方向から縦長気味の剥片を作出している。一側面には礫風化面がそのまま残されている。

チャート 16 製の石器 (44)　横長気味の貝殻状剥片である。端部には一部微細剥離が見られることから使用痕剥片であると考えられる。一部に礫風化面がそのまま残されている。

チャート 17 製の石器 (45)　石核である。各

方向から横長気味の貝殻状剥片を作出している。一側面には礫風化面がそのまま残されている。

チャート 18 製の石器 (46)　石核と考えられる。最終的には長さ 1 cm 程度の横長気味な貝殻状剥片を作出して終了しているか。

チャート 19 製の石器 (47 ～ 51)　47 ～ 50 は石核である。47 は円板状を呈するもので、主に対向する二方向から横長気味の貝殻状剥片作出を行っている。49 も対向する二方向から横長気味の貝殻状剥片作出を行っている。50 は原石よりの新鮮な剥離面から、上下に打面を転位させて、横長気味の貝殻状剥片を作出している。51 は縦長剥片で、肉厚な三角柱状を呈する。

チャート 20 製の石器 (52 ～ 54)　52 は横長気味の剥片である。肉厚な剥片で、ここからさらに剥片作出の石核や、そのままでも刃器などに使用可能である。一部に礫風化面がそのまま残されている。53 は縦長気味の貝殻状剥片が三部分に分かれたものである。

チャート 22 製の石器 (55 ～ 67)　55 は使用痕剥片。縦長剥片の一側辺に使用によると思われる微細剥離が見られる。56 ～ 59 は石核である。56 は横長気味の貝殻状剥片を作出したものである。57 は細長い板状の形状を呈する。打面を転位させて横長・縦長剥片を作出している。39 に類似か。58 は柱状の石核で、これも打面を転位させ、横長・縦長の剥片を作出している。59 は扁平な三角柱状の石核である。周囲を巡るように、順次剥片作出を行っている様子が窺えられる。60 は横長剥片である。表面は幾度かの剥離調整により、稜が立っている。打面調整のために作出された剥片かもしれない。61 ～ 67 は、縦長・横長気味の貝殻状剥片である。

チャート 23 製の石器 (68 ～ 75)　70 は石核である。菱形状の形態をなすもので、4 方向から横長気味の貝殻状剥片を作出している。両面ともに同様の剥片剥離を行っている。一部打点部分が抜けて大きく凹状を呈する部分があるなど、特徴的な石核といえる。71 ～ 74 は縦長・横長気味の貝殻状剥片である。73 は剥片同士の接合例である。

チャート 24 製の石器 (76 ～ 80)　76 は使用痕剥片。縦長気味の貝殻状剥片で、一側辺に不連続な微細剥離が連なる。77 は剥片 (77-1) と石核 (77-2) の接合例である。77-2 はやや円板状を呈するもので、周囲から縦長および横長気味の剥片を作出している。78 は横長気味の貝殻状剥片、79 はノッチ状の加工が入った剥片である。

チャート 25 製の石器 (81 ～ 88)　81 はやや厚みのある横長気味の貝殻状剥片である。側辺の一部に微細剥離があり、使用痕剥片の可能性もある。82 もやや厚みのある横長気味の貝殻状剥片で、一側辺に細部調整が見られる。83 は横長気味の、84 は縦長気味のやや大型の剥片である。84 は表面打点側付近に、やや高角度でブランディング状の加工が施されているか。85・87・88 は石核。周囲から縦長・横長気味の貝殻状剥片を作出している。

チャート 26 製の石器 (89 ～ 94)　89 は石核。90 は横長剥片の接合資料である。91 は縦長剥片、

92 は横長剥片である。94 は横長気味の貝殻状剥片である。

チャート 27 製の石器 (95 ～ 98)　95・97 は縦長気味の剥片である。95 では打面を 180 度転位させながら剥片を作出したようであり、97 ではこの剥離で石核から礫風化面が除去された様である。96 は半円板状の石核である。対向する位置から上下に転位させて横長気味の貝殻状剥片を作出している。98/ は板状の石核である。これも各方向に打面を転位させて、横長気味の貝殻状剥片を作出している。

チャート 29 製の石器 (102 ～ 108)　102 ～ 104 は使用痕剥片とした。いずれも縦長剥片、および縦長気味な貝殻状剥片の側辺に不連続な微細剥離が認められる。105 は三角錐状を呈する石核である。各方向から横長気味の剥片が作出されたものと考えられる。107 は縦長気味の貝殻状剥片の表面打点側に平坦気味な剥離が加えられているものである。108 は縦長剥片で、礫風化面が広範囲に見られる。原石からの剥片作出初段階のものであろうか。

チャート 32 製の石器 (109・110)　109 は横長気味の貝殻状剥片である。一部、礫風化面が残されており、打面を転位させながら、連続して剥片が作出されたと考えられる。110 は同様に横長気味の貝殻状剥片である。端部に使用によると考えられる微細剥離が見られることから、使用痕剥片と考えられる。

チャート 35 製の石器 (111)　原石を半分に分割し、一端から表裏交互に打面を変えながら横長気味の貝殻状剥片を作出している。原石のより広い平坦部からの剥片作出は行わず、端部から順次剥片作出を行っている点が特徴的である。

チャート 36 製の石器 (112・113)　112 は使用痕剥片 (112-1) と縦長気味の剥片 (112-2) との接合資料である。打面を調整しない原石から、順次剥片を作出した結果得られた剥片である。113 は縦長気味の貝殻状剥片である。

チャート 37 製の石器 (114)　扁平な原石の一端から、上下交互に打面を転位させて、横長気味の貝殻状剥片を作出している。111 と同様の所作を行っているといえよう。これに対する剥片・製品はこの調査で見つけることができなかった。

チャート 40 製の石器 (117 ～ 119)　117 はサイコロ状の剥片である。各方向に打面を転位させ、縦長・横長気味の貝殻状剥片を作出している。118 縦長気味の剥片、119 は横長気味の貝殻状剥片である。

チャート 42 製の石器 (120)　削器である。縦長気味の貝殻状剥片の側辺に調整剥離が加えられている。ほかにこの石材で剥片・石核などは見られなかった。

石英 (水晶) 製の石器 (126)　この石材の石器はほとんど見られなかった。唯一提示したのは、縦長気味の剥片のみである。

サヌカイト製の石器 (128 ～ 134)　128 は板状の石核の接合資料である。180 度の打面転位により、縦長気味の剥片を作出しているか。130 は

横長気味な貝殻状剥片の接合資料である。/131は横長の棒状を呈する石核で、同方向から横長気味の貝殻状剥片を作出としていると考えられる。132～134からも横長気味な貝殻状剥片の作出の状況が窺えられる。

今回の調査では、これに対する製品は存在しなかった。

下呂石製の石器 (135～137)　135は台形様石器もしくはナイフ形石器のいずれかのものである。素材剥片は縦長気味の貝殻状剥片である。表面の基部から一側辺にかけてやや高角度のブランディング状の加工が見られる。136は調整の見られる剥片である。全面に剥離調整が見られ押圧剥離の可能性がある。これは石鏃など縄文時代以降のものかもしれない。137は下呂石円礫の石核である。半円状のもので、残存している風化面側からの剥片作出が行われているか。

泥岩起源のホルンフェルス製の石器 (127・138・139)　この石材に対する主たる製品は、138・139のように大型の石器類である。138は局部磨製石斧である。縦長に剥がされた大型剥片を使用している。表面は、礫風化面をそのまま残しているが、一側辺から大きく調整が加えられている。さらに両側辺はやや細かい調整が加えられている。刃部は横方向を中心に研磨されている。139は礫器である。一部礫風化面を残しているが周囲から大きく剥離を加え、チョッピングツール状にしているか。

また、127は横長剥片の端部に調整の加えられているもので、掻器になるかもしれない。

第5節　97B.D.98A SX01の位置づけ

1. 時期的位置づけ

時期的特徴を示す定型的な石器としては台形様石器(1・135)、ナイフ形石器(9)、局部磨製石斧(138)がある。台形様石器はⅠ期に、ナイフ形石器はⅢ期に属する可能性が考えられ、時期差が考えられる。石材による石器の分布状況を考慮すれば、チャート01と下呂石製の台形様石器は図20の分布パターンAに、チャート03のナイフ形石器は同図の分布パターンBに属する。このことから、分布パターンAを示す石器群はⅠ期に、また分布パターンBを示す石器群はⅢ期に属することが想定される。分布パターンCを示す石器群は、明確にどちらに属するかの判断は難しい。チャート22に関しては、「谷状地形」への出土分布の密度から分布パターンAに準じるものかもしれない。

以上のことを換言すると、97B.D.98A SX01の遺物出土状況は、台形様石器・局部磨製石斧を代表とするⅠ期の石器群と、ナイフ形石器を代表とするⅢ期の石器群が、分布パターンCを介して、平面上は一部重なった状態で、帯状の広がりを見せているものと言えよう。

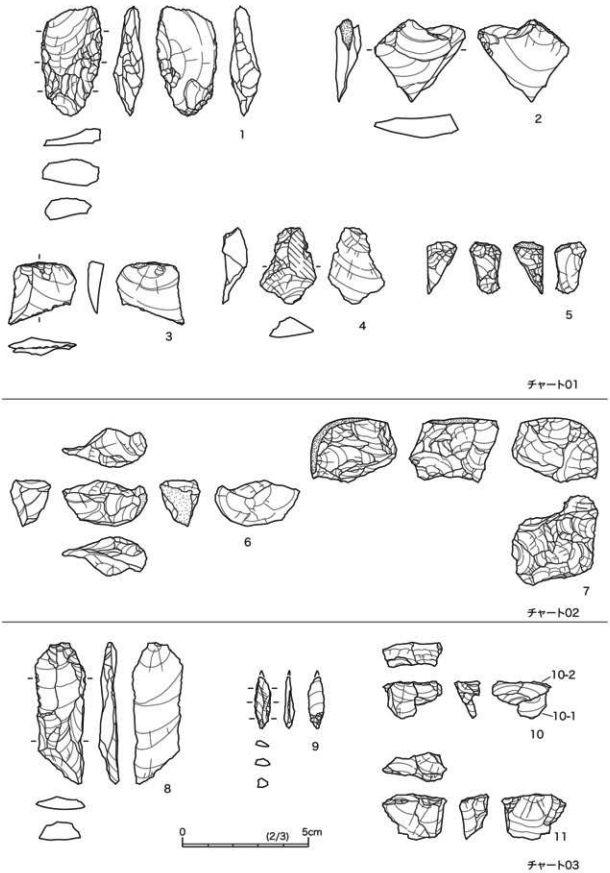


図21　97B.D.98A SX01 出土石器1

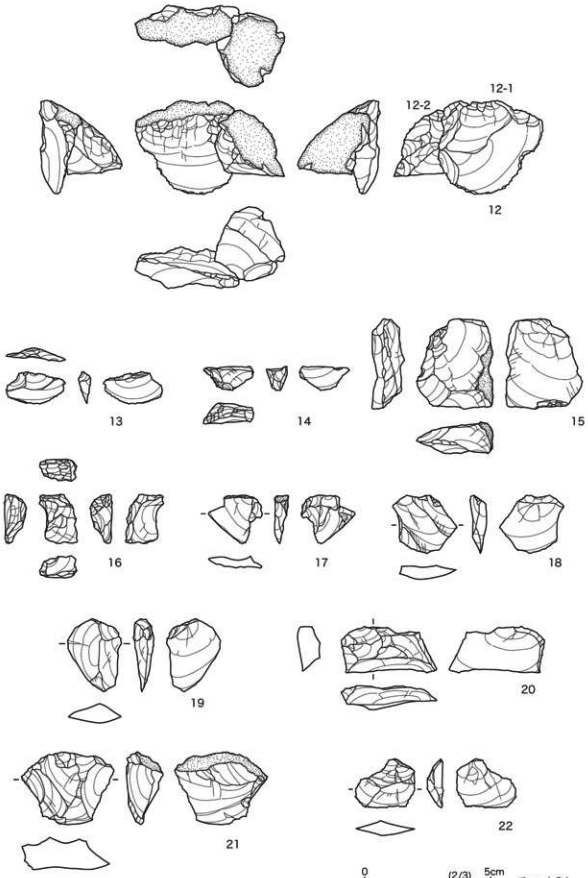


図 22　97B.D.98A SX01 出土石器 2

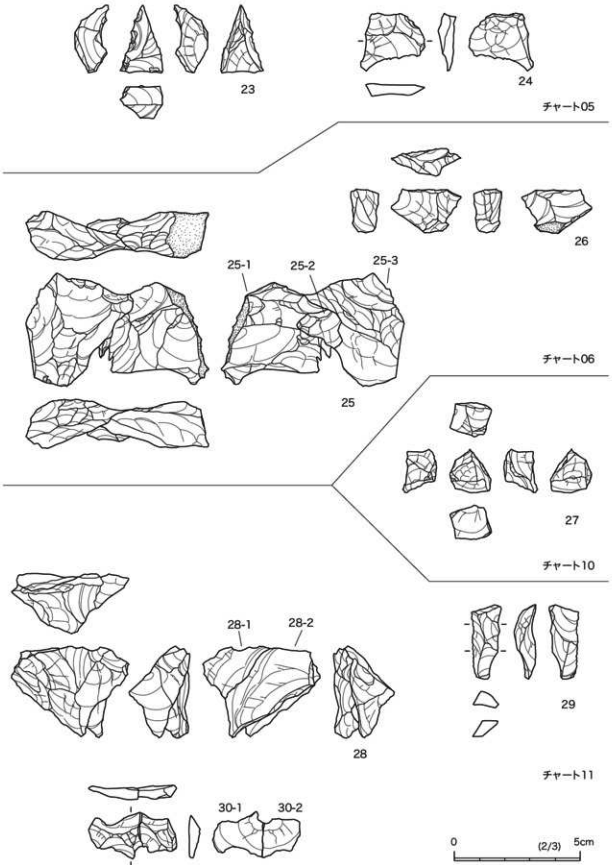


図23　97B.D.98A SX01 出土石器3

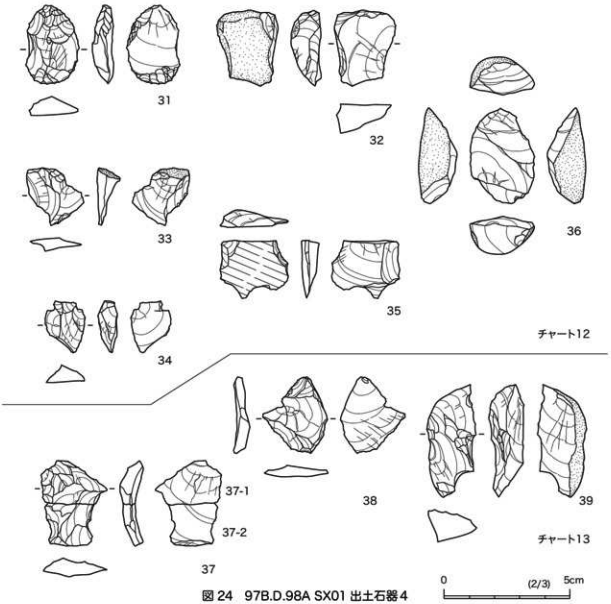


図 24　97B.D.98A SX01 出土石器 4

2. 石器製作状況

まずは原石について。チャートは原石の状態で、一方サヌカイトは板材の状態で、当地に持ち込まれている様である。それはサヌカイトに比べ、チャートの剥片・石核に礫風化面が残存している例が多いことによる。

チャートに関してまず言及する。剥片作出にあたり、礫風化面を全面除去することなく、原石の一端部から作業を開始する事例が見られる(111・114 など)。また剥片作出に際して、事前に風化面を除去して打面を調整する様子はあまり明確ではなく、そのまま連続して剥片を作出している様子が窺えられる (12・112 など多数)。

これらの目的とする剥片は、主に縦長および横長気味の貝殻状剥片であったようである。これに対応する石核 (残核) として、70 のようにいわば菱形状を呈する残核のあり方は特徴的である。今回の調査では認められなかったものの、台形様石器の石材 (チャート 01) の中にも、このような石核が存在していたことが想定される。

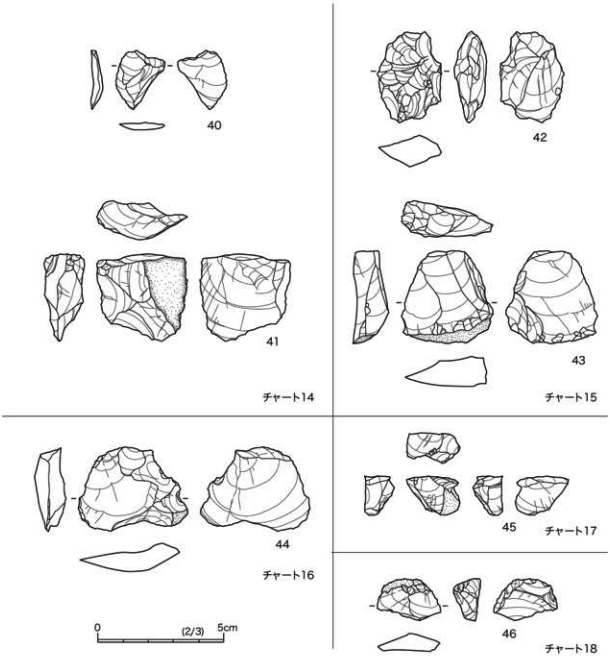


図25　97B.D.98A SX01 出土石器5

3. 使用石材について

局部磨製石斧および礫器以外の使用石材については、チャート・黒曜石・石英(水晶)・サヌカイト・下呂石・溶結凝灰岩があり、当地域で使用されている石材は、この時期からすでにほぼ同様に知られていたとすることができよう。その中でもチャートが圧倒的多数を占めることは点数・重量の両面からも明らかである。その一方で注目されるのは、サヌカイトがある一定量含まれていることと、黒曜石・溶結凝灰岩の少なさである。下呂石も若干見られるものの、サヌカイトほど、これをもとに当地で製作されていた様子は明確ではない。詳細は後述する(註4)。

(註4)詳細な分析は第6章に譲る。また、黒曜石・サヌカイトの蛍光X線分析結果については、第5章参照。

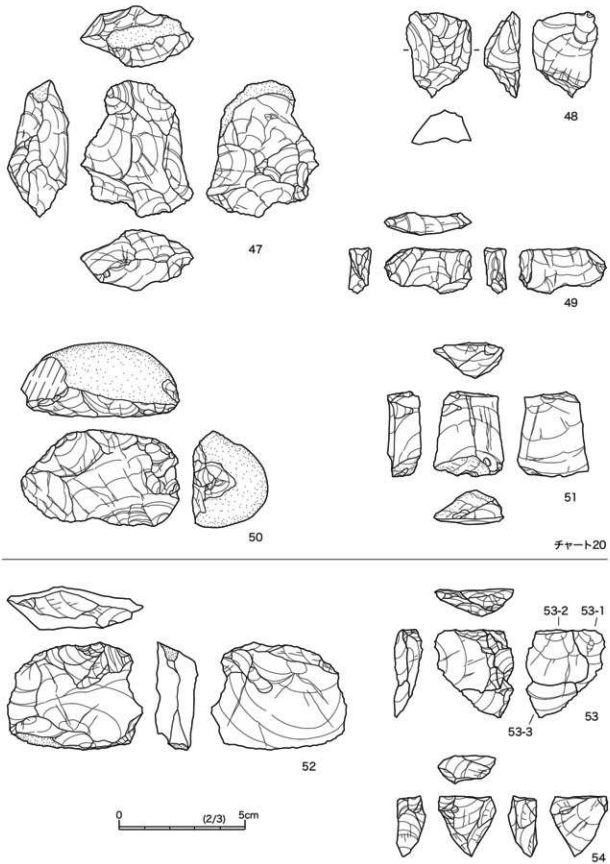


図 26　97B.D.98A SX01 出土石器 6

図27　97B.D.98A SX01 出土石器7

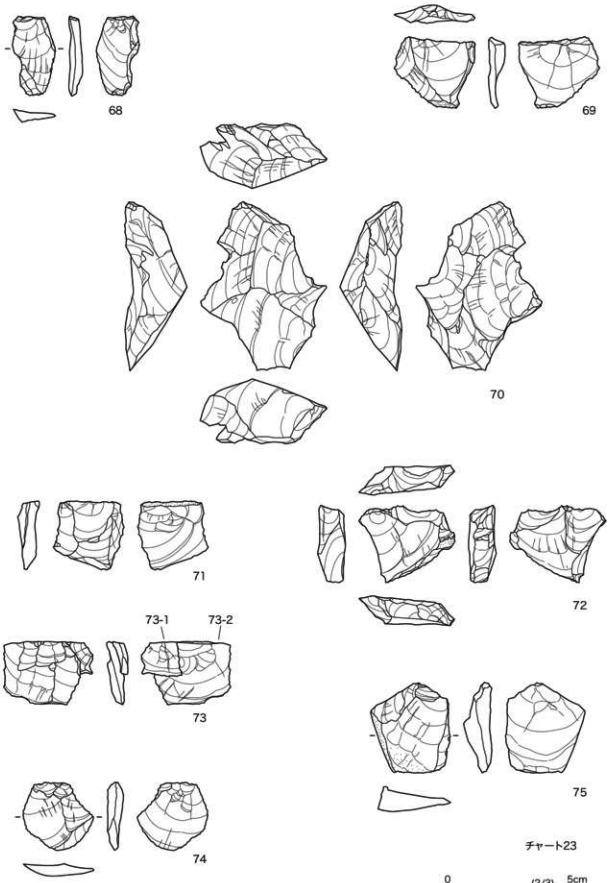


図28　97B.D.98A SX01 出土石器8

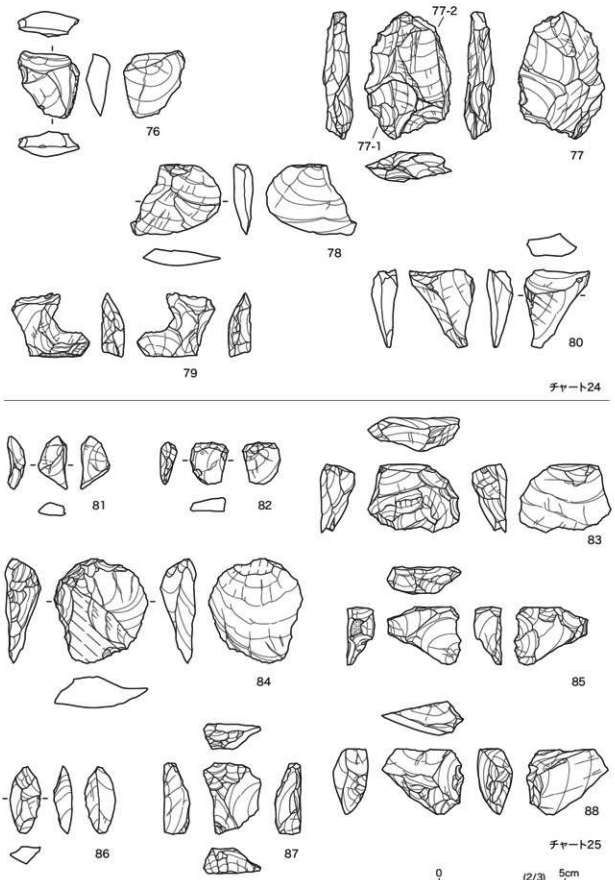


図29　97B.D.98A SX01 出土石器9

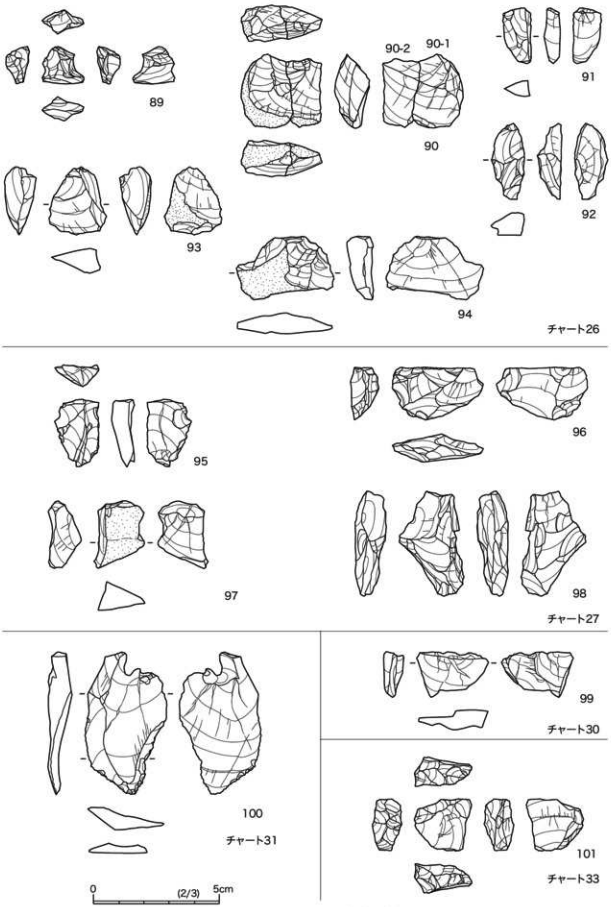


図30　97B.D.98A SX01 出土石器 10

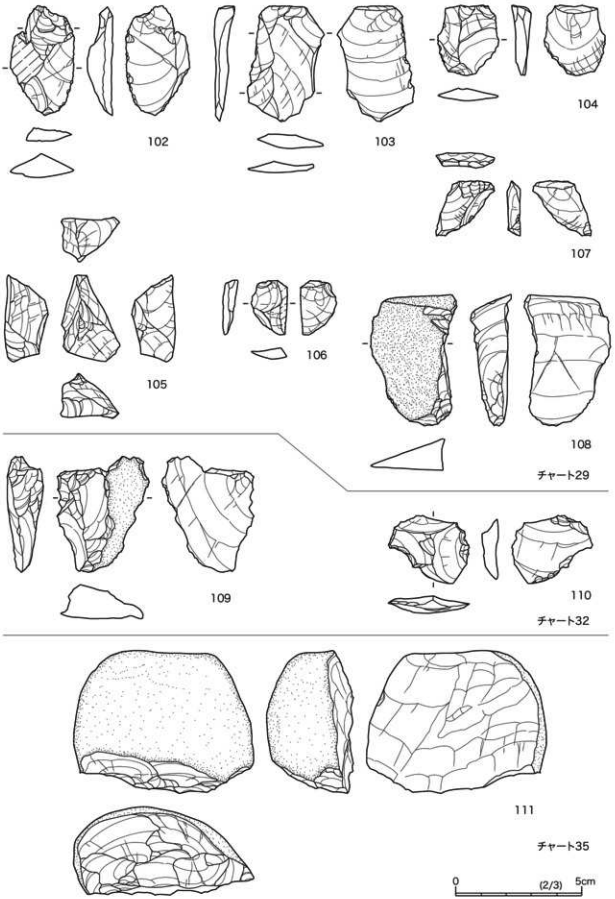


図 31　97B.D.98A SX01 出土石器 11

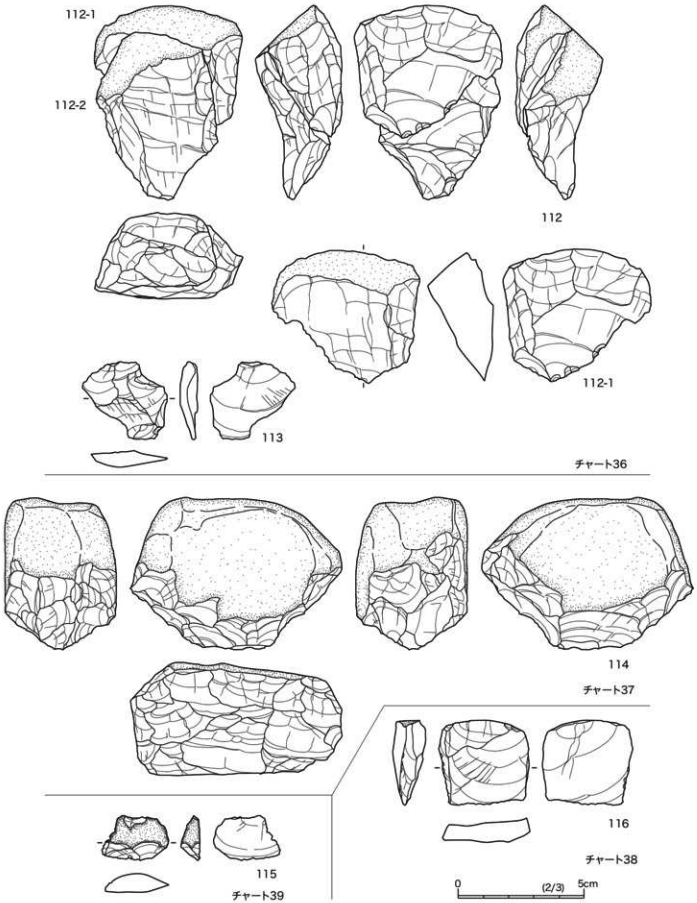


図 32　97B.D.98A SX01 出土石器 12

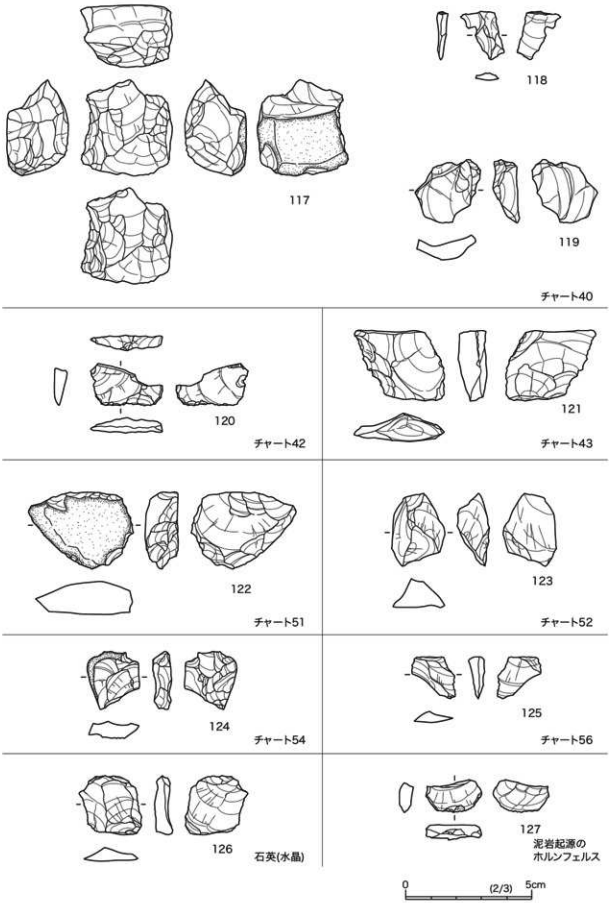


図 33　97B.D.98A SX01 出土石器 13

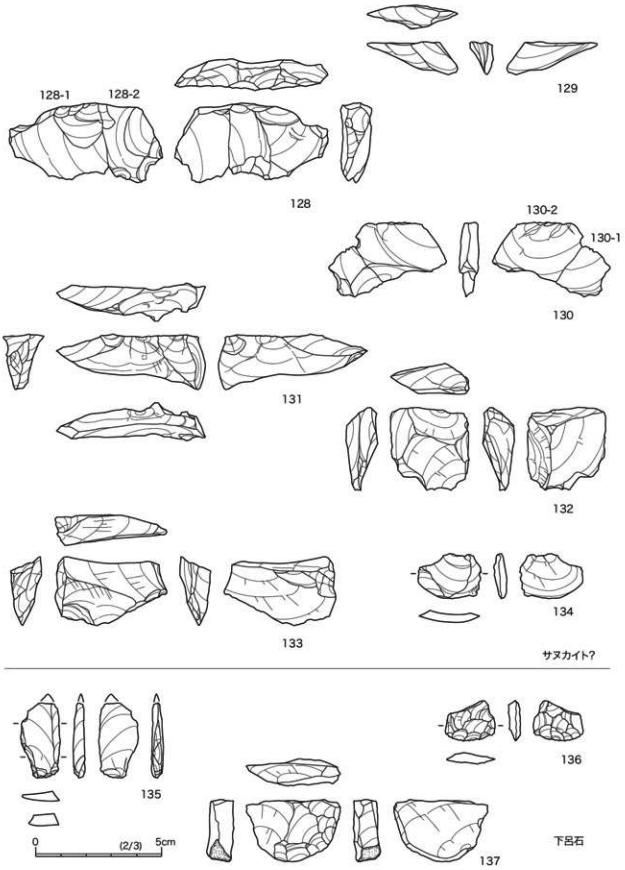
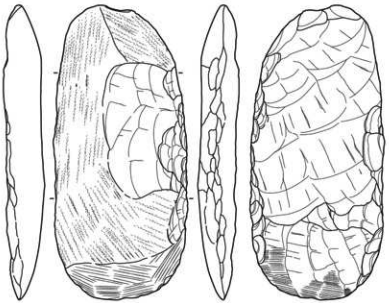


図 34　97B.D.98A SX01 出土石器 14



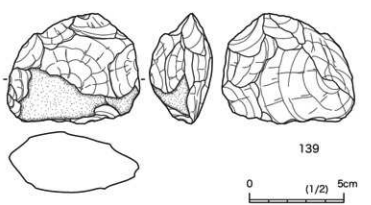


図 35　97B.D.98A SX01 出土石器 15

4. 石器使用痕分析について

チャート製の石器について、数点使用痕分析を行った(註5)。分析を行った資料は1・9・12-1・31・55・100・102・112-1・120である。いずれの石器も予想以上に使用痕の残存状況が悪く、良好な結果を抽出することができなかった。

(註5)愛知県教育委員会文化財保護室の原田　幹氏に分析をお願いした。

第４章　縄文時代以降の遺構・遺物

後期旧石器時代以外の遺構・遺物について報告する。時代別に報告するものの、古代・中世の石器類に関しては、両時代への峻別に難しいところがあり、これらに関しては一括して第３節中で報告する。

第１節　縄文時代～弥生時代

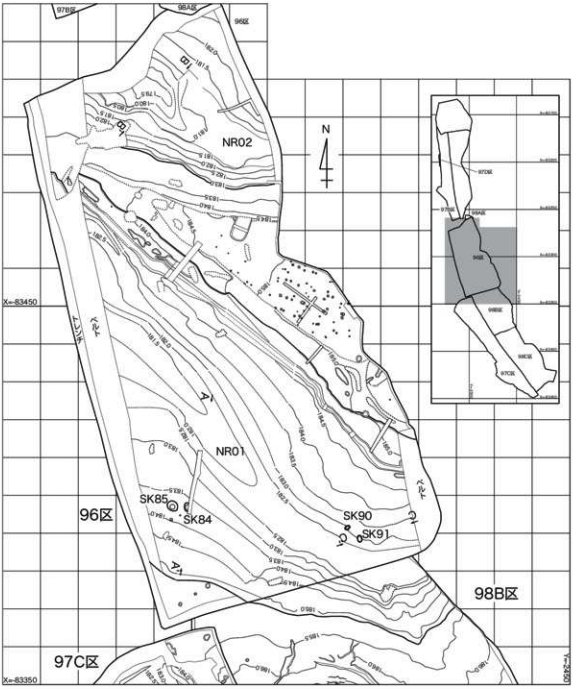
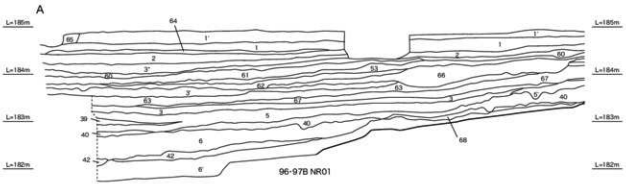
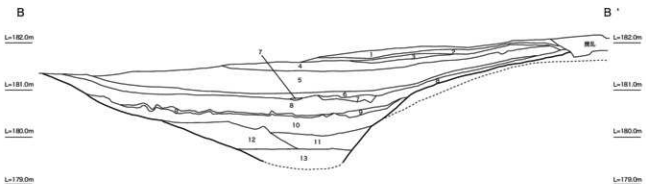
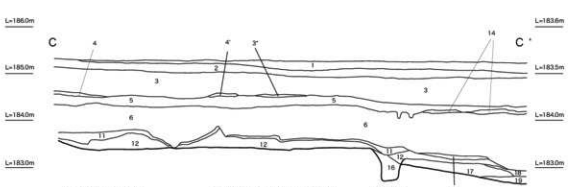


図 36　遺構配置図 (貯蔵穴と自然流路)(１：500)

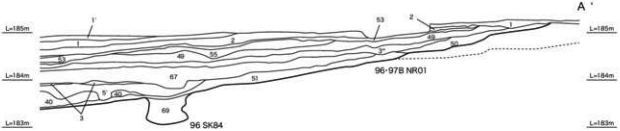




1 10YR2/1 黒褐色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質分解。
2 10YR2/1 黒色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質分解。
3 10YR4/1 褐灰色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質分解。
4 10YR2/1 黒色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質完全分解。
5 10YR2/1 黒色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質残存。
6 7.5YR2/1 黒色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質完全分解。
7 7.5YR3/1 黒褐色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質残存。
8 7.5YR2/1 黒色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質完全分解。
9 10YR4/1 褐灰色粘土 粒子細かく粘性あり(阿蘇戸火山灰)。
10 7.5YR1.7/1 黒色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質完全分解。
11 7.5YR2/1 黒色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質残存。
12 7.5YR2/2 黒褐色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質残存。
13 7.5YR3/2 黒褐色泥炭 粒子細かく粘性強い。植物質残存。



1 7.5YR4/4 褐色粘質土層
2 7.5YR3/2 黒褐色土層
3 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土層
3' 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土層
4 10YR2/2 黒褐色粘土 細砂含む
4' 10YR2/2 黒褐色粘土 やや小さい細粒砂含む
5 10YR2/2 黒褐色泥炭層
6 10YR2/2 黒褐色泥炭層
11 10YR4/1 褐灰色粘土 粒子細かく粘性あり(阿蘇戸火山灰)。
12 7.5YR2/1 黒色泥炭層
14 10YR2/2 黒褐色泥炭層
15 2.5Y4/1 黄灰色粘土層
16 SK91埋土
17 7.5YR2/2 黒褐色粘土層
18 10YR1.7/1 黒色粘土層
19 10YR2/2 黒褐色泥炭層



1	7.5YR4/4	褐色粘土層	6	10YR2/2	黒褐色泥炭層	60	10YR3/1 黒褐色泥炭層
1'	2.5Y5/2	暗灰黄色粘土層	6'	2.5Y3/1	黒褐色泥炭層	61	10YR3/1 黒褐色泥炭層
2	7.5YR3/2	黒褐色土層	39	2.5YR4/2	暗灰黄色砂層(粗粒砂)	62	10YR5/3 にぶい黄褐色砂層(粗粒砂)
3	7.5YR2/3	極暗褐色粘土層	40	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂層(粗粒砂)	63	7.5YR3/1 黒褐色泥炭層
3'	7.5YR2/3	極暗褐色粘土層	42	7.5YR4/3	褐色砂層(粗粒砂)	64	10YR4/2 灰黄褐色土層
3"	7.5YR2/3	極暗褐色粘土層	49	7.5YR3/1	黒褐色砂層(粗粒砂)	65	1'の再堆積
3"'	7.5YR2/3	極暗褐色粘土層	50	7.5YR2/1	黒色砂層(粗粒砂)	66	10YR4/1 褐灰色砂層(粗粒砂)
3"	10YR3/1	黒褐色砂層(粗粒砂)	51	7.5YR2/1	黒色砂層(粗粒砂)	67	10YR2/2 黒褐色砂層(粗粒砂)
5	10YR2/2	黒褐色泥炭層	53	7.5YR2/1	黒色泥炭層	68	10YR3/1 黒褐色泥炭層
5'	10YR3/1	黒褐色泥炭層	55	10YR4/1	褐灰色砂層(粗粒砂)	69	SK84埋土

図 37　96・97B NR01 および 96 NR02 土層断面図 (1 ：80)

a. 遺構・遺物出土状況

当時期の遺構が確認されたのは、96 区および 97B 区の自然流路 (96・97B NR01) 付近が中心となる。これは第 2 章で述べた「沢部分」の一つであり、南西から北東方向に向かって広がっている。最大幅約 35m、中央部で深さ 3 m 以上を測る。埋土は表土層以下、黒色粘土 (泥炭層) と砂層との互層をなし、砂層は粗粒砂が主体である。96・97B NR01 の最下層からは縄文後期～晩期に属する土器片が出土しており、かつ松河戸火山灰を含む褐灰色粘土層が下層に堆積していることから、この時期頃から谷の埋没がはじまったものと推定できる。なお松河戸火山灰を含む褐灰色粘土層は、96・97B NR01 の北側、96 NR02 でも確認された。

96・97B NR01 の谷底に向かう緩斜面では、堅果類を包含する土坑 (貯蔵穴) が 4 基 (96 SK84・96 SK85・96 SK90・96 SK91) 検出された。SK90・91 は長径 70cm 程度である一方、SK84・85 は長径 1 m から 1 m20cm ほどと、これらはより大型である。堆積状況が比較的良好なのは、SK84 と SK91 である。SK84 では、遺構埋土には植物質が分解された黒色粘土層が幾層も堆積し、最下層の細粒砂の中から堅果類が出土している。SK91 は植物質が残存する黒色の粘土層が堆積しており、最下層の黒色粘土中から堅果類が出土した。編物や木片・木の葉の敷き詰めなどの構造は確認できなかった。出土堅果類はコナラ属が多く、シラカシ・イチイガシも目立つ (註 1)。なお、これらの所属時期の特定は、やや難しい。SK84 からは、縄文晩期中葉から弥生時代中期中葉までの時期と思われる壺形土器の胴部片が出土している。また、SK85・SK91 の出土材の炭素 14 年代測定結果でも、同時存在ではない可能性を示している (註 2)。一方、SK91 は遺構上面に松河戸火山灰を含む層が存在している (図 37C-C' セクションの 11 層)。しかし、この層は、SK91 の上部でレンズ状に落ち込んでおり、この落ち込みは SK91 の遺構の輪郭にほぼ一致する。

(註 1) 詳細な分析は、第 5 章第 2 節参照。
(註 2) 詳細な分析は、第 5 章第 4 節参照。

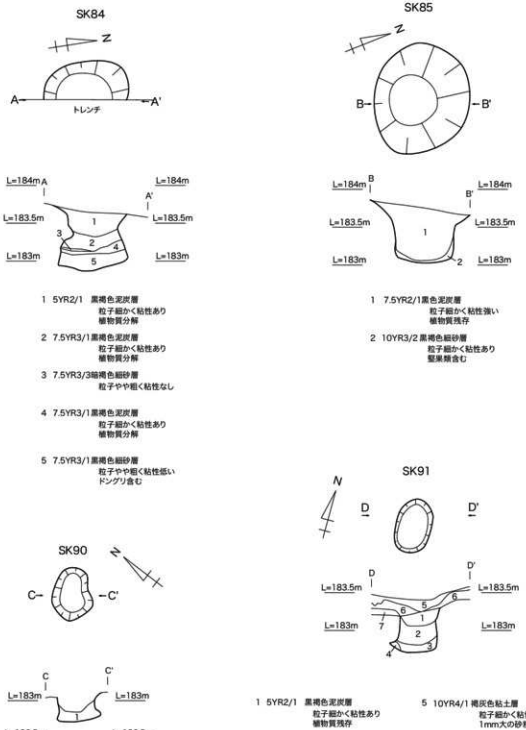


図38 96 SK84・85・90・91(1：50)

したがって、SK91 は一瞥すると松河戸火山灰出土層下から掘り込まれている様にも見えるが、C-C' セクションの 11 層上面もしくは 6 層中から掘り込まれ、その後 SK91 の上部に 11 層が再堆積した可能性も考えられるのである。

土器の出土は、96・97B NR01 内および 97C NR01 などの自然流路内から、散発的に出土している。96 SK84 からも若干の出土を見た。一方、石器はこれら自然流路内のみならず、97B・98A 区など、第 2 章で述べた「緩やかな傾斜地」でも散発的に出土している。

b. 出土遺物 (土器)

1・2 は 97C NR01 の上層で出土したものである。1 は深鉢口縁部片である。口縁部直下に横方向の長方形もしくは長楕円形の太い沈線区画が施され、その中に太い斜沈線が充填されている。2 は深鉢胴部片で、縦方向に垂下する細い粘土紐の貼付けがある。外面には、粘土紐貼付け時の調整痕が残されている。縄文時代中期後半に属すると考えられる。3 ～ 5 は、96・97B NR01 から出土したものである。3 は深鉢の胴部片で、3-1・3-2 は同一個体と考えられる。文様は口縁部・頸部付近のみで、胴部は無文である。3-1 は屈曲部分に細い沈線を施された後、口縁部側に LR が施文されている。4 は口縁部・頸部付近の深鉢片である。4 本の沈線が結節部を形成しながら、弧状に展開するものと考えられる。5 は無文の深鉢一個体分である。口縁端部は面取がなされているもので、器壁外面には斜もしくは縦方向に調整の擦痕が残されている。底部には木葉痕がみられる。3・4 は後期後葉に属するもので、5 は晩期に属すると考えられる。6・7 は 96 SK84 から出土したものである。6 は外面に横方向のナデもしくはミガキが施されているもので、壺形土器の胴部付近と思われる。7 は深鉢胴部で、外面には縦もしくは斜方向に条痕調整が見られるものか。時期的な特定は難しいものの、縄文晩期中葉から弥生時代中期中葉までに属するものと考えられる。8 から 12 も 96・97B NR01 から出土している。8 は弥生前期遠賀川系の壺胴部付近と思われる。外面は横方向に丁寧に磨かれており、竹管状工具で連続して刺突された貼付け突帯が横走している。9 ～ 11 は条痕系の深鉢片で、すべて胴部片である。弥生中期中葉貝田町式期の新相を示すものか。12 は壺形土器の胴部で、外面に縦羽状の浅くて細かい条痕が施されているものである。

c. 出土遺物 (石器)(写真図版 13)

石鏃 (140 ～ 155)　17 点出土したうち、15 点を報告する。基部の形態から大きく無茎鏃 (140 ～ 151) と有茎鏃 (152 ～ 155) に分けられる。無茎鏃は、長さ 1.5cm ほどから 2.5cm 以上と大きさに幅がある。148 は縁辺が若干の鋸歯縁状を呈するものである。151 は剥片の縁辺を中心に調整を加えて製品にした、いわゆる「剥片鏃」か。有茎鏃は長さ 2.5cm から 4 cm ほどである。153・154 は平面形態五角形を呈するもので、特に 153 は「飛行機鏃」と言われるものか。155 は欠損のため基部の形状が不明であるが、尖頭器もしくは石錐の可能性もある。使用石材は、

140・141・144・150・151・153がチャート、142・143・146・148・152・154が下呂石、147がサヌカイト？、149が黒曜石である。

石錐 (155～160・169・182・201)　10点出土したうち、9点を報告する。形態的には頭部および軸部が一体化しているものが大多数を占める。155は軸部のみのもので、その他頭部が軸部から作り出されているものは確認できなかった。使用石材は、155～159・169・182がチャート、160が石英(水晶)、201がサヌカイト？である。

石匙 (161)　いわゆる「横長」の石匙である。横長剥片を素材剥片とし、刃部は表面側を中心に調整が加えられている。チャート製。

掻器・削器・使用痕剥片 (162～168・172・173)　計9点出土した。掻器(162・166)や削器(163・165・172)などの刃部調整のみられるスクレイパー類と、刃部調整の見られない使用痕剥片(刃器164・167・168・173)に、大別される。162は表面に礫面を残す横長剥片で、表面にのみ調整が施されている。163は斜行気味の縦長剥片を素材剥片としている。166は縦長剥片の表面のみに調整を加え、側辺を刃部としている。使用石材は、162～165・168・172・173がチャート、166が下呂石角礫、167が安山岩である。

調整のみられる剥片 (170)　縦長剥片を素材剥片とする。両面ともに剥離調整が施されているが、表面中央部に「コブ状」の残存部があるのが特徴的である。下呂石製。

楔形石器 (171)　対向する辺に階段状剥離が見られるものである。各面には、縦横方向それぞれに剥片作出が行われた痕跡がみられる。チャート製。

石核 (174～180・184)　石核と考えられるものを一括した。174～177は扁平な形状を呈し、かつ縁辺部には細かいリダクションが認められることから、中世以降の火打石の可能性もある。180は出土位置など不明であるが、立方体状の石核で、打面の調整をすることなく、打面を転位させながら縦長・横長剥片を作出している。後期旧石器時代の所産かもしれない。石材は178が泥岩、181が黒曜石、それ以外がチャートである。

その他剥片類 (181・183・185)　3点とも縦長剥片である。すべてチャート製。後期旧石器時代の所産かもしれない。

打製石斧 (186・188)　186は横長剥片を素材とし、側辺側を中心に剥離調整が施されている。平面形態は短冊形である。188は刃部側が欠損した一部分のみのものである。礫器様石器の部類かもしれない。石材はともに泥岩起源のホルンフェルス。

礫器 (187)　礫素材端部の片側のみに調整が施されているものである。泥岩起源のホルンフェルス製。

磨石・敲石 (189)　肉厚の楕円形状を呈するものである。平面部および側辺部には敲打・磨痕があり、所々面が形成されている。細粒花崗岩製。

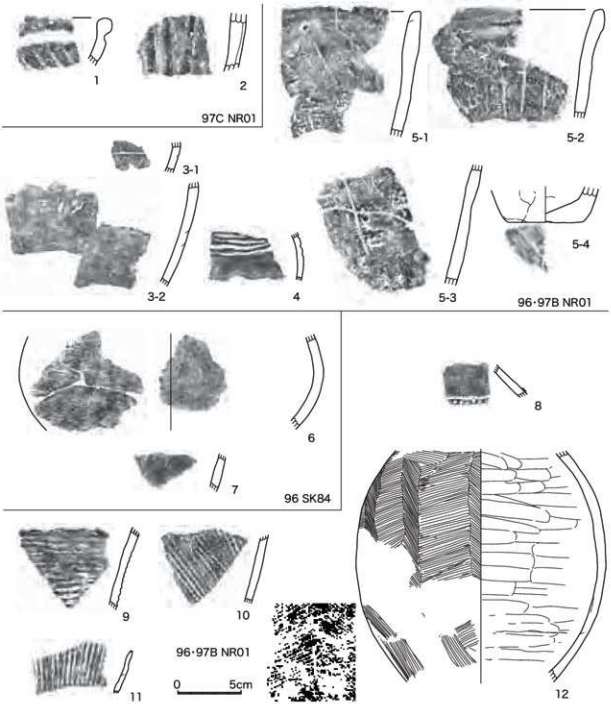


図39　縄文土器・弥生土器（１：３）

第２節　古墳時代初頭

a. 遺構・遺物出土状況

古墳時代初頭と考えられる遺構群が、若干確認された。竪穴住居跡５軒 (97A SB01・02・03・05・06) と 土 坑 (98A SK01・98A P52) である。遺構は、97A 区および 97B 区北端と 98A 区北端に限られている。97D SB06(古代の遺構と考えられる) の中からも、高坏脚部が出土しており、本来は 97B 区・98A 区以北の「緩やかな傾斜地」全体に遺構が展開していた可能性もある。また、「沢部分」の自然流路内からも、当時期の遺物が出土している。その中でも、自然流路の落ち際を中心に若干のまとまりが確認できた (96 SX01・98 SX02)。以下、個別に遺構の報告をする。

97A 区 SB01　調査区西端に位置し全掘はできなかったものの、調査時の確認値で、東西５m70cm、南北６m20cm、深さは検出面から約 15cm を測る、隅丸方形状を呈する竪穴住居跡である。住居の主軸は、国土座標軸に対し北西に約 10 度振れている。床面には、貼床や壁溝は確認できなかった。柱穴は４本、径 20cm ほどで、方形の各隅に位置したところで検出された。土層断面の観察では、柱穴内に径 15cm ほどの柱跡が確認できる。住居内の埋土からは、遺物がややまとまって出土している。

97A 区 SB02　東西５m30cm、南北４m90cm、深さは検出面から約 30cm を測る、隅丸方形状を呈する竪穴住居跡である。住居の主軸は、東西・南北ともほぼ国

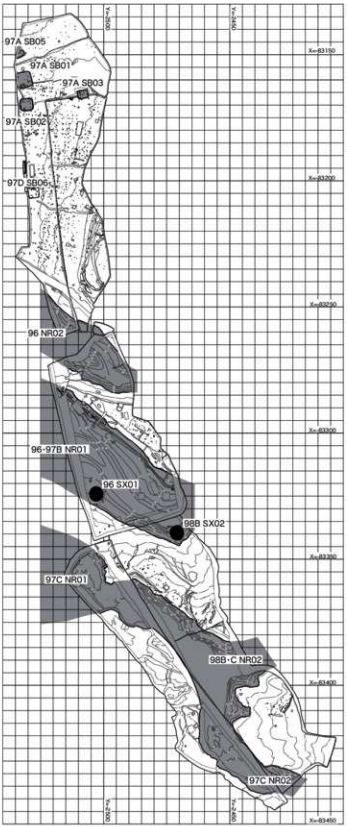
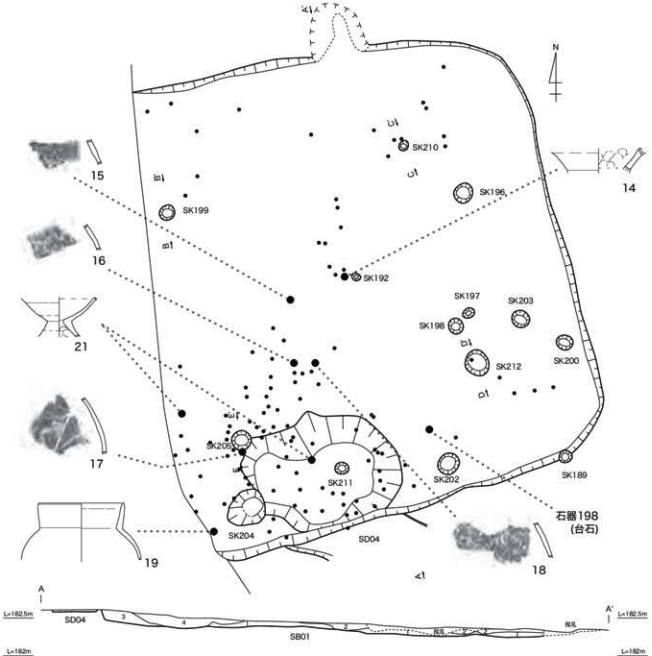


図 40　古墳時代初頭関連遺構配置図　（１：1,500）



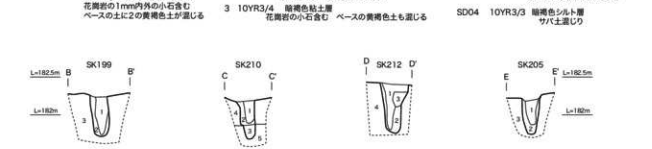
1 10YR3/4 暗褐色粘質土層
10YR5/6黄褐色粘質土のまじり
花崗岩の1mm内外の小石含む
ベースの土に2の黄褐色土が混じる

2 10YR2/4～3/5 にぶい黄褐色粘質土層
砂が混じる 花崗岩の小石含む

3 10YR3/4 暗褐色粘土層
花崗岩の小石含む ベースの黄褐色土も混じる

4 10YR3/2 黒褐色シルト層
砂が混じる(黒茶色が濃い)

SD04 10YR3/3 暗褐色シルト層
サバ土混じり



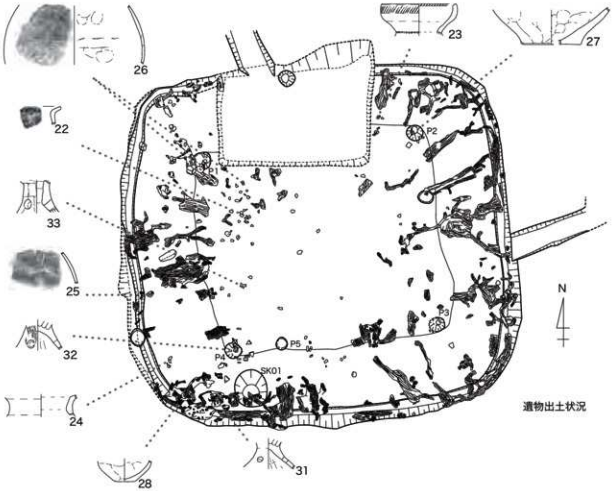
1 10YR3/2 黒褐色粘質土層
10YR4/4褐色粘質土まばらに混じる
10YR1.7/1黒色土ブロック状に混じる
しまり弱い
2 10YR4/6 褐色粘質土層
小礫混じり しまり弱い
3 10YR4/6 褐色粘質土層
10RY6/4にぶい黄橙色粘質土、
小礫が混じる
ベース

1 10YR3/2 黒褐色粘質土層
10YR2/1黒色粘質土ブロ
ック状に混じる
しまり弱い
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土層
しまり弱い 沈鉄含む
4層が流入したもの か
4層より若干黒褐色気味
3 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土層
小礫混じり
10YR5/8黄褐色粘質土
斑土状に混じる
4 10YR5/4～6/4 にぶい黄褐色～
にぶい黄橙色粘質土層
小礫混じり ベース
5 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土層
細粒砂混じり ベース

1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土層
10YR3/3暗褐色粘質土
斑土をなす
微細な炭化物を含む
土師器出土(3層の直上)
2 10YR3/3 暗色粘質土層
10YR4/6褐色粘質土斑土
をなす。細砂混じり
3 2.5Y5/3 黄褐色粘質土層
細砂混じり 5mm大の礫を含む
4 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土層
花崗岩風化砂混じり ベース

1 10YR3/2 黒褐色粘質土層
2.5Y4/1黄灰色粘質土、
10YR4/4褐色粘質土
斑状に混じる
2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土層
10YR3/1黒褐色粘質
土ブロック状にまじる
沈鉄斑土状に混じる
3 2.5Y5/4黄褐色粘質層
ベース 小礫まじり

図41 97B SB01(1：50)



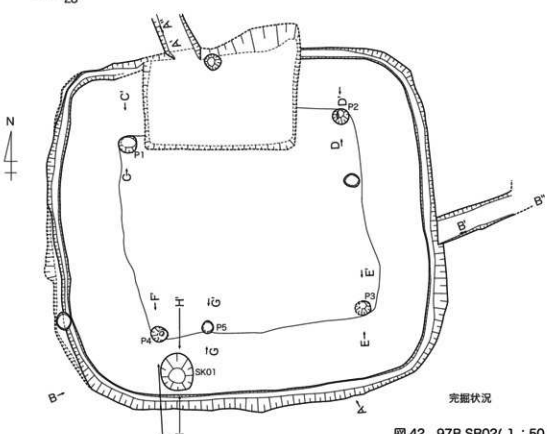
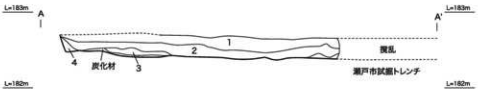
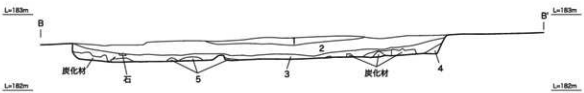


図42　97B SB02(1：50)





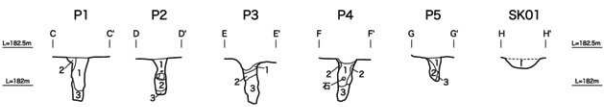
1　10YR3/4 暗褐色粘質土層
10YR4/4褐色粘質土が小さなブロック状に混じる
微細な炭化物若干混じる　花崗岩風化砂混じり
（メインセクション19層）

2　10YR3/2 黒褐色粘質土層
花崗岩風化砂、微細な炭化物が5～10%混じる
下部には柱等が抜けたと思われる炭化材多数
（メインセクション18層）

3　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層
ブロック状に入る　18よりやや黄色味をおびる
（メインセクション62層）

4　2.5Y3/1　黒褐色粘質土層
炭化物、粘土塊、白い2～5mmの小石含む
（メインセクション63層）

5　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層
炭化材2～5mmブロック、焼土塊含む



P1土層

1　10YR3/1 黒褐色土層
粘性をもち、しまる
多量の炭化物を含む

2　10YR4/3 にぶい黄褐色土層
粘性をもち、しまる
少量の10YR3/1黒褐色土が混入

3　10YR4/4 褐色土層
粘性をもつが、しまりに欠ける
（シルト質粘質土）
少量の酸化鉄を含む

P2土層

1　10YR3/1 黒褐色土層
粘性をもち、堅くしまる
比較的多量の炭化物を含む

2　10YR4/2 灰黄褐色土層
粘性に富み、しまる（シルト質）

3　10YR5/2 灰黄褐色土層
粘性に富み、堅くしまる（シルト質）

P3土層

1　10YR4/1 褐灰色土層
粘性に欠けるが、堅くしまる
中粒砂

2　10YR4/3 にぶい黄褐色土層
粘性をもち、しまる
少量の炭化物を含む

3　10YR3/2 黒褐色土層
粘性をもち、しまる
少量の炭化物を含む

P4土層

1　10YR3/1 黒褐色土層
粘性をもち、比較的しまる
多量の炭化物（1mm～2cm大）を含む

2　10YR4/3 にぶい黄褐色土層
粘性をもち、しまる
少量の炭化物を含む
（地山土に炭化物が混入したもの）

3　10YR4/2 灰黄褐色土層
粘性に富むが、ややしまりに欠ける
（シルト質粘質土）
少量の炭化物、酸化鉄を含む

P5土層

1　10YR4/3 にぶい黄褐色土層
粘性をもち、しまる
少量の炭化物を含む

2　10YR3/1 黒褐色土層
粘性をもち、しまる
比較的多量の炭化物を含む

3　10YR4/3 にぶい黄褐色土層
粘性をもち、しまる

SK01土層

1　10YR3/1 黒褐色土層
粘性をもち、比較的しまる
多量の炭化物（1mm～2cm大）を含む

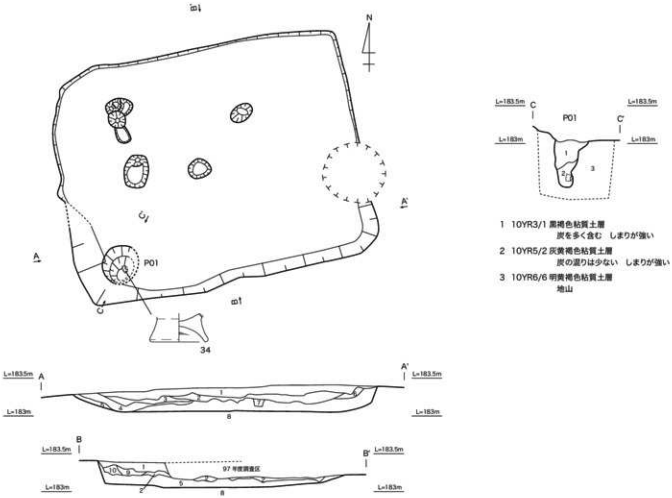


図43 97B SB03(1：50)

土座標軸に並行する。床面には貼床などはなく、住居内周囲には、幅10cm程度のごく浅い壁溝が確認された。柱穴は4本、径20cmほどで、方形の各隅に位置したところで検出された。住居内からは柱など建物の一部が炭化した状態で大量に出土した。「焼失家屋」と考えられる。住居中央部では炭化材は見られず、材は中央部から放射状に伸びて残存していた。東半分では炭化材の状態がより良好で、2本一組で使われていたかのような出土状況を示す部分もある。炭化材は、落葉広葉樹が圧倒的多数を占め、その中でもコナラ節が卓越するようである(註3)。遺物は住居内埋土で出土し、床面直上ではほとんど認められなかったものの、柱穴内には若干残されていた。

97A区 SB03 東西4m、南北3m10cm、深さは検出面から約30cmを測る、隅丸方形状を呈する竪穴住居跡である。住居の主軸は、国土座標軸に対し、北東に約10度振れている。床面

(註3)詳細な分析は、第5章第5節参照。

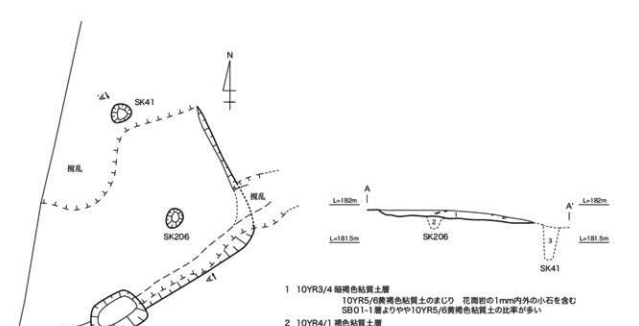


図44　97B SB05(1：50)

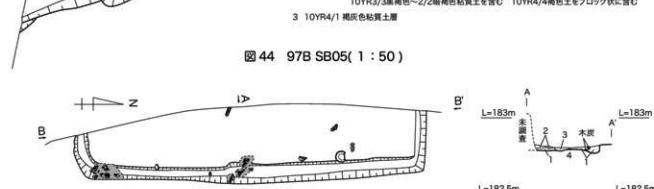


図45　97D SB06(1：50)

には、貼床や壁溝は確認できなかった。柱穴は径30cmほどのものを南西隅に1本確認した。北西端にもピットが4基重複して存在するが、これが柱穴になるかもしれない。遺物は住居内埋土および柱穴から若干出土した。

97A区 SB05　調査区西端に位置することと、後世の撹乱により破壊を受けていることにより、全形を窺うことはではない。調査時の確認値で、東西3m60cm、南北2m10cm、深さは検出面から約10cmを測り、隅丸方形状を呈する竪穴住居跡と考えられる。住居の主軸は、国土座標軸に対し、北東に約25度振れている。床面には、貼床や壁溝は確認できなかった。97A SK46やSK206が柱穴と考えられ、これも4本の柱穴

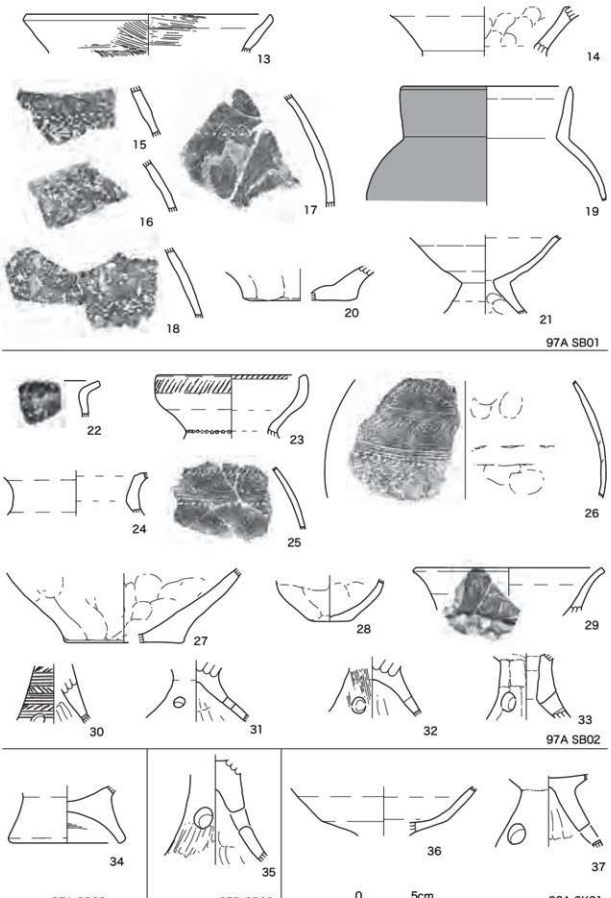


図46　古墳時代初頭の土器1（1：3）

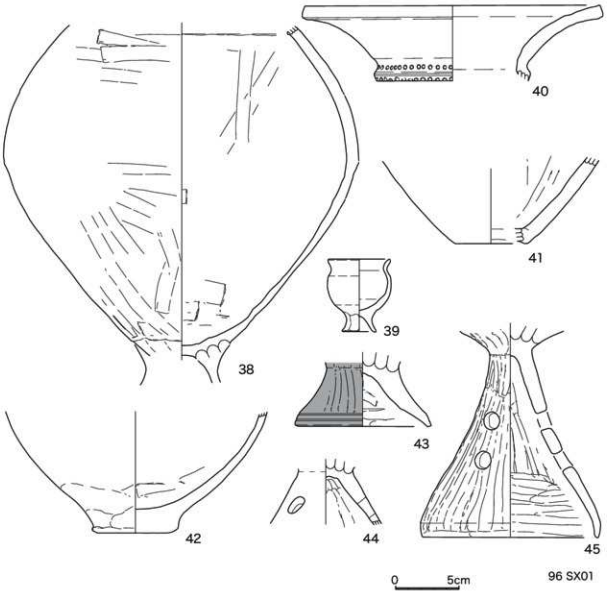


図 47　古墳時代初頭の土器 2 (1 : 3)

か四隅に配される形状と考えられる。遺物は住居内埋土および柱穴からも見られなかった。(註 4)

b. 出土遺物 (土器)

97A SB01 出土遺物 (13 ～ 21)　13 は、くの字状口縁を呈する甕の口縁部。外内面にはハケ調整が施されている。14 ～ 20 はそれぞれ壺の一部と考えられる。15 ～ 18 は同一個体と考えられる一群で、「パレススタイル壺」の胴部上半の文様帯部分である。横線文・斜線文・クシ状工具による波線文および刺突列文が重層的に施されている。19 は広口壺の口縁部から胴部にかけての部分である。外面には赤彩が施されている。21 は高坏で、坏部が有段となるものである。

これらの資料は、古墳時代初頭、廻間 I 式の中でも古相 (0 段階から 1 段階) を示すものと考え

(註 4) 当地は愛知県建設部道路建設課分の委託事業で、先に報告をした (川添 2005)。ここでは SB05 の帰属時期を古代としたので、訂正をする。

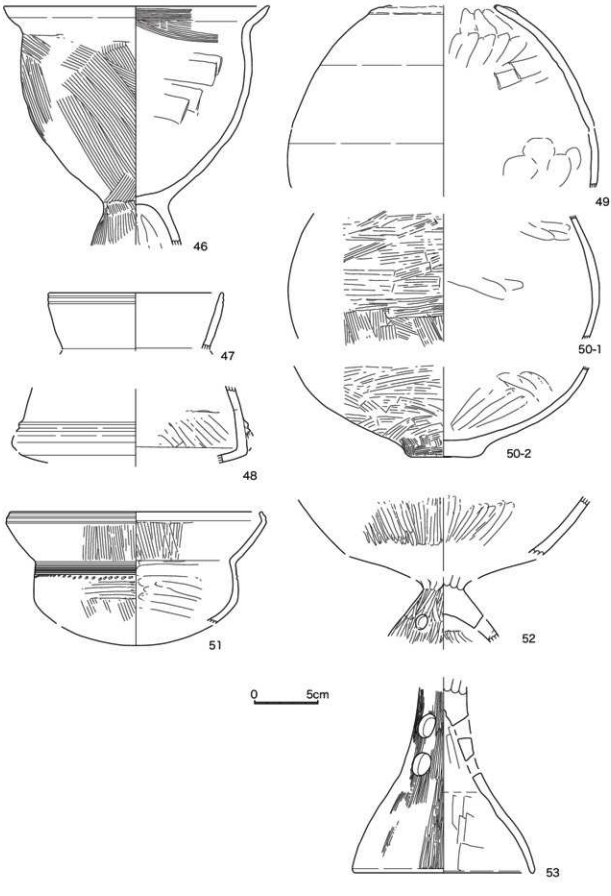


図48　古墳時代初頭の土器3(1：3)

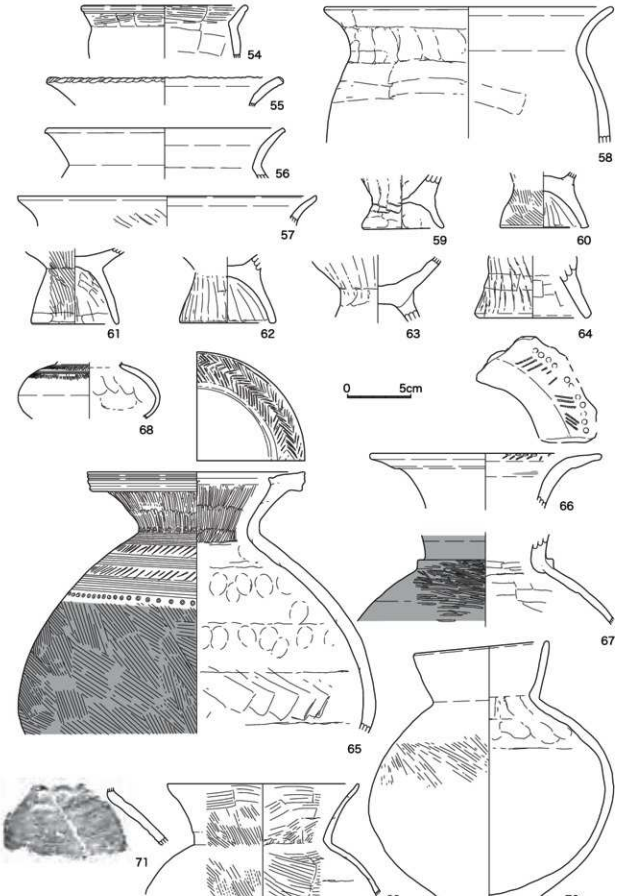


図 49　古墳時代初頭の土器 4 (1 ： 3)

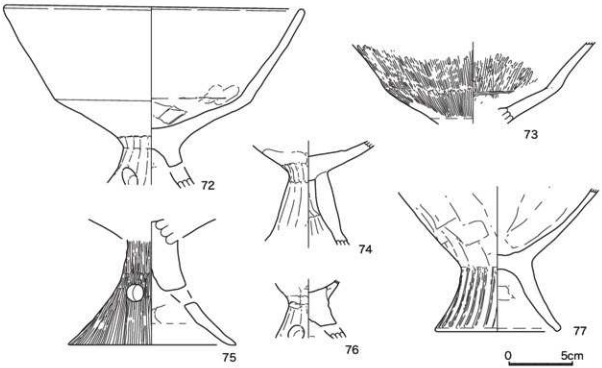


図50　古墳時代初頭の土器5(1：3)

られる。

97A SB02 出土遺物 (22～33)　22は鉢の口縁部。外内面ともナデ調整か。23～28は壺の各部分。23は24～26は「パレススタイル壺」頸部・胴部部分で、25・26は横線文・斜線文・刺突列文が重層的に施されている。28は最大径が9cmほどと小型な広口壺の胴部下半部分である。29は有段高坏の口縁部で、外面には波状沈線が2本横走する。30～32は高坏の脚部。30は横線文・斜線文が重層的に施されている。31は外面がナデ調整、32は外面にハケ調整が見られるものである。33は器台脚部。外面はナデ調整である。

これらの資料は、22・23が弥生時代後期前半の八王子古宮式に、29が弥生時代後期後半山中式に属するほかは、古墳時代初頭廻間Ⅰ式の中でも古相(0段階から1段階)を示すものと考えられる。

97A SB03 出土遺物 (34)　台付甕の脚部である。外面はナデ調整で内面に横方向にハケ調整である。これも古墳時代初頭廻間Ⅰ式におさまるものと考えられる。

98A SK01 出土遺物 (36・37)　36・37は高坏。36は有段高坏の坏部分である。37は脚部部分で、内面には縦方向にイタナデが施されている。古墳時代初頭廻間Ⅰ式までにおさまるものと考えられる。

96 SX01 出土遺物 (38～45)　38・39は台付甕である。38は外面内面ともにイタナデあるいはケズリ調整である。内面底部付近には、炭化物付着の痕跡がある。39は器高6cmほどのミニチュアである。口縁形態がくの字状を呈するもので、全面にナデ調整、部分的に指オサエの痕跡が残されている。40～43は壺の各部分である。40は頸部に隆帯を貼付けたあとで、その上下に竹管状工具による刺突列文が施されている。43は高坏もしくは台付壺の脚部である。外面は縦方向にミガキ調整が施され、脚部端部には2本の凹

線文がみられる。44・45 は高坏脚部である。45 の器面調整は、外面の坏部側がヘラケズリ、脚部側が縦方向にミガキで、内面の端部が横方向にナデもしくはミガキ、坏部側に向かってヘラナデが施されている。

これらの資料は、概ね古墳時代初頭廻間Ⅰ式(0段階から1段階)に属するものと考えられる。

98B SX02 出土遺物 (46 ～ 53)　46・51 は鉢である。46 は台坏鉢で、外面と口縁部内面にはハケ調整が施されている。51 は受口状口縁を有する鉢である。口縁端部外面には2条の凹線文が施されている。頸部には櫛状工具による横線文、そしてその下部には細い棒状工具による刺突列文が1条巡る。器面調整は、細密なミガキが主体である。47・48・49・50 は壺の各部分。47 は短頸壺で口縁端部外面には2条の凹線文が巡る。外面はミガキ調整。49・50 は広口壺。49 は頸部付近に1条の隆帯が貼付けられているものである。50 は外面にハケ調整を残すものである。48 は外面に2条の隆帯を貼付けるもので、胴部から底部にかけて屈曲する器形を有する。52・53 は高坏である。ともに外面の器面調整は縦方向に細密なミガキ調整が施されている。

これらの資料も概ね古墳時代初頭廻間Ⅰ式(0段階から1段階)に属するものと考えられる。

その他出土遺物 (35・54 ～ 77)　54・55・77 は鉢である。54 は口縁外面内面ともにハケ調整が主体となる。55 は口縁端部上面に浅い刺突列が施されている。77 は胴部下半から脚部にかけてであり、器面調整は坏部ではイタナデ、脚部では縦方向にミガキが施されている。56 ～ 58 は、くの字状を呈する甕の口縁部である。器面外面はナデ調整が主体である。58 は三河地域などより東域との関連が考えられる資料である。59 ～ 64 は台付甕などの脚部である。外面の器面調整にはハケ(60・61)、イタナデおよびケズリ(62・64)、ナデ(59・63)がみられる。61 の脚部端部には横方向にやや強いナデが施されている。65 ～ 71 が壺の各部分。66・67・71 はパレススタイル壺である。65 は、貼付けにより肥厚させた口縁部の外面に3条の凹線を、また上面には矢羽状の斜線文が巡るものである。頸部から胴部上半には、竹管状工具による刺突列文・櫛状工具による横線文・斜線文が重層する。器面調整は、頸部外面・内面ともに細密なミガキ、胴部外面がハケ、内面はヘラナデ・オサエ・ナデが重層する。外面胴部には赤彩が施される。66 は口縁部上面に竹管状工具による刺突列文と、櫛状工具による斜線文が巡る。外面には赤彩が施される。67 は頸部に隆帯を貼付けているもので、外面の器面調整は、横方向への細密なミガキが主体となっている。外面には赤彩が施されている。68 は細頸壺である。胴部上半には、細い横線文と格子文および斜線文が重層する。69・70 は広口壺である。器面調整は外面でハケ、内面で 69 はハケ、70 はナデ・オサエである。72 ～ 76 は高坏。72・73 は有段高坏の坏部分である。72・73 ともに器面調整はミガキを基調としている。74 ～ 76 は脚部である。これらも器面調整はミガキを基調としている。

これらも概ね、古墳時代初頭廻間Ⅰ式(0段階から1段階)に属するものと考えられる。

c. 出土遺物(石器)

198 は台石と考えられる。97A SB01 より出土。平面には、作業によると思われる摩滅痕が認められる。細粒花崗岩製。

第3節　古代

a. 検出遺構

竪穴住居跡1・溝5・土坑多数・ピット多数が検出された。ピットの多くは、掘立柱建物の柱穴であると考えられる。その中で掘立柱建物の概要が示すことができるものが5軒である。遺構は97B区・98A区以北の「緩やかな傾斜地」全体に展開しているが、現状で濃密な部分は、97A区の南端までである。

また96区以南の「沢部分」にも遺物の若干の出土がみられるが、遺構などは確認できなかった。自然流路はこの時期も埋まりきることなく、水流があったものと考えられる。

ここで報告するものは、奈良時代から平安時代にかけての遺構群であるが、竪穴住居など若干の遺構を除いて、多くは平安時代に属するものと考えられる。主要な遺構について個別に報告を行う。

97B SB04

97B区中央に位置する遺構で、全容が把握できたものである。東西4m50cm、南北4m55cm、検出面からの深さは約15cmを測る方形の竪穴住居である。住居の主軸は、ほぼ真北に沿っている。床面には、特に貼床は認められなかった。一部北壁際では確認できなかったものの、床面壁際には壁溝が確認できた。幅15から20cmほど、床面よりの深さ約10cmを測る。主柱穴も4本検出されている。いずれも径30cmほど、床面からの深さも30cmほどである。住居北壁では、カマドが検出されている。東西97cm・南北1m5cm、残存状況は良好であるものの、両袖部分は明確に確認できなかった。カマドの上部を焼土層と炭化物層が覆っている様子が観察された。ここからは土師器甕の破片が出土している。カマドの前には北西隅に向かう幅10cmほどの溝がある。遺物は、陶器片・土師器片が床面直上・埋土・およびカマドの内および周囲から出土している。また南東隅を中心に炭化した板材が検出されている。

この住居の時期は、遺物の出土状況などから折戸10号窯式の時期と考えられる。

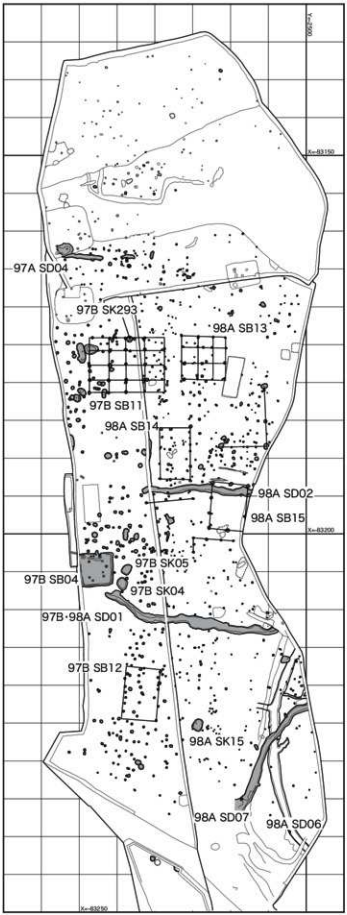
97B・98A SD01

東西方向に伸びる溝で、97B区側で若干西北方向に向きが変わるものである。98区よりも東側に伸びている様子が窺えられた。調査時の状況では長さ約23m、幅は最大で1m70cmほど、深さは検出面より40cmほどを測り、断面形状はU字もしくは浅い皿状を呈する。西端では北側の97B SK04・05側に向かって、若干伸びている部分がある。これらは一連の直交する溝になる可能性がある。溝内の埋土からは、須恵器・灰釉陶器・土師器甕が出土した。その中で圧倒的多数を占めるのは、灰釉陶器である。灰釉陶器には、底部外面を中心として「吉」「春」「用」の墨書が見られる。

この溝の時期は、虎渓山1号窯式の時期と考えられる。

98A SD02

97B・98A SD01同様に東西方向に伸びる溝で、97B SK09もこの溝の西端部と考えられる。これもさらに98A区の西側へ伸びる様子が窺えられる。調査時の状況では長さ約14m50cm、幅は



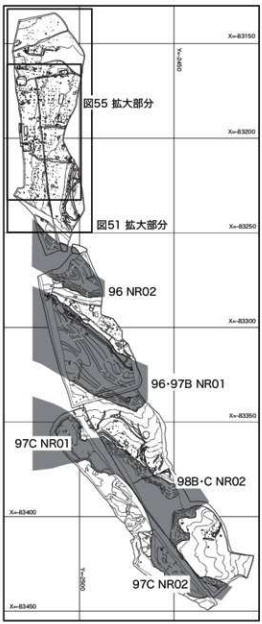


図51　古代遺構配置図
（左　1：500、右　1：2,000）

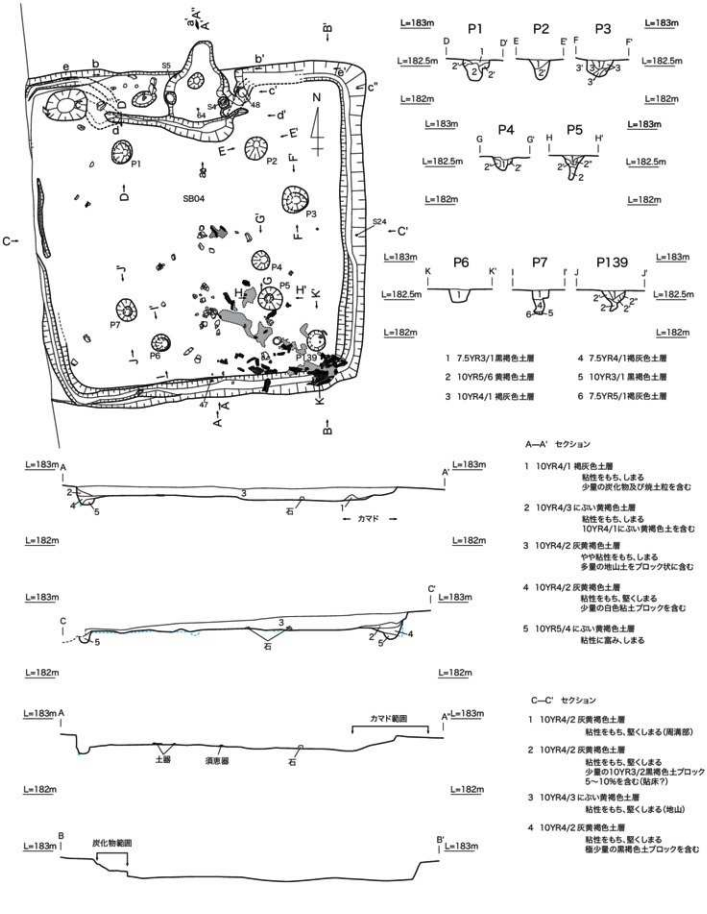
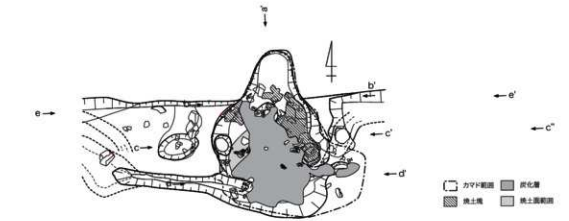
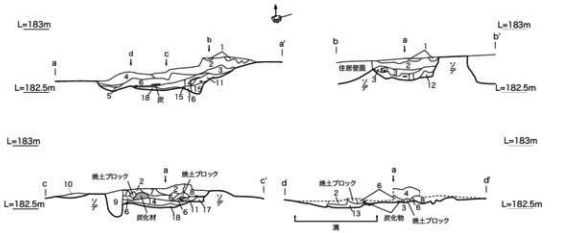


図52　97B SB04 (1 : 50)





1 7.5YR3/1 黒褐色土層 粘性をもち、堅くしまる

2 7.5YR3/3 暗褐色土層 粘性をもち、堅くしまる
カマドの天井部の崩落土か?
微量の焼土粒・ブロックを含む

3 7.5YR3/1 黒褐色土層 粘性をもち、堅くしまる
少量の焼土粒・ブロック及び炭化物を含む

4 5YR3/1 黒褐色土層 粘性をもち、堅くしまる
比較的多量の焼土ブロック、少量の炭化物を含む

5 10YR3/1 黒褐色土層 やや粘性にかけるが、しまる
微量の焼土粒を含む

6 7.5YR2/1 黒色土層 粘性に欠けるが、堅くしまる
多量の炭化物、少量の焼土粒・ブロックを含む
炭化物層

7 10YR3/3 暗褐色土層 粘性をもち、堅くしまる
少量の炭化物、微量の焼土粒を含む

8 5YR2/1 黒褐色土層 やや粘性に欠けるが、堅くしまる
多量の焼土ブロック、少量の炭化物
(カマド天井・壁の崩落したもの?)を含む

9 10YR3/1 黒褐色土層 粘性をもち、しまる カマドを切っている

10 10YR4/2 灰黄褐色土層 粘性をもち、しまる 少量の炭化物を含む

11 5YR4/1 褐灰色土層 やや粘性をもち、しまる
比較的多量の焼土ブロック・粒、少量の炭化物を含む

12 7.5YR3/2 黒褐色土層 やや粘性をもち、堅くしまる
少量の焼土ブロックを含む

13 7.5YR4/1 褐灰色土層 粘性をもち、しまる
少量の炭化物を含む 溝の覆土か?

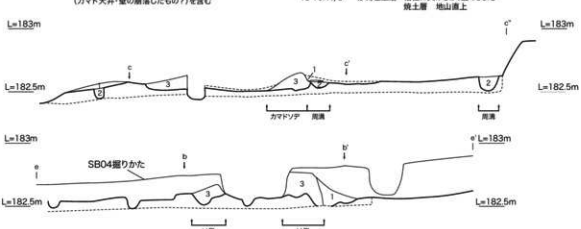
14 10YR5/3 にぶい黄褐色土層 やや粘性をもち、堅くしまる
多量の白色粘土ブロック(カマドの材料?)を含む

15 7.5YR4/1 褐灰色土層 粘性をもち、堅くしまる(他の土に比べ粘質)
少量の焼土ブロック及び炭化物を含む

16 10YR5/4 にぶい黄褐色土層 粘性に欠けるが、堅くしまる (ブロック状)

17 7.5YR4/2 灰褐色土層 粘性に欠けるが、堅くしまる
多量の焼土ブロック・粒、極少量の炭化物を含む

18 10R4/3 赤褐色土層 粘性に欠けるが、堅くしまる
焼土層 地山直上

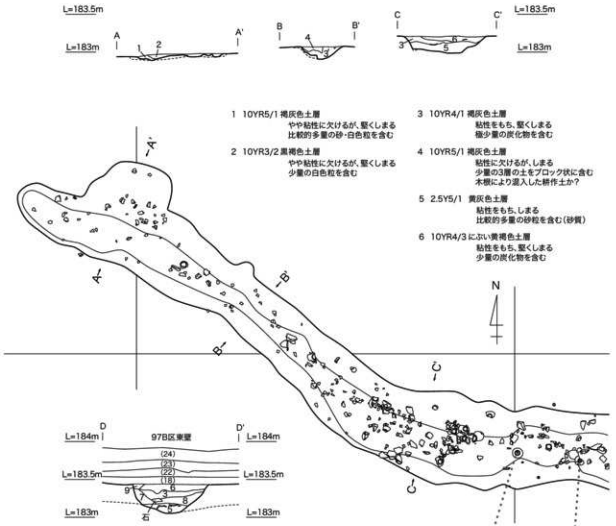


1 10YR4/2 灰黄褐色土層
やや粘性をもち、しまる
少量の黒褐色土、少量の炭化物を含む

2 10YR5/4 にぶい黄褐色土層
粘性に富み、しまる

3 10YR4/3 にぶい黄褐色土層
粘性をもち、堅くしまる
少量の黒褐色土を含む カマドソデの盛土か?

図53 97B SB04 カマド部分(1:30)



3 10YR4/1 褐灰色土層
粘性をもち、堅くしまる
極少量の炭化物を含む

5 2.5Y5/1 黄灰色土層
粘性をもち、しまる
比較的多量の砂粒を含む(砂質)

6 10YR4/3 にぶい黄褐色土層
粘性をもち、堅くしまる
少量の炭化物を含む

7 7.5YR4/1褐灰色土層
粘性に富み、堅くしまる
比較的多量の地山土が混入する

8 10YR5/2 灰黄褐色土層
粘性に富み、しまる
少量の砂粒を含む(やや砂質)
3~5への崩移層か?

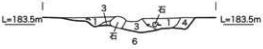
9 7.5YR4/3褐色土層
粘性に富み、堅くしまる
極少量の6層の土を含む
(地山の土にきわめて近い)

(18) 10YR5/6 黄褐色粘質土層
2.5Y4/1 黄灰色砂質土まじり
しまりややあり
(メインセクション97B区14層)

(22) 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト層
しまり弱い 粘性に富む
花崗岩風化砂まじり

(23) 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト層
粘性ややあり
1~5mm大の礫若干含む 耕作土

(24) 10YR7/1 灰白色礫層
ズリ



1 10YR3/3 暗褐色粘質土層
粗粒砂を多く含む
7.5YR5/4にぶい褐色粗粒砂を斑状に含む
炭を少量含む

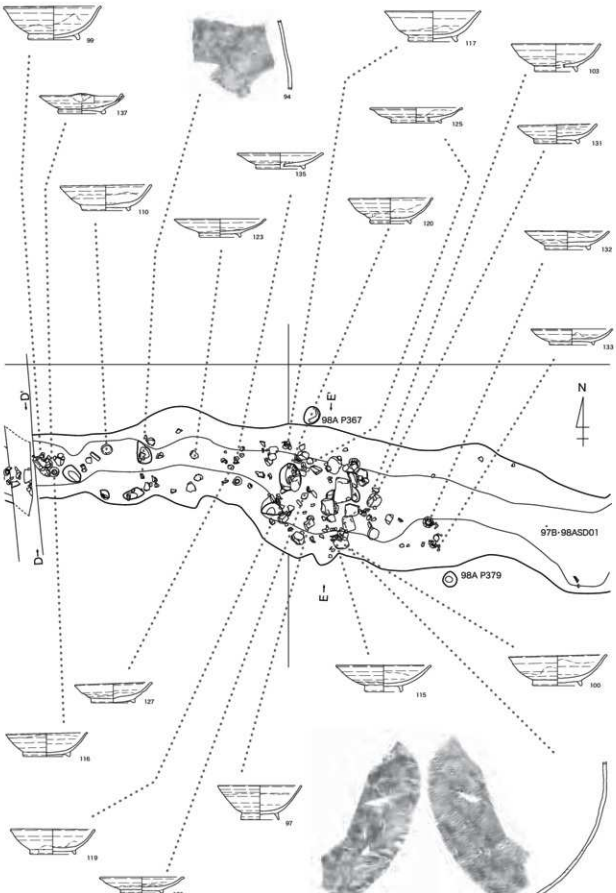
2 7.5YR5/3にぶい褐色粗粒砂層
地山に近い色

3 10YR3/1 黒褐色粘質土層
粗粒砂を少量含む
7.5YR5/4にぶい褐色粗粒砂を斑状に含む
炭を少量含む
握りこぶし大~径10cm程度の石を含む

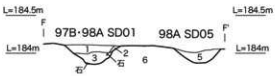
4 7.5YR5/3にぶい褐色粘質土層

6 7.5YR5/4にぶい褐色土層
地山

図54



97B・98A SD01 の1（1：50）



1 10YR3/3 暗褐色粘質土層
粗粒砂を多く含む
7.5YR5/4にぶい褐色粗粒砂を斑状に含む
炭を少量含む

2 7.5YR5/3にぶい褐色粗粒砂層
地山に近い色

3 10YR3/1 黒褐色粘質土層
粗粒砂を少量含む
7.5YR5/4にぶい褐色粗粒砂を斑状に含む
炭を少量含む
握りこぶし大～径10cm程度の石を含む

5 N3/0 暗灰色粘質土層
少片の炭を含む

6 7.5YR5/4にぶい褐色土層
地山

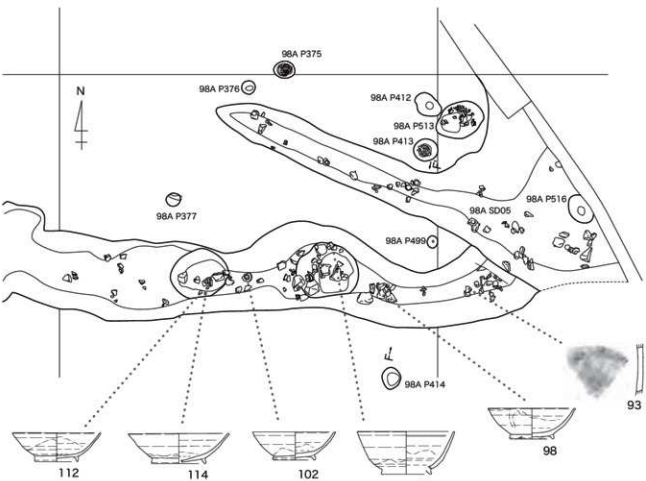


図54　97B・98A SD01の2(1：50)

最大で1m20cmほど、深さは検出面より25cmほどを測り、断面形状は浅い皿状を呈する。西端の97B SK09部分では、若干南西方向に伸びている。溝内の埋土からは、須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・土師器甕が出土した。その中で圧倒的多数を占めるのは、灰釉陶器である。灰釉陶器には、底部外面を中心として「山」の墨書が見られるものもある。また、溝中央部から管状土錘が9点出土した。

この溝の時期は、虎渓山1号窯式の時期と考えられる。

97B SK293

長径70cm、短径65cmの方形状を呈し、検

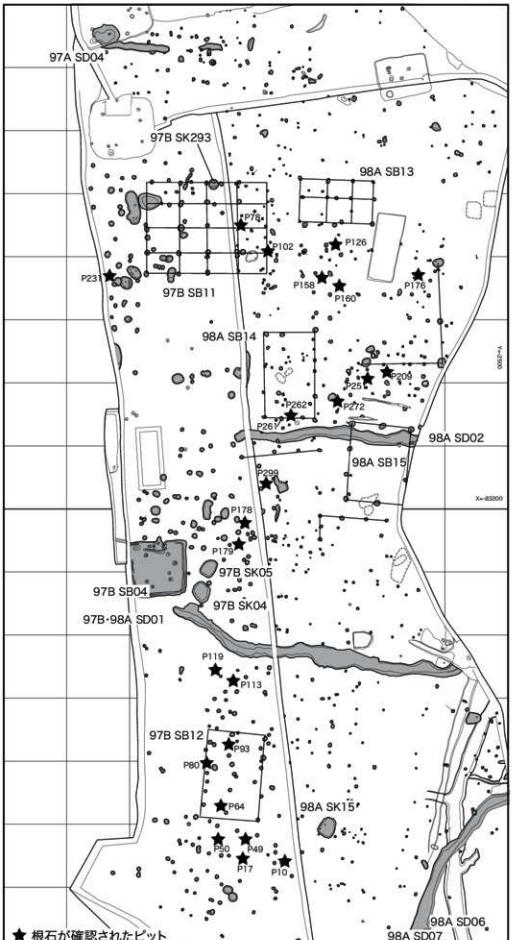


図55　古代遺構配置図2（1：300）

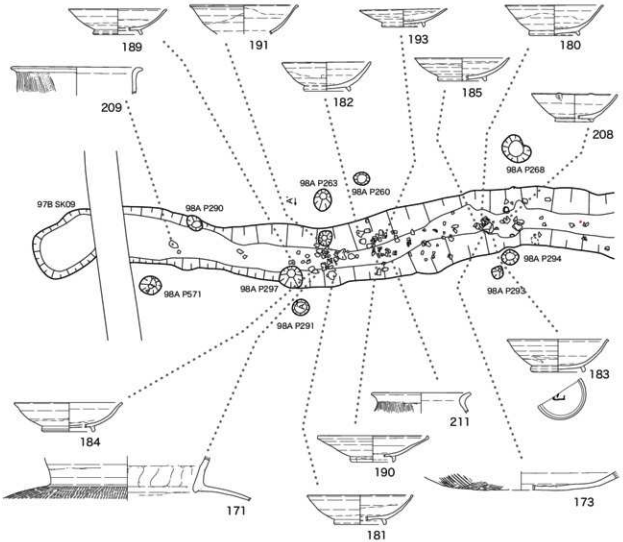


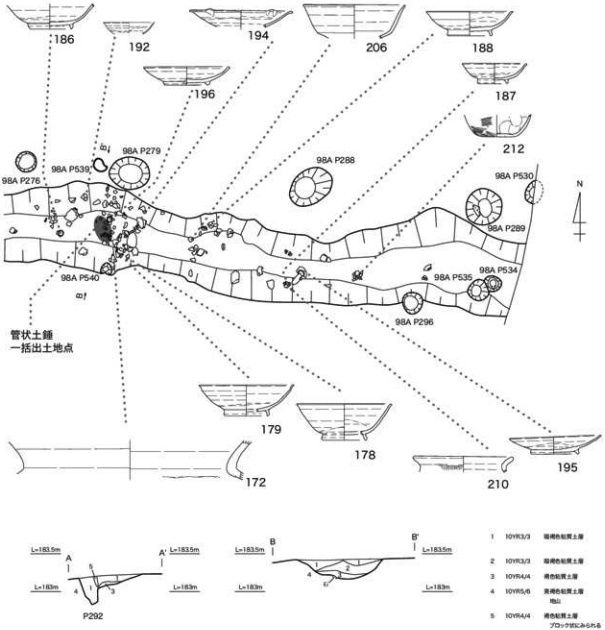
図56　98A SD02(１：50)

出面からの深さ 15cm を測る。遺構底面には柱状の角礫を四方に配し、その中央から長頸瓶・碗・皿が出土した。長頸瓶は遺構床面に底部が接し、埋納された状態であった。頸部付近の破片が存在せず、ここで欠失させた可能性が考えられる。碗・皿は遺構上面から出土しており、混入の可能性も考えられる。埋土には地山を含む灰黄褐色土が充填されていた。

長頸瓶からこの土坑の時期は大原２号窯式の時期と考えられる。

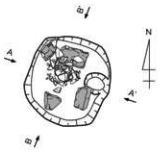
掘立柱建物およびピット群

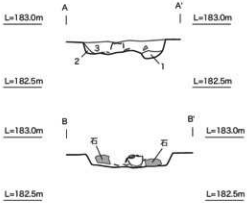
上述したように、多数出土したピット群の多くは、掘立柱建物などの柱穴と考えられる。97B SB11 は長軸 10m、短軸 7.5m を測る、４間×４間の建物である。総柱建物で、軸はほぼ真北に沿って建てられている。97B SB12 は長軸 7m、短軸 5m を測る。立替えが激しく建物構造を把握するのが難しいものの、２間×３間の建物である可能性がある。98A SB13 は長軸 6m、短軸 3.5m を測る、２間×３間の建物である。総柱建物になると考えられ、軸はほぼ東西に沿って建てられて



いる。98A SB14 は長軸 7m、短軸 4.5m を測る 3 間×2 間の建物である。軸はほぼ真北に沿って建てられている。98A SB15 は、長軸 6m、短軸 5m を測る 3 間×2 間の建物である。長軸方向は、上記のものとは若干異なり、東北方向にやや振る形で建てられていたようである。

また、根石と思われる人頭大の礫が見られるピットが 23 基、また、柱材が残存しているピットが 1 基あった。根石を持つ柱穴と、持たない柱穴の両者が存在していたようである。98A P102 の根石は、砥石として使用されたものの転用の可能性がある。



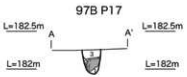


1　7.5Y5/6　明褐色粘質土ブロックの斑土

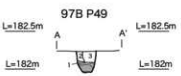
2　7.5Y4/3　褐色粘質土層

3　10YR4/2　灰黄褐色粘質土層
細かな 7.5Y5/6 明褐色粘質土
（地山）ブロックを含む

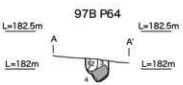
図 57　97B SK273 (1：30)



1　10YR4/6　褐色粘質土　地山ブロック
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　地山ブロック多く混じる
3　10YR3/2　黒褐色(粘質)土　炭化物含む

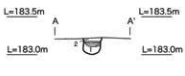


1　10YR4/4　褐色粘質土　地山ブロック
2　10YR4/1　褐灰色粘質土　地山ブロック混じる
3　10YR3/2　黒褐色粘質土　炭化物多く含む　柱痕部分

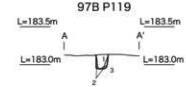


1　10YR4/1　褐灰色粘質土
10YR4/4褐色粘質土を斑に含む
炭化物・地山ブロック(柱痕部分)
2　10YR1.7/1　黒色土　炭化物含む
.5YR4/1灰色粘質土をブロック
状に含む(柱痕部分)
3　10YR4/4　褐色粘質土
4　10YR4/4　褐色粘質土

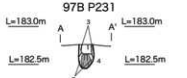
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　地山ブロック混じる
2　10YR3/2　黒褐色粘質土　炭化物・焼土塊を多く含む



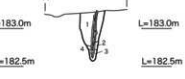
1　10YR3/2　黒褐色粘質土　地山ブロック混じる
2　10YR4/1　褐灰色土　地山ブロック混じる



1　10YR3/2　黒褐色粘質土
10YR4/4褐色粘質土に5mm大の炭化物
がブロック状に混じる
2　10YR4/3　灰黄褐色粘質土
3　7.5YR5/6　黄褐色粘質土
2.5Y6/1にぶい黄色粘質土・花崗岩の風化
物混じる



1　10YR4/1　褐灰色粘質土
2　10YR3/2　黒褐色粘質土　微細な炭化物混じる
3　10YR5/4　にぶい褐色粘質土
4　10YR4/4　褐色粘質土



1 10YR3/1　黒褐色粘質土
10YR4/3Cにぶい黄褐色土や10YR2/1黒色土をブロック状に含む
炭化物・焼土塊含む
2　10YR5/1　灰色砂　細粒砂主体
3　10YR5/1　灰色粘質土
4　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土　地山

1 10YR3/1　黒褐色粘質土　炭化物含む
2　7.5YR5/4　にぶい褐色粘質土

図 58　各ピット断割りセクション (1：50)

b. 出土遺物 (陶器)

97B SB04 出土遺物 (78 ～ 84)　78 は高台のない須恵器坏身である。丸身のある碗状の形態を有し、口縁部の対向する部分を平行にすることにより、口縁部が楕円形状を呈する形状となる。底部外面には糸切痕が残されたままである。79 は高台付きの須恵器坏身で、底部外面は回転ヘラで調整されている。80 ～ 84 は土師器甕である。80 は内外面ともナデ調整で、口縁が立ち上がり気味で、端部内面には若干の稜が立つ。81・82 は口縁部が外反気味のもので、内外面ともにハケ目調整が見られる。

これらの遺物は、折戸 10 号窯式の資料と考え

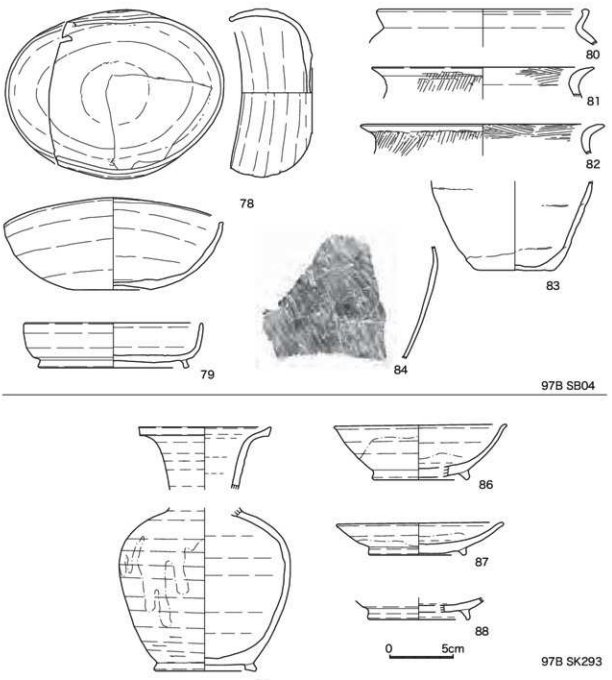


図 59　古代の陶器類 1 (須恵器・灰釉陶器・土師器)(1 ： 3)

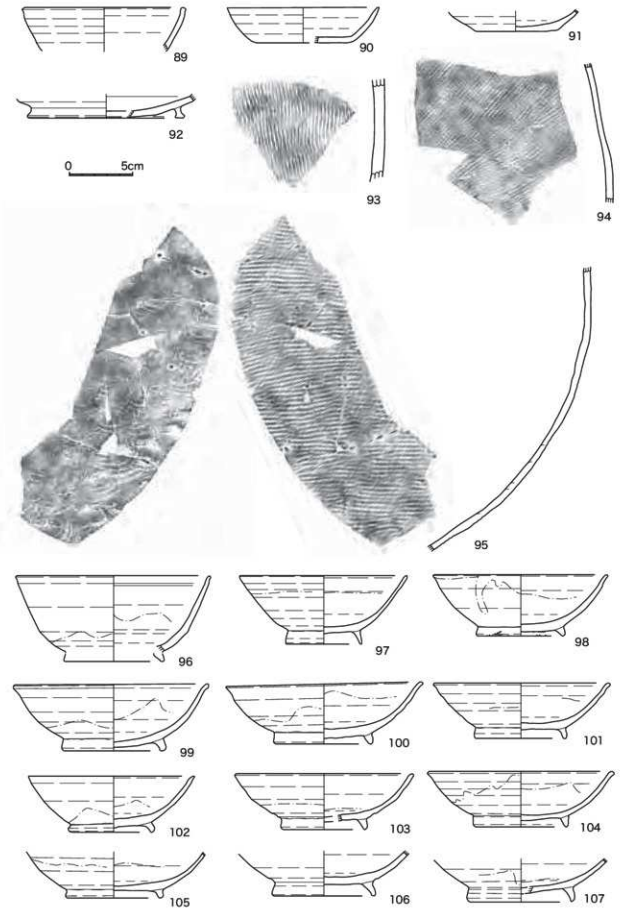


図60　古代の陶器類2(須恵器・灰釉陶器)(1：3)

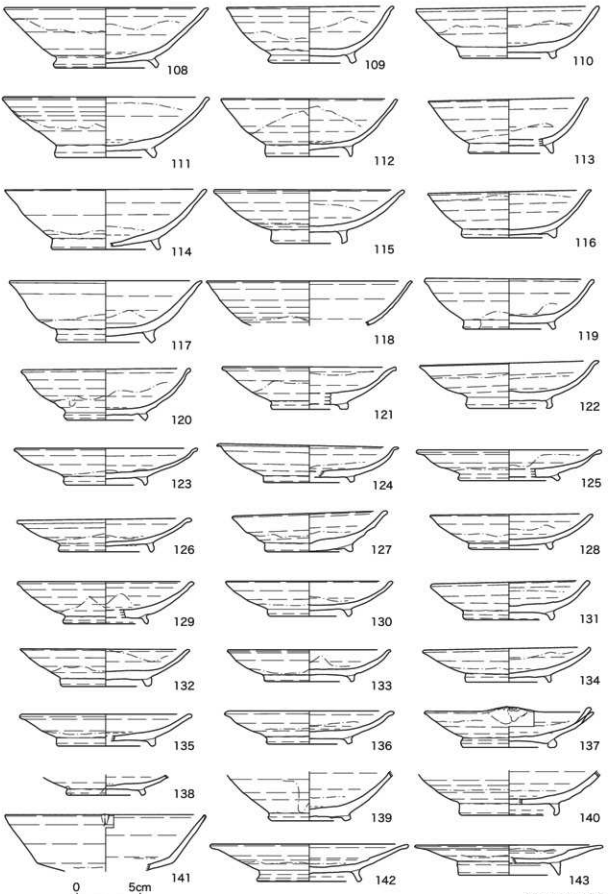


図61　古代の陶器類3(灰釉陶器)(1：3)

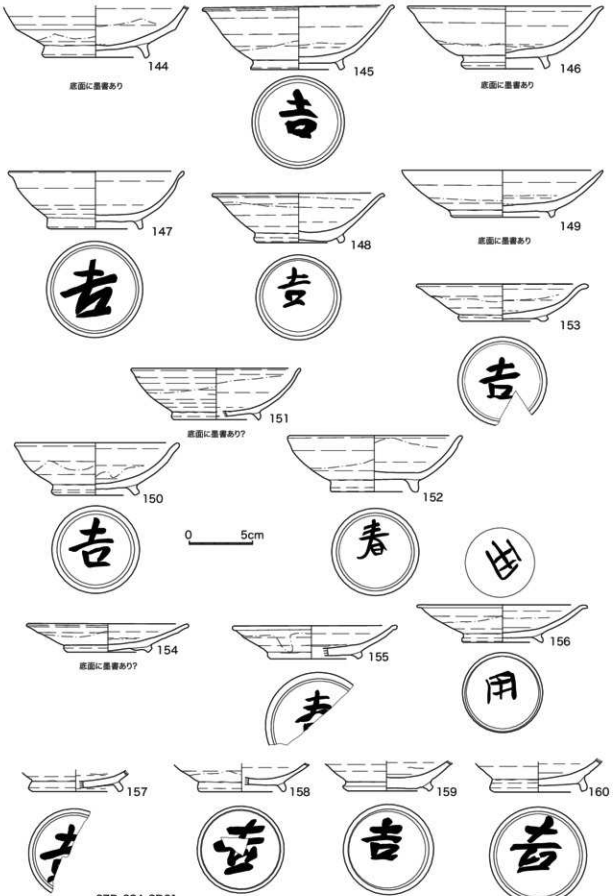


図 62　古代の陶器類 4 (灰釉陶器)(1 ： 3)

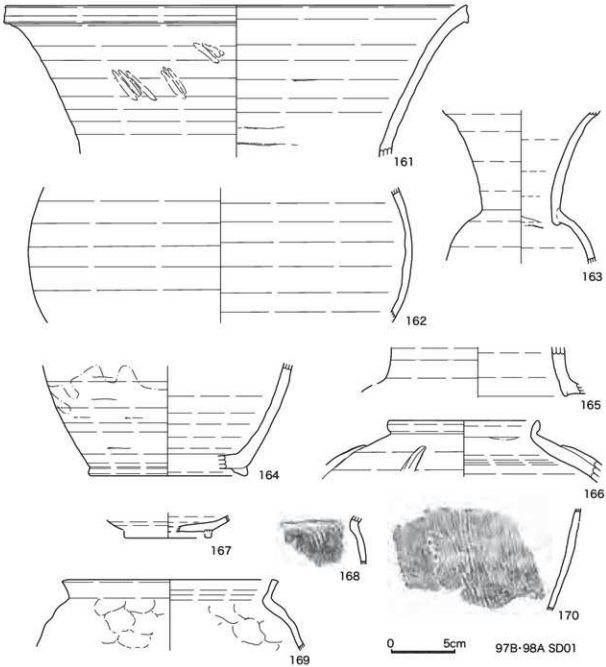


図63　古代の陶器類5(須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器)(1：3)

られる。但し、80は虎渓山1号窯式など灰釉陶器盛行時期に見られるものの可能性がある。

97B SK293 出土遺物 (85～88)　85は長頸瓶、86が灰釉陶器碗・87が灰釉陶器皿である。85は外面はヘラケズリ、内面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラで調整されている。大原2号窯式に属する。86～88は底部外面は回転ヘラで調整後に高台の貼付けを行っている。胴部上半を中心に釉薬のツケガケが見られる。虎渓山1窯式に属する。

97B・98A SD01 出土遺物 (89～170)　89～92は須恵器坏身である。90・91は底部外面

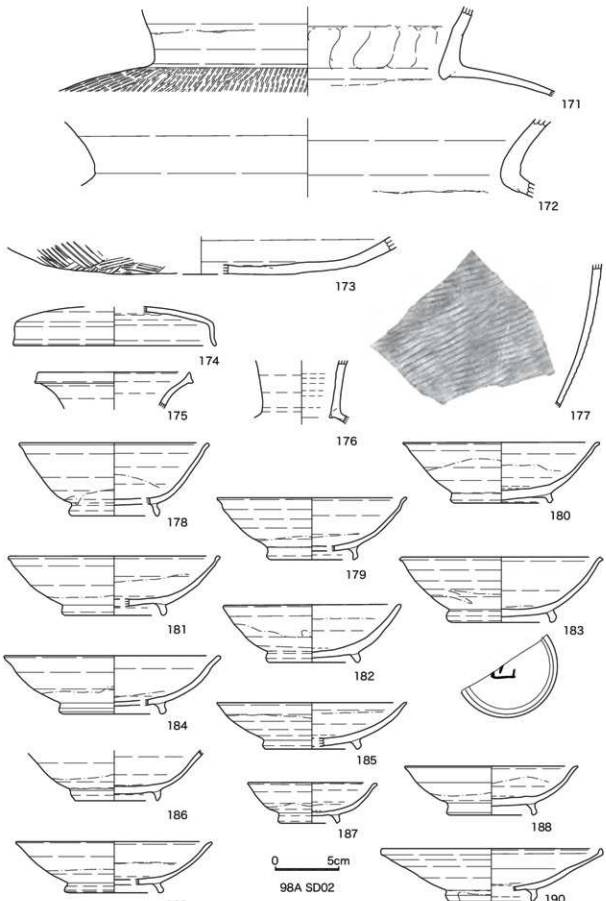


図64　古代の陶器類6(須恵器・灰釉陶器)(1：3)

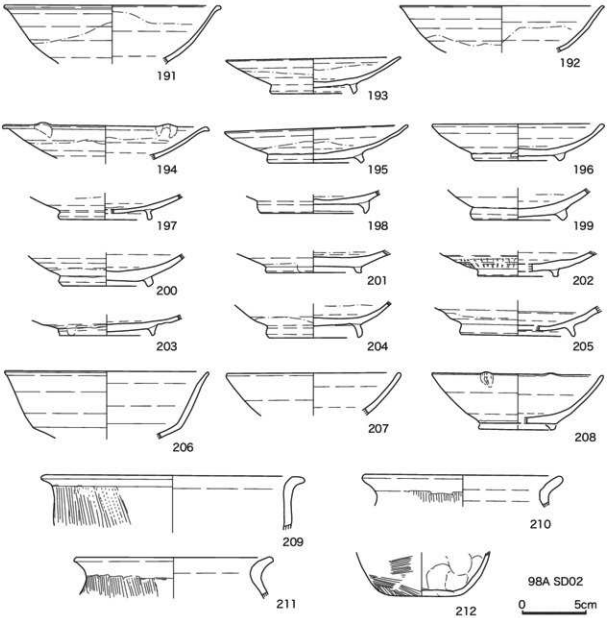


図 65　古代の陶器類 7 (須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・土師器)(1 ： 3)

に糸切痕を残すものである。92 は有高台で、回転ヘラで調整後に高台が貼付けられている。これらは 8 世紀前半に属するものか。93 ～ 95 は須恵器大甕である。外面は平行タタキが全面に見られ、内面にはナデもしくは工具の押し当て痕が見られる。96 ～ 160 は灰釉陶器である。器種としは碗・皿が多く見られるが、中には稜碗 (141・144) や段皿 (142・143) も見られる。碗は器高の浅い「浅碗」が主体であり、深碗は若干数である (96 など)。137・141 は口縁部の一部に押圧・引き上げにより「輪花」表現をしているものである。器面調整は内外面ともに回転ナデもしくはケズリで、底部外面は回転ヘラ調整の後、高台が付けられている。高台は、逆台形気味に太めのもの (99・109 など) が主体であり、尖り気味のもの (97) や内側に屈曲気味のもの (122・140 など)、潰れ気味のもの (121・137・139 など) も見られる。内外面には口縁部側を中心にツケガケに

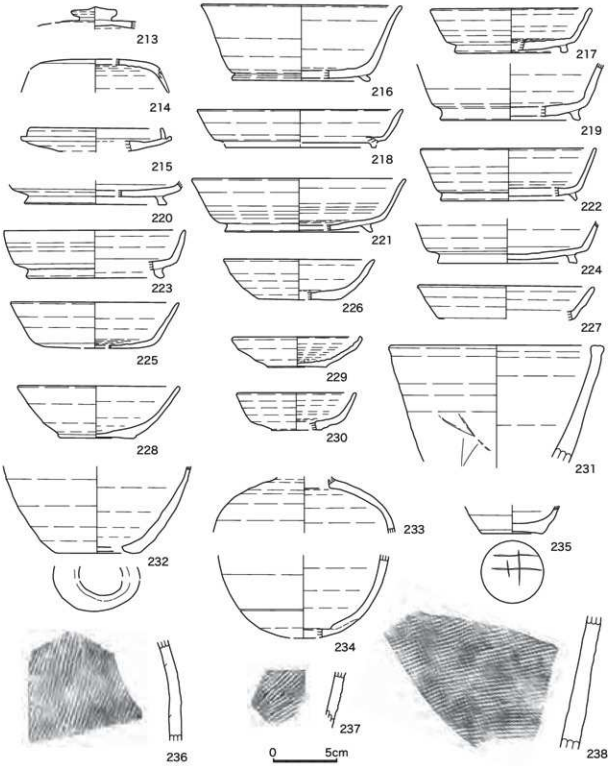


図66　古代の陶器類8(須恵器)(1：3)

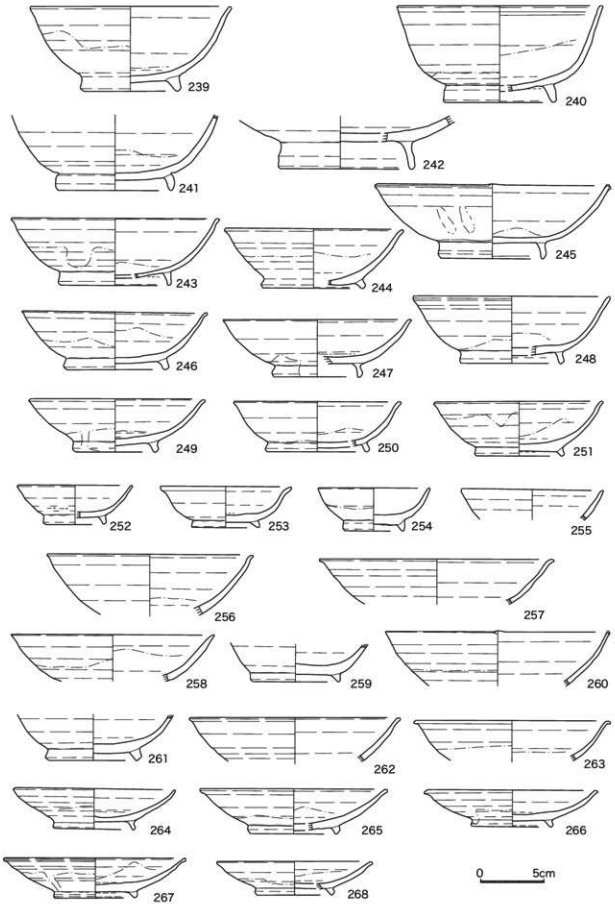


図67　古代の陶器類9(灰釉陶器)(1：3)

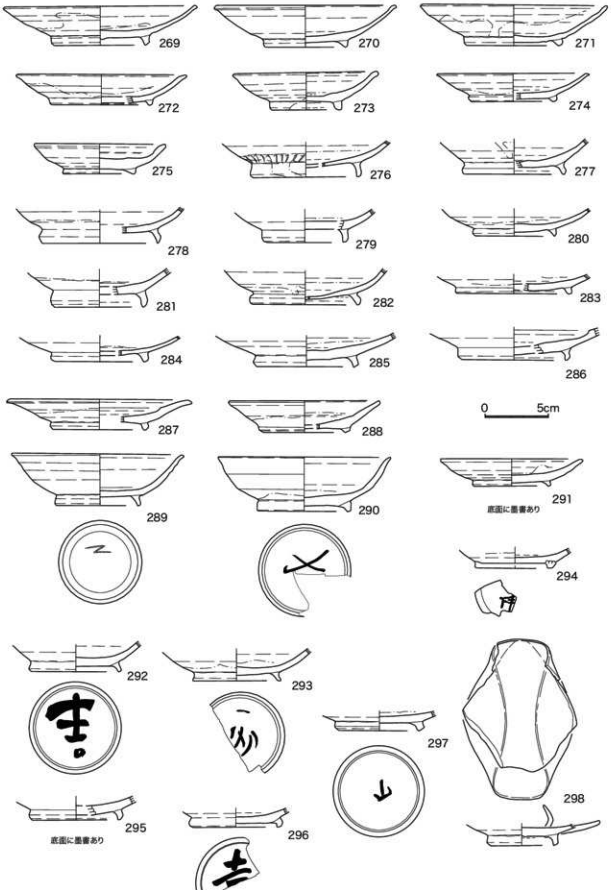


図 68　古代の陶器類 10(灰釉陶器)(1 ： 3)

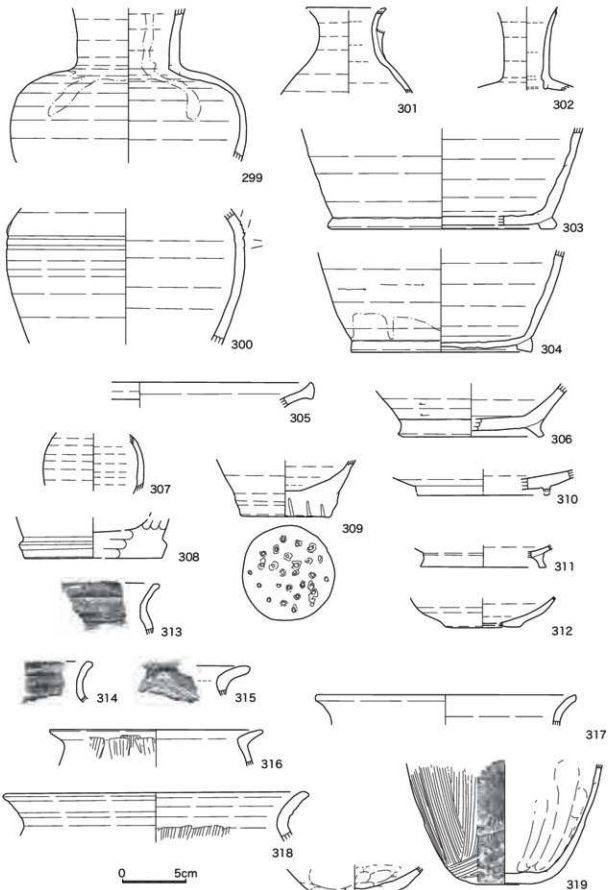


図 69　古代・中世の陶器類 11(須恵器・灰釉陶器・土師器・古瀬戸)(1 : 3)

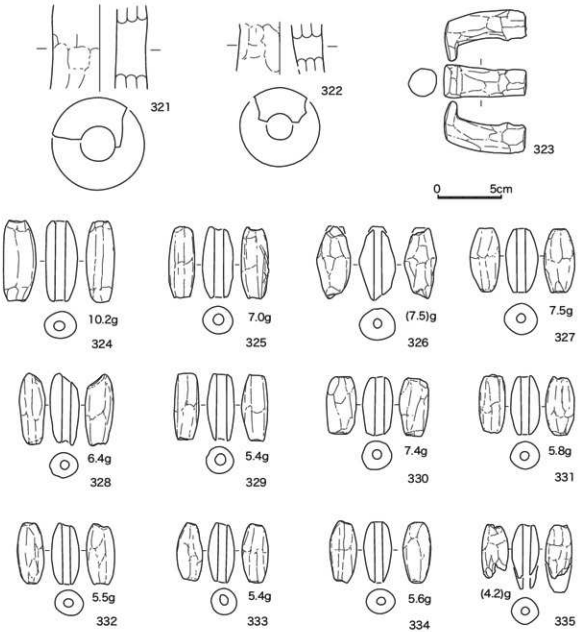


図70　古代の陶器類12(土製支脚・管状土錘)(1：3)

よる施釉が見られる。144～160は墨書のみられる碗・皿である。底部外面に墨書されているものが主体である。判読可能なものでは「吉」が多く、その他「春」「用」が書かれている。156は底部内面にも墨書されている例である。墨書・非墨書にかかわらず、内面の摩滅が著しく、使用された痕跡を示している。161～165は壺瓶類である。166は灰釉陶器三筋壺と考えられる。167は緑釉陶器碗もしくは皿。緑釉の塗布はハケヌリと思われ、内面・外面のみならず、回転ヘラ調整が施された底部外面にも、塗布が見られる。168～170は土師器甕である。169はナデもしくはオサエ調整が主体であり、168・170の外面にハケ調整が残されているものとは対照的である。

これらの遺物は8世紀前半に属する須恵器の一群を除き、一部大原2号窯式に属する可能性もあるものの、多くは虎渓山1号窯式に属するものと考えられる。

98A SD02 出土遺物 (171 ～ 212)　171 ～ 173・177 は須恵器大甕である。174 は灰釉陶器の壺蓋、175・176 は壺瓶類で長頸瓶と考えられる。178 ～ 205 は灰釉陶器碗・皿である。碗は 178 など「深碗」が少なく、「浅碗」が主体である。また、187 のような小碗も見られる。器面調整は、内外面とも回転ナデあるいはヘラケズリ、底部外面は回転ヘラによる調整が行われている。194 は口縁端部を押圧・引き上げにより「輪花」状を呈している。施釉は、口縁部側を中心にツケガケが行われている。貼付け高台は、逆台形状を呈するものが主体であり (184 など)、尖り気味のものや内側に屈曲気味のもの (186・190 など) のものも見られる。183 は底部外面に「山」の墨書が施されている。206 ～ 208 は緑釉陶器碗である。206 は稜碗である。206・207 はともに丁寧に調整された胎土上にハケヌリによって緑釉が塗布されている。208 は緑釉陶器素地と考えられる碗で、縁端部を押圧・引き上げにより「輪花」状を呈している。209 ～ 212 は土師器甕である。口縁部の外反屈曲が横方向のもの (209) と「く」の字状を呈するもの (210・211) とがある。外面調整は縦方向にハケである。

これらの多くは虎渓山 1 号窯式およびその平行する時期に属するものと考えられる。206 は折戸 90 号窯式と若干時期が古手となる。

その他の出土遺物

その他各遺構や包含層出土遺物を一括して報告する。

ア) 7 世紀代の遺物　215 は須恵器坏身である。底部が欠損しており全形を窺うことができないものの、浅身の形状になると考えられる。7 世紀前半期のものか。

イ) 8・9 世紀代初頭の遺物 (213 ～ 227・230 ～ 238・301・302・308・309)

灰釉陶器盛行前の須恵器を中心とする遺物群である。216 ～ 224 は有高台坏身である。216 のように器高の高いものから、218 のように器高が低く径の大きいものまである。内外面ともに回転ナデもしくはケズリ調整で、底部外面は回転ヘラによる調整が見られる。214・225・230 は高台の見られない坏身である。214・225 は底部外面が回転ヘラによって調整されている。231・308・309 は「すり鉢」といわれている一群である。309 は底部外面側から 27 ヶ所の未完通の孔が穿られている。232 ～ 238・302 は壺瓶類である。232 は底部に径 3.5cm ほどの焼成前穿孔が見られる。233 は水注になるか。235 は糸切痕が残る底部外面に焼成前の「井」字状の線刻が見られるものである。

なお、214・216・221・222・225・226・231・232・233・234・302・308・309 は 8 世紀前半期に、217 ～ 220・223・224・227・230 は 8 世紀後半期に属するものと考えられる。

ウ) 9・10 世紀代の遺物 (228・239 ～ 299・303 ～ 306・308・310 ～ 320・714)

碗・皿などで灰釉陶器が主体となる時期の遺物群である。碗は器高の高い「深碗」(240 など) と浅い「浅碗」とが見られるが、数量的には「浅碗」が優勢である。また、「小碗」も若干見られた (252 ～ 254)。器面調整は、内外面ともにナデもしくはケズリ調整で、ヘラ痕が器面に残されているものもある (276 など)。底部外面には回転ヘラ痕が見られる。240 は口縁部付近内面側に、一条の沈線が巡る。286・287 は段皿、294 は耳皿である。施釉はツケガケが主体で、口縁

部から胴部上半にかけてが中心である。289～297は底部外面に墨書・刻書が見られるものである。289は焼成前に、先細の工具により「Z」状に刻書されたものである。墨書は「吉」「山」と97B・98A SD01や98A SD02で出土したものと同様のものが見られるほか、「×」状の記号(290)や、不詳のもの(293)などもある。299・301・303・304・305～307・714は壺瓶類である。310・311は緑釉陶器である。ハケヌリによる施釉で、底部外面にも施されている。312は土師器小皿である。内外面ともに回転ナデもしくはケズリ調整が施されている。底部に糸切痕が残ることから、時期が下る可能性もある。314～319は土師器甕である。口縁部形態では「く」の字に若干立ち上がり気味のもの(313・314・318など)と、強く外反するもの(315・316など)とがある。外面の器面調整はハケが主体である。

これらの遺物の時期は多くは虎渓山1号窯式期かそれに併行する時期に属するものと考えられる。292・296・297・301などは光ヶ丘1号窯式期に属するなど、一部時期が古くなる遺物も含まれる可能性もある。

その他伊勢型鍋も出土している(676・677)。

c. 出土遺物(土製品)

フイゴの羽口(321・322)　器壁2cmほどの中空で筒状をなす。内面側は二次焼成によると思われる赤色化が見られる。表面側はユビによるナデもしくはオサエの痕が多く残る。滓の付着などは見られない。

なお、98A SD02からは、滓の可能性がある熱変成物も出土している。

管状土錘(324～335)　324・326・330以外は98A SD02から出土したものである。いずれも表面が摩滅しており、特に両端の孔部分が紐による摩滅が著しくみられる。表面にはユビオサエなどの調整痕が残されている。重量は324のみ10g以上とやや大型で、その他7g台と5g台とに分かれるようである。

その他　323は全面にナデもしくはユビオサエの見られる中実のものである。端部の一端が広がる。こちらの面を接合面とした、土師器甕の把手かもしれない。

d. 出土遺物(石器)

190は石錘である。敲打・研磨調整を基調とし、やや扁平な球の形状に中央部に抉りを入れる、「分銅形」に整形している。安山岩製。197は、98A P102の根石に利用されていたものである。平面部分の一部に摩滅痕が確認できる。手に持って使用する砥石というよりも、置いた状態で使用する「置き砥石」であったと考えられる。砂岩起源のホルンフェルス製。

第４節　中世・近世

a. 検出遺構

中世以降の遺構・遺物を一括して報告するが、確認された遺構の大多数は大窯期以前のものである。溝 14・土坑多数・ピット多数が検出された。ピットの多くは、古代同様に掘立柱建物の柱穴であると考えられる。その中で掘立柱建物の概要が示すことができるものが３軒である。遺構は 96 区以南の「沢部分」での確認が主体となる。自然流路間の狭い馬の背状の高台部ごとに遺構の展開が見られる。なお自然流路は、この時期も埋まりきることなく、水流があったものと考えられる。また、97B 区・98A 区以北の「緩やかな傾斜地」での遺構確認はごく少数にとどまっている。若干ではあるが遺物の散布が見られることから、当時期の遺構・遺物が後世の耕作などによって削平された可能性も考えられる。

ここでは、主要な遺構についてのみ個別に報告を行う。

97A SD01

検出時で、全長 21m、最大幅 50cm、深さ 8cm を測る。東端に接する 97A SK64 もこの溝の一部かもしれない。中央部より若干東側で鉤の手状に屈曲しており、クランク状に屈曲する西端は二股に分離している。屈曲部内部は、長軸 7m50cm、短軸 3m50cm ほどの方形状の空間になっており、ピットが若干検出されている。溝内からは、山茶碗類碗・小皿がややまとまって出土している。

出土遺物の状況から、この溝は北部系丸石３号窯式から南部系第６型式までの時期に属すると考えられる。

96 SD01、96 SB21

96 SD01 は検出時で、全長 55m、最大幅 2m、深さ 50cm を測る溝で、96・97B NR01 に沿って位置している。検出した東端では、鈍角状に屈曲する様子がみられる。96・97B NR01 に並行させた結果であるとも考えられるが、意図的にクランク状に屈曲させられた可能性もある。溝内からは、山茶碗類碗・小皿がまとまって出土している。碗の底部外面には墨書の見られるものがあり、これは器面内面には炭化物が付着している。

96 SB21 は、長軸 9m、短軸 6m50cm ほどの掘立柱建物で、３間×３間の総柱建物である。長軸は東西方向より約 15 度南東―北西方向に振る。主軸を若干ずらしながら、計３回ほど建てられている。

これらの時期は、遺物の出土状況などから、山茶碗第５型式に属すると考えられる。なお、96・97C NR01 上層からは、山茶碗類を中心とした同時期の遺物がまとまって出土している。水流などによる摩滅の程度は低く、底部外面に墨書があるものや、内外面に炭化物が付着しているものが多く見つかっている。これらの遺物の存在（恐らく廃棄によるものか）と 96 SD01 および 96 SB21 とは有機的関連があるものと考えられる。

98B SD01・02・03・04・06、98B SB22、98B SX01

98B SD01・02・03・04・06 は、自然流路間の狭い馬の背状の高台部に方形に区画する溝の一群である。SD01 は検出時で、全長 22m、最大幅 3m、深さ 20cm を測る溝で、北西方向から南

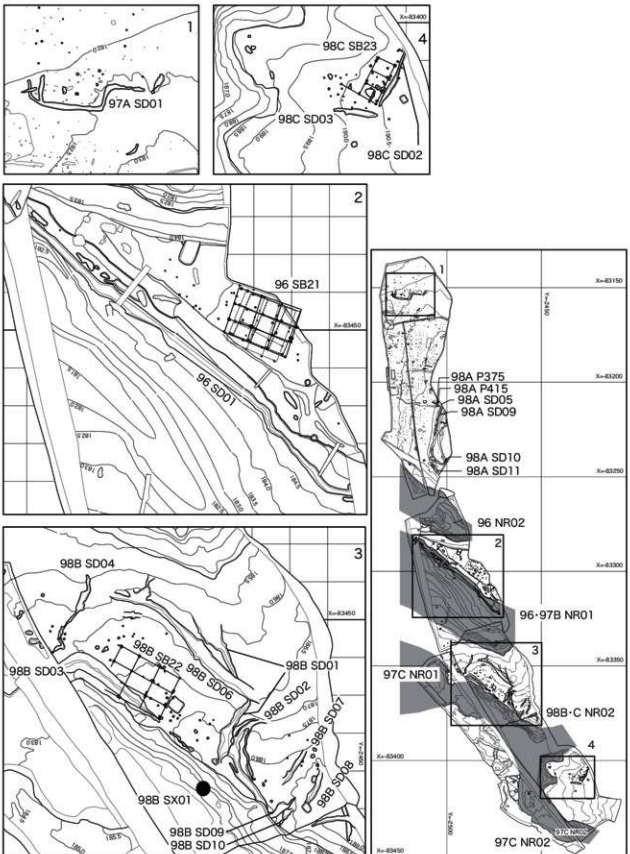


図71　中世・近世遺構配置図（全体図1：2,000、拡大図1：500）

西方向に直角に屈曲する。溝内からは底部外面に墨書があるものや、内外面に炭化物が付着している山茶碗類が多く出土した。SD02は全長13m、最大幅1m50cm、深さ35cmを測る溝で、北西側をコーナーとし屈曲する。98b SD09・10も同一の溝の可能性が高い。SD03は全長16m、最大幅2m、深さ110cmを測る溝で、断面形状がややV字状を呈するものである。98B・C NR02に沿って、南東側から南西側にかけて直角に屈曲している。SD06は全長24m、最大幅2m50cm、深さ10cmを測る溝で、北西端で等高線に沿って若干西向に振る。

96 SB22は、長軸9m、短軸6mほどの掘立柱建物で、3間×3間の総柱建物である。長軸は東西方向より約25度南東—北西方向に振る。柱穴の一部はSD03により消失しているものと考えられる。

溝の切り合い関係および平面的な位置関係より、SD01・SD04が対に、SD03・SD06が対に、さらにSD02はSD07・08・09・10とともに別の方形区画を形成する可能性がある。SD01・SD04がSD03・SD06よりも先行し、SB22はSD01・SD04に伴うものと考えられる。なお、98B・C NR02は水流もしくは小規模な地滑りなどにより、肩部分が若干崩壊したようで、SB22やSD02が一部消失している。その崩壊後、SB03が作られたようである。

これらの時期は、遺物の出土状況などから、山茶碗第6型式から7型式に属すると考えられる。なお、98B・C NR02でも96・97C NR01同様に、山茶碗類を中心とした同時期の遺物がまとまって出土している。底部外面に墨書があるものや、内外面に炭化物が付着しているものが多く見つかっており、SD01をはじめとするこれら遺構群と有機的関連があるものと考えられる。

また、98B・C NR02の傾斜部分では、頸部より上側を欠失した古瀬戸瓶子が横位の状態で出土した(98B SX01)。蔵骨器として使用されたものと考えられる。

98C SD02・03、98C SB23

SD02は検出時で、全長8m、最大幅60cm、深さ10cmを測り、北東から南西に伸びる溝である。SD03は全長6m、最大幅80cm、深さ10cmを測り、SD02に対して、やや鈍角気味に東西に伸びる溝である。

98C SB23は両軸とも5mほどの掘立柱建物である。現状で把握できるのは2間×3間の総柱建物であるが、SB23自体さらに北西側に展開するものと考えられ、96 SB21・98B SB22と同程度の大きさの建物になると想定される。長軸は東西方向より約20度南東—北西方向に振る。

これらの時期は、遺物の出土状況などから、山茶碗第6型式から7型式に属すると考えられる。

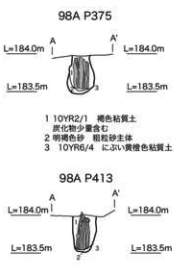


図72 98A P375・413断割りセクション(1:50)

b. 出土遺物 (陶器)

96 SD01 出土遺物 (336 ～ 362)

337 ～ 351・353 は南部系山茶碗類の碗である。口径 15 ～ 16cm ほど、器高 4 ～ 5cm ほどのもので、底部外面には回転糸切痕の上に高台が貼付けられている。高台全面に籾殻圧痕がみられる。350 は底部画面中央に「日」と墨書されたものであり、内面 (確認) には炭化物の付着も認められる。おおむね山茶碗第 5 型式に属すると考えられるが、353 のみ第 4 段階に属する可能性もある。352 は灰釉陶器 (百代寺窯式) もしくは山茶碗 (第 3 型式) である。354・355 は南部系山茶碗類の小皿で、354 が第 6 型式、355 が第 5 型式に属する。336・356 は北部系山茶碗類の碗で、357 は同小皿である。358 は古瀬戸花瓶で古瀬戸前期第 III 段階か、359 は同柄付片口で古瀬戸後期第 IV 段階ある。360 ～ 362 は羽釜である。いずれも底部付近が欠失しており全形は不詳であるが、いずれも口径 25cm 程度と均一であり、法量としてもほぼ均一なものと考えられる。常滑産か。

97A SD01 出土遺物 (363 ～ 374)

363 ～ 368・370 は北部系山茶碗類の碗である。口径 13 ～ 15cm、器高 5 ～ 6cm ほどのもので、底部外面には回転糸切痕の上に高台が貼付けられている。高台全面に籾殻圧痕がみられるばかりか、焼成時に重ねて接したと思われる底部内面にも籾殻圧痕がある。366 には炭化物の付着が確認できる。これらはほぼ丸石 3 号窯式と考えられる。369・371 は南部系山茶碗類の碗である。口径 15 ～ 16cm ほど、器高 4 ～ 5cm ほど、底部外面には回転糸切痕の上に高台が貼付けられ、高台全面に籾殻圧痕がみられる。第 6 型式に属する。372 は南部系山茶碗類の小皿で、第 6 型式である。373・374 は土師器小皿で、ロクロ整形のなされていないものである。

98B SD01 出土遺物 (375 ～ 427)

375 ～ 407 は南部系山茶碗類の碗である。口径 12 ～ 15cm、器高 4.5 ～ 5.5cm 程度、底部外面には回転糸切痕の上に高台が貼付けられ、高台全面に籾殻圧痕がみられる。376・377・379・383・385・388・390・392・396 に は内外面に炭化物の付着が見られる。375 のみ第 5 型式に属する可能性があるほかは、第 6 型式から第 7 型式に属するものと考えられる。408 ～ 418 は南部系山茶碗類の小皿である。418 には炭化物の付着が見られる。419 ～ 422 は北部系山茶碗類の碗である。おおむね明和窯式に属するものと思われるが、419 は窯洞窯式に属する可能性がある。423 は北部系山茶碗類の小皿である。424 は古瀬戸卸皿で古瀬戸前 II 期、425 は古瀬戸柄付片口で古瀬戸中期 II もしくは III 期、426 は古瀬戸水注で古瀬戸前 II 期、427 は常滑の大甕底部と考えられる。

その他出土陶器・土器

ここでは中世から戦国期にかけての遺物を中心にまとめて報告する。なお、一部近世の遺物も含まれている。

ア) 南部系山茶碗類 (428 ～ 550・576)

碗 (428 ～ 499・576)　428 ～ 472・479 ～ 498 は、底部外面に　糸切痕の上に貼付高台がみられるものである。高台には、籾殻圧痕が多くみられる。475 は貼付いていた高台が欠落したものである。435・468・470・475・481・

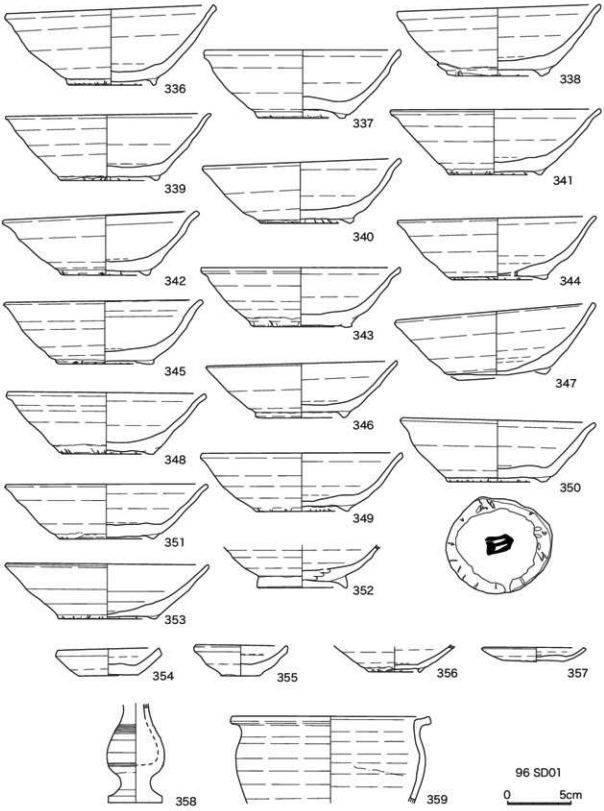


図73　中世以降の陶器類1（1：3）

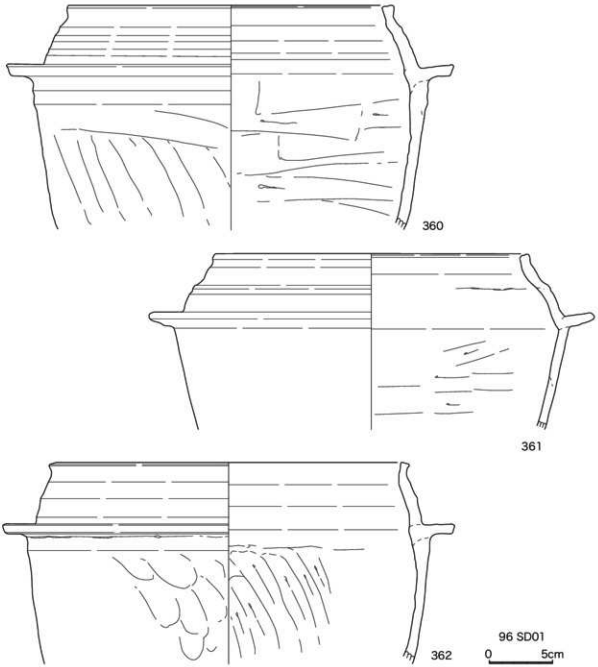


図74　中世以降の陶器類2(1：3)

482・486・490・493・494は内外面に炭化物の付着およびその痕跡が確認されるものである。これらは第5型式から第7型式に属し、439・447・576などは第5型式に属し、433・440などは第6型式に属すると考えられる。一方、473・474・476～478は貼付高台のみられないものである。473・474は第8型式に、476～478は第9型式に属する。496～498は底部外面に墨書のみられるものである。499は内傾する口縁を有する碗である。口縁部外面には細い沈線が一条巡る。消費遺跡での他の類例は管見に及ぶ限りみられないが、生産遺跡では最近調査された鳳山C窯跡で出土している(永井編2005)。第7型式のものと考えられる。

小皿(503～542)　器高の高低は若干あるものの、径は8～9cmほどに集約される。底部

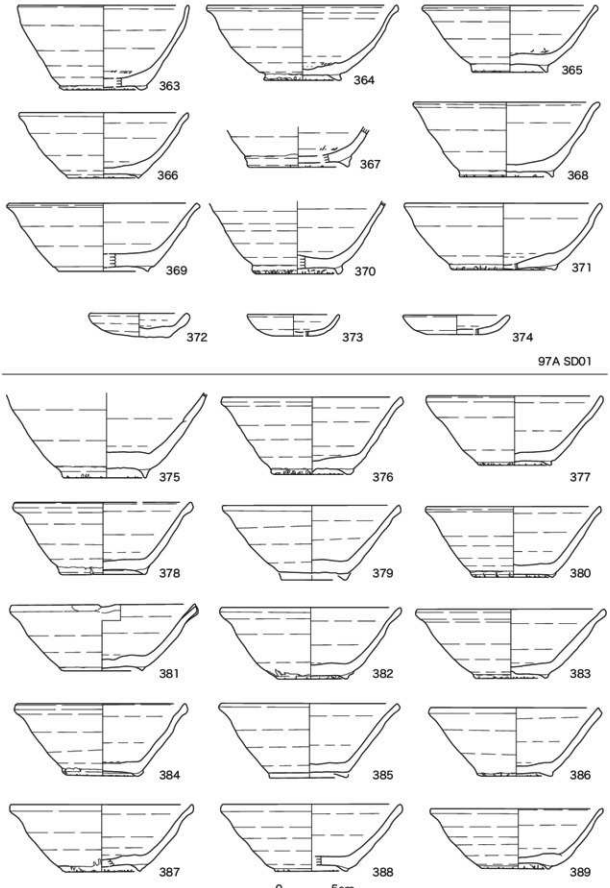


図75　中世以降の陶器類3(1：3)

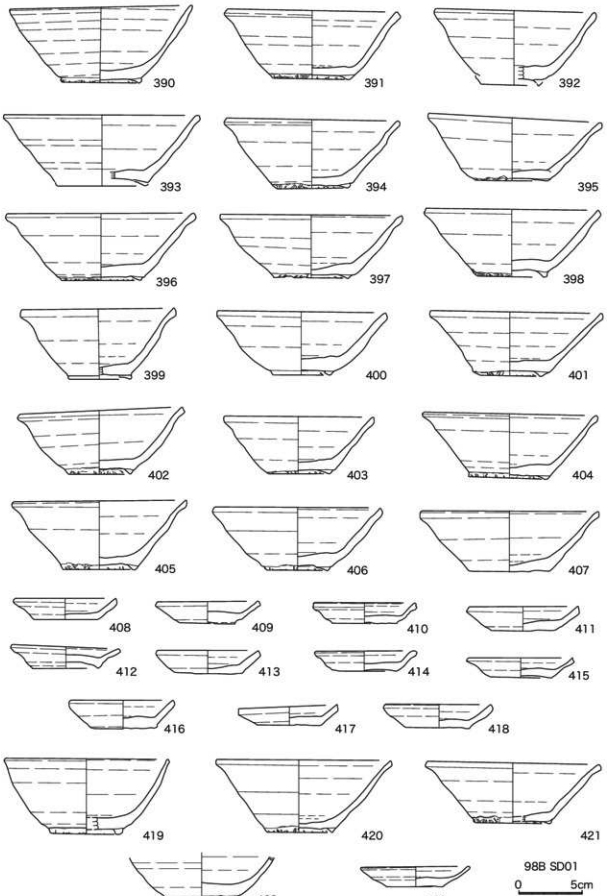


図76　中世以降の陶器類4(1：3)

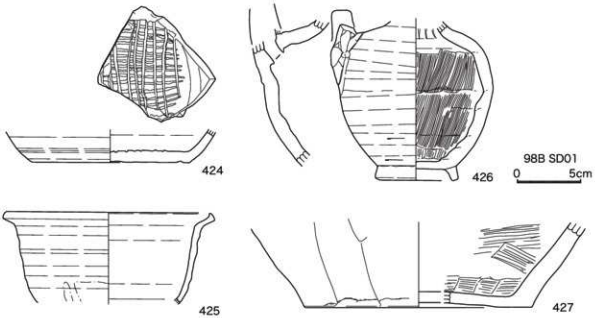


図 77　中世以降の陶器類 5（1：3）

外面には糸切痕が残る。元来の系譜である小碗の高台の残存形態が見られないことから、第 5 型式の新段階から第 9 型式までのものが含まれていると考えられる。

片口鉢 (543 ～ 546・548)　瀬戸産のものと常滑産のものが含まれている。543 は口縁部内面側に一条の沈線が巡るものである。543・544 は底部付近の内外面に横方向にヘラケズリ痕が見られる。544 は常滑産で、瀬戸の南部系山茶碗 6 型式併行か。545 は口縁端部上面に沈線が一条巡るものである。外面胴下半部には縦方向にヘラケズリ痕が残されている。瀬戸南部系山茶碗第 8 型式。546 は口縁部が受け口状になったものである。瀬戸南部系山茶碗第 10 型式。548 は底部内面に少なくとも 4 条の沈線がみられるものである。これも第 10 型式か。

入子 (549・550)　549 は花弁状のものである。底部外面は調整のためヘラケズリが行われている。

イ）北部系山茶碗類 (229・551 ～ 575・577 ～ 600)

碗 (229・551 ～ 580・591 ～ 595)　551 ～ 575 は底部外面に糸切痕の上に貼付高台がみられるものである。高台には籾殻圧痕がみられ、底部内面側にも若干見られるものが多い。551・557・564・575 が丸石 3 号窯式、552 ～ 556・558 ～ 561 が丸石 3 号窯式もしくは窯洞 1 号窯式か、563・591 が明和 1 号窯式、562・592・594 が大畑大洞 4 号窯式新段階、565 ～ 574 が大洞東 1 号窯式、578 ～ 580・595 が脇之島 3 号窯式、229・577 が生田 2 号窯式に属すると考えられる。

底部外面には刻書・墨書が施されているものもある (591 ～ 595)。591 は細い工具で焼成前に、格子目状の線刻が施されている。墨書では「＋」「上」などがある。

小　皿 (581 ～ 590・596 ～ 600)　582・583・590 は器壁が厚手で、器高が高くなるものである。581 は丸石 3 号窯式、582・590・597 は白土原 1 号窯式か。584 ～ 589 は器壁が薄手で、器高が低い一群である。586・588・596 が明和 1 号窯式、その他が大畑大洞 4 号窯式から生

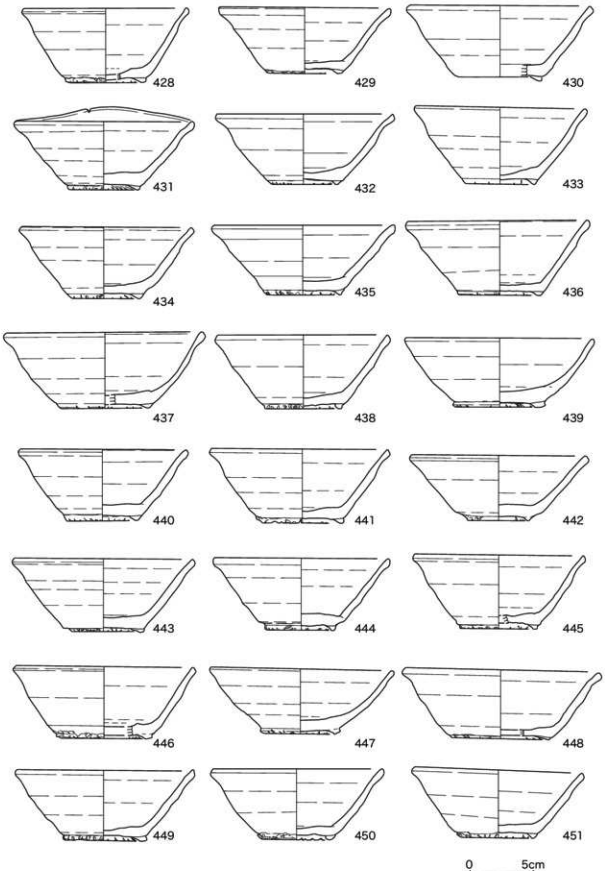


図78　中世以降の陶器類6(1：3)

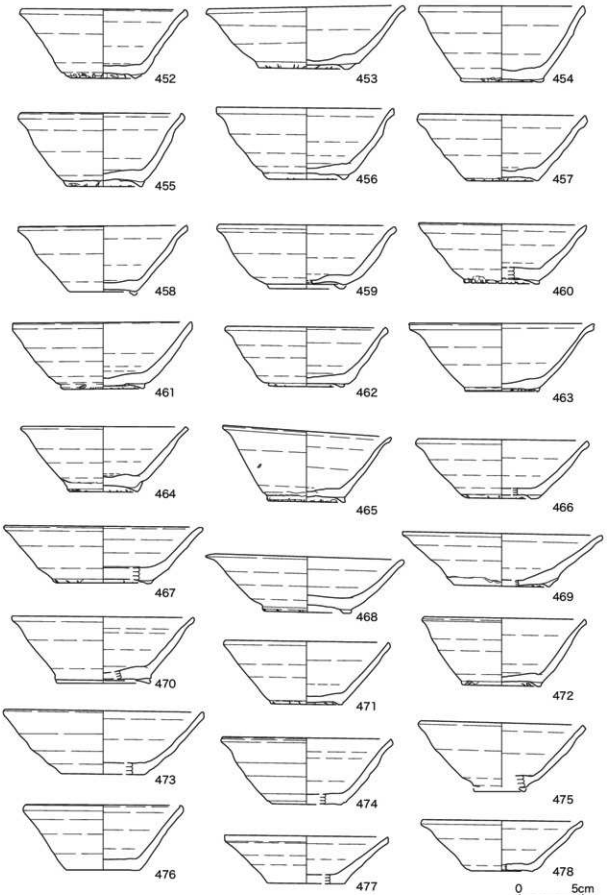


図 79　中世以降の陶器類 7（1：3）

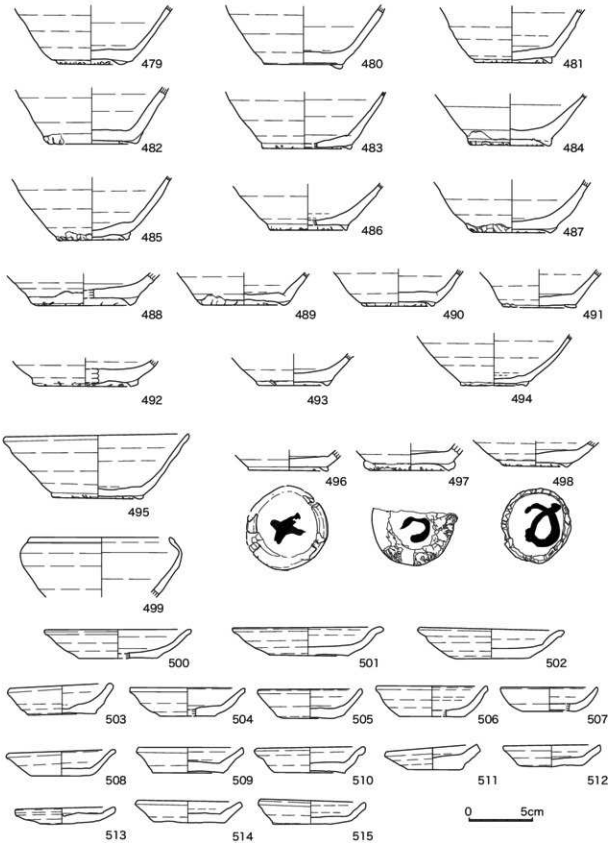


図80　中世以降の陶器類8(1：3)

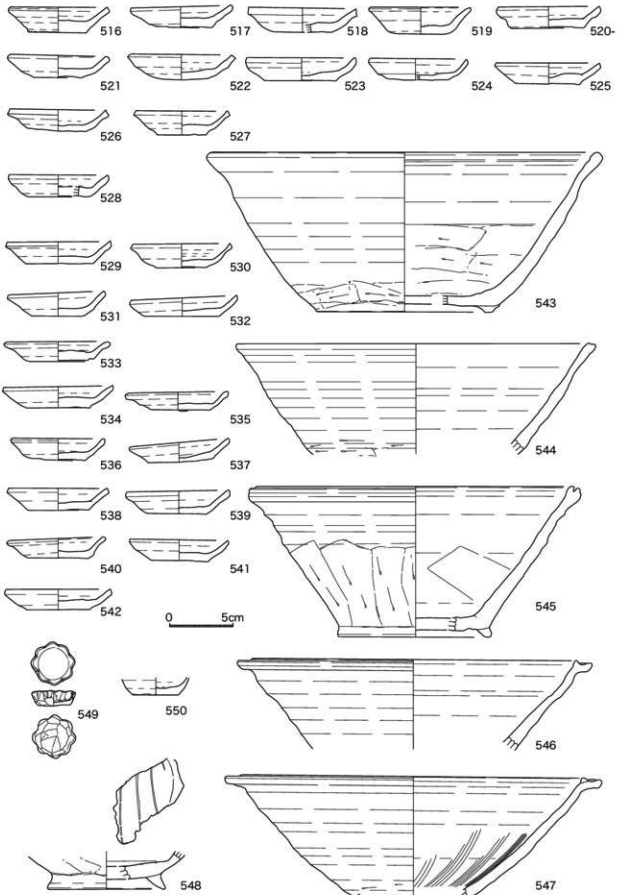


図81　中世以降の陶器類9(1：3)

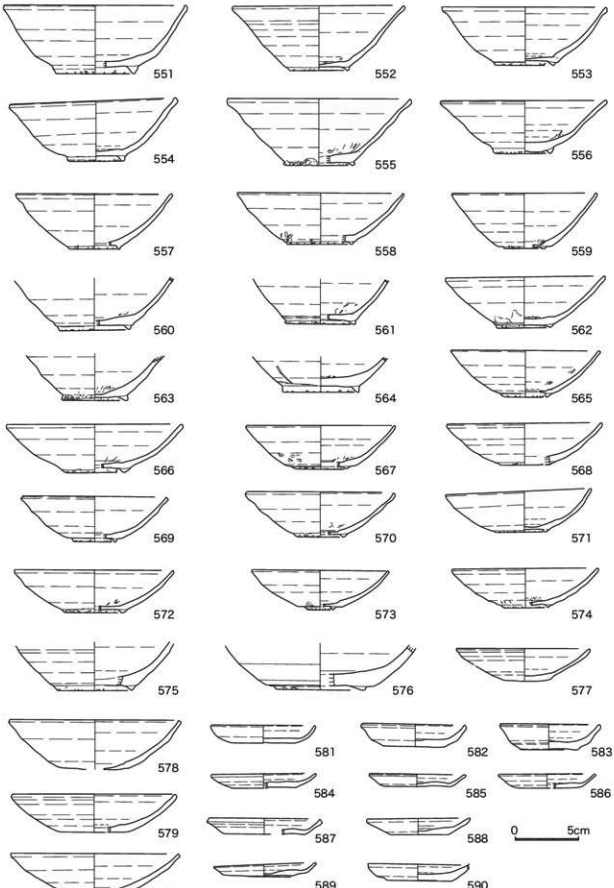


図82　中世以降の陶器類10(1：3)

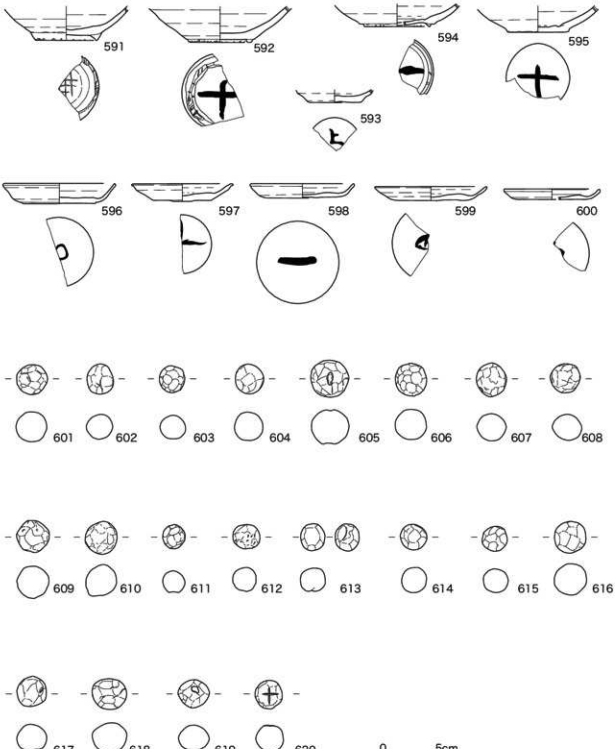


図83　中世以降の陶器類11(1：3)

田2号窯式に属すると考えられる。

596～600は底部外面に墨書が施されているもので、墨書には「○」「＋」「—」などがあるのは碗と同様である。

ウ)陶丸(601～620)

陶丸を一括する。径2～3cmほどで、全面にユビによるオサエやナデが見られる。粘土を丸めた時の接合痕が残されているものもある(613・

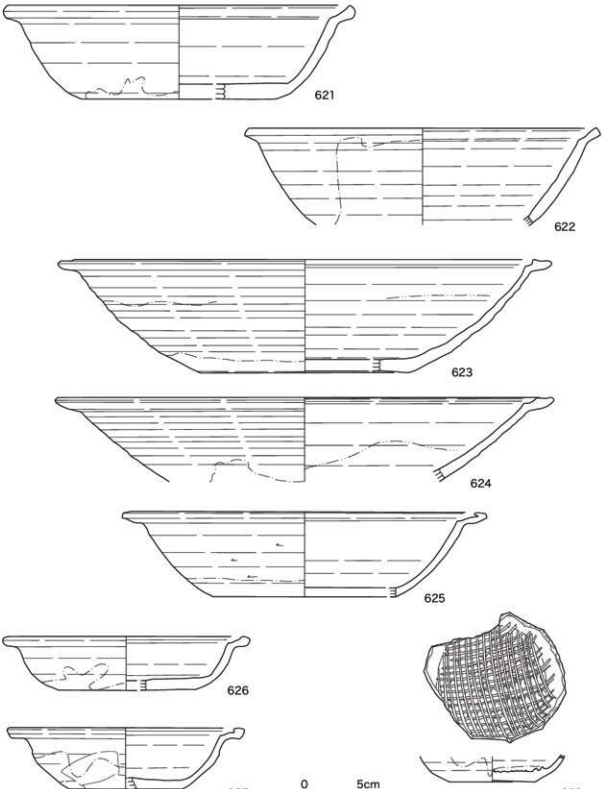


図84　中世以降の陶器類12(1：3)

618など)。620は「＋」字の細い線刻の見られるものである。

エ)施釉陶器(古瀬戸)

碗類　699は天目茶碗、701・727は端反碗である。すべて後Ⅳ期新と考えられる。

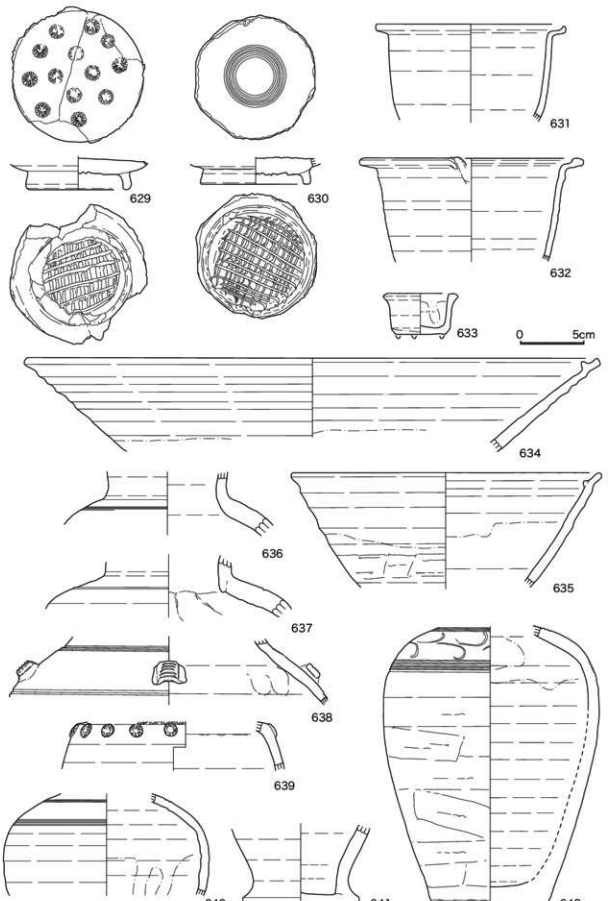


図 85　中世以降の陶器類 13(１：３)

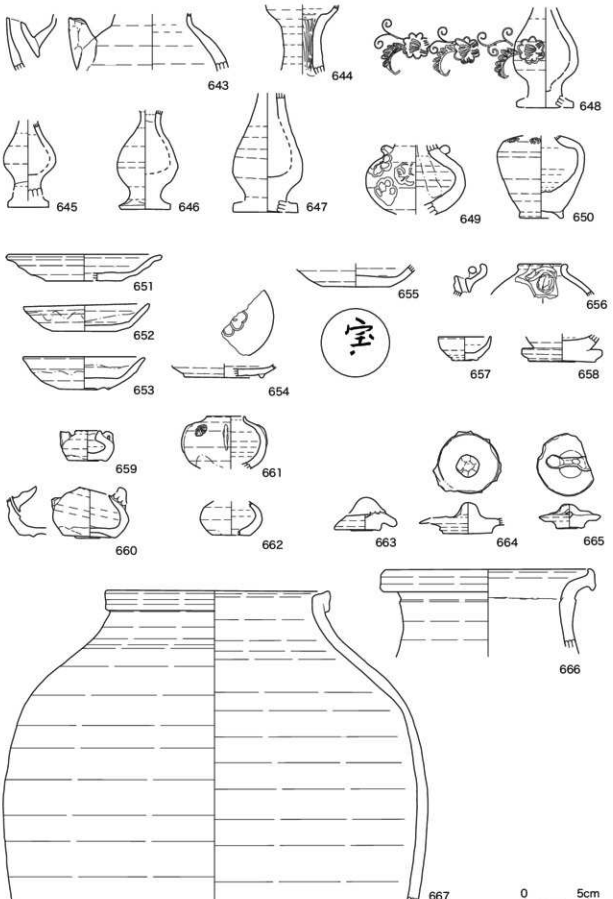


図86　中世以降の陶器類14(1：3)

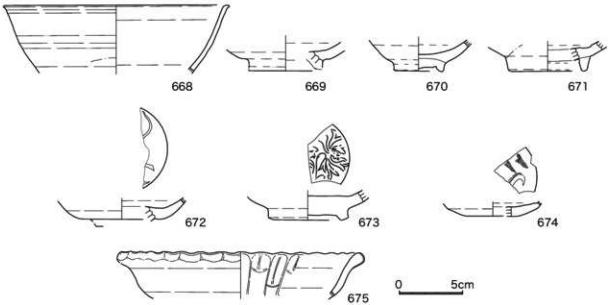


図87　中世以降の陶器類 15(1：3)

折縁深皿 (621～627)　径30～40cmほどのもの(621～625)と、径20cmほどのもの(626・627)とが見られる。器面調整は、外面下半が回転ヘラケズリ、上半が回転ナデ、底部外面は回転ヘラ調整である。施釉は口縁部側から内外面にかけてツケガケが行われている。623・624では、内面のみツケガケ前にハケヌリが施されている。621が中II期、622が中I期、623・624が後II期、625・627が中IV期、626が中III期と考えられる。

卸皿 (628)　口縁部側は欠失している。6本一単位の工具により格子目状に卸目が付けられている。施釉は口縁部側から内外面にかけてツケガケが行われている。古瀬戸後期のものか。

底卸目皿 (629・630)　底部のみの残存である。いずれも底部外面、貼付高台内に格子目状の卸目が付けられている。底部内面には、印花文(629)や同心円文様(630)が施されている。いずれも中I期。

柄付片口 (631・632)　内外面ともに回転ヘラケズリおよびナデにより、器壁が薄くかつ丁寧に仕上げられている。内外面ともに施釉が見られる。632は片口部分が若干残存している。631は中I期ないしは中II期、632は中IV期。

筒形香炉 (633)　径5cmほどの小型のものである。糸切痕の残る底部外面には脚の貼付け痕がある。後IV新期か。

卸目付大皿 (634・635)　ともに底部が欠失している。残存している部分では、内面に卸目は確認できない。口縁部内面に粘土を貼付けることにより、受け口状を呈する。施釉は口縁部側から内外面にかけてのツケガケである。後IV期。

壺瓶類1 (300・636・638～642)　四(三)耳壺・瓶子の類である。636・638は四(三)耳壺である。古瀬戸中期のものか。639は屈曲の強い肩部を中心にボタン状の貼付け文や鋸歯状の文様が施されている。中I期もしくは中II期。640～642は瓶子である。肩部には沈線文が横走する。640が後I期ないしは後II期、641は前II期ないしは前III期。642は98B SX01のもので、頸部が欠失している。肩部の横走する沈線間の文様は印花ではなく、先細の工具による施文である。

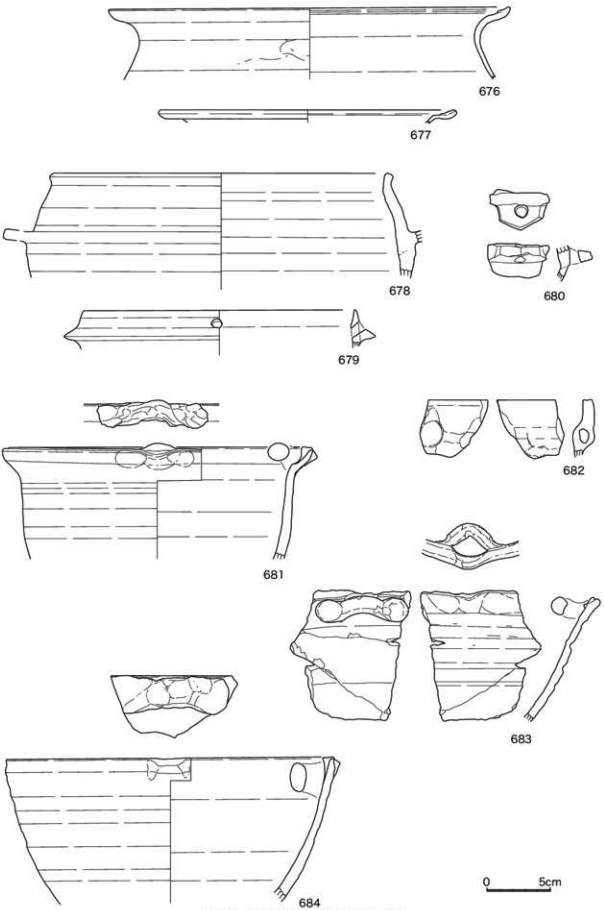


図88　中世以降の陶器類16(1：3)

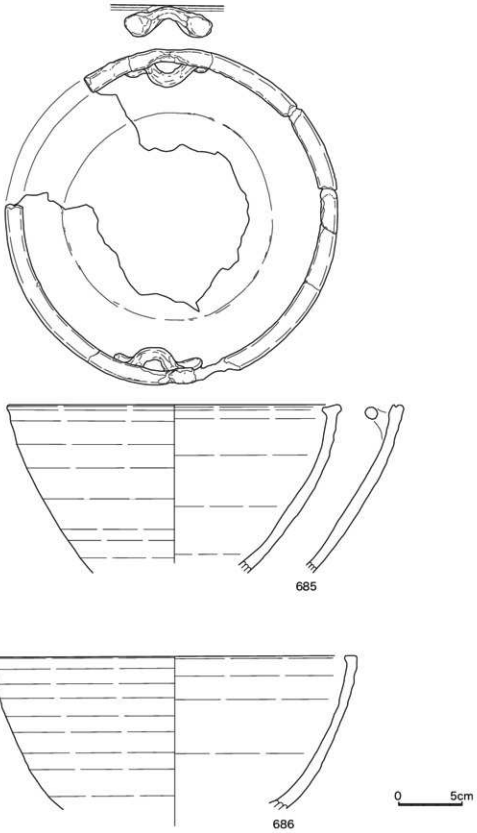


図 89　中世以降の陶器類 17(1 ： 3)

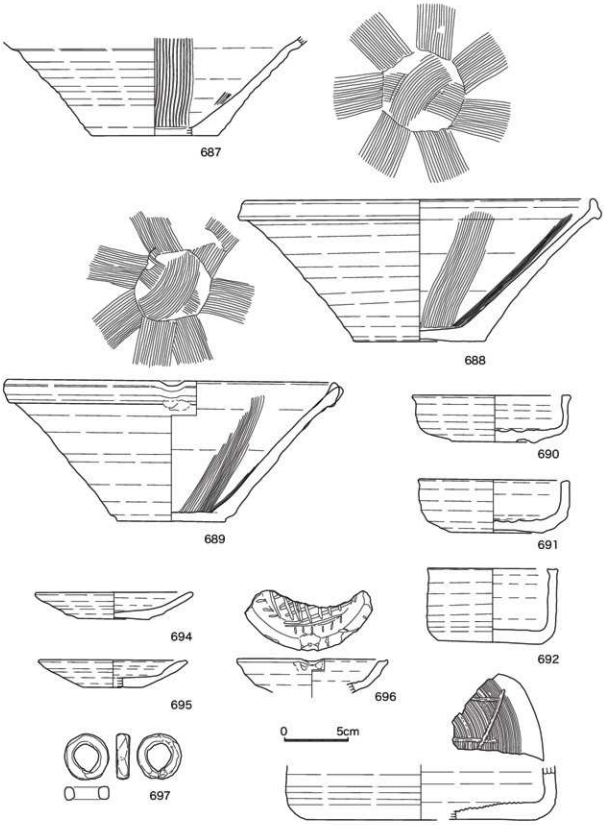


図90　中世以降の陶器類18(1：3)

中III期。

壺瓶類 2 (643 ～ 650・707・708・710・711)　水注・花瓶・小壺の類を集めた。643・644・656・708 は水注である。643 は古瀬戸後

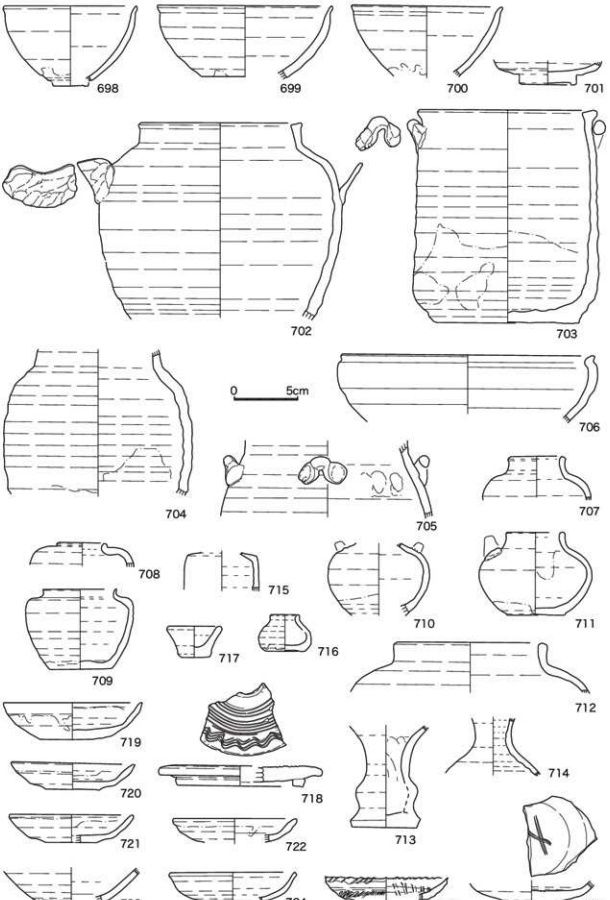


図91　中世以降の陶器類 19(1：3)

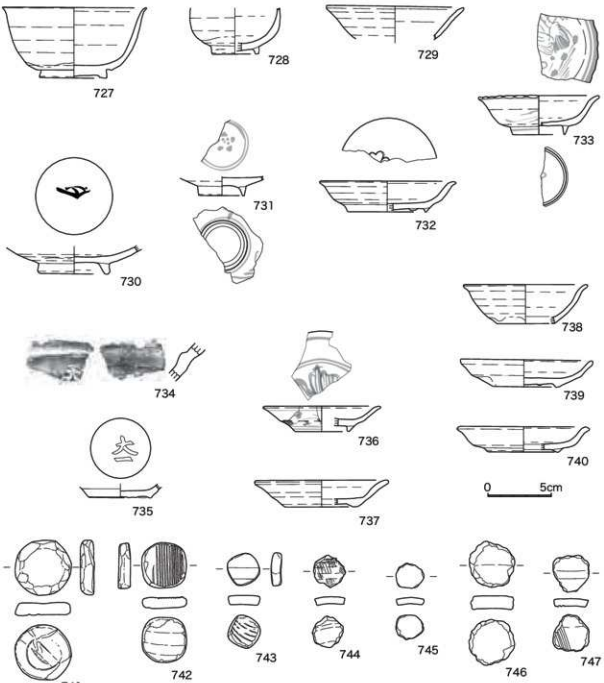


図92　中世以降の陶器類20(1：3)

期、644は前II期。656は耳付水注で、古瀬戸後期のものか。645～649は花瓶である。646・647は前II期。645は中I期。648・649は胴部に印花文が展開する。中I期もしくは中II期。707・708は耳付水注か小壺で、711は双耳小壺ある。これらは古瀬戸後IV期。

壺類3(702・704・705・712) 上記以外の大型の壺類で、すべて鉄釉が施してある。702は広口の壺の胴部に板状の粘土を貼付け「耳」状にしているものである。705はややナデ肩気味の壺で、2つ以上の耳が付く。すべて古瀬戸後IV期。

その他小型品など　650は壺瓶類で、肩部に印花文が展開する。前II期。652・653は緑釉小皿。後III期もしくは後IV期新。655は小皿

底部である。底部外面には「宝」字の墨書がみられる。後 II 期もしくは後 III 期。719 ～ 722 も緑釉小皿であるが、釉は鉄釉である。古瀬戸後 IV 期新。726 も緑釉小皿と考えられる。底部内面には半截竹管状工具による「×」印が見られる。後 IV 期新。725 も緑釉小皿の一種で、内外面に集中して卸目状の凹凸が付けられているものである。格子目状にはならず、同一方向に付けられている。釉は鉄釉である。後 IV 期新。738 は後 IV 期古。657 は小型の天目茶碗で、施釉はみられない。後 I 期もしくは後 II 期のもの。659 ～ 662・716 は水滴もしくは合子である。661 はボタン状の貼付けと垂下する貼付け隆起線が交互に展開する。659 は古瀬戸後期、660 は古瀬戸中 II 期、661 は古瀬戸中 I 期もしくは中 II 期。716 は外面に鉄釉が施されている。後 IV 期。663 ～ 665・718 は蓋である。718 は大型の蓋で、上面には同心円上の沈線文様が展開する。上面には鉄釉が施されている。後 IV 期。その他のものも古瀬戸後期のものである。

擂鉢 (547)　口縁端部は屈曲させた上に粘土を貼付けることにより、受け口状を形成している。外内面に施釉の範囲は確認できなかった。後 II 期。

内耳鍋 (681・683)　681 は胴部立ち上がりが直立気味で、口縁付近で一旦クランク状に広がる。後 IV 期古。683 は胴部立ち上がりが斜めに直線的なものである。後 IV 期新。

手付鍋 (706)　丸みのある鉢状の器形を有するもので、内外面に施釉 (鉄釉) されている。古瀬戸後期のものか。

その他 679・682 は土師質の鍋類である。

オ) 施釉陶器 (古瀬戸末～大窯)

天目茶碗 (698・700)　698 が大窯 IV 期、700 が大窯 I 期。

花瓶 (713)　胴部と脚部とを一体化して作られている。外面全体に錆釉が見られる。大窯 II もしくは III 期。

はさみ皿 (500 ～ 502・651・694・695・739)　立ち上がりが直線的な小皿で、底部外面には糸切痕を残し、施釉の見られないものである。古瀬戸後 IV 期から大窯期にかけてである。

卸小皿 (696)　推定口径 10cm ほどの小皿で、器壁が厚く、一端に片口を有する。内面には 6 本一単位の格子目状の卸目が付けられている。大窯 I 期。

その他小皿　737 は稜皿、732・740 は端反皿である。654・732 は底面に花弁か印花されており、735 は底面に「大」が押圧されている。大窯 I 期あるいは II 期のものである。

その他小物類　658 は仏供、709 は小壺、715 は茶入である。大窯 I 期のものか。

大甕 (667)　口縁側にかけてすぼまる形態を有する。口縁部には粘土の貼付けが 1 条見られる。

内耳鍋 (684 ～ 686)　鉢状の形態をなすもので、内外面に多量の炭化物の付着が見られる。古瀬戸後 IV 期から大窯のものである。

擂鉢 (687 ～ 689)　胴部内面および底部内面に 10 本一単位の擂り目が入れられている。底部外面を除く全面に錆釉が施されている。687 が古瀬戸後 IV 期、688 が大窯 I 期後半、689 が大窯 II 期前半か。

窯道具　690 ～ 693 は匣鉢である。693 は底部内面が同心円状に凹凸がある上に、数条の沈線が見られる。697 は輪トチンである。すべて大窯期か。

カ) 中世陶器 (常滑)

637 は壺瓶類である。頸部には一条の沈線が横走する。666 は大甕、678 は羽釜である。678 は 360 ～ 362 と同種のものと考えられる。

キ) 輸入陶磁器 (688 ～ 675・729・733・736)

96 区以南の「谷地形」内の自然流路内や、97A 区からは輸入陶磁器が散発的に出土している。小破片のものが多く、図化しえたものはすべて掲載した。

668 は白磁碗である。他の青磁に比べても非常に薄手であることが特徴的である。12 世紀代のものか。669 ～ 673・675 は龍泉窯系青磁と考えられる。672・673 は浅い沈線文様が施されている。675 は口縁部が波状を呈し、内面には蓮弁文が見られるものである。これらは概ね 13 世紀から 14 世紀ごろのものと考えられる。674 は同安窯系青磁の碗。底部内面に 13 世紀前半期のものか。

733・736 は染付けの見られる小皿である。733 は口縁が小波状を呈し、底部内面のみならず外面にも染付けが施されている。736 は内外面ともに染付けが施されている。大窯期に併行するものか。

ク) 近世陶器 (717・723・724・728・730・731)

近世陶器の若干出土している。近世後期のものが中心である。中には、730・731 のように染付けが施されているものも見られる。

ケ) 加工円盤

中世から近世期の加工円盤を集めた。741 は古瀬戸後 I 期の天目茶碗底部片を利用している。敲打調整による稜が残る。742 は大窯期の擂鉢胴部片で、縁辺は研磨もしくは摩滅により陵が発達している。743 は江戸前期黄瀬戸碗片で、縁辺は研磨もしくは摩滅により平滑になっている。744 ～ 747 は縁辺部が敲打調整のままのもので、古瀬戸後 IV 期から近世陶器片を利用したものである。

c. 出土遺物 (石器)(写真図版 13)

191 ～ 196 は砥石である。191・192・194 は板状の形態を呈し、平面部に各方向に研痕が残る。192・195 は柱状の形態を呈し、192 は各面に研痕が残る。196 はやや大型の剥片状を呈するもので、片面のみに研痕が残る。すべて中世から大窯期のものと考えられ、各石材は 191 ～ 193 が凝灰岩、194 が砂岩、195 が泥岩起源のホルンフェルス、196 が泥質凝灰岩である。

d. 出土遺物 (木器)(写真図版 14)

自然流路内からは若干の木製品が出土している。1 は下駄で、歯は一枚板から作り出している。2・3 は底板と考えられる。4・5 は板材を加工したものである。6 は断面形状長方形を呈するやや棒状の形態を有するものである。全体を削り薄くすることにより、一端のみを凸部分にしている。7 ～ 9 は先端部のみを加工した、細身の杭と考えられる。これらの時期はすべて中世から大窯期のものと考えられる。

第５章　自然科学的分析

第１節　地層の堆積年代

鬼頭　剛（愛知県埋蔵文化財センター）
古澤　明（有限会社　古澤地質調査事務所）

１．はじめに

瀬戸市上品野町の上品野遺跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た．その層序解析，テフラ分析，放射性炭素年代測定から新たな知見が得られたので報告する．

２．試料および分析方法

上品野遺跡の地下層序解析のため，調査区全体の６地点において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し，層序断面を露出させ，層序断面図の作成と試料採取を行なった．層序断面図の作成にあたり，層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した．層序断面からはテフラ分析や放射性炭素年代測定用試料を採取した．テフラ試料の採取は古澤が，他は鬼頭が行なった．

テフラ分析の試料は洗浄・篩別し，極細粒砂サイズ（1/8 ～ 1/16）に粒度調整し，この粒度調整試料中の火山ガラスおよび自形で新鮮な角閃石や斜方輝石の含有率を測定した．粒子組成の把握には通常の 200 粒子の観察とともに，微量含まれる特徴的なテフラ起源鉱物を識別するため，1000 粒子中のテフラ起源鉱物含有量も把握した．屈折率の測定には液浸の温度を直接測定して屈折率を求める温度変化型測定装置 MAIOT（古澤，1995）を使用した．測定精度は火山ガラスで± 0.0001，斜方輝石および角閃石で± 0.0002 程度である．分析は古澤が行なった．

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった．加速器質量分析法は 125 μ m の篩により湿式篩別を行ない，篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した．石墨（グラファイト）に調整後，加速器質量分析計にて測定した．測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後，補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した．^{14}C 年代値の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した．^{14}C 年代の暦年代への較正には CALIB4.3 を使用した．測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した．

３．分析結果

上品野遺跡の深掘層序

上品野遺跡の調査区全体では６地点において層序断面の観察を行なっているが，それらのうち主要な３地点（図 93）について地点ごとに述べる．

地点１（97D 区）では西壁断面中央部において，現在の地表面（標高 182.82m）から深度約 0.8m の層序断面を得た（図 94）．下位層より，標高 181.95 ～ 182.15m までは明黄褐色の粘土層からなる．塊状で固結度が高く，全体に生物攪乱の影響がつよく，堆積構造はみられない．本層から石器が出土する．標高 182.15 ～ 182.32m も明黄褐色の粘土層である．塊状で固

結度が高い．本層からも石器が出土する．標高182.32～182.53mはにぶい褐色を呈する粘土層からなる．本層も下位でみられる堆積物と同じように，塊状かつ固結度が高く，堆積構造は認められない．本層からも石器が出土する．標高182.53～182.63mは灰黄褐色の粘土層である．褐色粘土のブロックが分散する．上位層に比べて粗粒砂サイズの砂粒子を含む割合が高い．標高182.63～182.82mは褐灰色の粘土層からなる．固結度はやや高く，粗粒砂サイズの砂粒子を含む．それぞれの地層は層序の観察結果と考古学的な発掘所見を基に，次のように便宜的に地層名を付けた．標高181.95～182.15mをPre石器出土層準（段丘堆積物），標高182.15～182.32mを石器出土層準（下部ローム層），標高182.32～182.53mをPost石器出土層準（上部ローム層），標高182.53～182.63mを旧表土，標高182.63～182.82mを灰色耕作土とした．

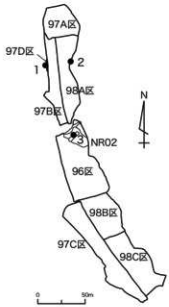


図93　分析試料採取地点図

地点2(98A区)では東壁面において，地表面(標高184.10m）から深度約1mの層序断面を得た（図95）．下位層より標高183.07～183.17mは明黄褐色を呈する粘土層である．標高183.17～183.50mは明黄褐色を呈する粘土層である．標高183.50～183.70mはにぶい黄褐色を呈する粘土層からなる．標高183.70～183.85mは灰黄褐色を呈する粘土層である．炭化物を含む．標高183.85～183.95mは灰色の粘土層からなる．標高183.95～184.10mは灰色の粘土層である．上記の地層のうち，標高183.07～183.70mまでは旧石器が出土する．地層の観察結果と考古学的な発掘所見を基に地層名を付けた．下位層より標高183.07～183.17mを段丘堆積物，標高183.17～183.50mをローム質段丘堆積物，標高183.50～183.70mをにぶい淡褐色ローム層，標高183.70～183.85mを旧表土，標高183.85～183.95mを灰色耕作土（下

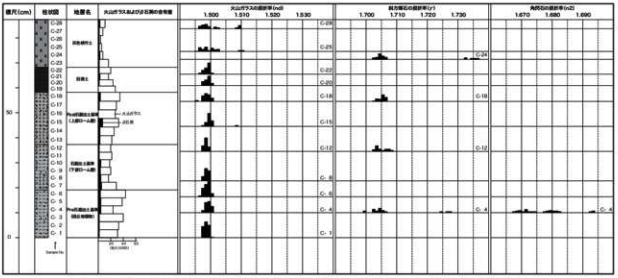


図94　地点1(97D区）におけるテフラ分析結果　柱状図トップの標高は182.82m

位層との漸移部)，標高 183.95 ～ 184.10m を灰色耕作土とした．

地点 3（96 区）では埋積谷 NR02 の層序確認のために掘り残されたベルト中央部分においてベルト表面（標高 181.61m）から深度約 2m の層序断面を得た（図 96）．下位層より，標高 179.50 ～ 179.86m は黒褐色を呈する腐植層と極粗粒砂層との互層からなり，まれに中礫サイズの礫が含まれる．標高 179.86 ～ 179.96m は褐色の砂混じり腐植層である．標高 179.96 ～ 180.03m は黒褐色を呈する砂混じり腐植層である．標高 180.03 ～ 180.15m は黒褐色の腐植層と極粗粒砂層との互層からなる．標高 180.15 ～ 180.38m は黒褐色の腐植層である．標高 180.38 ～ 180.44m は黒褐色腐植層からなる．標高 180.44 ～ 180.47m は黒褐色腐植である．標高 180.47 ～ 180.50m は灰白色を呈するテフラ層である．標高 180.50 ～ 180.70m は黒褐色腐植である．標高 180.70 ～ 180.81m は黒褐色腐植である．標高 180.81 ～ 180.85m は黒褐色腐植層であるが，極粗粒砂サイズの砂粒子を含む．標高 180.85 ～ 180.91m は黒褐色腐植層である．標高 180.91 ～ 180.95m は黒褐色腐植層である．標高 180.95 ～ 180.99m は黒褐色腐植層からなる．標高 180.99 ～ 181.11m は黒褐色腐植層である．標高 181.11 ～ 181.41m は黒褐色腐植層からなるが，下部（標高 181.11 ～ 181.21m）

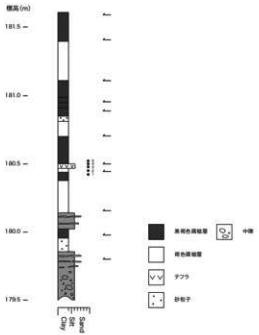


図 96　地点 3(96 区 NR02) における層序
矢印は放射性炭素年代測定の，黒丸はテフラ分析の試料採取層準を示す

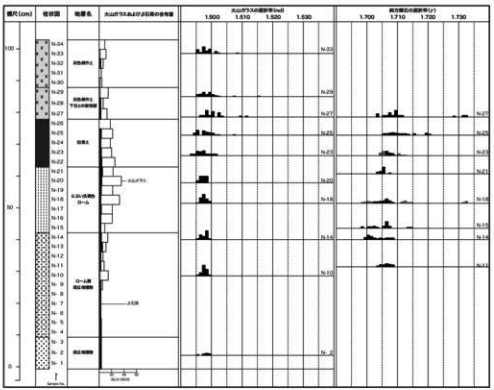


図 95　地点 2(98A 区) におけるテフラ分析結果 柱状図トップの標高は 184.10m

ではより大きな植物片を含むことで上部と区別できる．標高 181.41 ～ 181.61m は黒褐色の腐植層からなる．

テフラ分析

96 区・97D 区・98A 区の 3 地点で試料を採取した．地点ごとに分析結果を述べる．

地点 1（97D 区）では下位から上位へ約 3cm 刻みに 28 試料（C 試料）を採取した（図 94）．火山ガラスおよびβ石英の含有量は，段丘堆積物（標高 181.95 ～ 182.15m）と上部および下部ローム層（標高 182.15 ～ 182.53m）内では有為な差がみられない．ただし，灰色耕作土層（標高 182.63 ～ 182.82m）との間には大きな差がみられ，ローム層に比べて明らかにガラスの含有量が低い．

火山ガラスの形態はローム層と旧表土層（標高 182.53 ～ 182.63m）とでは異なる．発泡の違いもあるが，同じバブルウォールタイプでも表面の溶蝕の程度が異なる．明らかにローム層に含まれるものは溶蝕が進んでいる．β石英にはガラスは付着していない．ただし，円磨されているものもみられない．斜方輝石は各層準にごくわずかに含まれる．その割合は 10000 粒子に 1 粒子混入する程度である．風化が著しく，形態的な特徴を詳細に把握することはできないが，大山倉吉（DKP）テフラや大山生竹（DNP）などの大山中・下部火山灰層に特徴的な形態に類似するようにもみえる．

屈折率に関して，火山ガラスの屈折率は段丘堆積物から旧表土までほとんど変化しない．値は 1.497-1.501 の範囲に集中する．いっぽう，最上部の灰色耕作土層のそれは下位の層準と異なり，1.495-1.503 および 1.508-1.511 にモードがみられる．斜方輝石の屈折率も，旧表土以下の層準とこれより上位とで異なる．Pre 石器出土層準（段丘堆積物），石器出土層準と Post 石器出土層準からなるローム層および旧表土は 1.699-1.708 にモードがみられる．いっぽう，灰色耕作土は 1.732-1.736 と非常に高い値のものを含む．角閃石の屈折率は 1.688-1.682 にモードがみられ，1.692-1.694 を示すものを少量含む．

地点 2（98A 区）では下位から上位へ約 3cm 刻みに 34 試料（N 試料）を採取した（図 95）．段丘堆積物（標高 183.07 ～ 183.17m）およびローム層（標高 183.50 ～ 183.70m）からは 1% 程度のβ石英が産出する．β石英の含有量は段丘堆積物およびローム層で有為な差はない．β石英にはガラスは付着しない．ただし，円磨されているものもみられない．いっぽう，ローム層からはバブルウォールタイプの火山ガラスがやや目立って産出する．ローム質段丘堆積物（標高 183.17 ～ 183.50m）にも少量の火山ガラスが産出する．火山ガラスの含有量はローム層とこれより下位の段丘堆積物とで大きく異なる．段丘堆積物にはガラスがほとんどみられないのに対し，ローム層には少量のガラスが含まれている．火山ガラスの形態はローム層内では類似し，これより上位の旧表土ではローム層内に含まれるガラスに加え，低発泡なものやパミスタイプのものが含まれる．斜方輝石も各層準にごくわずか（0.1% 以下）含まれる．風化が著しいため，ガラスの付着の有無や形態的特徴は識別できない．緑色普通角閃石は斜方輝石よりやや多く含まれる．周辺に花こう岩類が露出していることから，その多くは基盤岩からの風化粒子の再堆積粒子と考えられる．

各鉱物の屈折率について，火山ガラスの屈折率は段丘堆積物からローム層までほとんど変化し

ない．値は 1.497-1.501 の範囲に集中する．いっぽう，これより上位の旧表土から灰色耕作土層のそれは，下位の層準と異なる．1.495-1.504 および 1.508-1.516 付近に値が分布する．斜方輝石の屈折率はローム質段丘堆積物，ローム層および旧表土それぞれで値が異なる．ローム質段丘堆積物は 1.704-1.709 に，ローム層は 1.699-1.704 と 1.704-1.709 に，旧表土および耕作土は 1.704-1.713 にモードがそれぞれみられる．なお，耕作土の最下部には 1.728-1.733 と非常に高い値のものが少量含まれる．ローム層最上部からも類似した値のものが重液分離で濃集したものにごくわずか含まれる．

地点 3（96 区）の埋積谷（NR02）のトレンチ断面において，肉眼観察で識別できるテフラ層およびその直上・直下を含め計 5 試料を採取した（図 96）．分析結果を表 5 に示す．極細粒砂サイズの粒子はテフラ層である No.3（標高 180.48m）試料に多く含まれるが，そのほかの試料ではほとんどは植物繊維であった．各試料の詳細を試料番号ごとに記す．No. 1（標高 180.42m）に含まれる極細粒砂サイズの粒子のほとんどは長石・石英などの岩屑起源粒子である．バブルウォールタイプおよびパミスタイプの火山ガラスが 1% 程度含まれる．火山ガラスの屈折率はバブルウォールタイプのものが 1.495-1.500 および 1.508-1.510，パミスタイプのものが 1.500 ～ 1.504 である．バブルウォールタイプで屈折率が 1.495-1.500 のものおよびパミスタイプのものを主体とする．No.2（標高 180.45m）に含まれる極細粒砂サイズのほとんどは火山ガラスである．パミスタイプのガラスが最も多く，全体の 75% 程度を占める．有色鉱物としては緑色普通角閃石および斜方石が含まれる．火山ガラスの屈折率は 1.4999-1.5026 である．No.3（標高 180.48m）に含まれる極細粒砂サイズの粒子のほとんどは火山ガラスである．パミスタイプのガラスがもっとも多く，全体の 80% 程度を占める．有色鉱物としては緑色普通角閃石および斜方輝石が含まれる．火山ガラスの屈折率は 1.4988-1.5027 である．斜方輝石の屈折率は 1.703-1.709（モード 1.705-1.709）である．角閃石の屈折率は 1.670-1.680 である．極細粒砂サイズの粒子が非常に多く，このサイズの粒子のガラス，斜方輝石および角閃石の屈折率がまとまることから，本試料はテフラ純層と考えられる．No.4（標高 180.51m）に含まれる極細粒砂サイズの粒子もほとんどは火山ガラスである．パミスタイプのガラスが最も多く，全体の 70% 程度を占める．有色鉱物としては緑色普通角閃石および斜方輝石を含む．火山ガラスの屈折率は 1.5002-1.5031 である．No.5（標高 180.53m）に含まれる極細粒砂サイズの粒子のほとんどは火山ガラスである．パミスタイプのガラスが最も多く，全体の 68% を占める．有色鉱物としては緑色普通角閃石および斜方輝石を含む．火山ガラスの屈折率は 1.4998-1.5030 である．

表 5　地点 3(96 区) の埋積谷 (NR02) におけるテフラ鉱物組成

Sample No.	Volcanic Glass			P.Q.	Heavy Mineral			Volcanic Rock	Rock	Total
	Bw	Pm	O		GHo	Opg				
1	2	0	0	146	0	0	0	0	52	200
2	7	151	10	16	1	2	3	10	200	
3	5	159	6	23	2	0	0	5	200	
4	4	140	10	35	1	0	3	7	200	
5	5	136	7	36	1	0	9	6	200	

Volcanic Glass: 火山ガラス, Bw:バブルウォール型, Pm: おそらく大きな衝撃のため泡の接合部がみられず，平板ないしはゆるく湾曲した扁平型, O: 発泡跡のみられないその他の型, P.L:長石, Q: 石英, Heavy Mineral:重鉱物, GHo:緑色普通角閃石, Opg:不透明鉱物, Volcanic Rock :火山礫片, Rock :岩片

放射性炭素年代測定

地点3(96区)で確認された埋積谷(NR02)の断面から11試料の放射性炭素年代値を得た(表6)．最下位層にあたる腐植層と極粗粒砂層との互層(標高179.50～179.86m)の上部(標高179.81m)で採取した植物片は3635 cal yrs BP(PLD-3221)であった．テフラ層(標高180.47～180.50m)の直下(標高180.45m)から採取したピートは2945 cal yrs BP(PLD-3218)，直上(標高180.51m)で採取したピートは3155, 3140, 3130, 3100, 3090, 3080 cal yrs BP(PLD-3217)の数値年代であった．最も上位でみられた黒褐色腐植層(標高181.41～181.61m)の最上部(標高180.60m)から採取したピートは2115, 2075, 2070 cal yrs BP(PLD-3211)を示した．埋積谷NR02の堆積物からはおよそ3600年前から2000年前までの数値年代が得られた．

表6　地点3(96区)の埋積谷(NR02)における放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	暦年代較正値 (1σ, BC/AD)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	1σ暦年代範囲 (BC/AD, probability)	Lab code No.(method)
179.81	細混じり粗粗粒砂層と腐植層の互層	植物片	3395±30	-28.7	3635	BC1685	3690-3655(47.7%) 3645-3630(21.6%) 3600-3585(16.5%) 3620-3610(14.1%)	BC1740-1705(47.7%) BC1695-1680(21.6%) BC1650-1635(16.5%) BC1670-1660(14.1%)	PLD-3221(AMS)
180.00	砂混じり黒褐色腐植層	木片	3115±25	-30.3	3355	BC1405	3375-3330(76.2%) 3285-3270(23.8%)	BC1415-1380(64.2%) BC1335-1320(23.8%) BC1425-1420(12.0%)	PLD-3220(AMS)
180.16	砂混じり褐色腐植層	木片	3130±30	-25.8	3360	BC1410	3380-3335(87.8%) 3280-3270(12.2%)	BC1430-1390(87.8%) BC1330-1320(12.2%)	PLD-3219(AMS)
180.45	褐色腐植層	ピート	2835±25	-30.4	2945	BC1000	2960-2920(58.2%) 2910-2875(41.8%)	BC1010-970(58.2%) BC960-930(41.8%)	PLD-3218(AMS)
180.51	黒褐色腐植層	ピート	2945±30	-31.2	3155, 3140, 3130, 3100, 3090, 3080	BC1205, 1190, 1180, 1150, 1145, 1130, BC1000	3160-3060(81.7%) 3205-3190(11.4%)	BC1215-1115(81.7%) BC1255-1240(11.4%)	PLD-3217(AMS)
180.71	褐色腐植層	ピート	2835±25	-29.7	2945	BC1000	2955-2920(56.3%) 2910-2880(43.7%)	BC1005-970(56.3%) BC960-930(43.7%)	PLD-3216(AMS)
180.89	黒褐色腐植層	ピート	2445±25	-28.4	2465, 2405, 2385	BC520, 455, 435	2490-2430(37.0%) 2420-2360(33.9%) 2705-2665(23.5%)	BC540-480(37.0%) BC470-410(33.9%) BC755-700(29.3%)	PLD-3215(AMS)
180.96	黒褐色腐植層	ピート	2450±30	-29.2	2485, 2480, 2470	BC535, 530, 520	2705-2640(37.0%) 2490-2430(32.8%) 2390-2360(15.6%) 2415-2395(10.3%)	BC755-690(37.0%) BC545-480(32.8%) BC440-410(15.6%) BC465-450(10.3%)	PLD-3214(AMS)
181.12	褐色腐植層	ピート	2460±25	-29.0	2705, 2665, 2655, 2490, 2475, 2470	BC755, 720, 705, 540, 530, 525	2710-2630(41.2%) 2495-2450(23.0%) 2615-2590(12.0%)	BC760-685(41.2%) BC545-500(23.0%) BC665-640(12.0%) BC440-415(10.7%)	PLD-3213(AMS)
181.42	黒褐色腐植層	ピート	2435±25	-28.8	2465, 2410, 2400, 2390, 2380, 2370, 2365	BC515, 460, 450, 440, 430, 420, 415	2470-2360(76.3%) 2705-2670(17.5%)	BC520-410(76.3%) BC755-725(17.5%)	PLD-3212(AMS)
181.60	黒褐色腐植層	ピート	2115±25	-27.0	2115, 2075, 2070	BC165, 130, 120	2120-2040(98.2%)	BC175-95(98.2%)	PLD-3211(AMS)

4. 考察

上品野遺跡で得られた層序および分析試料は，推定される地質年代から更新統(地点1・2)と完新統(地点3)とに大きく分けられる．以下では分析結果を基にして地点ごとに考察を加える．

地点1(97D区)におけるテフラ分析からわかる堆積年代

テフラ分析の結果から，地点1(97D区)におけるPre石器出土層準(段丘堆積物)から石器出土層準(下部ローム層)をPost石器出土層準覆う上部ローム層までの地層には，バブルウォールタイプのガラスが少量含まれた．含有量の地層による変化はほとんどみられない．ガラスの屈折率は1.497-1.501の範囲に集中した．このガラスの屈折率は鬼界葛原(K-Tz)テフラのそれに類似する．いっぽう，この層準には風化した緑色普通角閃石および斜方輝石が含まれた．斜方輝石の形態は大山倉吉(DKP)テフラと類似した100面の発達した特徴を有した．この特徴は大山火山の噴出物に多くみられる．また，斜方輝石の屈折率は1.668-1.682に，角閃石のそれは

1.688-1.682 にモードがみられた．ところで，大山火山起源のテフラのひとつに大山生竹 (DNP) テフラがある．本テフラは富士山東山麓などでも降灰が確認されているものであるが（町田・新井，2003），このテフラのもつ斜方輝石の屈折率は，今回の上部および下部ローム層に含まれるものの低い側半分にちょうど相当する．また，鬼界葛原 (K-Tz) テフラのそれは今回のローム層の高い側半分に相当する．本ローム層には姶良 Tn(AT) テフラに含まれるような特徴的に高い値を示す斜方輝石はまったく含まれなかった．以上の特徴に加え，同層準にはほとんど円磨されていないβ石英が目立って含まれた．このようなβ石英の特徴は鬼界葛原 (K-Tz) テフラにみられるものである．したがって，Pre 石器出土層準（段丘堆積物）からローム層に含まれるテフラは鬼界葛原 (K-Tz) テフラおよび大山生竹 (DNP) テフラ起源であると考えられる．

いっぽう，旧表土には上部および下部ローム層には含まれない特徴の火山砕屑物が含まれた．バブルウォールタイプかつ水和不良で屈折率が 1.508-1.512 を示す火山ガラス，および発泡度がやや低いパミスタイプの形態で屈折率が 1.495-1.503 を示す火山ガラスがこれに相当する．前者はガラスの屈折率，形態および水和の状況から鬼界アカホヤ (K-Ah) テフラに対比できる．後者はガラスの屈折率およびガラスの付着した斜方輝石の屈折率などから伊豆カワゴ平 (Kg) テフラに対比できる．

以上のことから，石器出土層準（下部ローム層）の下位に分布する Pre 石器出土層準（段丘堆積物）には鬼界葛原 (K-Tz) テフラおよび大山生竹 (DNP) テフラが混在する．鬼界葛原 (K-Tz) テフラの噴出年代が約 7.5 万～9.5 万年前，大山生竹 (DNP) テフラが約 8 万～9 万年前と考えられているので（町田・新井，2003），Pre 石器出土層準（段丘堆積物）は鬼界葛原 (K-Tz) テフラおよび大山生竹 (DNP) テフラの降灰期以降と考えられる．また，この層準には姶良 Tn(AT) テフラが混在しないことから，Pre 石器出土層準（段丘堆積物）は酸素同位体ステージのステージ 2 よりも前の堆積物と考えられる．同段丘の形成期はステージ 5a（約 80ka）ないしは 3（約 50 ～ 30ka）と考えられる．ステージ 3 を示す広域テフラの降灰は東海地方では今のところみつかっておらず，5a と 3 とを識別するには，周辺の段丘の分布状況を十分に把握する必要がある．いずれにせよ，姶良 Tn(AT) テフラの暦年代値が 27500 cal yrs BP と限りなく 3 万年前に近いと言われており，段丘を覆う石器出土層準（下部ローム層）の埋積期は約 7.5 万ないしは 8 万年前よりも新しく，3 万年前より古いと考えられる．

地点 2（98A 区）におけるテフラ分析からわかる堆積年代

地点 2（98A 区）における段丘堆積物からローム質段丘堆積物までの地層には，バブルウォールタイプのガラスがほとんど含まれなかった．これは地点 1(97D 区) の段丘を覆うローム層とは対照的である．この層準にはごく少量（0.1% 程度)のβ石英および火山ガラスが含まれた．また，10000 粒子に 1 ～ 2 粒子程度の斜方輝石が含まれ，これらの含有量は同一層内の鉛直方向でほとんど変化しなかった．ごく少量含まれるガラスの屈折率は 1.495-1.501 の範囲に集中した．ガラスの屈折率は鬼界葛原 (K-Tz) テフラのそれに類似する．斜方輝石は著しく風化しており，屈折率は 1.704-1.709 にモードがみられた．斜方輝石

の屈折率は鬼界葛原 (K-Tz) テフラのそれと一致する．また，ローム層には姶良 Tn(AT) テフラに含まれる特徴的な高い値を示す斜方輝石はほとんど含まれなかった．以上に加えて，ローム層内には鬼界葛原 (K-Tz) テフラに特徴的に含まれるほとんど円増されていないβ石英を産出した．したがって，段丘堆積物からローム質段丘堆積物に含まれる火山砕屑物は鬼界葛原 (K-Tz) テフラであると考えられる．

また，ローム層には前述したローム質段丘堆積物とほぼ同質の火山ガラスのほかに，これとは屈折率の異なる斜方輝石が含まれた．その値は 1.699-1.704 と 1.704-1.710 の範囲に分布する．この斜方輝石の起源については，地点 1(97D 区) にも同様の屈折率のものが含まれることから，大山生竹 (DNP) テフラや大山倉吉 (DKP) テフラなどの大山系起源である可能性が指摘できる．なお，ローム層内にもごく一部の層準において，ローム質段丘堆積物と同様，屈折率の高い斜方輝石が含まれる．

旧表土にはにぶい淡褐色ローム層には含まれない特徴の火山砕屑物が含まれた．発泡度がやや低いかパミスタイプの形態で，屈折率が 1.495-1.504 を示す火山ガラスがこれに相当する．この層準にはこれより下位の層準とは異なる屈折率の斜方輝石も含まれる．その値はローム質堆積物のものとやや類似するが，これよりも高いものを多く含む．1.709-1.713 のものがこれに相当する．これらのガラスの屈折率および斜方輝石の屈折率などから伊豆カワゴ平 (Kg) テフラのものとほぼ一致し，旧表土に含まれるこれらの鉱物は伊豆カワゴ平 (Kg) テフラ起源と考えられる．

なお，旧耕作土を覆う耕作土には，下位の層準に含まれる様々な火山灰起源鉱物に加え，姶良 Tn(AT) テフラ起源と考えられる屈折率の高い（1.728-1.733）斜方輝石が含まれる．旧耕作土には姶良 Tn(AT) テフラより後に降灰した伊豆カワゴ平 (Kg) テフラ起源の鉱物が含まれることから，この結果は耕作土堆積時，周辺に姶良 Tn(AT) テフラ起源の斜方輝石を多く含む地層が存在し，これが耕作土にリワークしていたことを示す．この層準には鬼界アカホヤ (K-Ah) テフラ起源の火山ガラス（屈折率が 1.510 前後でバブルウォールタイプ，水和不良が目立つ）も含まれる．

以上のように，地点 2 でも地点 1 と同様に，下位の段丘堆積物やローム層から鬼界葛原 (K-Tz) テフラや大山生竹 (DNP) テフラや大山倉吉 (DKP) テフラが，旧表土を含めてそれより上位層からは姶良 Tn(AT) テフラや伊豆カワゴ平 (Kg) テフラが確認された．地点 2 のローム層の堆積期も約 7.5 万ないしは 8 万年前よりも新しく，3 万年前より古いものと推定される．

地点 3(96 区）における堆積年代

地点 3(96 区）でみられる埋積谷 (NR02) は全体に腐植質に富む細粒堆積物により埋積された．標高 179.50 ～ 180.15m までの下位層には極粗粒砂層の薄層が挟まれ，特に最下位層である標高 179.50 ～ 179.86m の腐植層と極粗粒砂層の互層からは中礫サイズの礫が含まれた．この礫は埋積谷基底のラグ堆積物に由来すると考えられる．本層の上部（標高 179.81m) から採取した植物片は 3635 cal yrs BP(PLD-3221) を示した．このことから，谷地形は少なくとも約 3600 年前以前にはすでに調査地点に形成されていたことになる．埋積谷を埋める上部層である黒褐色粘土層（標高 181.41 ～ 181.61m）の最上部（標

高 181.60m) では 2115, 2075, 2070 cal yrs BP(PLD-3211) の数値年代が得られた．約 3600 年前には埋積が進行していたことがわかっているため，谷はおよそ 1600 年の時間をかけて次第に埋積されたことがわかった．標高 180.47 ～ 180.50m にはテフラ層が観察できた．本テフラ層の火山ガラスの屈折率が伊豆カワゴ平 (Kg) テフラの特徴（町田・新井，2003）とほぼ一致し，斜方輝石および角閃石の屈折率もほぼ一致することから，本テフラ層は伊豆カワゴ平 (Kg) テフラに対比できる．また，その純層は No.3(標高 180.48m）の層準となる．伊豆カワゴ平 (Kg) テフラは濃尾平野において松河戸 (MT) テフラに対比される．松河戸 (MT) テフラは上品野遺跡より約 17km 西方の町田遺跡，約 16km 西方の松河戸遺跡において報告されたテフラ層である（森・伊藤，1989; 森ほか，1990; 森，1994）．その降灰年代について，テフラ層直下の泥炭層の放射性炭素年代測定から，町田遺跡では 3120 ± 120 yrs BP(Gak-13810)，松河戸遺跡では 3120 ± 120 yrs BP(Gak-13521) の年代値を得ている．今回の調査地点ではテフラ層（標高 180.47 ～ 180.50m）をはさんだその上下で放射性炭素年代測定用の試料を採取し，テフラ層の直下（標高 180.45m）から採取したピートが 2945 cal yrs BP(PLD-3218)，直上（標高 180.51m）で採取したピートは 3155, 3140, 3130, 3100, 3090, 3080 cal yrs BP(PLD-3217) の数値年代であった．テフラ層直下の数値年代値に比べて直上の方がより古く，年代値の逆転が生じているが，おおむね約 3000 年前の数値年代を得た．嶋田 (2000) により，伊豆カワゴ平 (Kg) テフラは同テフラ層中の炭化木片およびテフラ層直下の腐植土中の炭化木片の放射性炭素年代から 3060-3190 cal yrs BP と考えられている．上品野遺跡から得られた本テフラをはさむ地層の年代値である 2945-3155 cal yrs BP は，嶋田 (2000) のそれと近似しており，両年代値はほぼ同時期と解釈できる．いずれにせよ，町田遺跡で標高 9.5m 前後，松河戸遺跡で標高 10 ～ 12m から検出されるなどそれまで沖積低地でのみ確認されていたテフラ層が，標高約 180m の後背地側でも認められたこととなる．

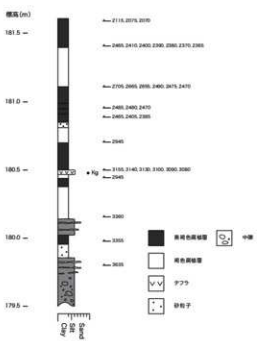


図 97　地点 3(96 区 NR02) における層序と放射性炭素年代値およびテフラ

Kg: 伊豆カワゴ平テフラ

矢印右横の数値は放射性炭素年代測定による暦年代較正値を示す

謝辞

本論を作成するにあたり，愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の川添和暁氏・池本正明氏・小澤一弘氏には上品野遺跡および周辺遺跡に関する考古学的情報を教えていただいた．図面のトレース作業は愛知県埋蔵文化財センター研究補助員の

山口典子氏にお願いした．図面の整理では元研究補助員の尾崎和美氏にお世話になった．分析試料の整理・保管と原図の作成では元整理補助員の服部恵子氏・宇佐美美幸氏・山口きみ代氏，整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた．記して厚くお礼申し上げます．

文献

古澤　明，1995，火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析，地質学雑誌，101，123-133.

町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス - 日本列島とその周辺 -，東京大学出版会，336p.

森　勇一・伊藤隆彦，1989，愛知県町田遺跡から発見された縄文時代後・晩期の火山灰について，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 9 集「町田遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，60-63.

森　勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣，1990，愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について，第四紀研究，29，17-23.

森　勇一，1994，愛知県松河戸遺跡における自然科学的検討 - とくに松河戸火山灰層と昆虫群集について -，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集「松河戸遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，37-54.

嶋田　繁，2000，伊豆半島，天城カワゴ平火山の噴火と縄文時代後～晩期の古環境，第四紀研究，39，151-164.

第２節　上品野遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

上品野遺跡は、愛知県瀬戸市に所在する。ここでは、本遺跡で確認されたドングリピット埋土中の大型植物化石を検討することにより、縄文時代晩期～弥生時代中期頃に遺跡付近で利用されていた植物の推定および周辺植生の推定を試みた。

2. 試料と方法

大型植物化石の検討は、96 SK84・SK85・K90 および SK91 の４つのドングリピット内埋土から出土したものについて行った。このうち、SK84・SK90 については、既に洗い出しされて取り上げられた大型植物化石について検討した。SK85・SK91 については、堆積物試料を持ちかえり、洗い出しを行って大型植物化石を採集し、それを検討した。SK85 の埋土は、黄灰色～暗灰黄色砂礫混じり粘土で砂礫が非常に卓越する。SK91 の埋土は、黒色未分解質・草本質泥炭である。時代については、放射性炭素年代測定により、SK85 が 1,920 ± l00yrB.P.(Pm-378)、SK91 が 2,130 ± 90yrB.P.(PLD-377) の年代値が得られている。これに従えば、SK85 が縄文時代晩期頃、SK91 が弥生時代中期頃と考えられる。なお、SK91 の埋土については、花粉化石群集の検討も行われた。

大型植物化石の採集は、大きく分けて２つの方法で行った。第１は、ドングリなどの地較的大型の種実類を採集する目的で、屋外で約６mm 目の節を用いて堆積物試料を水洗し、肉眼で確認できる大型植物化石を拾い上げるという方法である。これには、SK85 が約 70 リットル、SK91 が約 140 リットルと大量の堆積物試料を処理に用いた。第２は、比較的小型の種実類を採集する目的で、堆積物試料約 100cc を 0.25mm 目の篩を用いて水洗篩い分けをし、残渣中の大型植物化石を実体顕微鏡下で拾い上げるという方法である。

3. 出土した大型植物化石

a. 大型の種実類 (ドングリ類)

各ドングリピットから出土したドングリなどの比較的大型の種実類を表１に示す。なお、表中の数字は、完形の個数を示し、(　) 内の数字は破片から推定されるおよその個数を示す。

[SK84 から出土したドングリ類]

出土したドングリのうち、アカガシ亜属のドングリが約９割を占める (コナラ属としか同定できなかったもの、およびマテバシイを除く)。そのうち、シラカシが約７割、イチイガシが約３割でアカガシ・アラカシが僅かに出土した。イチイガシは、他のドングリピットに比べて SK84 で特に目立った出土状況であり、アラカシは SK84 のみで出土した。コナラ亜属では、コナラが約９割、ナラガシワが約１割出土した。コナラ属の果実以外では、マテバシイが SK84 のみで特徴的に出

表7　ドングリピットから出土した種実類

分　類　群	部　位	96 SK84	96 SK85	96 SK90	96 SK91
ハンノキ	果実序				109
	雄花序				18
ナラガシワ	果実	5		270	
	殻斗				2
コナラ	果実	52	7(1)	172	(1)
	幼果				1
	殻斗				1(1)
アベマキ近似種	果実		1(6)	1	6(9)
	果実・殻斗			1	
	幼果			1	11
	殻斗			14(3)	7(6)
コナラ属コナラ亜属	果実		1(3)		
イチイガシ	果実	231(1)	2(5)	1	(1)
アカガシ	果実	12	26(16)	10	6(3)
アラカシ	果実	3			
シラカシ	果実	570(4)	21(3)	168	97(13)
コナラ属アカガシ亜属	果実	78	6(12)	5	6(26)
	殻斗		3		
コナラ属	果実	291(248)	(154)	155(110)	(54)
	芽				1
クリ	果実				3
マテバシイ	果実	10(9)			
ホオノキ	種子				1
サクラ属サクラ節	核				1
トチノキ	種子片				1
不明	芽				3
コナラ属コナラ亜科	果実合計	57	9(10)	445	18(10)
コナラ属アカガシ亜属	果実合計	894(5)	55(36)	184	109(43)
コナラ属	果実合計	1242(353)	64(200)	784(110)	127(107)

土した。

[SK85 から出土したドングリ類]

アカガシ亜属が優占し、その占める割合は、約8割である (コナラ属を除く)。そのうち、アカガシが約 6 割、シラカシが約 3 割、イチイガシが約 1 割である。SK85 と同様にアカガシ亜属が多産する SK84、SK91 では僅かにしか出土しないアカガシが多産するのは特徴的である。コナラ亜属では、コナラとアベマキ近似種が同程度出土した。

[SK90 から出土したドングリ類 1

4つのドングリピットの中で SK90 のみがコナラ亜属が優占する。コナラ亜属は約 7 割を占め (コナラ属を除く)、そのうち、ナラガシワが約 6 割、コナラが約 4 割、アベマキ近似種が僅かに出土した。アカガシ亜属では、シラカシが 9 割以上を占め、アカガシ、イチイガシが僅かに出土した。

[SK91 から出土したドングリ類]

アカガシ亜属が優占し、その占める割合は、約 8 割である (コナラ属を除く)。そのうち、シラカシが約 9 割、アカガシ、イチイガシが僅かに出土した。コナラ属では、アベマキ近似種が多く、コナラが僅かに出土した。コナラ属の果実以外では、ハンノキの果実序、雄花序が多産して非常に目立ち、クリ (果実)、ホオノキ (種子)、サクラ属サクラ節 (核)、トチノキ (種子破片) が僅かであるが、SK91 のみから特徴的に出土した。

b. 小型の種実類

0. 25mm 目の篩を用いた方法で採集した比較的小型の種実類を以下に示す。なお、分類群名・出土部位の後ろの ( ) 内の数字は出土個数を示し、( ) 内の数字は破片の数を示す。

[SK85 から出土した大型植物化石]

本本 (2 分類群): ハンノキ・果苞 (1)、コナラ属・果実 ((2))

草本 (4 分類群): ホタルイ属・果実 (2)、スゲ属 A・果実 (1)、スゲ属 B・果実 (5)、カラムシ属・種子 (1)

その他 : 菌核 (9)

[SK91 から出土した大型植物化石]

本本 (1 分類群): ハンノキ・果実 (1)

草本 (2 分類群): スゲ属 A・果実 (18)、スゲ属 C・果実 (2)

4. 考察

a. ドングリなどの利用植物

4 つのドングリピット内のドングリを検討した結果、SK90 を除く、3 つのドングリピットでアカガシ亜属が圧倒的に多産しており、コナラ亜属よりもアカガシ亜属の方が利用されていた可能性が高いものと思われる。中でもシラカシは、いずれのドングリピットでも比較的多産する傾向にあり、最も普通に利用されていたものと思われる。他に、SK84 で多産したイチイガシ、SK85 で多産したアカガシもシラカシに次いで利用されていた。SK84 のみで僅かに出土したアラカシは、あまり利用されていなかったようである。コナラ亜属では、SK84・SK90 の組成からナラガシワ、コナラが主に利用されており、次いでアベマキ近似種も利用されていたものと思われる。コナラ属以外では、同じブナ科のクリ、マテバシイが利用されていたことが予想され、SK91 で僅かに出土したサクラ節、トチノキなども食用として利用可能な植物である。

b. 周辺植生

花粉分析結果で示されたように、遺跡周辺には、コナラ亜属・アカガシ亜属の両亜属を主体とした森林が成立していたことが予想される。おそらく、比較的容易に大量のドングリを採集することができたであろう。ところで、表 1 に示したようにナラガシワ、コナラ、アベマキ近似種といったコナラ亜属は、果実と共に、幼果、殻斗なども出土しているが、アカガシ亜属は、種不明の殻斗が僅かに出土しているのみで幼果は全く出土していない。このことから、コナラ亜属の各分類群は遺跡に程近い場所に生育していたものと予想される。それにもかかわらず、ドングリピット内のドングリは、アカガシ亜属が圧倒的に多産する傾向にあり、選択的にアカガシ亜属を利用していた可能性も考えられる。コナラ属以外にも、遺跡周辺には、ハンノキ、マテバシイといった花粉分析の結果 (ハンノキ属、シイノキ属—マテバシイ属の多産) からも予想される分類群や、クリ・ホオノキ・サ

クラ節・トチノキなども生育していたものと考えられる。ドングリピット付近は、小型種実の検討でSK85からホタルイ属が出土しており、付近に湿地的環境がみられたことが予想される。

5. 主な大型植物化石の形態記載

スゲ属 *Carex* 果実

スゲ属Aは褐色～黒褐色で二面の倒卵形、長さ約1.6～1.7mm、幅約1.2～1.4mm。スゲ属Bは褐色～黒褐色で三稜形、長さ約1.8～2.2mm、幅約1.1～1.2mm。スゲ属Cは褐色で三稜形、長さ約6mm、幅約1.8mm。

ハンノキ *Alnus japonica*(Thunb.)Steud. 果実序、雄花序

果実は、偏平な広倒卵形～卵状円形で長さ3～5mm。縁辺は薄くなり、僅かに翼状となる。果苞は、広扇形で長さ4～6mm。先端はかなり反り返る。以上のことからハンノキの果実序と同定した。雄花序は、暗褐色ないし黒色で1個の苞の脇に2対の小苞がついたものが単位となり、密に配列する。

コナラ *Quercus serrata* Murray 果実、幼果、殻斗

果実は、倒卵形で長さ約19～22mm。殻斗は径10mm前後で、殻斗鱗片が覆瓦状に並び、鱗片は卵形。殻斗の上端は、やや内側を向き、基部は鋭脚。

アベマキ近似種 *Quercus* cf. *Variabilis* Blume 果実、幼果、殻斗

果実は、長さ20～30mm前後と大きい。縦長のものが多く、大半はアベマキであると思われるが、クヌギも混じっている可能性もある。殻斗は径18～25mm。

コナラ属コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* 果実

破片で果実上部に輪状紋のないものでこれ以上の同定に至らなかったもの。

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 果実

果実上部は、輪状紋があり、まっすぐ立ち上がって花柱につながる。柱頭は、短く、傘状で外側に向く。

アカガシ *Quercus acuta* Thunb. 果実

果実は楕円形で尻は突出する。輪状紋の部分は顕著に突出し、花柱は、太く短くゆるやかに開く。

アラカシ *Quercus glauca* Thunb. 果実

輪状紋の部分は、突出せず薄く肩に広がる。花柱は太く短く、急に舌状に開く。

シラカシ *Quercus myrsinaefolia* Blume 果実

輪状紋の部分は、円錐状に突出し、花柱は太く短く、急に舌状に開く。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 果実

破片で果実上部に輪状紋が認められるが、花柱・柱頭が残っておらず、これ以上の同定には至らなかったもの。

コナラ属 *Quercus* 果実

輪状紋の有無が確認できないような細かな破片などで、これ以上の同定には至らなかったもの。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 果実

果実は黒褐色で尻の部分には、縦に長いしわがある。

マテバシイ *Pasania edulis* Makino 果実

果実は、長楕円形～狭卵形で尻はややくぼむ。長さ約25～37mmと非常に大きい。

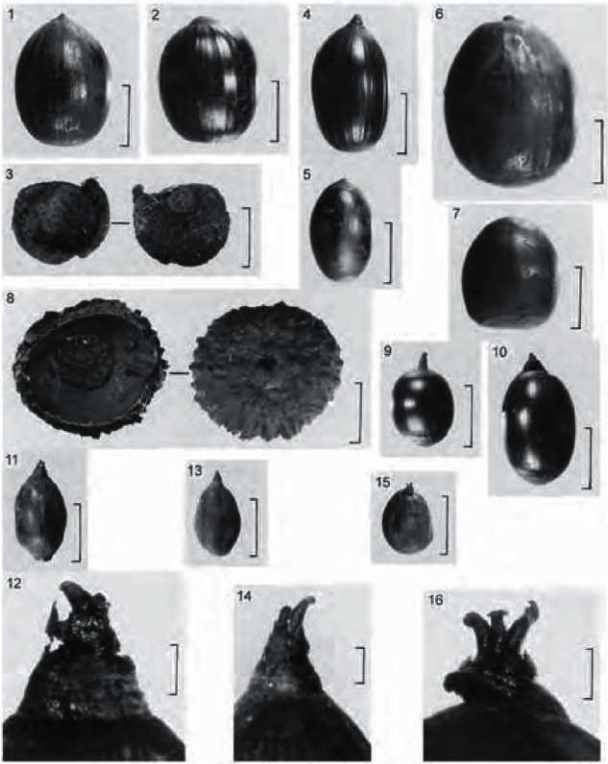


写真1　出土した大型植物化石 (スケールは 1 cm、12・14・16 は 1 mm)

1. ナラガシワ 果実 (SK84)、2. ナラガシワ 果実 (SK90)、3. ナラガシワ 殻斗 (SK91)、4. コナラ 果実 (SK90)、5. コナラ 果実 (SK84)、6. アベマキ近似種 果実 (SK85)、7. アベマキ近似種 果実 (SK90)、8. アベマキ近似種 殻斗 (SK91)、9. イチイガシ 果実 (SK91)、10. アカガシ 果実 (SK90)、11 ～ 16. アカガシ 果実 (SK85) (12 は 11、14 は 13、16 は 15 のそれぞれ果実上部の拡大)

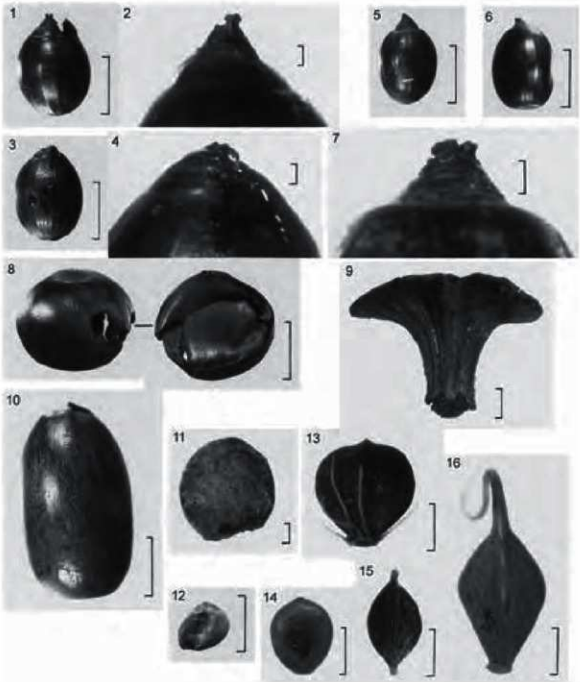


写真２　出土した大型植物化石

（スケールは１・３・５・６・８・10・12が１cm、２・４・７・９・11・13～16は１mm）

１～４. アラカシ 果実 (SK84)、5. シラカシ 果実 (SK85)、6. シラカシ 果実 (SK90)、7.「6」の果実上部の拡大、8. クリ 果実 (SK91)、9. ハンノキ 果苞 (SK91)、10. マテバジイ 果実 (SK84)、11. サクラ属サクラ節 核 (SK91)、12. ホオノキ 種子 (SK91)、13. ホタルイ属 果実 (SK85)、14. スゲ属 A 果実 (SK91)、15. スゲ属 B 果実 (SK85)、16. スゲ属 C 果実 (SK91)

参考文献

岡本素治 ,1973「どんぐりの話」『NatureStudy』第 19 巻 pp.55-61,77-78,91-94 大阪市立自然史博物館

第３節　上品野遺跡の花粉化石群集

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

上品野遺跡は、愛知県瀬戸市に所在する。ここでは、本遺跡で確認されたドングリピット (SK91) 埋土を試料に用いて花粉化石群集からみた遺跡周辺の古植生の推定を試みた。

2. 試料と方法

花粉化石群集の検討は、SK91(ドングリピット) 埋土より採取された１試料について行った。試料は、黒色未分解質・草本質泥炭であり、時代については、放射性炭素年代測定により、2,130 ± 90yrB.P.(PLD-377) の年代値が得られている。これに従えば、弥生時代中期頃と考えられる。なお、この試料は、大型植物化石の検討についても行われた。

花粉化石の抽出は、試料約２～3g 程度を 10% 水酸化カリウム処理 (湯煎約 15 分) による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理 (約 30 分) による珪酸塩鉱物などの溶解、ア

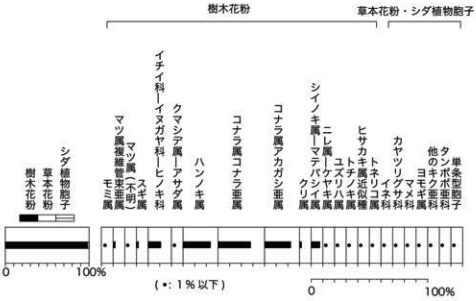
表８　花粉化石一覧表

和　名	学　名	
樹木		
モミ属	*Abies*	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diplexylon*	8
マツ属 (不明)	*Pinus* (Unknown)	4
スギ属	*Cryptomeria*	7
イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科	T, - C,	49
クマシデ属―アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	2
ハンノキ属	*Alnus*	106
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobelanus*	129
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobajaeopsis*	99
クリ属	*Castanea*	7
シイノキ属―マテバシイ属	*Castanepsis - Pasanis*	32
ニレ属―ケヤキ属	*Ulmus - Zelkovs*	1
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	1
トチノキ属	*Aesculus*	3
ヒサカキ属近似種	cf. *Eurya*	4
トネリコ属	*Praxinus*	1
草本		
イネ科	*Gramineae*	2
カヤツリクサ科	*Cyperaceae*	1
マメ科	*Leguminosae*	1
ヨモギ属	*Artemisia*	1
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	1
シダ植物		
単条型胞子	Monoleie spore	1
樹木花粉	Arboreal pollen	454
草本花粉	Nenarboreal pollen	8
シダ植物胞子	Spores	1
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	463
不明花粉	Unknown pollen	13

セトリシス処理 (氷酢酸による脱水、濃硫酸 1 に対して無水酢酸 9 の混液で湯煎約 5 分) の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、全ての試料において重液分離 (臭化亜鉛を比重 2.15 に調整) による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に撹はんした後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について、樹木花粉総数が 200 個以上になるまで同定・計数した。その計数結果をもとに、樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として、各分類群の出現率を百分率で算出した。ただし、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3. 結果

同定された分類群数は、樹木花粉 16、草本花粉 6、形態分類で示したシダ植物胞子 1 である。樹木花粉の占める割合は、約 98% と非常に高率である。その中で、コナラ亜属が約 28% で最も高率で出現する。次いで、ハンノキ属 (約 23%)、アカガシ亜属 (約 22%) が出現し、イチイ科—イヌガヤ科 (約 H%)、シイノキ属—マテバシイ属 (約 7%) なども目立つ。他に、マツ属複維管束亜属、スギ属、クリ属、ユズリハ属、ヒサカキ属近似種などが低率で出現する。草本花粉では、イネ科、他のキク亜科などが僅かに出現する。



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

図 98　花粉化石分布図

4. 考察

弥生時代中期頃、遺跡周辺の丘陵部などには、落葉広葉樹のコナラ亜属(大型植物化石では、ナラガシワ・コナラ・アベマキ近似種が出土)と常緑広葉樹のアカガシ亜属(大型植物化石では、イチイガシ・アカガシ・シラカシが出土)を主体に針葉樹のイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、常緑広葉樹のシイノキ属—マテバシイ属(大型植物化石では、マテバシイが出土)などを混じえた森林が成立していたことが予想される。また、低地部や谷部では、ハンノキ属(大型植物化石では、ハンノキが出土)からなる林分もみられ、そこにはトチノキ属(大型植物化石では、トチノキが出土)なども混じっていた。

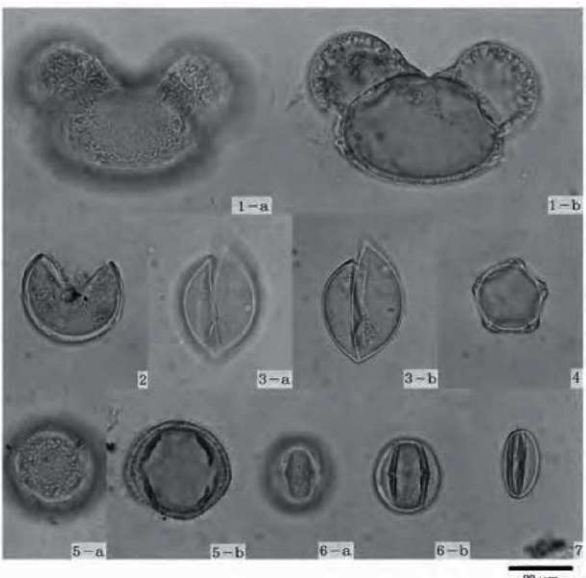


写真3　産出した花粉化石

1：マツ属複維管束亜属　PAL.MN 1133
2：スギ属　PAL.MN 1132
3：イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科　PAL.MN 1127
4：コナラ属コナラ亜属　PAL.MN 1129
5：コナラ属アカガシ亜属　PAL.MN 1128
6：シイノキ属　PAL.MN 1131

第４節　放射性炭素年代測定

山形秀樹 (パレオ・ラボ)

1. 放射性炭素年代測定について

試料は , アルカリ･酸処理を施して不純物を除去し , 炭化処理をした後リチウムと混合して反応管内に入れ , 真空ポンプで引きながら 800℃まで加熱して炭化リチウム (カーバイド) を生成後 , 加水分解によりアセチレンを生成した .

測定は約一ヶ月放置した後 , 精製したアセチレンを比例計数管 (400cc) を用いて , β - 線を計数して年代値を算出した . その結果は下記に示す .

なお , 年代値の算出には 14C の半減期として Libby の半減期 5,570 年を使用した . また , 付記した年代誤差は , 計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し , 標準偏差 (One sigma) に相当する年代である . 試料の β - 線計数率と自然計数率との差が 2 σ 以下の時は ,3 σ に相当する年代を下限の年代値として表示し , 試料の β - 線計数率と現在の標準炭素 (Modern standard carbon) の計数率との差が 2 σ 以下の時は ,Modern と表示し ,14C(Sample)/14C(Modern), の値を付記し ,14C(Sample)/14C(Modern)<1 であれば ,yrBP の値を付記する .

暦年代の補正は , 大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された 14C 年代値 (yrBP) に対し , 過去の宇宙線強度の変動による大気中の 14C 濃度の変動および半減期の違い (14C の半減期 5,730 ± 30 年) を補正して , より正確な年代を求めるものであり , 具体的には年代既知の樹木年輪の 14C 年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し , これを用いて暦年代を算出する . 補正暦年代の算出に CALIB3.0(Stuiver and Reimer, 1993:IBH-PC 用 :Reference(Stuiver&Pearson,1993)] を使用した . なお , 交点年代値は 14C 年代値に相当する補正曲線上の年代値であり ,1 σ 年代幅は 14C 年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す . 年代を検討する場合は ,68% の確率で 1 σ 年代幅に示すいずれかの年代になる . 暦年代の補正は約一万年前から AD1,950 年までが有効であり , 該当しないものについては補正暦年代を *** または Modern と表示する . また AD1,955* は Modern を意味する .

2. 放射性炭素年代測定結果 (表 9)

測定 No.	試　　料	^{14}C 年代値	補正暦年代	
PLD-377	木材 IISK96(SK91)	2,130 ± 90 yrBP (BC 180 年)	交点年代値	BC 170 年
			1 σ 年代幅	BC 350 to 300 BC 210 to 40
PLD-378	木材　(炭化材含) IISK96(SK85)	1,920 ± 100 yrBP (AD　30 年)	交点年代値	AD 80 年
			1 σ 年代幅	BC 0 to AD 230

引用文献

Stuiver,M. and Reimer, P.J. 1983: Extended 14C database and revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program.

第５節　97B SB02 出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

当遺跡は瀬戸市の北西部の上品野に所在し、縄文時代から近世の遺物・遺構が出土している。ここでは、弥生時代末から古墳時代初めの焼失竪穴住居跡 (IISK97B SB02) から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。当住居跡は、丘陵斜面から段丘端部の標高 182m に立地する。出土炭化材は住居壁際に広く分布し、板状や丸太状の形状を留めているものもあり、明らかに焼失した建築材の一部が残存していた状況であった。このように建築材の出土状況が判る事例は、瀬戸市では初めてであり、当地域一帯でも非常にめずらしい。当時の建築材の樹種選択を知る上で貴重な情報である。

2. 炭化材樹種同定の方法

実体顕微鏡で炭化材の横断面を観察し分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亜属・シイノキ属・コナラ節・クヌギ節・クリは横断面の管孔配列が特徴的であることから実体顕微鏡下の観察でも同定可能であるが、それ以外の分類群については３方向の断面 (横断面・接線断面・放射断面) の組織構造を走査電子顕微鏡で観察し同定した。上記の分類群でも不確定と思われる試料は、走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を 5mm 角以下の大きさに整え、直径 1cm の真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗り、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡 (日本電子（株）製　JSM-T100 型) で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

検討した試料 47 点は、住居跡のほぼ全周から採取されている。樹種同定結果の一覧を表に示し、炭化材の産状と各炭化材の樹種を図に示した。検出された分類群は、落葉広葉樹のコナラ節が 35 点とクヌギ節４点とクリ ?3 点、針葉樹のヒノキ１点、常緑広葉樹のヒサカキ１点、そのほかに広葉樹のコナラ属１点の合計６分類群であった。No.13 と No.42 の２試料は保存が悪く同定できなかった。コナラ属とした No.14 も保存が悪い為、集合放射組織が見られたが一年輪分の管孔配列が観察できなかった為に、常緑性のアカガシ亜属と落葉性のコナラ節・クヌギ節の識別ができなかったものである。No.4・No.6・No.34 は破片が小さく割れたものが多く、集合放射組織は見られなかったがコナラ節の可能性もある為にクリ？とした。

落葉広葉樹のコナラ節が圧倒的に多く出土しており、コナラ節が当住居の主要な建築材であったことが判った。検出数は少ないがコナラ節の他にも落葉広葉樹のクヌギ節・クリ ?、針葉樹のヒノキ、常緑広葉樹のヒサカキが検出されたことから、複数の樹種が使われていた事も明らかになった。

炭化材の形状には板状や丸太状のものがあったが、特に樹種の使い分けは見られなかった。コナ

ラ節の材は全般に大きなものが多く、残存の最大幅は8.5cmであった。ヒノキは、直径5cmの丸木であり、ヒサカキは放射方向の径が約1.2cmの細い枝で年輪数は15年輪が数えられた。

以下に樹種同定の根拠となった組織観察結果を記載する。

(1) ヒノキ *Chamaecyparis Obtusa* Endl.

図版1　1a.～1c.(No.41)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材部の量は極めて少ない。分野壁孔の輪郭は円形で、孔口は縦に細く開いたヒノキ型が多く、1分野に主に2個が水平に配列している。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州の山地のやや乾燥した尾根に多く生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれている。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus.* sect. *Prinus* ブナ科　図版1　2a.～2c.(No.22)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部では薄壁・角形で非常に小型～極めて小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。接線状・網状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯の丘陵から山地に生育する落葉高木で二次林にも多く、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は重硬であるが加工はややしにくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点がある。

(3) コナラ属クヌギ節 *Q.* subgen. *Quercus.* sect. *Cerris* ブナ科　図版1　3a.～3c.(No.11)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部では厚壁・円形で非常に小型の管孔が単独で放

表10　97B SB02出土炭化材樹種同定結果一覧

試料番号	樹　種	試料番号	樹　種	試料番号	樹　種
C 01	コナラ節	C 17	コナラ節	C 33	コナラ節
C 02	コナラ節	C 18	コナラ節	C 34	クリ?
C 03	コナラ節	C 19	コナラ節	C 35	コナラ節
C 04	クリ?	C 20	コナラ節	C 36	コナラ節
C 05	コナラ節	C 21	コナラ節	C 37	コナラ節
C 06	クリ?	C 22	コナラ節	C 38	コナラ節
C 07	コナラ節	C 23	コナラ節	C 39	コナラ節
C 08	コナラ節	C 24	コナラ節	C 40	コナラ節
C 09	コナラ節	C 25	コナラ節	C 41	ヒノキ
C 10	コナラ節	C 26	コナラ節	C 42	不可
C 11	コナラ節	C 27	コナラ節	C 43	コナラ節
C 12	コナラ節	C 28	コナラ節	C 44	ヒサカキ
C 13	不可	C 29	コナラ節	C 45	コナラ節
C 14	コナラ属	C 30	コナラ節	C 46	コナラ節
C 15	コナラ節	C 31	コナラ節	C 47	クヌギ節
C 16	コナラ節	C 32	コナラ節		

樹　種	試料数
ヒノキ	1
コナラ属	1
コナラ節	35
クヌギ節	4
クリ?	3
ヒサカキ	1
不可	2
合計	47

射方向に配列する環孔材である。接線状・網状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のものと複合状のものがある。

クヌギ節は暖帯の低山林や二次林に普通の落葉高木で、クヌギとアベマキが属する。材は重厚で割裂性が良い。

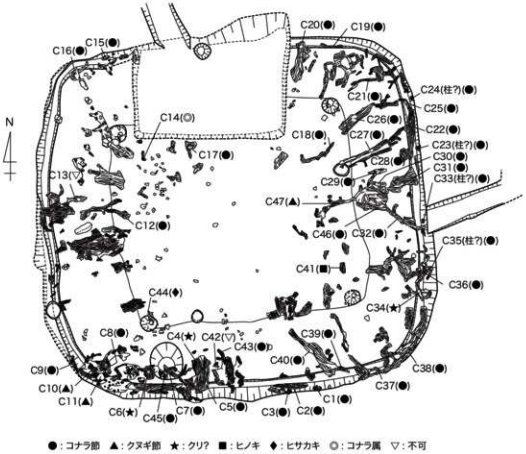
(4) クリ？ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.? ブナ科 図版２ 4a.～4c.(No.4)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。接線状柔組織がある。道管の壁孔」は交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

(5) ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ属 図版２ 5a.～5c.(No.44)

非常に小型で多角形の管孔が密に散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒の数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、２細胞幅が多く、道管との壁孔は交互状・階段状である。ヒサカキは暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。大径の材は少ないが材質は緻密で均一であり小物器具や柄など部材に使われる。



●：コナラ節 ▲：クヌギ節 ★：クリ? ■：ヒノキ ◆：ヒサカキ ◎：コナラ属 ▽：不可

図99 97B SB02 出土炭化材の産状と樹種

4. まとめ

当遺跡の弥生時代後期末から古墳時代初めの竪穴住居 (IISK97B SB02) から出土した 47 点の炭化材樹種構成は、落葉広葉樹が圧倒的に多くそのほかに針葉樹と照葉樹も少数含まれていた。落葉広葉樹はコナラ節がほとんどであり他にクヌギ節とクリ？が検出され、針葉樹はヒノキ、落葉広葉樹はヒサカキであった。

この時期の住居跡出土炭化材の樹種は、全般にコナラ節またはクヌギ節が優占する事例が多い (山田 1993)。千野 (1991) は主に南関東の各時期の建築材樹種を集成した。それによると、縄文時代はクリが多用されていたが、弥生時代以降はコナラ節やクヌギ節が多く照葉樹の利用も見られ、平安時代になると再びクリの利用が目立ちコナラ節やクヌギ節が優占する報告は減少し、時期により使用樹種が変化していることを示した。コナラ節が優占する当遺跡の結果は、山田 (1993) や千野 (1991) らにより示された同時期の一般的な傾向と符号するものであった。

ところで、南関東一円ではその後の調査地点数の増加に伴い、弥生時代～古墳時代でもコナラ節やクヌギ節がほとんど検出されない住居跡の事例が増加し、住居跡周辺の古植生と建築材樹種との関連性を検討する必要が指摘されている (鈴木・能城・車崎 1996、千野 1998)。当遺跡周辺域では資料数が少ないが地点により検出樹種の傾向が異なる現象は、当地方一帯でも見られるようである。例えば、当遺跡から約 9km 南西方向に位置する上之山遺跡 (瀬戸市上之町) では古墳時代の住居跡出土炭化材樹種は、コナラ節・アカガシ亜属・シイノキ属であり、照葉樹が優占する結果であった (パリノ・サーヴェイ株式会社)。また当遺跡の北方の美濃加茂市に所在する尾崎遺跡では、弥生時代後期の住居跡からはクリ・クヌギ節・トチノキ・ササ類が出土し、古墳時代からはクリ・コナラ節が出土し (藤根 1993) ており、樹種構成は落葉性が多く樹種も当遺跡の結果と比較的類似している。しかし、更に西方の岐阜市に所在する堀田城之内遺跡の古墳時代前期の竪穴住居からは落葉性のクリと常緑性のシイノキ属が検出され (植田 1997) た。また大垣市に所在する今宿遺跡の弥生時代後期の竪穴住居跡からは当遺跡と同様に炭化材の産状が良好で多数の炭化材を調査したがそのほとんどがヒノキ・コウヤマキ・アスナロ・モミ属などの針葉樹であった (植田 1998)。このように、当地域一帯も、住居建築材の樹種選択は単一ではなかったようである。今後も、調査事例を増やし住居建築材の樹種選択性を明らかにして行くことにより、利用されていた建築材樹種と古植生との関連性や、地域集団のまとまりなどを明らかにするヒントが得られるではないだろうか。

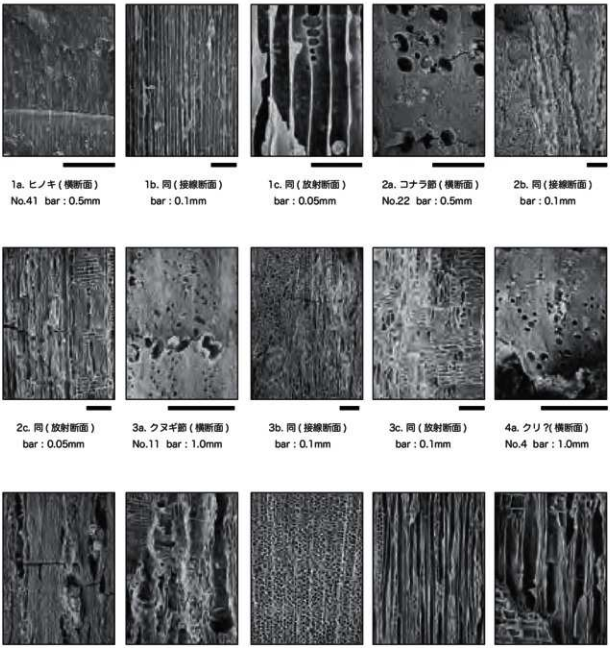
引用文献

植田弥生 1997:「竪穴住居から出土した炭化材の樹種」『堀田城之内遺跡』pp.125-126、図版 24. 岐阜県文化財保護センター。

植田弥生 1998:「弥生時代後期の焼失住居跡から出土した炭化材樹種同定」『今宿遺跡』第 2 分冊 pp.31-37、図版 141-145. 岐阜県文化財保護センター。

鈴木三男・能城修一・車崎正彦 1996:「炭化材の樹種同定」『下戸塚遺跡の調査』pp.693-707、図版 177-186. 早稲田大学。

千野裕道 1991:「縄文時代に二次林はあったか―遺跡出土の植物性遺物からの検討―」『研究論集』X.pp.215-249. 東京都埋蔵文化



1a. ヒノキ (横断面)
No.41 bar : 0.5mm

1b. 同 (接線断面)
bar : 0.1mm

1c. 同 (放射断面)
bar : 0.05mm

2a. コナラ節 (横断面)
No.22 bar : 0.5mm

2b. 同 (接線断面)
bar : 0.1mm

2c. 同 (放射断面)
bar : 0.05mm

3a. クヌギ節 (横断面)
No.11 bar : 1.0mm

3b. 同 (接線断面)
bar : 0.1mm

3c. 同 (放射断面)
bar : 0.1mm

4a. クリ ?(横断面)
No.4 bar : 1.0mm

4b. 同 (接線断面)
bar : 0.5mm

4c. 同 (放射断面)
bar : 0.1mm

5a. ヒサカキ (横断面)
No.44 bar : 0.5mm

5b. 同 (接線断面)
bar : 0.1mm

5c. 同 (放射断面)
bar : 0.1mm

写真4　97B SB02 出土炭化材樹種

財センター。

千野裕道 1998:「子ノ神遺跡出土の炭化材について」『子ノ遺跡 VI』pp.187-197、図版 40-47. 厚木市教育委員会。

パリノ・サーヴェイ株式会社 1992:「上之山遺跡の炭化材樹種同定」『上之山』pp.585-592. 瀬戸市教育委員会。

藤根久 1993:「尾崎遺跡住居 j 止出土炭化材の樹種」『尾崎遺跡』pp.135-138、図版 27-29. 岐阜県文化財保護センター。

山田昌久 1993:「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第 1 号 .242PP。

第６節　黒曜石・サヌカイト石材の原産地推定

藤根　久 (パレオ・ラボ)

１．はじめに

ここでは、上品野遺跡より出土した黒曜石製石器およびサヌカイト製石器の原産地推定を蛍光Ｘ線分析により行った。

２．試料と方法

以下では、黒曜石とサヌカイトに分けて述べる。なお、試料は、上品野遺跡から出土した黒曜石製石器の計 11 試料とサヌカイト製石器 10 試料である。

[黒曜石の原産地推定]

黒曜石の産地推定は、望月 (1999) が示した蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の方法を用いた。すなわち、主成分元素のカリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) と微量元素のルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計７元素を蛍光Ｘ線分析で測定し、各元素のＸ線強度 (cps；count per second) から以下に示す指標値を計算する。

1).Rb 分率 =Rb × 100/(Rb+Sr+Y+Zr)　2).Sr 分率 =Sr × 100/(Rb+Sr+Y+Zr)

3).Mn × 100/Fe　4).log(Fe/K)

そしてこれら指標値を用いた２つの判別図 (横軸 Rb 分率－縦軸 Mn 強度× 100/Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率－縦軸 log(Fe 強度 /K 強度) の判別図) を作成し、日本各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。判別図に用いる黒曜石原産地及び判別群名称は表２に示す。判別群名称は望月 (2002) を参考にした。

試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジにエタノールを少量含ませて試料をこすり、表面に付着する土壌等の汚れを除去した。その後、比較的平坦な面 (あるいは凸面) を選んで測定面とした。

表 11　産地推定を行った黒曜石とその詳細

分析No.	登録番号	種類	調査区	遺構No.・検出	備考
1	202	微細剥片	97B	SX01	黒曜石
2	203	微細剥片	97B	SX01	黒曜石
3	204	横長薄片	97D	SB06	黒曜石
4	205	微細剥片	97D	SB06	黒曜石
5	145	石鏃	98A	各グリッド	黒曜石
6	179	微細剥片	98A	各グリッド	黒曜石
7	207	横長薄片	97AB	SB02-1	黒曜石
8	209	微細剥片	98A	各グリッド	黒曜石
9	210	微細剥片	98B		黒曜石
10	211	剥片	98B	SD01	黒曜石
11	149	石鏃	98B	NR01	黒曜石
12	199	微細剥片	97B	SX01	サヌカイト
13	129	横長薄片	97B	SX01	サヌカイト
14	128b1	石核	97B	SX01	サヌカイト
15	130d1	横長薄片	97B	SX01	サヌカイト
16	200	横長薄片	97B	SX01	サヌカイト
17	131	石核	97B	SX01	サヌカイト
18	134	横長薄片	97B	SX01	サヌカイト
19	132	石核？	97D	SX01	サヌカイト
20	133	石核	97D	SX01	サヌカイト
21	201	石鏃	98B	表採	サヌカイト

[サヌカイトの原産地推定]

原産地の推定は、望月（1999）が示した蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた黒曜石産地推定の判別図法と同様の手法を用いた。すなわち、主成分元素のカリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) と微量元素のルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計７元素を蛍光Ｘ線分析で測定し、各元素のＸ線強度（cps）から以下に示す指標値を計算する（黒曜石の指標値と同様の計算式）。

これら指標値を用いた２種類の判別図 (横軸 Rb 分率－縦軸 Mn × 100/Fe の判別図と横軸 Sr 分率－縦軸 log(Fe/K) の判別図) を作成し、日本各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。原産地の原石は、二上山産（春日山）のサヌカイト、四国の金山・国分台・城山・雄山・雌山等のサヌカイト、および岐阜県湯ヶ峰産下呂石である（表 13）。

試料は、測定前にエアーブラシを用いて直径約 10mm 程度の比較的平坦な面 (あるいは凸面) を選んで新鮮面を作り、表面に付着する土壌等の汚れを除去するために超音波洗浄を行った。

分析装置は、(株) セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計 SEA －2001L である。装置の仕様は、Ｘ線発部の管球のターゲットはロジウム (Rh)、ベリリウム (Be) 窓、Ｘ線検出器は Si(Li) 半導体検出器である。測定条件は、測定時間 300 秒、照射径 10 ㎜、電流自動設定 (μ A)、電圧 50kV、試料室内は真空である。

３．結果および考察

表 14 に、黒曜石製およびサヌカイト製石器から検出された各元素のＸ線強度 (cps) と計算による指標値を示す。図 100 及び図 101 には測定した黒曜石原石の判別図を示す。各判別群で重複している箇所があるので視覚的に分かりやすくする為、任意で各判別群を取り囲むように円を描いている。

また、同様に図 102 及び図 103 には測定したサヌカイト原石の判別図を示す。各判別群で重複している箇所があるので視覚的に分かりやすくする為、任意で各判別群を取り囲むように円を描いている。

黒曜石石器について見ると、図 100 と図 101 に試料の指標値を照合すると、多くの黒曜石は、諏訪星ヶ台群域 (SWHD) に分布している。なお、分析№ 11 は和田高松沢群域（WOTM）に分布している。

一方、サヌカイト製石器について見ると、図 102 では全く区別できないが、図 103 において

表 12　黒曜石原産地の判別群名称 (望月 2002 参考)

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	
		黒曜の沢群	STKY	
	赤井川	曲川群	AIMK	
青森	木造	出来島群	KDDK	出来島
	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉、脇本海岸
		脇本群	OGWM	脇本海岸
岩手	北上川	北上折居2群	KKO2	北上川
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前
新潟	新津	金津群	NTKT	金津
	新発田	板山群	SBIY	板山牧場
	佐渡	真光寺群	SDSK	真光寺山
		金井二ツ坂群	SDKH	二ツ坂
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉
	色麻	根岸群	SMNG	根岸
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵
		秋保2群	SDA2	土蔵
	塩釜	塩釜群	SGSG	塩釜
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢
		七尊沢群	THNH	七尊沢、宮川
長野	和田(WD)	蓮山群	WDTY	蓮山、東鉢屋
		小深沢群	WDKB	小深沢
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西
		ぶどう沢群	WOBD	ぶどう沢
	和田(WO)	牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下
		高松沢群	WOTM	高松沢
	諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台、星ヶ塔
	蓼科	冷山群	TSTY	冷山、麦草峠、麦草峠東
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯
		畑宿群	HNHJ	畑宿
		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋
静岡	天城	上多賀群	HNKT	上多賀
		柏峰群	AGKT	柏峰
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島
		砂糖崎群	KZSN	砂糖崎

表 13　原産地のサヌカイト原石

遺跡No.	所在地	所在地	備考
AN0001	岐阜県下呂市湯ノ峰温泉地区	峰温泉元	下呂石
AN0003	大阪府太子町一般教会温泉町	二上山	サヌカイト
AN0005	香川県高松市牟礼町浦路	金山(雌山)	サヌカイト
AN0011	奈良県香芝市穴虫峠(手柏)	二上山系穴虫石	サヌカイト
AN0012	大阪府南河内郡太子町北子間地	太子町谷石石	サヌカイト
AN0032	大阪府南河内郡太子町春日	春日山みかん畑内容石	サヌカイト
AN0025	香川県坂出市西庄町雌雄連峰線	雌山南側55地点	サヌカイト
AN0026	香川県坂出市西庄町土居連峰線	雌山北側55地点	サヌカイト
AN0027	香川県坂出市津崎町押神社前	国分台系 押神神社前	サヌカイト
AN0028	香川県坂出市加茂町松尾神社台	国分台系 松尾神社(道光寺山麓)	サヌカイト
AN0029	香川県綾歌郡国分寺町高屋重神社前	国分台系 高屋重神社前	サヌカイト
AN0030	香川県綾歌郡国分寺町東横谷	国分台系 東横谷	サヌカイト
AN0031	香川県綾歌郡国分寺町 国分台下ひかん前	国分台系 国分台下ひかん前	サヌカイト
AN0032	香川県坂出市高屋町横山墓前線	国分台系高屋山	サヌカイト
AN0033	香川県坂出市高屋町横山墓前線	国分台系高屋山	サヌカイト

表 14　黒曜石製石器の元素強度 (cps) と計算された指標値及び原産地推定結果

分析No.	種類	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	log(Fe/K)	産地の推定
1	微細剥片	43.238	6.436	72.063	11.645	3.211	4.954	7.920	41.994	8.931	11.580	0.222	諏訪蓼ヶ台群
2	微細剥片	44.119	5.869	71.858	11.329	3.924	4.931	8.230	39.871	8.167	13.810	0.212	諏訪蓼ヶ台群
3	横長薄片	31.404	4.053	45.531	8.455	2.427	3.596	6.388	40.520	8.902	11.631	0.161	諏訪蓼ヶ台群
4	微細剥片	44.910	6.431	70.867	11.859	4.501	4.257	9.259	39.694	9.075	15.066	0.198	諏訪蓼ヶ台群
5	石鏃	37.885	5.619	55.899	10.337	3.532	3.995	7.990	39.982	10.052	13.661	0.169	諏訪蓼ヶ台群
6	微細剥片	43.885	6.105	70.029	11.463	3.352	4.323	8.620	41.296	8.718	12.076	0.203	諏訪蓼ヶ台群
7	横長薄片	29.702	3.903	43.263	7.946	2.800	3.294	6.786	38.154	9.022	13.445	0.163	諏訪蓼ヶ台群
8	微細剥片	37.400	4.730	59.379	10.734	3.470	3.842	8.268	40.792	7.966	13.187	0.201	諏訪蓼ヶ台群
9	微細剥片	46.257	6.845	70.043	11.898	3.331	4.707	8.937	41.208	9.773	11.537	0.180	諏訪蓼ヶ台群
10	剥片	41.308	5.694	65.425	10.935	3.029	4.649	8.344	40.565	8.703	11.236	0.200	諏訪蓼ヶ台群
11	石鏃	38.295	4.708	74.187	11.554	3.625	4.716	11.029	37.363	6.346	11.722	0.287	和田高松沢群
12	微細剥片	17.245	7.893	403.536	4.812	19.665	1.734	13.149	12.2256	1.9560	49.9619	1.3692	二上山+春日山
13	横長薄片	14.761	5.123	309.508	2.831	16.779	1.142	11.129	8.8799	1.6552	52.6301	1.3216	二上山+春日山
14	石核	15.044	4.798	306.239	3.271	15.390	1.096	10.192	10.9219	1.5668	51.3874	1.3087	二上山+春日山
15	横長薄片	14.595	5.991	322.167	3.223	15.450	0.755	10.840	10.6488	1.8596	51.0434	1.3439	二上山+春日山
16	横長薄片	16.624	6.422	351.866	4.143	18.725	1.370	12.189	11.3734	1.8251	51.4042	1.3256	二上山+春日山
17	石核	17.723	7.263	413.052	5.293	21.450	1.997	13.920	12.4074	1.7584	50.2813	1.3675	二上山+春日山
18	横長薄片	15.350	5.653	319.900	3.230	15.703	1.429	10.573	10.4412	1.7671	50.7613	1.3189	二上山+春日山
19	石核?	14.713	5.593	319.588	3.325	16.456	1.133	10.838	10.4718	1.7501	51.8267	1.3369	二上山+春日山
20	石核	16.735	6.920	360.726	4.193	18.634	1.453	12.812	11.3043	1.9184	50.2372	1.3336	二上山+春日山
21	石鏃	16.838	6.647	376.272	4.214	19.807	1.493	13.559	10.7849	1.7665	50.6923	1.3492	二上山+春日山

いずれも二上山および春日山のサヌカイト領域に分布する。

以上のことから、黒曜石製およびサヌカイト製の各石器は、表 14 に示す原産地が推定された。

引用文献・参考文献

望月明彦 (1999)、上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定、埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2　―上和田城山遺跡篇―、大和市教育委員会、172-179p.

望月明彦 (2002)、茅野市馬捨場遺跡出土黒曜石製石器の産地推定、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 58、広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書―茅野市内―、馬捨場遺跡、長野県埋蔵文化財センター、149-158p.

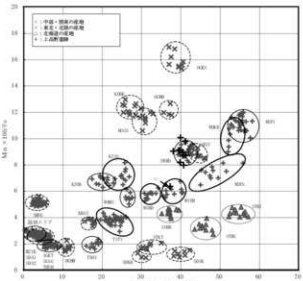


図 100　出土黒曜石製石器の原産地判別図 1

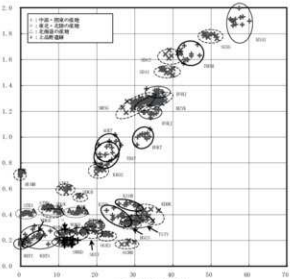


図 101　出土黒曜石製石器の原産地判別図 2

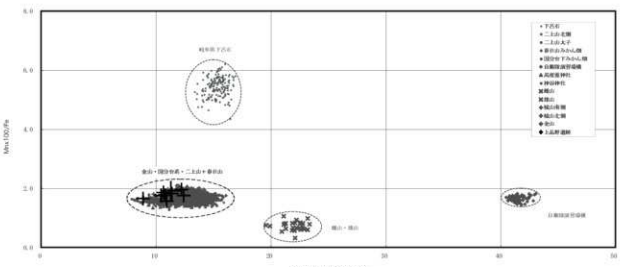


図 102　出土サヌカイト製石器の原産地判別図 1

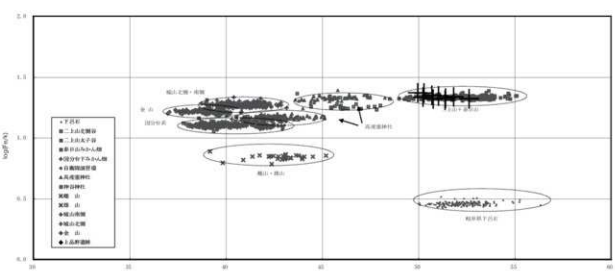


図 103　出土サヌカイト製石器の原産地判別図 2

第７節　上品野遺跡の縄文後・晩期の地層中より産出した昆虫化石

森　勇一（愛知県立津島東高等学校）

１．はじめに

先史～歴史時代の遺物包含層から見いだされた昆虫化石を用い、植生や古環境、人為による自然改変などについての情報を得るための研究は、これまでに多数行われてきた（森 1994・1997・1999）。

本論は、平成 17 年度に開催された愛知万博・瀬戸会場より北方に約 6km、東海環状自動車道路建設に伴う緊急発掘調査に伴って明らかになった愛知県瀬戸市上品野遺跡の縄文時代後・晩期の地層中より産出した昆虫化石とその意義について述べる。

２．試料および分析方法

上品野遺跡は、庄内川水系水野川が形成した河岸段丘上に位置している。遺跡の上空には、南南東より北北西に延びる送電線と、南東–北西方向に延長される送電線が交差していて、遺跡内にも巨大な鉄塔が屹立しているのを観察することができる。遺跡の立地する河岸段丘は、水野川に注ぐ大洞川ないしはその支谷が排出する河道内にあたり、地形のうえでは大洞川とこれに合流する支谷が形成した扇状地であるとみなすこともできる。そのため、上品野遺跡の立地環境は、遺跡東部にそびえる花崗岩の岩巣山（標高 481m）とこれと同じ中生代白亜紀のものと考えてよい花崗岩起源の丘陵地を基盤として、水野川が運んだ中位段丘堆積物（新生代第四紀更新世後期）、およびこれらを開析ないしは被覆するように堆積した大洞川起源の扇状地堆積物（新生代第四紀更新世後期～同完新世）の３者について、検討する必要があろう。

1996 年より 1998 年の３年間の調査によって、上品野遺跡からは、後期旧石器時代・縄文時代晩期～弥生時代中期・古墳時代初頭・古代・中世といった計５時期の遺物や遺構が確認されている。だが、発掘面積に比して、上品野遺跡における遺物の検出量は必ずしも多いとはいえない状況であった。

昆虫分析に供した試料は、96 調査区の NR01 とされる河道内（縄文谷と呼ぶ）に堆積した植物片混じり腐植質シルト層より採取した計 264cm の土壌試料である。試料１は、分析試料の最上部にあたる層厚 40cm 分（湿潤重量 21.0kg）、試料２は、試料１下位の層厚 50cm 分（湿潤重量 17.5kg）、試料３はこの下位にあたる層厚 47cm 分（湿潤重量 20.5kg）、試料４は、試料３下位の層厚 50cm 分（湿潤重量 16.5kg）、試料５は、層厚 45cm 分（湿潤重量 18.5kg）、試料６は、最深部の層厚 32cm 分（湿潤重量 20.2kg）の計６試料であった。昆虫化石の検出にあたり、試料２および試料３、試料５、試料６については、上位より３分割ないし４分割して調査した。

分析試料の堆積年代については、試料５最下部の層準より最大層厚 6mm の松河戸火山灰層（森ほか、1990）が検出されており、その結果、昆虫分析試料は縄文時代後・晩期より弥生時代中期に至る間に堆積したものと考えられる。こうした推定は、発掘調査によって得られた縄文時代晩期

～弥生時代中期にかけての堅果類の貯蔵穴の存在からも裏付けられる。

なお、昆虫分析試料は、いずれも愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭　剛氏により遺跡調査の過程で採取され、同科学分析室の作業員の皆さんの努力で抽出されたものである。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

3．昆虫化石群集

上品野遺跡の分析試料より抽出された昆虫化石は、現時点での集計で計567点であった（表15）。うち、試料1から産出した昆虫化石は3点、試料2からは101点、試料3からは156点、試料4からは35点、試料5からは119点、試料6からは153点が見いだされた。産出した昆虫化石のうち、主なものについては、図版1に実体顕微鏡写真を掲げた。

昆虫化石を分類群ごとにみると、目レベルまで分類できたもの1目10点、科レベル12科196点、亜科レベル3亜科21点、族レベル1族4点、属レベルは10属70点、種まで同定できたものは29種230点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が36点存在する。検出部位別では、鞘翅（Elytron）が最も多く、続いて腿脛節（Legs）・前胸背板（Pronotum）・胸部（Thorax）などであった。

生態別では、食植性の水生昆虫を中心に、食肉性ないし雑食性の地表性歩行虫、陸生の食植性昆虫および食糞性昆虫をまじえる昆虫群集であった。

特徴的な種についてみると、湿地性のネクイハムシとして知られ、カサスゲ・アゼスゲなどに飛来するキヌツヤミズクサハムシ *Plateumaris sericea*（計149点）がほぼ全層準より発見された。キヌツヤミズクサハムシは日本全土に分布するものの本州や九州では山地にかたより、東北地方や北海道などでは低地にも認められる（野尻湖昆虫グループ1985）。高層湿原・池沼・ため池・沢・小規模な湿地・水路など生息範囲は幅広いが、生息場所の適地はハンノキなどが生える湿地内のミズバショウやスゲ類が繁茂する水域内であるとされる。本種は全試料よりまんべんなく発見されており、上品野遺跡における指標昆虫であるといえる。種名が特定できていないが、計30点出現したネクイハムシ亜科 Donaciinae はそのほとんどがキヌツヤミズクサハムシに同定されるべき体節片であろう。また、これ以外に、キヌツヤミズクサハムシ同様湿地のスゲ群落に生息するフトネクイハムシ *Donacia clavareaui*（2点）も検出されている。このほか、水深の浅い止水域に多い食植性のセマルガムシ *Coelostoma stultum*（30点）、樹木や草本類の花粉に集まるアシナガコガネ *Hoplia communis*（8点）などが目立った。

陸生の食植性昆虫では、主に人が植栽した畑作物や果樹、二次林の樹葉や花粉などに集まるドウガネブイブイ *Anomala cuprea*（2点）、サクラコガネ *A. daimiana*（2点）、ヒメコガネ *A. rufocuprea*（1点）、サクラコガネ属 *Anomala* sp.（40点）などが確認された。これ以外の食植性昆虫としては、森林性で樹液に集まるアオカナブン *Rhomborrhina unicolor*（3点）やカナブン属 *Rhomborrhina* sp.（2点）、ミヤマク

表 15　上品野遺跡から産出した昆虫化石

生態		和名	学名	第1層	第2層							第3層				第4層	第5層			第6層				小計	
					①'	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲		
水生	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae								1	2					2				1			6	11
		ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae		1																			1	
		マメゲンゴロウ属	*Agabus* sp.														1							1	
		クロゲンゴロウ	*Cybister brevis* Aube							1														1	
		キベリクロヒメゲンゴロウ	*Rybius apicalis* Sharp																	1				1	
		ミズスマシ属	*Gyrinus* sp.														1							1	
	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae							1							2				1			4	206
		ヒメガムシ	*Sternolophus rufipes* (Fabricius)															1				1		2	
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (Walker)		1	3		4	2	2	3	1	5							2	2	5	30	
		ネクイハムシ亜科	Donacilinae			1		1		1	4						1	9		1		1	18	
		ミズクサハムシ属	Genus *Donacia* Fabricius																					1	
		キヌツヤミズクサハムシ	*Plateumaris sericea* Linne		1	4	1	14	25	29	23	2	6					38	5	1		149	
		フトネクイハムシ	*Donacia clavareaui* Jacobson							1								1				2		
	食糞性	エンマコガネ属	*Onthophagus* sp.					1			2		2	2	1	1		1		1		10	18
		コブマルエンマコガネ	*Onthophagus atripennis* Waterhouse						1				1	1		1						4	
		オオセンチコガネ	*Geotrupes auratus* Motschulsky		3																	3	
		コマグソコガネ	*Aphodius pusilus* (Herbst)											1								1	
	食屍	シデムシ科	Silphidae										1									1	1
地表性	食肉・雑食性	オサムシ科	Carabidae		3	4		3	2	3	13	5	12	5		13	8	3	74				140
		ミカワオサムシ	*Cerabus arrowianus* Breuning															1		1			
		ナガゴミムシ属	*Pterostichus* sp.											1						1			
		トックリゴミムシ属	*Lachnocrepis* sp.							1	1							1		3			
		ツヤヒラタゴミムシ属	*Synuchus* sp.							1	1		1	3				1		7			
		ヒラタゴミムシ属	*Platynini*									1	1	1					1	4			
		ゴミムシマツモリ	*Tenebrionidae*			1														1			
		キマワリ属	*Plesiophthalmus* sp.	1		1							1	1						4			
		ハネカクシ科	Staphylinidae	1		3		1	3	2	10	5	6	2		7			5	45			
陸生	食植性	コガネムシ科	Scarabaeidae		1	2		1	1	1				2		4				12			129
		サクラコガネ属	*Anomala* sp.		4	5	1	1				9	3	10		3	1	3	40				
		サクラコガネ	*Anomala daimiana* Harold					2												2			
		ドウガネブイブイ	*Anomala cuprea* Hope									1		1						2			
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* Motschulsky										1							1			
		カナブン属	*Rhomborrhina* sp.									1	1							2			
		アオカナブン	*Rhomborrhina unicolor* Motschulsky									2					1			3			
		ヒメカンショコガネ	*Apogonia amida* Lewis													1				1			
		ハナムグリ亜科	Cetoniinae					1	1										1	3			
		ヒラタハナムグリ	*Nipponovalgus angusticollis* (Waterhouse)											1						1			
		アオハナムグリ	*Eucetonia roelofsi* (Harold)		1	1														2			
		コアオハナムグリ	*Oxycetonia jucunda* (Faldermann)			3														3			
		アシナガコガネ	*Hoplia communis* Waterhouse		2	2		4												8			
		クロアシナガコガネ	*Hoplia moerens* Waterhouse			1										1				2			
		カミキリムシ科	Cerambycidae										1	2						3			
		ノコギリカミキリ	*Prionus insularis* Motschulsky											1						1			
		ミヤマクワガタ	*Lucanus maculifemoratus* Motschulsky										1							1			
		クマムシ	*Chrysochroa fulgidissima* (Schonherr)										1							1			
		ゴメツキムシ科	Elateridae	1	1	1	1	4		1						5	1	1	16				
		アカアシオオクシコメツキ	*Melanotus cete* Candeze											1						1			
		クシコメツキ	*Melanotus legatus* Candeze							1			1							2			
		ハムシ科	Chrysomelidae			2		2		1	1		3	5	1	2				17			
		バラルリツツハムシ	*Cryptocephalus approximatus* Baly							1										1			
		ゾウムシ科	Curculionidae							1	1							1		4			
その他		シアオカメムシ	*Pentatoma japonica* Distant							1										1			62
		オオアメンボ	*Gerris elongatus* Uhler											1						1			
		アリ科	Formicidae							1	1	3	2	2		4				13			
		クロオオアリ	*Camponotus japonicus* Mayr													1				1			
		双翅目	Diptera			1			1		3	1		1		1	2			10			
		不明甲虫	Coleoptera		1	4		1	2		2	4	7	5	1	6	3			36			
		合計		3	19	39	3	40	40	49	67	35	57	57	5	102	28	23		567			

（検出部位凡例）H(Head):頭部　An(Antenna):触角　M(Mandible):大顎　S(Scutellum):小楯板　P(Pronotum):前胸背板　C(Chrysalis):蛹殻
E(Elytron):鞘翅　W(Wing):上翅　T(Thorax):胸部　A(Abdomen):腹部　L(Leg):脚腹部　O(Others):その他

ワガタ *Lucanus maculifemoratus*（1 点）をはじめ、同じく森林性と考えてよい大型のハナムグリ亜科 Cetoniinae（3 点）、カミキリムシ科 Cerambycidae（3 点）などが発見され、ほかにエノキやヤマザクラの古木などに多いタマムシ *Chrysochroa fulgidissima*（1 点）が発見された。アシナガコガネ同様、樹木や草本類の花粉を食するアオハナムグリ *Eucetonia roelofsi*（2

点)、コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda*（3点)、クロアシナガコガネ *Hoplia moerens*（2点）などの訪花性昆虫や、植物を中心に雑食性で森林内より発見されることが多いアカアシオオクシコメツキ *Melanotus cete*（1点），クシコメツキ *Melanotus legatus*（2点）をはじめコメツキムシ科 Elateridae（16点)、バラ科の葉上に多いバラルリツツハムシ *Cryptocephalus apooroximatus*（1点)、およびゾウムシ科 Curculionidae（4点）なども確認されている。

地表性昆虫では、人糞や大型草食獣の糞に来集する食糞性のオオセンチコガネ *Geotrupes auratus*（5点)、同じく人糞に多いコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*（4点），ほぼ同種と考えてよいエンマコガネ属 *Onthophagus* sp.（10点)、コマグソコガネ *Aphodius pusilus*（1点）などのほか、食屍性昆虫では、生ゴミや獣糞に集まるハエのウジなどを食するシデムシ科 Silphidae（1点）などが認められた。

いっぽう、同一試料中より自然度の高い林床内を徘徊する夜行性のミカワオサムシ *Carabus arowianus*（1点)、同じような環境に生息するナガゴミムシ属 *Pterostichus* sp.（1点)、およびキマワリ属 *Plesiophthalmus* sp.（4点）などが検出されている。

これ以外の地表性昆虫では、湿潤地表面を好むトックリゴミムシ属 *Lachnocrepis* sp.（3点)・ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.（7点)・ヒラタゴミムシ族 Platynini（4点）などが見いだされた。これらはいずれも水辺に多い歩行虫である。

食肉性の水生昆虫では中ないし大型のキベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis*（1点）やクロゲンゴロウ *Cybister brevis*（1点)、ミズスマシ属 *Gyrinus* sp.（1点）などが、また食植性の水生昆虫ではガムシ科 Hydrophilidae（4点)、ヒメガムシ *Sternolophus rufipes*（2点）などが検出されている。大型のゲンゴロウ *Cybister japonicus* やガムシ *Hydrophilus acuminatus* などは発見されなかった。

4．昆虫群集が示す古環境とその意義

上品野遺跡の分析試料より得られた昆虫化石群集に、キヌツヤミズクサハムシが多数認められたことから、縄文時代後・晩期から弥生時代にかけてのころ、傾斜の小さな河谷（縄文谷と呼ぶことにする）中には水深の浅い湿地が継続的に存在したことが分かる。湿地内にはところどころにハンノキが繁茂し、縄文谷のあちこちにミズバショウやカサスゲなどの生育に適した清澄な湧き水が見られたことだろう。

ミヤマクワガタやアオカナブン・タマムシ・アシナガコガネなどといった森林性の昆虫の発見から、遺跡周辺の丘陵地にはクヌギ・コナラ・エノキなどから成る落葉広葉樹林が成立していたと考えられる。

人糞や大型草食獣の糞に集まるオオセンチコガネや、裸地的環境下の人糞に多いコブマルエンマコガネをはじめ食糞性昆虫も一部に認められたがその出現比率はきわめて小さく、そのため、人間生活が周辺環境に与えた影響は軽微なものであったと考えられる。この時期、人は縄文谷をドングリの貯蔵のために利用することはあっても、生活の根拠地は他の場所に求めていたと推定される。

陸生の食植性昆虫の中に、人の介在した二次林や果樹などの樹葉を加害するヒメコガネ・ドウガ

ネブイブイ・サクラコガネ・ヒメカンショコガネはじめ人里昆虫が含まれることから、縄文時代後・晩期のころ、周辺植生に対する人の干渉はすでに行われていたことが考えられる。

次に、松河戸火山灰層（3120±120yearsBP）降灰に伴う水域内や周辺植生に対する影響について考える。幸い本分析試料中には、肉眼にて松河戸火山灰層の堆積を確認することができる好試料（試料５の下部）が認められた。試料５の下部を挟みこの上下の地層中の昆虫化石群集をみると、松河戸火山灰層を含む6.17kgの分析試料では昆虫化石の出現率が0.8点／1kgときわめて乏しいことが分かる。加えてこの層準では、すべての試料を通じ優占種として産出していた湿地性のキヌツヤミズクサハムシはまったく確認されなかった。こうした傾向は、松河戸火山灰層を含む試料（試料５の下部）上位の地層（試料５の中部）にも及んでおり、〔試料５の下部〕ではキヌツヤミズクサハムシを欠く昆虫組成となっている。このため、わずか6mmにも満たない火山灰層が上品野遺跡周辺の丘陵地上や水域内に降り注いだ影響は、相当大きかった可能性が考えられる。なお、松河戸火山灰層の降灰に伴う環境変化については、愛知県春日井市における松河戸遺跡の遺物包含層からも報告されている（森1995）。

5．まとめ

上品野遺跡の遺物包含層より産出した昆虫化石を同定・分析し、その群集組成から当時の古環境を復元した。昆虫群集は、湿地性のキヌツヤミズクサハムシが優占し、これにサクラコガネ属・コガネムシ科・ハムシ科・コメツキムシ科・クロアシナガコガネなど陸生の食植性昆虫と、止水性の水生昆虫であるセマルガムシが随伴するものであった。

この結果、傾斜の小さな縄文谷中には清澄な水が常に涵養されており、カサスゲ・ミズバショウなどが繁茂する止水域が継続的に存在した可能性が考えられる。遺跡の周りの丘陵地にはクヌギやコナラなどの落葉広葉樹が生えていたことが、ミヤマクワガタ・アオカナブンといった森林性昆虫の出現によって推定される。

約3000年前、上品野遺跡に降灰した松河戸火山灰層は水域内の環境を大きく変え、この結果生物組成に多大な影響を与えたことが昆虫分析によって明らかになった。今後は、こうした環境変化について、珪藻分析や花粉分析などを実施することによって検証していきたい。

文　献

森　勇一（1994）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元．第四紀研究、33(5)、331-349.

森　勇一（1995）珪藻分析に基づく古環境復元．新しい研究法は考古学になにをもたらしたか（改訂版）、クバプロ、61-70.

森　勇一（1996）稲作農耕と昆虫．季刊考古学第56号、特集・稲作の伝播と長江文明、雄山閣、59-63.

森　勇一（1997）虫が語る日本史-昆虫考古学の現場から．インセクタリウム、34(1)・34(2)、18-23、10-17.

森　勇一（1999）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史．国立歴史民俗博物館研究報告第81集「歴博国際シンポジウム論文特集号」、311-342.

森　勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣（1990）愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について．第四紀研究、29、17-23.

野尻湖昆虫グループ（1985）日本のネクイハムシ-化石同定への手引き．182p.

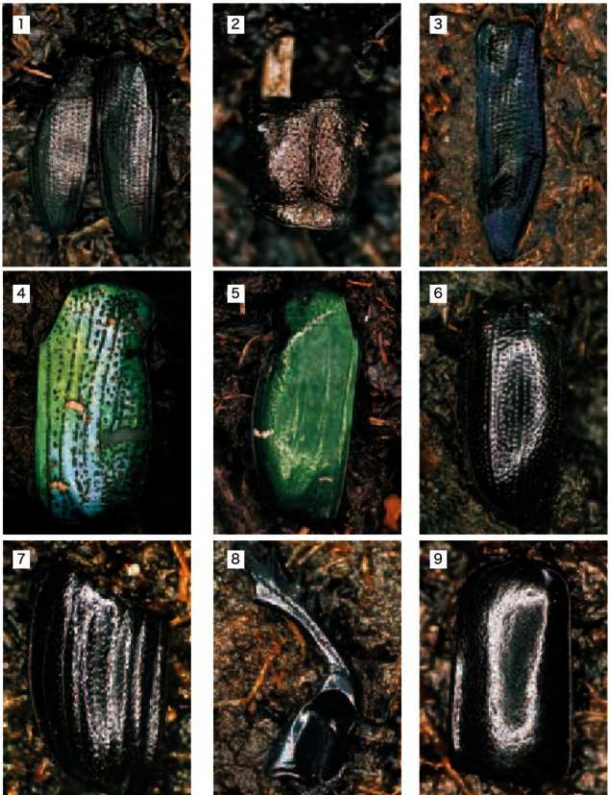


写真5　上品野遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真

1．キヌツヤミズクサハムシ *Plateumaris sericea* Linne
左右上翅　長さ 6.2mm（IKH 2 –中：標本 16）

2．キヌツヤミズクサハムシ *Plateumaris sericea* Linne
前胸背板　長さ 1.8mm（IKH 5 –上：標本 3）

3．フトネクイハムシ *Donacia clavareaui* Jacobson
右上翅　長さ 7.2mm（IKH 5 –上：標本 100）

4．アオハナムグリ *Eucetonia roelofsi* (Halord)
左上翅　長さ 14.2mm（IKH 2 –2：標本 5）

5．コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* Faldermann
右上翅　長さ 9.8mm（IKH 2 –2：標本 23）

6．ヒメカンショコガネ *Apogonia amida* Lewis
左上翅　長さ 7.4mm（IKH 6 –上：標本 71）

7．コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse
左上翅　長さ 3.5mm（IKH 6 –上：標本 33）

8．オオセンチコガネ *Geotrupes auratus* Motschulsky
脚節節 節節の長さ 5.1mm（IKH 2 –①：標本 10）

9．ハネカクシ科 Staphylinidae
右上翅　長さ 3.2mm（IKH 5 –上：標本 51）

現在の上品野遺跡 (東海環状自動車道　せと品野 IC 付近)

第６章　総括

第１節　上品野遺跡の時期的変遷

上品野遺跡では、第２・３章で述べたように後期旧石器時代初頭から中世・戦国期までの遺構・遺物が検出・出土した。窯業遺跡の調査が多い瀬戸市域において、このように一遺跡から通史を追うことのできる遺跡の調査事例はそれほど多くないといえる。

今回の調査成果には、一遺跡の事情にとどまらず、東海地域全体を考える上で重要な事柄が含まれている。ここでは各時代の調査成果の中で、特筆される事柄についてさらに詳細に検討・考察し、遺跡調査の成果として提言を行いたい。

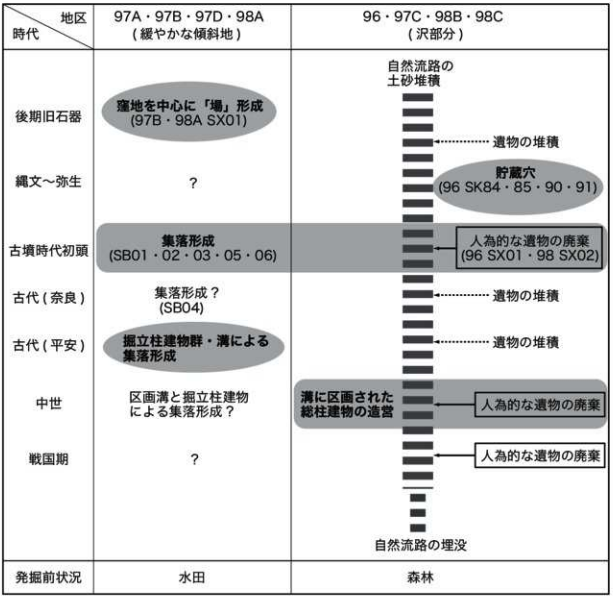


図 104　上品野遺跡遺跡変遷図

第２節　各時代の歴史的位置づけとその意義

a. 後期旧石器時代の石器群について

当石器群には、Ⅰ期とⅢ期の石器群が混在している可能性を指摘した。これらは、石器の型式学的検討と遺物の分布状況から、各時期に帰属する石器群の峻別がある程度可能であることをも指摘した。

しかし、今回の石器群は 97B・98A SX01 谷状地形付近出土石器を中心にⅠ期に属するものが主体である。器種としては、台形様石器・掻器・削器・使用痕剥片・その他剥片類・石核・局部磨製石斧・礫器がある。一方で、谷状地形付近の堆積層中の火山灰分析により、石器包含層は K-Tz ～ DKP 降灰期以降かつ AT 降灰期以前であることも明らかになっている。

この時期の資料としては、東海地域ではほかに岐阜市寺田遺跡で「寺田Ｋ１」として抽出された資料 (西村 1999)、静岡県では沼津市中見代Ⅰ遺跡の第Ⅴ文化層 (高尾 1989) などがある (註 1)。また中部高地では日向林Ｂ遺跡・貫ノ木遺跡などの野尻湖遺跡群 (谷ほか 2000・大竹 2000) が見られるほか、近畿地域では兵庫県篠山市板井寺ケ谷遺跡や小野市勝手野遺跡、大阪府長原遺跡 14 層 (趙・藤田 1991、絹川 1999) などが知られている。以下、これらの資料と比較して、97B・98A SX01 石器群を検討する。

まず、出土石器器種では、上品野遺跡 97B・98A SX01 では、磨石・敲石・砥石が確認されていない。それに関連する礫群の出土も見られない。また、調査では被熱痕や炭化物の検出もされていない。97B・98A SX01 は遺物分布の東端部分が調査されたのみで、全容が明らかになったわ

表 16　東海・中部高地後期旧石器時代初頭遺跡一覧

遺跡名	層・遺構番号など	所在地	構成器種 (報告書などの記載のママ)	剥片石器石材 (報告書記載のママ)	遺物の出土状況	礫群(配石)	炭化物	備　考	文　献
中見代第Ⅰ遺跡	第Ⅴ文化層	静岡県 沼津市	台形様石器・ナイフ形石器・掻器・削器・抉入石器・楔形石器・石核・剥片・局部磨製石斧・打製石斧・敲石	黒曜石主体、その他に緑色凝灰岩・安山岩・頁岩	8ヶ所のブロックに分かれ、それが環状ブロックを形成	5ヶ所のブロックに存在	4ヶ所		高尾1989
貫ノ木遺跡	Ⅰ石器文化	長野県 信濃町	台形石器・ナイフ形石器・彫器・掻器・削器・石刃・楔形石器・斧形石器・剥片・石核・剥片・砕片・敲石・砥石など	無斑晶質安山岩主体、その他に黒曜石・チャート・凝灰質頁岩・頁岩・下呂石など	約90ヶ所近くのブロックを形成	多数	第4地点で約10ヶ所		大竹2000
日向林Ｂ遺跡	Ⅰ石器文化	長野県 信濃町	台形石器・ナイフ形石器・彫器・掻器状石器・背部状刃器・抉入削器・鋸歯縁状削器・楔形石器・掻器器・斧形石器・剥片・石核・剥片・砕片・敲石・敲石・砥石など	黒曜石主体、その他に玉髄・珪質頁岩・チャート・石英など	30ヶ所のブロック	各ブロックに存在(合石・敲石・敲石か)	多く存在	多量に出土した斧形石器はすべて蛇紋岩製	谷ほか2000
寺田遺跡	「寺田Ｋ１」	岐阜県 岐阜市	「ナイフ形石器あるいは台形様石器のバリエーションと思われる石器」、局部磨製石斧		Ⅳ期-Ⅴ期のブロック外から出土				西村1999
上品野遺跡	97B・98A SX01	愛知県 瀬戸市	台形様石器・掻器・削器・使用痕剥片・その他剥片類・石核・局部磨製石斧・礫器	チャート主体、その他サヌカイト・下呂石・黒曜石・石英(水晶)	「谷状地形」を中心に展開	検出されず	確認されず		

(註 5) そのほかには、三重県多気町内垣外遺跡の下層から出土した石器群 (西出 1997) が、97B・98A SX01 石器群と「同時期もしくはそれより古い段階に位置づけられる」ともいわれている (西村ほか 2005 の長屋氏発言)。定形的な製品はないものの剥片・石核が出土しており、使用石材は数点がサヌカイトや頁岩である以外は、すべてチャートとのことである。なお、この遺跡では炭化物の出土と、礫群の検出が報告されている。

けではない。しかし、谷状地形から出土していることと明確なブロックが見られない出土状況は、この石器群の存在を考える上で考慮しなくてはならないであろう。

また、97B・98A SX01 における剥片石器石材ではチャートが主体であり、これは寺田遺跡K 1や三重県の後期旧石器全般の傾向 (奥 1984) に符合する。チャートの中には、台形様石器の素材剥片と想定しうる、横長気味の貝殻状剥片を作出しているものが、いくつか見られることは報告した。使用石材において黒曜石が主体である日向林B遺跡などでも同様に、横長気味の貝殻状剥片を作出したと考えられる板状石核やサイコロ状の石核が多く報告されている。石材の違いはありながら、同様の石器製作を行っていたと考えられる。また、チャート石材の搬入は、素材剥片の段階のものも一部あった可能性があるものの、礫の状態が主体であった可能性が高い。一方、サヌカイトについては若干異なるようである。剥片の作出は、板状剥片の段階から行っているようであり、板状剥片の状態で、当地に搬入されたものと考えられる。このような板状剥片による石材搬入は、大阪府長原遺跡など近畿地方中央部と同様の状況なのかもしれない (山口 2003)。

また、使用石材に関して、溶結凝灰岩の不使用が注目される。縄文時代草創期の良好な石器群が出土した品野西遺跡 (岡本編 1997) では、「(珪質) 頁岩」と報告されている白色の石材がかなりの割合を占める。「(珪質) 頁岩」の中には、この報告でいう「溶結凝灰岩」と同質のものが多数を占めているようで、溶結凝灰岩の使用度合いの高さが窺えられる。縄文早期後半の表裏条痕文期を主体とする八王子遺跡でもこの石材の使用頻度が高かったものの (武部編 2003)、早期末以降の長谷口遺跡 (永井編 2004a)・吉野遺跡 (永井編 2004b) では、この石材の使用が希少になる。溶結凝灰岩の流入状況を考える上で、注目される事例となろう。

b. 東海地域における貯蔵穴について

上品野遺跡では、96NR01 において縄文時代晩期中葉から弥生時代中期中葉までに属すると思われる貯蔵穴が 4 基見つかっている (註 2)。この時期はコメに代表される水田耕作など農耕の開始時期であり、当時期の植物質食料の利用に関連して、注目される事例といえる。

表 17 は愛知・岐阜・三重・静岡の東海 4 県で検出された貯蔵穴や植物質食料利用に関連する遺構出土の主要遺跡一覧である。すべて湿型であり、乾燥型のものはない。宮ノ前遺跡など飛騨地域では縄文中期後半から見られるようであるが、朝日遺跡の縄文後期前葉をはじめ、後期後葉から弥生前期までの事例が知られている。弥生前期の例として知立市西中神明社南遺跡例がある (岡本ほか 1992)。ここではクヌギ・アベマキというよりより複雑なアク抜き技術を必要とする堅果類が出土している。上品野遺跡で出土したシラカシ・イチイガシ・アカガシ・コナラといった堅果類と合わせると、弥生時代にも各種の堅果類が食用に利用されていたことが窺えられる。

一方、東海地域周辺では、弥生時代以降の事例がいくつか知られている。まず縄文時代晩期末の例として、石川県鹿島郡田鶴浜町三引C・D遺跡、弥生前期では大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡や石川県金沢市藤江C遺跡、弥生中期と思われる事例としては奈良県橿原市から桜井市にまたがる坪井・

大福遺跡例がある。三引遺跡例ではトチが主体のようで、藤江C遺跡例ではクルミが主体であるようである。弥生時代以降の堅果類利用は、地域的に限定されることなく広く行われていたことが想定される。

この時期に対応するその他遺構群は今回の調査では見つからなかった。しかし付近からは有茎鏃も出土しており(153・154)、馬の背状の高台部の東側延長上、現在山林になっている未調査区域などに当時期の遺構群が展開していることも想定される。

表 17　東海地域の貯蔵穴および関連遺構出土遺跡一覧表

遺跡名	所在地	時期	立地	出土遺構(基数)	出土遺物	出土種子	備考
清水天王山遺跡	静岡県清水市	縄文後期後葉～晩期前半	低湿地	ピット(16)		クリ・トチ・イチイガシ	
坂田北遺跡	静岡県周智郡森町	縄文後期後葉	低湿地	ピット(3)		クリ主体	
宮ノ前遺跡	岐阜県古城郡宮川村	縄文中期後半	低湿地	ピット(2)・清水ポット(1)		ピット内はオニグルミ主体。清水ポット周辺からはコナラ属堅果類が大量出土	
たのもと遺跡	岐阜県大野郡丹生川村	縄文晩期	低湿地	水場遺構(1)	土器・石器	トチ・クルミ	クリ材の出土
カクシクレ遺跡	岐阜県大野郡丹生川村	縄文晩期前半	低湿地	水場遺構(1)・ピット(1)	土器	トチ・クルミ	水場遺構は方形の木組みを有す
西北出遺跡	愛知県岩倉市	縄文後期中葉	低湿地	ピット(1)	土器	アラガシ・マテバシイ	
朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町ほか	縄文後期前葉	低湿地	ピット(2)	土器	クヌギ・アベマキ	1基は土器埋設土坑に転用
富士見町遺跡	愛知県名古屋市中区	縄文晩期中葉	低湿地	水場遺構(1)	土器・石器	魚骨・クルミ・クリ	杭・丸太・板材出土
見晴台遺跡	愛知県名古屋市南区	縄文晩期後半	低湿地	ピット(3)	土器	トチ・クリ・クルミ	
トゝメキ遺跡	愛知県東海市	縄文後期中葉	低湿地	ピット(1)		クヌギもしくはアベマキ・ミズナラもしくはコナラ	
上品野遺跡	愛知県瀬戸市	縄文晩期中葉～弥生中期中葉	低湿地	ピット(4)	土器	シラカシ・イチイガシ・アカガシ・コナラ属・トチノキ・クリなど	
西中神明社南遺跡	愛知県知立市	弥生前期	低湿地	ピット(5)	土器	クヌギ・アベマキ	
日陰田遺跡	愛知県東加茂郡足助町	縄文中期後半	低湿地	ピット(1)		オニグルミ・クリ・コナラ? ・アカガシ・アラカシ・シラカシ・ツクバネガシ・トチなど	
中村遺跡	愛知県北設楽郡稲武町	縄文後期後葉	低湿地	ピット(8)		コナラ主体・クヌギ・アベマキ・ナラガシワ	
城下遺跡	愛知県宝飯郡一宮町	縄文晩期中葉		ピット(1)	多量の石材		
森脇遺跡	三重県上野市	縄文後期後葉	低湿地	ピット(9)	土器	カシ類・トチ	多量の木材出土

c. 品野地域における弥生後期から古墳時代初頭の動向

上品野遺跡では、古墳時代初頭の竪穴住居跡が5軒検出され、この時期には当地に集落が形成されたようである。品野盆地周辺では、これまでの調査でも当時期の遺構・遺物が各所で散発的に見られるようである。上品野遺跡では以前の調査でも若干の遺物出土が報告されている(山下編1990)。上品野蟹川遺跡では、自然流路から台付甕・壺・高坏が出土している(岡本編1998)。品野西遺跡では、自然流路内から台付甕・直縁壺が出土している(岡本編1997)。また落合橋南遺跡では、古墳時代初頭とされる竪穴住居跡が1軒検出されている(金子編1998)。

まず注目すべきことは、上品野蟹川遺跡・品野西遺跡での自然流路から出土した遺物群についてである。これらの遺跡では壺形土器などが良好な状態で出土しており、水流により遠方の別地点から遺物が流入した状況ではなく、当地に近い場所で遺物が入った可能性が高く、上品野遺跡 96 SX01・98 SX02 の状況に類似すると考えられる。これらは自然流路内へ意図的に入れられた可能性が高い。ここでは小規模な祭祀的行為による結果である可能性を指摘しておく。

次に竪穴住居跡についてである。落合橋南遺跡例は後世の削平が著しいものの、南北約 4.2m 東西約 4.8m の方形プランであることが報告されている。周囲には壁溝が巡るなど、規模・形状などにおいて上品野遺跡例に類似する。上品野遺跡では竪穴住居群が調査区外のさらに西側に展開するものと考えられ、居住域としては「緩やかな傾斜地」のさらに下位の区域に広がっていたものと想定される。落合橋南遺跡でも、本来は同様の住居群を形成していたものと考えられる。

上記の想定をまとめると、「緩やかな傾斜地」に展開する居住域と、「沢部分」で行われた小規模な祭祀行為の跡との組み合わせが考えられるのかもしれない。また、前回の調査で袋状鉄斧が報告されているがこの時期のものである可能性が考えられる (山下編 1990)。

d. 平安時代の品野地域素描

品野盆地では、これまでの調査により古代の遺構・遺物が多く知られている。前回の上品野遺跡でも須恵器・灰釉陶器・木製品が出土している。

今回、検出された遺構群について、竪穴住居 (97B SB04) などの遺構を除いて、多くは虎渓山 1 号窯式およびその前後の時期に展開したものと考えられる。さらに細かい遺構変遷を提示できないものの、98A SD02 と 98A SB15 の関係などからも、遺構群は同時存在ではなく、比較的短い時間幅で立替えや配置替えが行われたと考えられる。「根石を有する掘立柱建物群 (総柱建物をも含む) が並立し、側には溝で区画された空間がある」というのが、概略的なイメージである。

今回の調査でも墨書土器が出土している。97B・98A SD01 を中心に見られることから、この溝が墨書土器を用いた「祭祀」の中心的役割を担った可能性がある。墨書の内容は「吉」が圧倒的多数を占めるなか、「春」「用」「山」もある。前回の調査は、この 97B・98A SD01 とは若干離れた場所である。墨書土器では上記以外で、「東」「財万 (か ?)」などが出土しており、また馬形などの木製品も出土している。

また、フイゴの羽口の出土も注目される。今回の調査では滓は出土していないものの、集落内で小鍛冶が行われた可能性があろう。また、98A SB02 からは管状土錘がまとまとって出土している。付近の河川および沼地などで網漁業が行われたと考えられるが、共に灰釉陶器などが廃棄されており、この遺物の出土には別の意味が付加されている可能性もある。

前回の上品野遺跡の調査報告でも「本遺跡が官衙的遺跡ではないにせよ品野盆地を中心とした地域の中心的存在であった可能性を示唆している」と報告している (山下 1990)。今回の調査成果でも、このことを裏付ける形となっており、水野川を挟んで対岸の上品野蟹川遺跡など近隣の遺跡を含めた総合的な検討が、今後の課題である。また、その時には当地が後世に「中馬街道」といわれる

街道沿いに立地していることも合わせて視野に入れなくてはならないであろう。

e. 中世山茶碗における使用・廃棄の「場」について

今回、中世以降の遺構・遺物出土の中心は、96区以南の「沢部分」である。馬の背状の高台部分には総柱建物とその四方を区画する溝があり、溝内や付近の自然流路内には大量の遺物がまとまって出土した。出土遺物は水流などによる摩滅は少ないばかりか、完形あるいは完形に近い状態のものが多い。遺物は山茶碗(南部系山茶碗での5型式～7型式の時期)が主体であり、内面・外面には炭化物によると思われる黒色化が見られるものが多い。また一部には底面外部に墨書が施されているものもある。

この遺構群の立地・建物構造および遺物の出土状況などから、この一群は宗教的な建物群である可能性も考えられる。特徴的な事柄は、自然流路内での遺物のあり方である。

自然流路内からのこのような遺物出土状況の類例に、近年調査された惣作・鐘場遺跡04E区の事例がある。ここは、自然流路に対する護岸状の杭列の近辺に、摩耗の程度が低い山茶碗が大量に出土している。この山茶碗には内面・外面には炭化物によると思われる黒色化が見られるものが多い。また、木製品として、漆碗・下駄・尺などが出土している。これらの主体となる時期は南部系山茶碗での5型式～7型式の時期と考えられる。

今後、このような類例が検出された場合、まずは遺跡ごとの検証が必要である。その上で、これらの事象の意味について、ある程度共通した要素が抽出できるかどうかが、今後の課題となろう。

参考文献

赤塚次郎編 ,1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

井上喜久男 ,1992『尾張陶磁』東京 ニューサイエンス社。

大竹憲昭 ,2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15―信濃町内その 1―貫ノ木遺跡・西岡 A 遺跡』長野県埋蔵文化財センター。

尾野善裕 ,1999「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』96.163 ～ 176 頁。岐阜史学会。

岡本茂史ほか 1992『西中神明社南遺跡』知立市教育委員会。

岡本直久編 ,1997『品野西遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター。

岡本直久編 ,1998『上品野蟹川遺跡―品野台小学校移転に伴う発掘調査―』瀬戸埋蔵文化財センター。

奥　義次 ,1984「三重県の遺跡」『日本の旧石器文化』3.56 ～ 76 頁。東京 雄山閣出版。

小田静夫 ,2003『日本の旧石器文化』東京 同成社。

加納俊介・石黒立人編 ,2002『弥生土器の様式と編年 東海編』東京 木耳社。

金子健一編 ,1999『上品野蟹川遺跡 II』瀬戸市埋蔵文化財センター。

河合君近編 ,1998『落合橋南遺跡 II』瀬戸市埋蔵文化財センター。

川添和暁 ,2005「上品野遺跡調査報告 (県建設部分)」『平成 16 年度 愛知県埋蔵文化財センター年報』愛知県埋蔵文化財センター。

絹川一徳 ,1999「大阪市長原遺跡 14 層出土石器群について」『「蠣石島技法」の再検討』第 23 回近畿旧石器交流会資料。

齊藤基生 ,2001「上品野遺跡」『愛知県史 資料編 1 旧石器・縄文』102 ～ 103 頁。愛知県。

城ヶ谷和広編 ,1992『小田妻古窯跡群』愛知県埋蔵文化財センター。

鈴木冨美夫ほか 1992『中村遺跡発掘調査報告書』稲武町教育委員会。

瀬戸市史編纂委員会 ,1986『瀬戸市史　資料編二　自然』瀬戸市。

瀬戸市教育委員会文化財課 ,1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』瀬戸市教育委員会。

高尾好之 ,1989『中見代第 I 遺跡発掘調査報告書 (足高尾上 No.5 遺跡)』沼津市教育委員会。

武部真木編 ,2003『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

谷和隆ほか ,2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 15―信濃町内その 1―日向林 B 遺跡・日向林 A 遺跡・七ツ梨遺跡・大平 B 遺跡』長野県埋蔵文化財センター。

趙哲済・藤田幸夫 ,1991「中谷芳蔵氏による建築工事に伴う長原遺跡 (NG90-62 次) 調査略報」『平成 2 年度大阪市内埋蔵文化財包含地発掘調査報告書』185 ～ 194 頁。大阪市教育委員会。

永井宏幸編 ,2004a『長谷口遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

永井宏幸編 ,2004b『吉野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

永井宏幸編 ,2005『鳳山 C 窯跡　窯作・鐘場遺跡 I』愛知県埋蔵文化財センター。

西村勝広 ,1999「濃尾平野北部における旧石器時代の石器編年―調査・研究の到達点―」『岐阜史学』96. 1 ～ 20 頁。岐阜史学会。

西村勝広・齊藤基生・長屋幸二・野口淳・森勇一ほか ,2005「シンポジウム「東海の旧石器時代」」『東海石器研究』

3.10～36頁。東海石器研究会。

西出　孝,1997『内垣外遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター。

日本旧石器学会,2003『後期旧石器時代のはじまりを探る』日本旧石器学会 第1回シンポジウム予稿集。

服部信博編,1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

樋上　昇編,2001『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

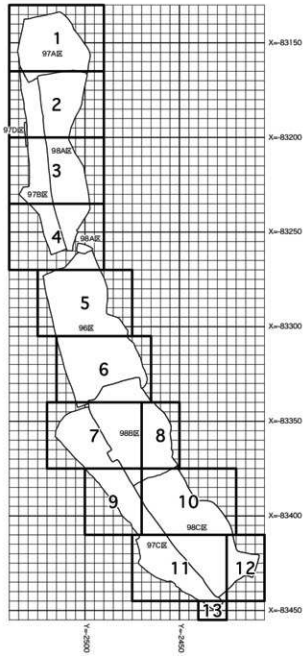
藤澤良祐,2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』10.53～175頁。瀬戸市埋蔵文化財センター。

松澤和人編,1997『落合橋南遺跡Ⅰ』瀬戸市埋蔵文化財センター。

山口卓也,2003「近畿地方における後期旧石器初頭の文化」『後期旧石器時代のはじまりを探る』日本旧石器学会 第1回シンポジウム予稿集。22～27頁。日本旧石器学会。

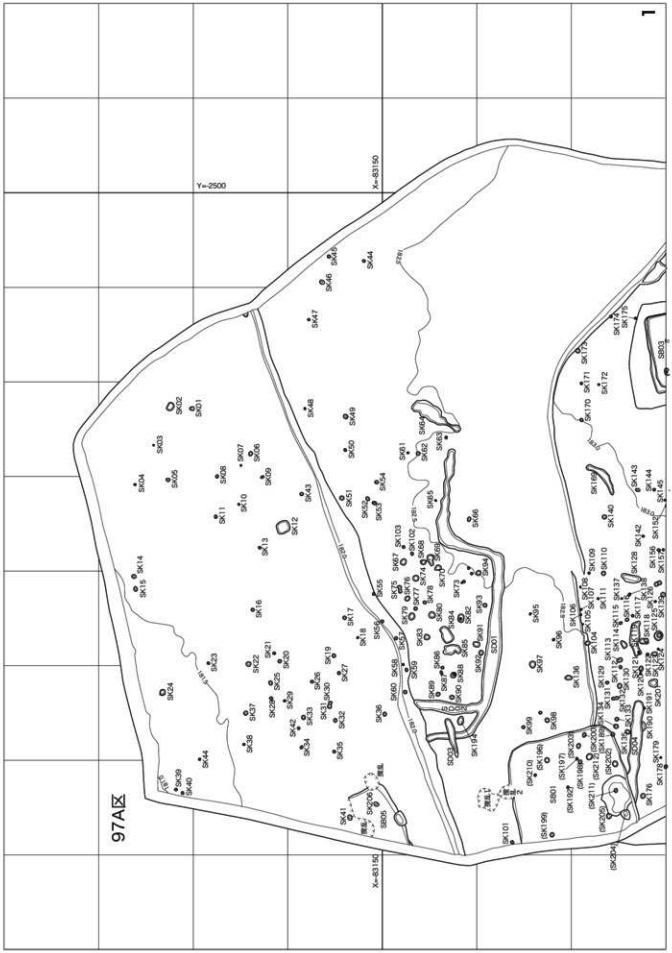
山下峰司編,1990『上品野遺跡―中部電力株式会社「電名北豊田線」No.51鉄塔地点―』瀬戸市教育委員会。

遺構・写真図版



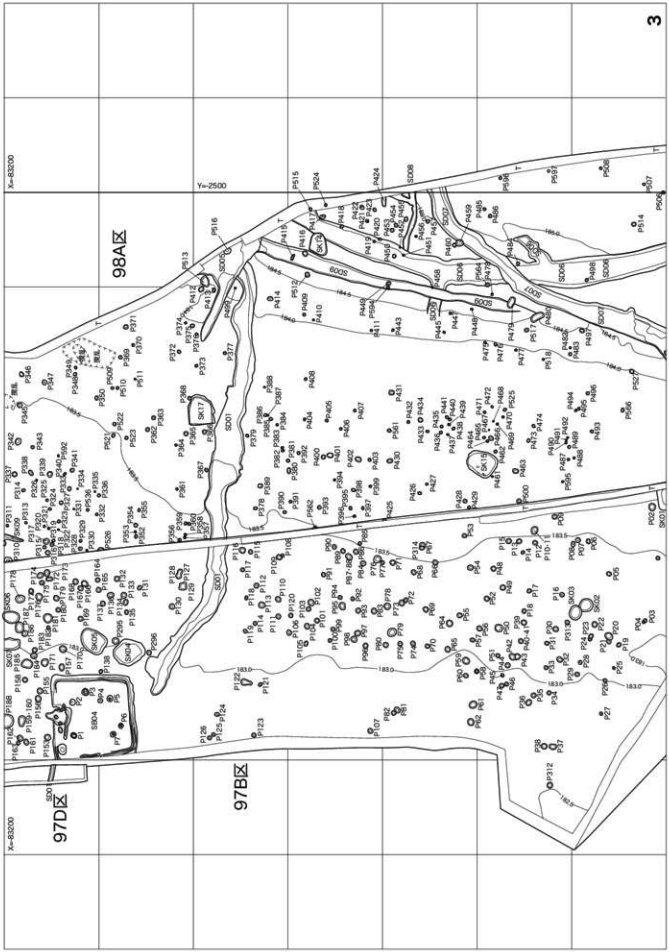
遺構図版割付図

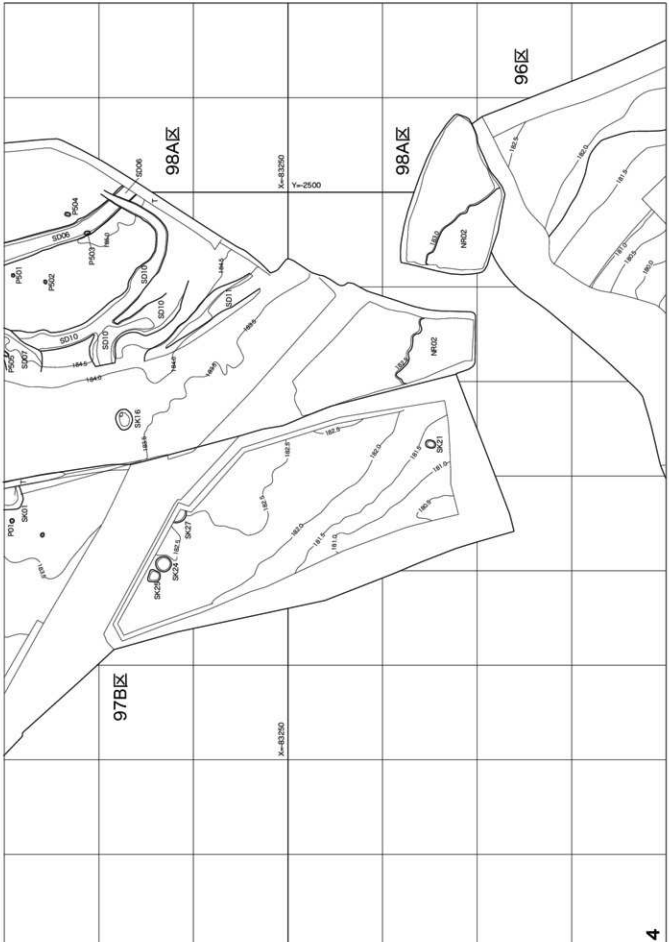
遺構図版 1



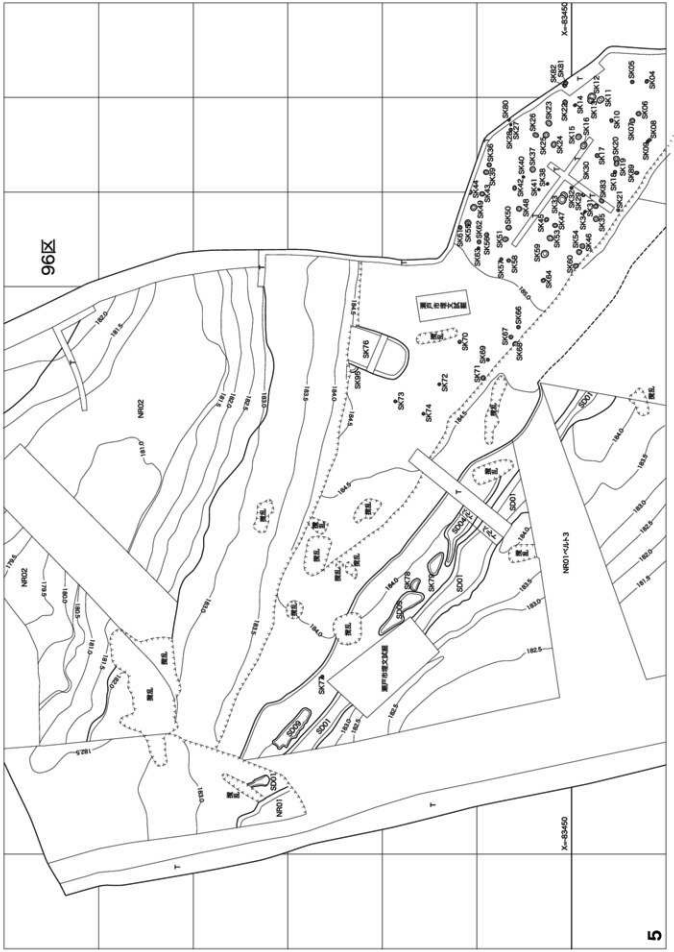
2
98A区
97A区
97B区
97D区
Y=2500
X=83200
X=83200

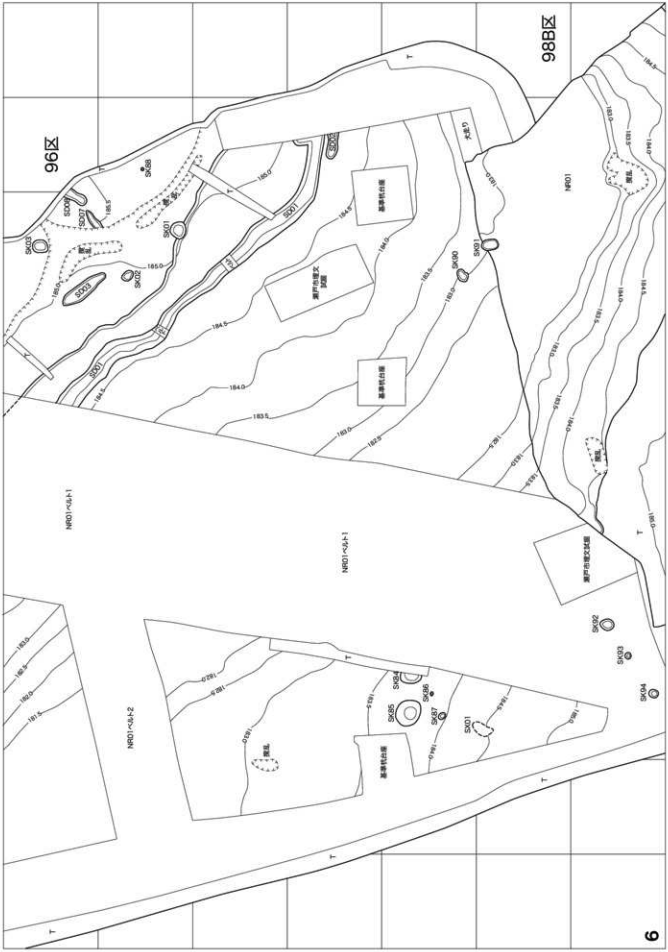
遺構図版３



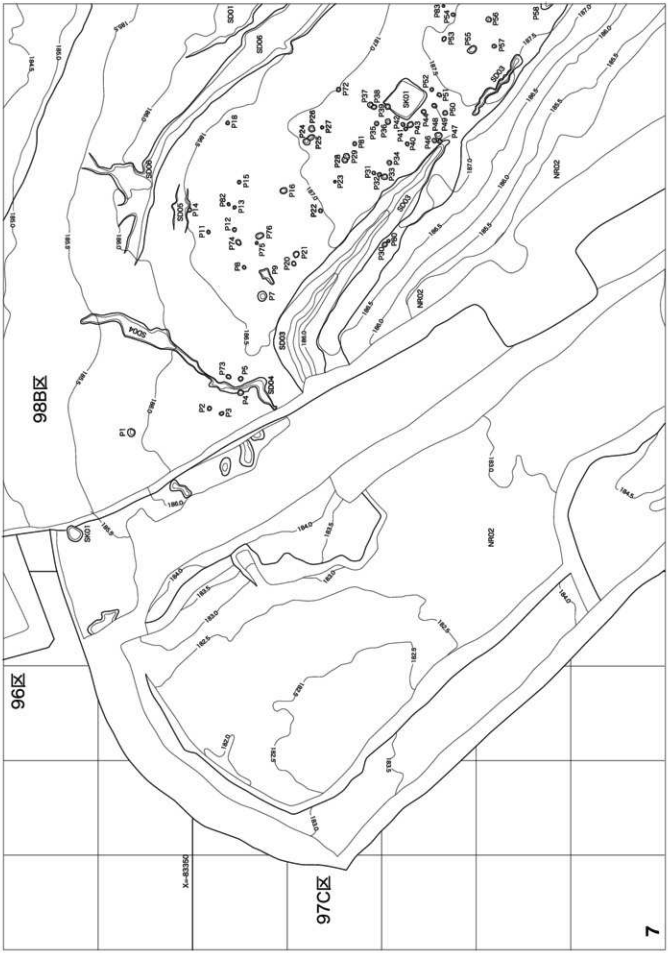

97B区
98A区
98A区
96区
X=63250
Y=2500
X=63250
SD06
SD07
SD10
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40
SD41
SD42
SD43
SD44
SD45
SD46
SD47
SD48
SD49
SD50
SD51
SD52
SD53
SD54

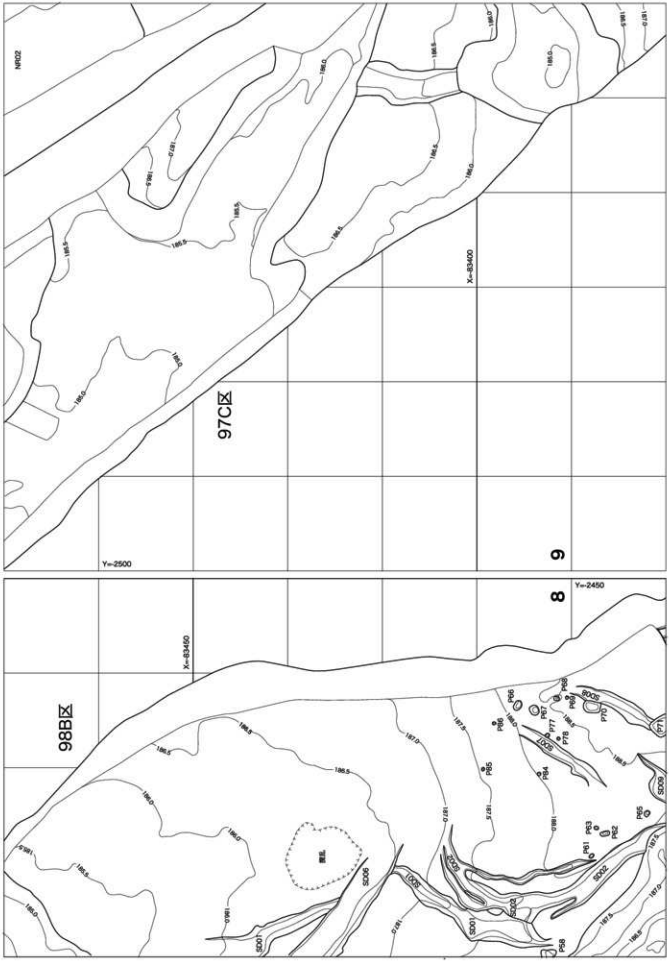
遺構図版 5


96区
X=-83450
X=-83450
NR01
NR02
NR01<U-1-3
SK76
SK73
SK72
SK74
SK70
SK69
SK71
SK75
SK78
SK79
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40

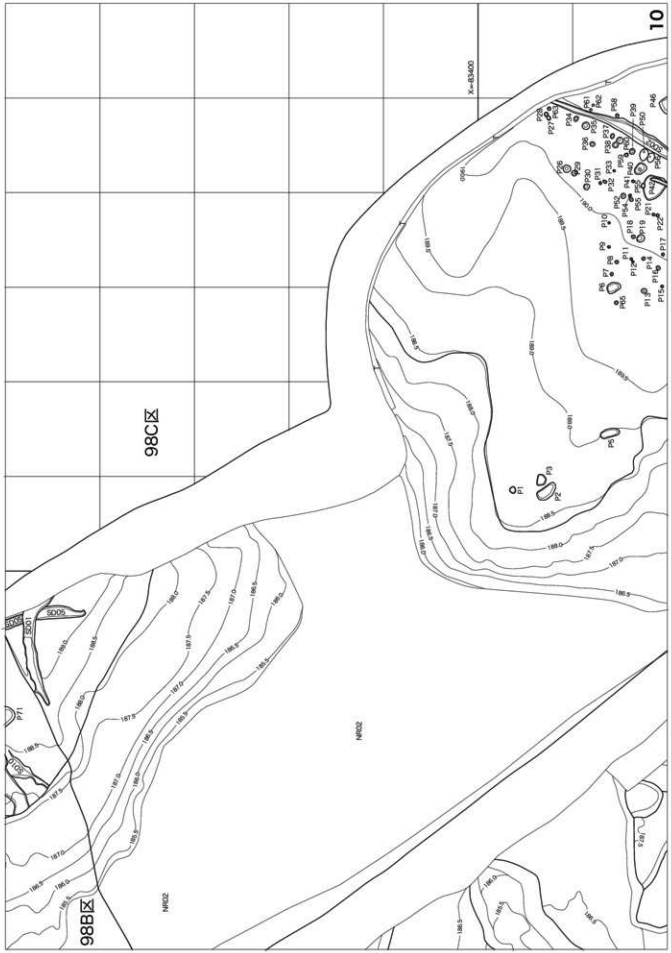

96区
98B区
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40

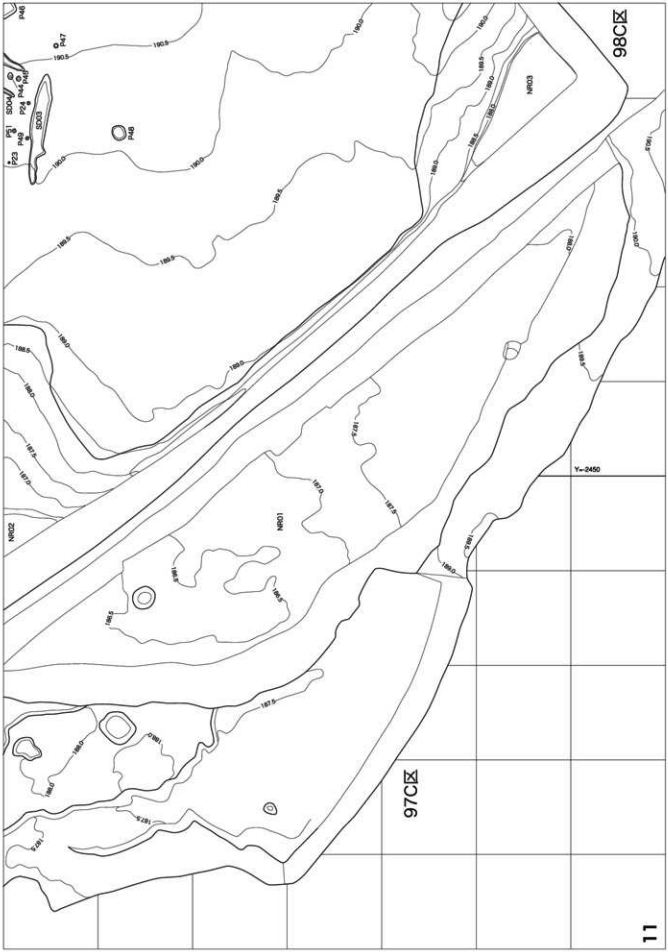
遺構図版７



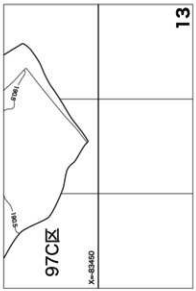

97C区
98B区
9
8
X=83400
X=83450
Y=2500
Y=2450
NR02
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40
SD41
SD42
SD43
SD44

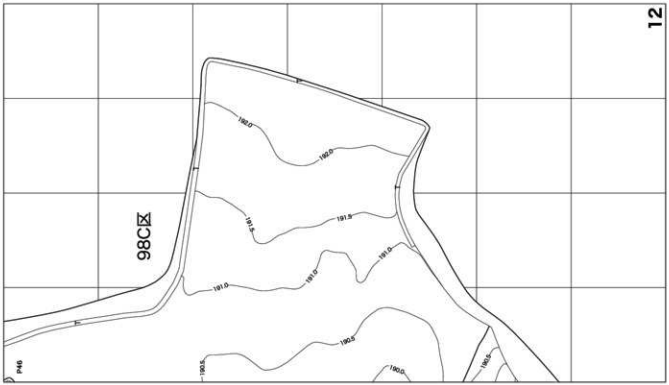
遺構図版 10


10
98B区
98C区
NR02
NR02
X=-83400
SD05
SD01
SD06
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40


98C区
97C区
Y=-2450
KR03
KR02
KR01
SD03
P44
P45
P46
P47
P48
P49
P50
P51
P52
P53
P54
P55
P56
P57
P58
P59
P60
P61
P62
P63
P64
P65
P66
P67
P68
P69
P70
P71
P72
P73
P74
P75
P76
P77
P78
P79
P80
P81
P82
P83

遺構図版 12・13


97C区
X=-83460
190.5
190.0
13


98C区
190.0
190.0
191.5
191.5
191.0
191.0
191.0
190.5
190.5
190.0
190.5
246
12

写真図版 1

96・97B NR01　貯蔵穴検出付近（北西より）

96 SK84・85（東より）

96 SK90・91（北より）

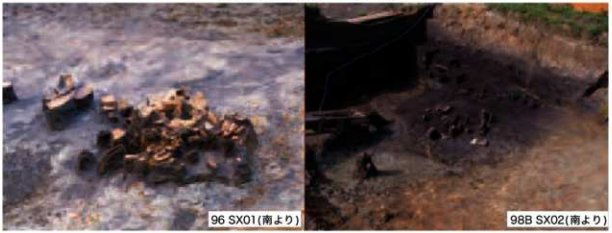
96 SK84（西より）

96 SK91（北より）

97A SB02(南より)

97A SB02 東西セクション(北より)

97A SB02 東西セクション(東より)



96 SX01(南より)　98B SX02(南より)

97A SB01(南より)

97A SK199(西より)　97A SK210(西より)

97A・98A SB03(西より)

97A・98A SB03 P1(南東より)

97A SB01・02・05(南東より)

97D SB06(北東より)

97B SB04(北東より)

SB04　東西セクション(南より)

SB04　カマド部分(南より)

97B SD01(北東より)

98A SD01(西より)

98A SD02(北西より)

97B SK293(南より)

96区全景(北より)

97A区全景(南より)

97B区全景(南より)　97B区全景(北より)

98A区全景1(北より)　98A P375(南より)

98A区全景2(北より)　98A P413(南より)

98B SX01（西より）

98B区全景（南より）

98C区全景（北より）

65

70

45

12

51

46

77

75

53

59

34

78

79

83

86

87

85

99

108

109

110

116

117

120

122

126

127

128

137

187

132

153

195

246

254

266

267

289

221

164

212

232

304

216

302

145

150

147

156

148

309

292
293
297

324
325
326
327
328
330
331
332
333
334
321
322
323

336

338

339

342

344

345

346

353

354

416

379

390

404

426

449

472

554

589

499

549

600 655

599 592 673

496 497 498 597 674

598

596

642

646

645

650

709

660

665

633

661

688

670

711

702

713

689

685

703

694

692

140
141
142
143
144
145
149
150
146
147
148
151
152
153
154
155

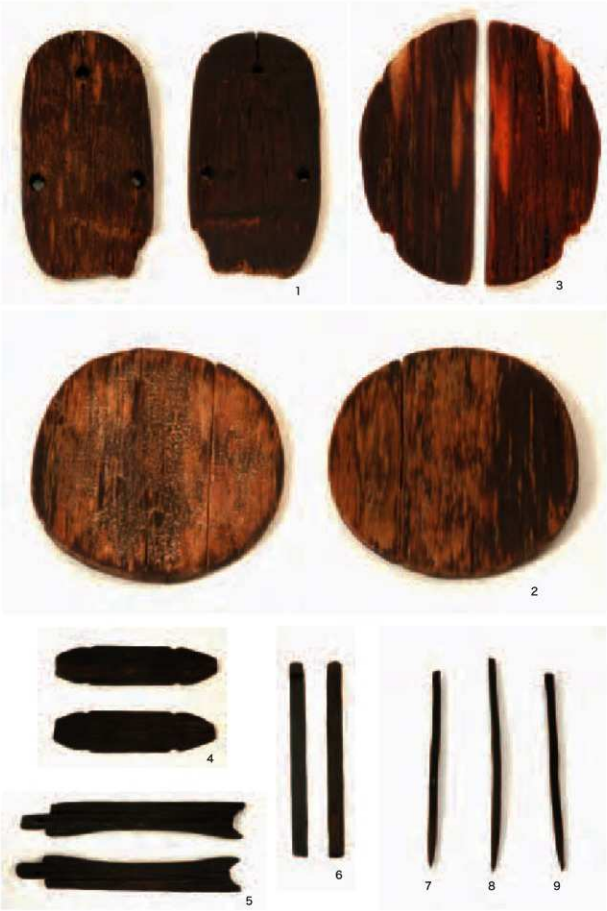
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167

168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
184
185
183

191
192
193
194
195
196

188
187
186
189
190

197
198


1
3
2
4
5
6
7
8
9

報告書抄録

ふりがな	かみしなのいせき
書名	上品野遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第132集
編著者名	川添和暁・鬼頭　剛・古澤　明・新山雅広・山形秀樹・植田弥生・藤根　久・森　勇一
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦2005年8月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
かみしなのいせき 上品野遺跡	せとしかみしなのちょう 瀬戸市上品野町	23204	03678	35度15分11秒	137度8分10秒	199611～199812	13,000㎡	東海環状自動車道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上品野遺跡	集落遺跡	後期旧石器	石器製作跡など集落跡	台形様石器・ナイフ形石器・掻器・削器・局部磨製石斧・剥片・石核	
		縄文～弥生	貯蔵穴	土器・石器・植物遺体	
		古墳	竪穴住居跡など	土器・石器・植物遺体	
		古代	土坑・ピット・溝	須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・土師器・フイゴの羽口・管状土錘など	灰釉陶器には墨書あり
		中世以降	土坑・ピット・溝	中世～戦国期陶器(山茶碗・古瀬戸・大窯)・砥石・木製品など	山茶碗には墨書あり

文書番号　発掘届出(　8埋セ199・8.10.11／　9埋セ92・9.4.1／10埋セ第100号・10.4.1)
通知(　8教文第61-24号・8.／　9教文第61-13号・9.5.13／　10教文第61-10号・10.4.27)
終了届(　9埋セ第69号・9.3.31／10埋セ第113号・10.4.9／11埋セ第10号・11.2.1)
保管証・発見届(　9埋セ第68号・9.3.31／10埋セ第112号・10.4.9／11埋セ第11号・11.2.1)
鑑査結果通知(　8教文第61-26号／　9教文第61-13号／10教文第61-10号・11.2.17)

要約　今回の調査で新たに見つかった時代の遺構・遺物として、後期旧石器時代初頭の石器群と、縄文時代晩期～弥生時代の貯蔵穴群がある。この石器群は、東海地域において、後期旧石器としては最古となる石器群であり、資料のまとまりなどからも今後の指標となると考えられる。
貯蔵穴(ドングリピット)については、水稲耕作導入後も広く竪穴住居利用が行われていたことを示す資料として、注目される。
今回の調査でも、古墳時代初頭・古代・中世～戦国期の集落跡が見つかった。前回の調査を追認するばかりではなく、各時代、当地域における集落跡としては、良好な資料を提示しているといえよう。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集

上品野遺跡

2005年8月31日

編集・発行　財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　サンメッセ株式会社